

平成 30 年度 近畿 E S D コンソーシアム活動実施報告書



2019 年 3 月

近畿 E S D コンソーシアム

はじめに



平成26年度ユネスコ活動費補助金（グローバル人材の育成に向けたE S Dの推進事業）に採択され、奈良市、橿原市、和歌山県橋本市、滋賀県彦根市の各教育委員会様に連携協力を依頼し、「奈良E S Dコンソーシアム」を立ち上げて5年がたちました。平成26年という、「国連E S Dの10年」の最終年として、11月に愛知県名古屋市、岡山市において、「E S Dに関するユネスコ世界会議」が開催された年です。10月2日には、内閣府政府広報室より「E S Dに関する世論調査」の概要が公表されています（全国20歳以上の日本国籍を有する3,000人を対象。

有効回収数1,826人）。その中の「E S Dの認知度」についての調査結果を見ます、「E S Dを知っている（意味もわかる）」と答えた人は2.7%、「言葉だけは聞いたことがある」が16.4%、「知らない」と答えた人が79.1%、「わからない」が1.8%です。このような状況の中、奈良国立博物館等の社会教育施設、奈良大宮ロータリークラブ等の企業、奈良ユネスコ協会などを一軒一軒訪問し、E S Dについて説明させていただき、E S Dの普及・推進を目的にコンソーシアムを組織したのがついこの間のようです（この間、「近畿E S Dコンソーシアム」と名称を変更しています）。

2015年に、ニューヨーク国連本部において「国連持続可能な開発サミット」が開催され「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ」が採択され、人間、地球及び繁栄のための行動計画として17の目標と169のターゲットからなる「持続可能な開発目標（SDGs：Sustainable Development Goals）」が掲げられました。これ以降、メディアでも「持続可能な」という言葉をよく耳にするようになり、E S DやSDGsの認知度は急上昇したようです。しかし、気候変動に関連した自然災害の頻発、海洋プラスチック問題の地球規模での顕在化、歯止めのかからない核開発競争などが、SDGsの認知度上昇の要因であるならば、それを手放しで喜ぶわけにはいきません。

戦争への靴音で始まった昭和が終わり、平成も終わろうとしています。戦後70数年間、日本は平和でしたが、世界では多くの戦争や紛争があり、テロも多発しています。この先も、日本が平和であるという保障はどこにもありません。人工知能の進化やグローバル化、少子高齢化など、これからは予測不可能な時代であると言われていています。時代の変化に翻弄されることなく、平和で持続可能な社会を主体的に創っていこうとする意識を持ち、行動することで社会を変革する人々を育てるために、今後もコンソーシアム活動を推進していきたいと考えます。みなさまのお力添えをお願いいたします。

奈良教育大学 学長

近畿E S Dコンソーシアム 会長 加藤 久雄

目 次

はじめに	・・・01
平成30年度 近畿ESDコンソーシアム事業概要	・・・03
平成30年度 近畿ESDコンソーシアム総会開催要項	・・・04
平成30年度 近畿ESDコンソーシアム成果発表会・実践交流会概要報告	・・・05
平成30年度 奈良ESD連続セミナー概要報告	・・・19
平成30年度 橋本市ESD連続セミナー概要報告	・・・54
平成30年度 学ぶ喜び・ESD連続公開講座概要報告	・・・70
平成30年度 森と水の源流館授業づくりセミナー概要報告	・・・96
平成30年度 奈良県立万葉文化館授業づくりセミナー概要報告	・・・110
平成30年度 春日山原始林授業づくりセミナー概要報告	・・・120
平成30年度 基礎学習理論研究会概要報告	・・・135
【学生によるESD活動支援報告書】	
岡山県災害復興支援ボランティア実施報告書	・・・152
学生によるESD活動支援（ESD実践）	・・・170
東大寺寺子屋支援報告書	・・・180
奈良市内小学校における野外活動支援実施報告書	・・・193
ストップいじめなら子どもサミット実施報告書	・・・202
そうだ、海外に行こう。フィリピン・スタディツアー報告会開催報告書	・・・211
世界遺産を体感 東大寺に泊まろう 支援報告書	・・・206
「集まれ！ESD子ども広場」開催報告書	・・・210
奈良市富雄第三小中学校ユネスコ委員会支援報告書	・・・219
【資料編】	
近畿ESDコンソーシアム規約	・・・227
SDGs推進に向けた奈良教育大学の取組	・・・231

平成30年度近畿ESDコンソーシアム事業概要

項目	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
運営会議	5日① 18日②	2日③ 18日④	8日⑤ 22日⑥		9日⑦	5日⑧ 18日⑨	9日⑩ 22日⑪	19日⑫	10日⑬	8日⑭ 15日⑮	13日⑯ 25日⑰	3月 13日⑱
総会(連絡会議)				7日 総会					26・27日 美穂交流会			25日 認定証授与式
学生派遣												
学生活動(ESD活動支援)												
奈良連続セミナー												
橋本市連続セミナー												
授業づくりセミナー(春日山)												
授業づくりセミナー(万葉集)												
授業づくりセミナー(森と水)												
ESD基礎学セミナー												
陸前高田市文化遺産調査												
先進地・全国大会												
教委・学校研修支援												
連続公開講座(5回)												
ユネスコ協会研修会												
ESD子ども広場												
その他												
ESDティーチャープログラム 全国展開												
研修・連続セミナー												

27日中国地方研究会
29日関東地区研修交流
会
23日近畿地方研究会

18・19日学会大会

平成 30 年度 近畿 ESD コンソーシアム総会 開催要項

1. 目的

近畿 ESD コンソーシアムでは、近畿圏を中心にユネスコスクール等への支援、及び ESD の推進を図っている。本コンソーシアム活動の一環として、構成団体間の情報交換と目的意識の共有、ESDに関する研修を目的として、下記の通り、総会を開催する。

2. 開催日時 平成 30 年 7 月 7 日（土）13 時 30 分～17 時 00 分

3. 会場 奈良教育大学 大会議室 （管理棟 2F）

4. 内容

13 時 30 分～13 時 40 分 開会行事

13 時 40 分～13 時 50 分 出席者の自己紹介

13 時 50 分～14 時 20 分 30 年度奈良教育大学 ESD コンソーシアムの事業計画

14 時 30 分～16 時 00 分 ESD 研修会

研修テーマ：持続可能な地域社会をつくるためにできること

16 時 00 分～16 時 50 分 情報交換・その他

16 時 50 分～17 時 00 分 閉会行事

問合せ

近畿 ESD コンソーシアム事務局
奈良教育大学次世代教員養成センター
中澤研究室

中澤静男、中城朗子、池田江里

TEL・FAX 0742 (27) 9269

メール nakazawa@nara-edu.ac.jp

平成 30 年度 近畿 ESD コンソーシアム成果発表会・実践交流会開催要項

1. 目的

小学校においては 2020 年度、中学校では 2021 年度から新学習指導要領が完全実施となる。新学習指導要領には前文に「持続可能な社会の創り手」を育成することが明記されたことより、全国の小中学校で ESD の理念に基づく教育活動が展開されると考えられる。また、持続可能な開発目標 (SDGs) への関心が企業や NPO などの生涯教育において高まってきていることから、学校教育・生涯教育において、今後は質の高い教育活動が求められることから、構成団体メンバーの意欲向上と活動の質的向上、また ESD の普及を目的に開催する。

2. 主催

近畿 ESD コンソーシアム、奈良教育大学 ESD-SDGs コンソーシアム

3. 後援

ESD 活動支援センター、近畿 ESD 活動支援センター

4. 開催日時

2018 年 12 月 26 日 (水) 10 時～17 時 30 分 ・ 12 月 27 日 (木) 9 時～12 時

5. 会場

12 月 26 日：奈良教育大学大会議室

12 月 27 日：奈良教育大学次世代教員養成センター 2 号館

6. 日程

【12 月 26 日】

09：30～10：00 受付 (奈良教育大学本部)

10：00～10：10 開会行事・挨拶 (奈良教育大学 加藤学長、文部科学省 田村ユネスコ振興推進係長)

10：10～12：10 ESD 子どもフォーラム (発表 20 分+講評・移動 10 分)

奈良市：奈良市立飛鳥小学校 4 年生

橋本市：橋本市立あやの台小学校 6 年生

彦根市：彦根市立佐和山小学校 5 年生・城西小学校 6 年生

橿原市：橿原市立今井小学校 6 年生

司会 (学生)

講評 (奈良教育大学 加藤学長、文部科学省 田村ユネスコ振興推進係長)

13：30～15：30 ESD 研修会 (シンポジウム)

「へき地教育と ESD：持続可能な地域社会づくりへ」

コーディネーター：田淵 五十生 氏

講師：東京大学 主幹研究員 及川 幸彦 氏 (へき地教育と ESD)

琉球大学 准教授 大島 順子 氏 (国頭村の少人数教育・ESD)

元曾爾村立曾爾小学校 校長 松岡 清之 氏 (へき地教育の魅力と課題)

- 15 : 45－17 : 15 ESD 実践交流会（1）（発表 20 分＋質疑 10 分）
- 分科会 1（大会議室）：地域の活性化など
 司会・指導助言：中澤静男、タイムキーパー：
 河野晋也氏（教育大附属小・奈良）・寺村尚子氏（城西小・彦根市）・
 篠原隆浩氏（杉原谷小・多可町）
- 分科会 2（第 1 会議室）：文化遺産など
 司会・指導助言：大西浩明氏、タイムキーパー：
 辻脇昌義氏（信太小・橋本市）・石田尚士氏（白樫北小・橿原市）・
 中澤哲也氏（平群北小・平群町）
- 分科会 3（次世代 1 号館）：へき地教育など
 司会・指導助言：河本大地氏、タイムキーパー：
 木内貴士氏（光が丘第四中・練馬区）・島俊彦氏（郡山西小・大和郡山市）・
 川崎貴寛氏（川上小・川上村）
- 17 : 20－17 : 30 一日目閉会行事・挨拶（高橋副学長）

【12 月 27 日】

- 08 : 45－09 : 00 受付（次世代教員養成センター 2 号館）
- 09 : 00－10 : 00 ESD の最新情報
 講師：東京大学 主幹研究員 及川 幸彦 氏
- 10 : 00－11 : 30 実践交流会（2）
- 分科会 4（多目的ホール）
 司会・指導助言：田淵五十生氏、タイムキーパー：
 天野結氏（第三中・吹田市）・谷垣徹氏（奈良教育大学生）・
 石原宏一郎氏（平城小・奈良市）
- 分科会 5（モデル教室）
 司会・指導助言：河野晋也氏、タイムキーパー：
 重松雅治氏（麗澤中高・柏市）・新宮濟氏（平城小・奈良市）・
 石田千陽氏（育英小・萩市）
- 分科会 6（会議室）
 司会・指導助言：大島順子氏、タイムキーパー：
 椎葉拓朗氏（愛宕浜小・福岡市）・阿彌茉央氏（飛鳥小・奈良市）・
 小林愛香氏（富谷高・宮城県）
- 11 : 30－11 : 40 閉会行事・挨拶（北村先生）

ESD研修会（シンポジウム）概要報告

奈良教育大学 中澤 静男

- ◇開催日時 2018年12月26日 13:30-15:30
- ◇会場 奈良教育大学大会議室
- ◇参加者 240名
- ◇内容

テーマ：「へき地教育とESD：持続可能な地域社会づくりへ」

コーディネーター：田淵 五十生 氏

講師：琉球大学 准教授 大島 順子 氏（国頭村の少人数教育・ESD）

元曾爾村立曾爾小学校 校長 松岡 清之 氏（へき地教育の魅力と課題）

東京大学 主幹研究員 及川 幸彦 氏（へき地教育とESD）

（1）大島氏

沖縄本島北部のヤンバルは、今、世界自然遺産の登録を目指しており、亜熱帯の樹々に覆われている。ヤンバル地域は北緯27度に位置している。北半球の北緯27度地点はほとんどが砂漠だ。ヤンバルは黒潮の影響を受け、雨が多い海洋性の気候だ。年間3000ミリ以上の雨が降る。亜熱帯の樹々に覆われているヤンバルは、奇跡の森と呼ばれている。県民の水がめでもある。

森の中は、すばらしい。ヤンバルの森にしか住んでいない希少種のトリたち、両生爬虫類などユニークな生き物が多い。哺乳類では琉球イノシシ、昆虫類も多い。コケの仲間も多い。これらの自然の恵みは、住んでいる人にも伝統行事という形で受け継がれている。自然とともに私たちの生活文化がある。

国頭村には1つの中学校といくつかの小さなへき地の小学校がある。へき地校では、児童一人ひとりに目が届きやすく、きめ細かな指導がしやすい、クラブ活動や学校行事においても、個人が活動する場面を作りやすい。教師にとっても自分の声が直接子どもに届き、反応がもらえるというのはやりがいにつながっている。個人としてのやり取りができるというのは大きなメリットだ。生活面では、プライベートな問題が学校にまで影響するという問題はあるが、地域特性を生かして人間関係が深まりやすい。

学校が一体となって活動しやすく地域と連携しやすい。国頭村ではいくつかの小学校が集まって合同遠足をしたり、合同授業したり、交流学习が行われている。

ヤンバルの自然資源をきちんと伝えていくことを大事にしていきたい。地域資源を生かす学習は様々行われており、地域のNPOなどが関わっている。学校の先生だけでは当然できない。小規模学校は臨機応変なフットワークの良さを持っている。

へき地校では教師としての力量が磨かれるととてもいい機会だと思っている。パフォーマンス評価やルーブリック評価ができるのは小規模校のいいところだ。きめ細かい指導を通じて力量が形成される。

（2）松岡氏

校内の教員数が少ないので、全員で会議して共通認識をつくりやすい。個人の意見が反映されやすく、また、臨機応変に試行すること可能だ。若手の教員も自分で考えたことをやってみることができる。子



ども同士の中に心のつながりがあり、親戚のような関係だ。お互いに規制しあったり、年下をうまくリードするといったことが続いている。学習面でも思い切った活動ができるので、スクールバスをつかった見学もできた。他校との交流もできる。

大人たちが地域の存続を必死に考えているので、将来の住民になる子どもにも提案してほしいと言われており、地域との連携はやりやすい。曾爾村で頑張っている人を学校に招聘して話してもらい、子どもたちに夢をもたせるようにしている。

テレビ会議システムを使って遠隔地の学校と交流したり、教員が共同で研修したりしている。中学校との交流 総合的な学習を中心に。小学校のブラスバンドは中学校に教えてもらったりしている。小中で一緒に活動できないかと話し合いしている。共同研修会もしてきた。

中心部に遠い。安定した仕事が少ない。収入が得られないというのが一番の課題だろう。

(3) 及川氏

へき地校では、四季折々の変化とともに子ども一人ひとりと向き合うことをここで学んだ。「誰も置き去りにしない」というのはSDGsのキーワードだが、ここでは4人しかいないので置き去りになんかできない。一人ひとりをどう伸ばすかということ考えた。個と向き合うことを突き詰められた、しかも楽しくやれた。

地域に根差した体験活動をやらせていただいた。たとえば、銀ザケの養殖を素材に教科横断的な学習に取り組んだ。理科と算数、社会、家庭科、図工を組み合わせた一大プロジェクトだ。今で言うと総合的な学習の時間でのESDだ。こういう取り組みができるのも小規模校の良さだ。

へき地にはESD的なエッセンスがつまっている。ESDの視点から見るとへき地教育は、①地域に根差した教育が濃密に展開できる、地域の対する誇りや愛着心を養うことができる②へき地に閉じてはだめだ。ESDを取り入れることで、子どもの目を外へ、世界へ向けることができる。③様々な地域を知ることで、自分の地域の特性も明らかにできる、④自分たちの地域を創る主体者となることができる。

恵まれた自然環境がある一方で、少子高齢化で過疎化が進んでいる。自然とのつながりや人とのつながりの中で、地域愛を育むことができる。教育で地域を活性化する。そのカギがESDだ。開かれた地域と捉えるのがESDだ。地域を通して世界とつながる教育がESDだ。豊かな生態系が人の暮らしや文化を支えているという大事な部分を学ぶことができる。ESDを取り入れ、他地域に視野を広げることで、自分の地域を自覚し、思考を広げ、そのよさを創っていこうとする子どもを育てる、というストーリーをきちんと描いて教育していくことが大事だ。へき地や地方が抱える共通の不安は、先が見えないことだ。それを夢を持てる教育に変えていく力がESDにはある。



ESD研修会：ESDの最新情報 概要報告

- ◇開催日時 平成30年12月27(木) 9:00~10:00
- ◇会場 奈良教育大学次世代教員養成センター2号館多目的ホール
- ◇参加者数 56名
- ◇内容

「ESDの最新情報」

講師 東京大学海洋アライアンス海洋教育促進研究センター 主幹研究員 及川 幸彦 氏

※持続可能な社会の創り手を育成する：ESD for SDGs

(1) ESDとこれからの学校教育

新学習指導要領×国際アジェンダと国内ESD施策による
新たな教育の方向性が示された

教育改革とESDの統合＝新たな教育の方向性

- ・ESDとは、様々な問題を、各人が自らの問題として主体的にとらえ、身近なところで取り組むことで、それらの問題の解決につながる新たな価値観や行動の変容をもたらし、持続可能な社会を実現していくことを目指して行う学習・教育活動である。
- ・持続可能な社会を実現するためには、すべての人が、人と人、人と社会、そして人と自然のつながりを理解しようと努め、問題を解決するためにはどのような取組が必要かを自ら考えるような視点を身に付け、行動を起こすことが必要である。

【新学習指導要領の前文（アンブレラ）】

- ・持続可能な社会の創り手となることができるようにすること（ESD）が求められる
- ・このために必要な教育の在り方を具体化するのが教育課程 全国の学校でESDをやる必要がある
- ・よりよい社会を創るという理念を学校と社会が共有する 社会に開かれた教育課程の実現

新学習指導要領が目指す資質・能力の3本柱

①知識技能

②思考判断表現

③学びに向かう力・人間性を涵養すること

どのように社会・世界とかかわりよりよい人生を送るか ESDを踏まえたアクティブラーニング
目標・内容・方法をESD的に結び付ける。

学習指導要領の基盤となる理念としてESDがある

(2) ESDと今後の学校教育の在り方 中等教育資料1月号

- ①ESDの教育的意義は教育とSD（地域創生）の融合
- ②学習指導要領の基盤となる理念がESD
- ③ESDにより学習スタイルが変革し、目指す資質能力が育成される
- ④社会に開かれた教育課程を実現するESD 地域連携が必須
- ⑤SDGs 地域づくりへの貢献
- ⑥今後の教育の方向性は、自己実現から共生・共創へ

(3) ESDとSDGsとの関係

1992年・ESD→ 2005年～2014年・DESD→2014年～2020年GAP→



2000年・MDGs（途上国の目標）→2015年・SDGs（世界全体の共通目標としてのSDGs）

(4) SDGsが目指す5つのP

- ①People 人間（社会）
- ②Planet 地球（経済）
- ③Prosperity 繁栄（経済）
- ④Peace 平和
- ⑤Partnership パートナーシップ



(5) SDGsの3つの目標

普遍的であること（すべての人の行動による）

不可分・関連（目標は関連しており、独立しているものではなく、総合的に取り組むことが重要）

変革的・野心的（誰も置き去りにしてはならない）

(6) 多角的アプローチの例（海洋教育）それぞれのテーマで関連を考える

(7) 国内委員会からのメッセージ

- ・ESD推進におけるSDGsの捉え方
- ・自分たちのESDの様々な活動が目標にどのように貢献するのかを考える
- ・自分自身のESDの活動の新たな意義や価値づけをこと
- ・地域に根差した身近な活動が世界につながる
- ・地球規模の課題解決に貢献する

→SDGsを見据えながら足元の課題解決を大事にESDを推進していく

(8) 外務省SDGs副教材：SDGsを理解するための学習にとどまるのではなく、SDGsの活動

に取り組みたくなるような教育をすることが重要。E for SDGs

世界の課題と日本の課題、地域の課題をつなげる教育が必要

(9) SDGsのための教育を進めるポイント

- ①地球的諸課題が国内や地域にも存在することを意識させる
- ②諸課題は様々な目標や課題が複雑に絡んでいることを認識させる
- ③地域から世界への行動を促す
- ④生涯にわたって探求する意欲を喚起する

(10) これからのESDの5つの視点

- ①SDGsの目標とこれまでの地域や学校の取組を関連付け整理する。
- ②SDGsの視点で、身近な取組の国際的な課題への貢献を評価する。
- ③各目標が相互に関連していることを地域課題から整理・意識する。
- ④SDGsを国や地域の課題に即して焦点化し優先的に取り組む。
- ⑤SDGsの達成には教育（人づくり）が重要であることを再認識する。

担い手づくりを通じて目標の達成に貢献する

自己実現の教育（個の能力の向上）だけでなく、「共に生き、共に創る」教育へ


SUSTAINABLE GOALS DEVELOPMENT
 17 GOALS TO TRANSFORM OUR WORLD

平成30年度 近畿ESDコンソーシアム成果発表会・実践交流会
ESDの最新情報
 持続可能な社会の創り手を育成する: ESD for SDGs

東京大学 海洋アライアンス 海洋教育促進研究センター
 主幹研究員 及川 幸彦

日本ユネスコ国内委員会 委員
 持続可能な開発のための教育円卓会議 議長
 公益社団法人 日本ユネスコ協会連盟 理事
 ESD活動支援センター 上席アドバイザー

1


SUSTAINABLE GOALS DEVELOPMENT
 17 GOALS TO TRANSFORM OUR WORLD

ESDとこれからの学校教育
 ～持続可能な社会の創り手の育成～



2


教育課程改革とESD

教育課程改革 (新学習指導要領)

- 前文の創設
- 持続可能な社会の創り手
- 資質・能力の3つの柱
- アクティブラーニング
- カリキュラムマネジメント
- 社会に開かれた教育課程
- チームとしての学校

×

国際アジェンダと国内ESD施策

- グローバル・アクション・プログラム (GAP) →ポストGAP
- ESD国内(GAP)実施計画
- ESD推進の手引き
- ESDコンソーシアム
- ESD活動支援センター
- 持続可能な開発目標(SDGs)

教育改革とESDの統合 → 新たな教育(新学習指導要領)の方向性

3

「持続可能な開発のための教育(ESD)」とは？

ESD (GAP)国内実施計画(2016年3月 ESDIに関する関係省庁連絡会議決定)

・ESD(Education for Sustainable Development)とは？
「持続可能な開発のための教育 (ESD, Education for Sustainable Development)」は、人類が将来の世代にわたり豊み豊かな生活を確保できるよう、気候変動、生物多様性の喪失、資源の枯渇、貧困の拡大等、人類の開発活動に起因する現代社会における様々な問題を、各人が自らの問題として主体的に捉え、身近なところから取り組みことで、それらの問題の解決につながる新たな価値観や行動等の変容をもたらし、もって持続可能な社会を表現していくことを目指して行う学習・教育活動である。(中略)

(持続可能な開発)を行う社会を実現するためには、すべての人が、人と人、人と社会、そして人と自然とのつながりを理解しようとする努力、上記に掲げた様々な問題を解決するためにどのような取組が必要かを自ら考えるような視点を身に付け、行動を起こすことが必要である。

4

新学習指導要領とESD: 前文抜粋

- これからの学校には、(中略)一人一人の児童が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすること(=ESD※筆者補入)が求められる。このために必要な教育の在り方を具体化したのが、各学校において教育の内容等を組織的に計画的に組み立てた教育課程である。
- 教育課程を通して、これからの時代に求められる教育を実現していくためには、よりよい学校教育を通してよりよい社会を創るという理念を学校と社会とが共有し、それぞれの学校において、必要な学習内容をどのようにならに学び、どのような資質・能力を身に付けられるようになるのかを教育課程において明確にし、社会との連携及び協働によりその実現を図っていくという、社会に開かれた教育課程の実現が重要となる。(新学習指導要領前文)

5

新学習指導要領とESD: 総則抜粋

- 第1小・中学校教育の基本と教育課程の役割
- 1 小・中学校から(3)までに掲げる事項の実現を図り、豊かな創造性を備え持続可能な社会の創り手となることが期待される生徒に、力を育むこととを旨とする。学校教育全体並びに、各教科、道徳科、総合的な学習の時間及び特別活動(略)の指導を通して、どのような資質・能力の育成を明確に示すこととを旨とする。その際、生徒の発達段階や特性等を踏まえつつ、次に掲げることに掲げることが、偏りなく実現できるものとする。

- (1) 知識及び技能が習得されるようにすること。
- (2) 思考力、判断力、表現力等を育成すること。
- (3) 学びに向かう力、人間性等を涵養すること。

資質・能力の
3本柱

6

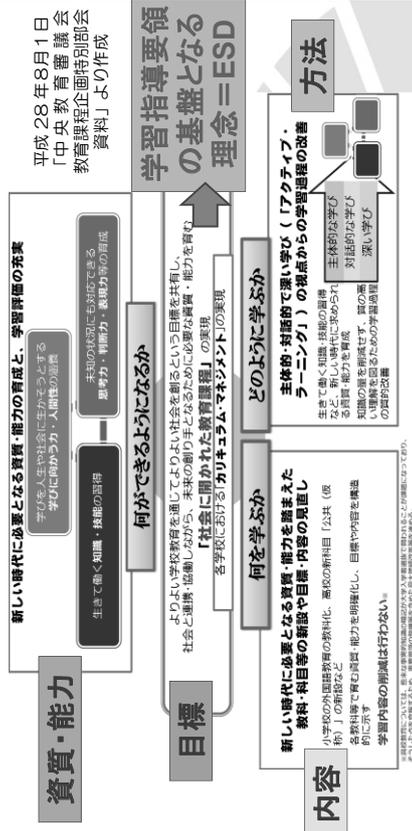
新学習指導要領がめざす資質・能力とESD

★ESDの考え方を踏まえたつづつ(次期指導要領改訂)の基本方針(8/1)



7

学習指導要領改訂の方向性とESD



8

ESDと今後の学校教育の在り方

1. ESDの教育的意義⇒E（教育）とSD（地域創生）の融合
2. 学習指導要領とESD⇒基盤となる理念・ESD
3. ESDによる教育の改善⇒学習スタイル変革，資質/能力育成
4. 社会に関わられた教育課程を実現するESD⇒地域連携
5. 社会の創り手を育てる教育⇒SDGs，地域づくりへの貢献
6. 今後の教育の方向性⇒「自己実現」から「共生・共創」へ

文部科学省・中等教育資料「特集」持続可能な社会づくりに向けた学校教育」 論題「ESDと今後の学校教育の在り方」(及川幸彦)

9



ESDの新たな潮流 ～ESD for SDGs～

「誰も置き去りにしない」世界をめざして

10

10

「持続可能な開発のための2030アジェンダ」採択



2015年 持続可能な開発サミット(2015年9月25日)

11

ESD(教育)とSDGs(開発)との関係

17 GOALS TO TRANSFORM OUR WORLD

国連持続可能な開発のための取り組み

1992年 リオデジャネイロ・地球サミット「アジェンダ21」…… ESD

2000年 国連ミレニアム・サミット…… MDGs

「国連ミレニアム宣言」をもとにMDGsが策定

2002年 ヨハネスブルクサミットで我が国がDES(ESD)を提案

2002年 国連決議(第57回総会)

・2005～2014年の10年をDES(ESD)を主導機関

2005年 DESD国際実施計画をユネスコにて策定…… DESD

2009年 ESD世界会議(ボン)・ボン宣言の採択

2014年 ESDに関するユネスコ世界会議(名古屋市/岡山市)

「グローバル・アクション・プログラム(GAP)」…… GAP

2015年 持続可能な開発サミット…… SDGs

「持続可能な開発のための2030アジェンダ」の採択

12

MDGsとの比較

2001～2015年

MDGs
Millennium Development Goals

8ゴール・21ターゲット
(シンプルで明快)

途上国の目標
国連の専門家主導

2016～2030年

SDGs
Sustainable Development Goals

持続可能な開発目標

17ゴール・169ターゲット
(包括的で、互いに関連)

全ての国の目標
(=ユニバーサルティ)

国連全加盟国で交渉
実施手段(資金・技術)

13

外務省作成

SUSTAINABLE GOALS
17 GOALS TO TRANSFORM OUR WORLD

SDGsがめざす5つのP

- ・People (人間)
- ・Planet (地球)
- ・Prosperity (繁栄)
- ・Peace (平和)
- ・Partnership (パートナーシップ)

14

SUSTAINABLE GOALS
17 GOALS TO TRANSFORM OUR WORLD

SDGsの3つの特徴

- 普遍的
- 不可分・関連
- 変革的・野心的

SDGsは普遍的なものであり、すべての国とすべての人による行動を必要とする

それぞれの目標は相互に関連しており、独立しているものではなく、総合的に取り組むことが必要

アジェンダは、幅広く野心的であり、「誰も置き去りにしてはならない」ことを強調

国際連合広報局資料より作成

15

SUSTAINABLE GOALS
17 GOALS TO TRANSFORM OUR WORLD

SDGsへの多角的アプローチ (海洋教育)

国際連合広報局資料より作成

16

新たな教育の可能性を拓くESD/SDGs

日本ユネスコ国内委員会教育小委員会からのメッセージ

SDGs

持続可能な開発目標(SDGs)とは、2015年9月の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」に記載された、2016年から2030年までの間に達成を目指す17の目標と169のターゲットから成る。

ユネスコ スクール

ユネスコスクールは、持続可能な開発目標(SDGs)の達成に貢献する教育の場として、2002年に創設された。ユネスコスクールは、持続可能な開発目標(SDGs)の達成に貢献する教育の場として、2002年に創設された。

1. 持続可能な開発目標(SDGs)の達成に貢献するESD

ESDは、持続可能な開発目標(SDGs)の達成に貢献する教育の場として、2002年に創設された。ESDは、持続可能な開発目標(SDGs)の達成に貢献する教育の場として、2002年に創設された。

2. 新たな教育の可能性を拓くユネスコスクール

ユネスコスクールは、持続可能な開発目標(SDGs)の達成に貢献する教育の場として、2002年に創設された。ユネスコスクールは、持続可能な開発目標(SDGs)の達成に貢献する教育の場として、2002年に創設された。

3. 教育の質の向上へのESDの貢献

ESDは、持続可能な開発目標(SDGs)の達成に貢献する教育の場として、2002年に創設された。ESDは、持続可能な開発目標(SDGs)の達成に貢献する教育の場として、2002年に創設された。

新学習指導要領

新学習指導要領は、持続可能な開発目標(SDGs)の達成に貢献する教育の場として、2002年に創設された。新学習指導要領は、持続可能な開発目標(SDGs)の達成に貢献する教育の場として、2002年に創設された。

日本ユネスコ国内委員会

SDGsの全ての目標達成に貢献するESD

ESDは持続可能な社会の担い手づくりを通じて、17全ての目標の達成に貢献するもの。

ESDをより一層推進することが、SDGsの達成に直接・間接につながっている。

SDGsを、ESDで目指す目標が国際的に整理されたものとして捉えることもできる。

日本ユネスコ国内委員会

国連・持続可能な開発目標(SDGs)

2015-2030持続可能な開発目標SDGs: 17の目標と169のターゲット

教育を通じて、持続可能な開発を促進するため必要な知識及び技能を習得できるようにする

目標4、「すべての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯学習の機会を促進する」

4.7「2030年までに、持続可能な開発のための教育及び持続可能なライフスタイル、人権、男女の平等、平和及び非暴力の文化の推進、グローバル・パートナーシップ、文化多様性と文化の持続可能な開発への貢献の理解の教育を通して、全ての学習者が、持続可能な開発を促進するために必要な知識及び技能を習得できるようにする。」

ESD推進におけるSDGsの捉え方・考え方

SDGsのESD推進への3つの効用

- 自分たちのESDの様々な活動が、国際的に整理された目標である **SDGsの各目標にどのように貢献しているのか**を考えると
 1. SDGsによって自分自身のESDの活動に新たな意義や価値付けを行うことであり、ESDの目標を明確化する方法の一つ
 2. SDGsは人類共通のグローバル目標であり、それを意識してESDの活動に取り組むことは、地域に根差した身近な活動が世界につながることであり、地球規模の課題解決に貢献
 3. この自覚と誇りをもって、学校や地域で、SDGsを見据えながら **足元の課題解決を大事に、ESDを推進していくことへの道標**

【外務省SDGs副教材】 「わたしたちがつくる 持続可能な世界」

- 外務省作成（事務局 Unicef）
- 「持続可能な開発目標（SDGs）に関する副教材作成のための協力者会議」
- 主に中学校3年生の社会科公民分野対象（9月初旬に教育委員会を通じ見配配布、10月中旬対象生徒数を学校宛に配布）
- 社会科公民分野に限らず、総合的な学習など幅広く活用（小中高校分も配布）
- 中学校3年生に限らず、小学校、中学校、高等学校や社会人の学習にも活用
- 教員のSDGsの理解やSDGsの授業づくりなど教員研修の資料にも活用



副教材の3つのテーマ

SUSTAINABLE GOALS
17 GOALS TO TRANSFORM OUR WORLD

11 公平な社会を築く(公平)

SDGsは、世界で最も貧しい人々を支援するためにあります。

12 豊かや差別をなくす(豊か)

SDGsは、豊か、豊かでない人々の両方を支援するためにあります。

13 地球温暖化を止める(地球)

SDGsは、地球温暖化を止めるためにあります。

03 地球環境を守ろう!

今地球上で起きている気候変動や環境問題。どのような課題と結びついているでしょう?

住民の移動を余儀なくさせる災害の年間発生件数(1970～2013)

気候変動による子どもの移住リスクの増加

人口増加、製造業、水力発電、生活用水への水需要の増加、気候変動による利用可能な水資源の減少、変化などにより深刻な水不足が起きている。水資源の取り合いが紛争に結びつく危険もあります。

大気中の温室効果ガスが増え続けている。温暖化による海面上昇が島国や沿岸部に大きな影響を与えています。また、感染症を媒介する生物の生息域が広がります。例えば、マラリア、デング熱、シカ病などが、取り除くことが難しい地域に広がることが懸念されています。

人口増加、製造業、水力発電、生活用水への水需要の増加、気候変動による利用可能な水資源の減少、変化などにより深刻な水不足が起きている。水資源の取り合いが紛争に結びつく危険もあります。

日本も抱える差別や貧困の問題

格差や貧困は、途上国だけでなく、日本も含めた先進国の中でも問題になっています。

先進国の子どもの状況

先進国の子どもの状況は、貧困や差別の問題が深刻化しています。SDGsの目標について比較すると、日本は貧困の削減に遅れています。2017年（17カ国）において、日本は23位（37カ国）中、格差の縮小については32位（41カ国）でした。

様々な差別

世界には、性別、障がい、人種、民族、社会的立場、宗教など様々な理由で差別される人々があります。差別は暴力にもつながりやすく、差別をなくすため、条約や法律などが作られ、取り組みが進められています。児童の権利に関する条約（子どもの権利条約）は、どのような理由でも子どもは差別されないことを定めています。

子どもへの暴力

虐待や暴力は、子どもの健康や発達に大きな影響を与えています。日本でも、子どもへの暴力は問題として認識されています。児童虐待防止法や児童相談所など、子どもへの暴力を防止するための取り組みが進められています。

地域からのSDGs達成に向けた挑戦

17 GOALS TO TRANSFORM OUR WORLD

「持続可能な大牟田のまちづくり」をめざして

- 大牟田がこれまで取り組んできたESDとパートナーシップを基盤に大牟田らしいSDGsを展開
- 大牟田の地域課題やよさを踏まえて、SDGsの目標を選択・集中して重点的に取り組む

学校や地域の課題解決を大切にした
大牟田版SDGs

大牟田が目指す未来と大牟田版SDGs

17 GOALS TO TRANSFORM OUR WORLD

【大牟田のビジョン：5つのP】

「誰も置き去りにしない」
大牟田市教育委員会資料より作成

大牟田版SDGs

17 GOALS TO TRANSFORM OUR WORLD

3. 持続可能な開発目標 (SDGs)とは、2016年9月の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」に記載された、2016年から2030年までの間に達成を目指す17の目標と、それに関連する169のターゲットから構成される。

大牟田市教育委員会資料より作成

17 GOALS TO TRANSFORM OUR WORLD

1. 持続可能な開発目標 (SDGs)とは、2016年9月の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」に記載された、2016年から2030年までの間に達成を目指す17の目標と、それに関連する169のターゲットから構成される。

「大牟田版SDGs」の具体的アプローチ

17 GOALS TO TRANSFORM OUR WORLD

3. 持続可能な開発目標 (SDGs)とは

2016年9月の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」に記載された、2016年から2030年までの間に達成を目指す17の目標と、それに関連する169のターゲットから構成される。

14. 海の豊かさを守ろう

大牟田版SDGsの14番目の目標は「海の豊かさを守ろう」です。これは、海洋資源を持続可能な形で活用し、海洋汚染や酸性化を防ぐことを目指しています。

15. 陸の豊かさも守ろう

大牟田版SDGsの15番目の目標は「陸の豊かさも守ろう」です。これは、陸域の生態系を保護し、持続可能な形で資源を利用することを目指しています。

16. 公正な社会と平和を築こう

大牟田版SDGsの16番目の目標は「公正な社会と平和を築こう」です。これは、公正な社会を築き、平和を維持することを目指しています。

SDGsへの貢献を目指す教育委員会の取組

17 GOALS TO TRANSFORM OUR WORLD

事業等	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
ESD実践部	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ESD実践部	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
子どもサポーター	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
特別支援科	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
社会科部	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
生涯学習部	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
教育委員会	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ESD実践部	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
生涯学習部	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ESD実践部	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
生涯学習部	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

SDGsのための教育を進めるポイント

1. 持続可能な諸課題は、海外だけではなく国内や地域にも存在することを意識させる。
2. それらの課題は、SDGsと一対一対応ではなく、様々な目標や課題が複雑に絡んでいることを認識させる。
3. それらの諸課題を理解するだけの学習ではなく、その課題解決に向けて地域から世界への行動を促す。
4. ある学年や教科、単元のみの学習ではなく、発達段階に応じて生涯にわたって探究する意欲を喚起する。

⇒“Education of SDGs”から“**Education for SDGs**”に

29



これからのESDの方向性

ポスト・グローバル・アクション・プログラム
(GAP)2020—2030

持続可能な社会 (SDGs) を実現するESDの方向性

30

ESD Post-GAP position paper(案)の概要

1. 経緯と今後の予定
⇒ユネスコ執行委員会(2018/4月)→加盟国協議(7月)→オンライン協議(9～10月)→後継枠組提案(2019/春)→ユネスコ総会(2019/秋)→国連総会決議
2. GAPの中間評価
⇒ネットワークメカニズム(資金、分野横断)、加盟政府のリーダーシップ
3. GAP後で重視されるべき改善点
⇒行動の変革、構造的変革、科学技術の進歩した未来
4. 実施枠組
⇒SDGsへの支援、GAPの構造の維持、加盟国の5つの行動分野での努力

Global Action Programme 2030 on Education for Sustainable Development: **Towards achieving SDGs (GAP2030)**

31

これからのESDの5つの視点

- 視点1: SDGsの目標とこれまでの地域や学校の取組を関連付け整理する。
- 視点2: SDGsの視点で、身近な取組の**国際的な課題への貢献**を評価する。
- 視点3: 各目標が**相互に関連**していることを地域課題から整理・意識する。
- 視点4: SDGsを国や地域の課題に即して**焦点化し優先的**に取り組む。
- 視点5: SDGsの達成には**教育(人づくり)**が重要であることを再認識する。

学習指導要領:「自己実現」の教育から「共に生き、共に創る」教育へ
Post GAP: ESD Towards achieving SDGs

32

平成 30 年度 第 1 回奈良 ESD 連続セミナー 概要報告

奈良教育大学 中澤静男

- ◇開催日時 平成 30 年 5 月 10 日 (木) 19 時～21 時 30 分
- ◇会場 次世代教員養成センター 2 号館
- ◇参加者 島俊彦 (郡山西小)、河野晋也 (附属小)、池見繁・西口美佐子 (奈良市教委)、
杉山拓次 (春日山原始林を未来につなぐ会)、中澤敦子 (きんき環境館)、
圓山裕史・大西浩明・阿彌茉央、池見幸恵 (飛鳥小)、中澤哲也 (平群北小)
青山真弓 (京都市環境保全活動推進協会)、蔵前拓也 (真美ヶ丘第一小)
新宮済 (平城小)、後藤田洋介 (大阪成蹊大)、高垣努 (愛媛大)
北村恭康・中澤静男 (奈良教育大)
糸綾香・丸本まりな・谷垣徹 (奈良教育大学) 計 21 名

◇内容

1. ESD マスター認定証の授与



大西浩明先生 (飛鳥小)



蔵前拓也先生 (真美ヶ丘第一小)



中澤哲也先生 (平群北小)

2. 今年度の連続セミナー実施計画 (中澤)

3. 春日山原始林をテーマとした授業づくりセミナーに関して

講師：杉山氏

特別天然記念物 古来ほとんどふえつを加えず 巨樹が多い
寒地性の種類に加え、亜熱帯の植生もよく保存
されている。照葉樹林。

生物の多様性などの価値が認められる。

自然遺産ではなく文化遺産 景観・文化的に価値が認められる

東大寺山塊四至図 (756 年) : 社殿はないが、神地として記されている

841 年に勅命により狩猟伐木を禁じられる

春日宮曼荼羅 (鎌倉時代) : 神仏習合 4 柱に如来・菩薩をあてている

大和名所図絵 (江戸時代) 紅葉が美しい場所として知られている

春日山の利用 花山 榎・シキミを採る

秀吉による 1 万本の植樹

台風・観光目的等で人の手が入っている。人の手が入ることでよく保存されていると
ころに価値が見られる。



問題

- ・後継樹の生育不良 次の世代が育っていない。
- ・下層植生 下草がなくなってきている 鹿の影響
- ・ナギ・ナンキンハゼの拡大 ナギは熊野から移植されたもの
- ・ナラ枯れ被害の拡大

管理主体 奈良県 春日山原始林保全計画検討委員会 人やシカとも共生できる森林保全のための取組.

- ・ナギ数量調節
- ・ナンキンハゼの駆除
- ・ナラ枯れ防除対策
- ・後継樹育成
- ・保全の担い手の育成：春日山原始林を未来につなぐ会の活動
必要なのは、共感＝「自分ごと化」 多くの人が必要に思わないと守れない

4. ESD子ども広場に関する支援の依頼（丸本さん）



5. フィリピン・スタディーツアー報告会の案内（谷垣君）

6. ESDに関する解釈の変化（中澤）

持続可能な社会づくりの担い手を育成する教育から
持続可能な社会づくりの担い手育成を通して

SDGsの達成に貢献する教育へ

(1) MDGsとSDGsの比較

①解決したものと未解決なもの

新たに優先したいこと

平和でなくなっているのかも

②MDGsは途上国に焦点が当てられているが、SDGsでは先進国にも求めている

都市・平和

貧困・相対的貧困など

③MDGsは上から目線、SDGsは地球全体

(2) これからの世界遺産学習

◇教材化によって獲得できるESDの視点を明確にする

①多様性 時代にわたっている

責任性 自分が

連携性 みんなで

②責任性、公平性、多様性、相互性、循環性（有限性）

③連携性、公平性、有限性

◇その教材によって貢献できるSDGsは何か？

①貧困・飢餓、平和

②貧困、平和

③飢餓、健康・福祉、平和、働きがい

※教材のどこに焦点を当てるかで変わってくる



第2回奈良ESD連続セミナー 資料

奈良教育大学 中澤 静男

開催日時 平成30年6月8日(金)19時～21時

会場 次世代教員養成センター2号館多目的ホール

テーマ：次期学習指導要領とESD

次期学習指導要領に即した各教科・総合等でのESDの授業

ESD学習指導案の様式について

1. 次期学習指導要領について

(1) これまでの学習指導要領との違い

- ・ 予定調和の世界で生きる子どもの育成が先行き不透明な世界で生きる子どもの育成に変化
グローバル化・AI化・人口爆発(食料問題)と人口減少(労働力不足)・温暖化 など
- ・ 社会に適応できる力の育成というよりは、社会の創り手の育成 適応→創造

(2) 子どもにつけたい3つの学力(資質・能力)

- ①各教科で育成する教科固有の学力
- ②すべての教科の基盤となる学力

③地球的課題に対応する力

(3) 学力(資質・能力)を構成する3つの柱

- ①知識・技能 事実的知識(断片的知識)

what, where, when, who, which

- ②思考力・判断力・表現力 概念的知識(構造化された知識)

why

事実的知識を比較したり、総合したり、因果関係でつないだりすることで、説明できる知識に。

- ③学びに向かう力・人間性 価値的・判断的知識(深い学び)

how

自分に問い直し、生き方や考え方に迫る

(4) 見方・考え方の育成について

見方・考え方とは視点と同じ。教材や社会事象に対する構え・アンテナ

子どもは、白紙の状態で教室にいるのではなく、生活経験を通して、様々な見方・考え方を身につけている。

子どもは既存の見方・考え方を使って、課題を発見する。

子どもは既存の見方・考え方を使って、仮説を立てる

(学習前にできる範囲での知識の構造化を行って)。

学習によって、見方・考え方が洗練化される。(汎用性のある見方・考え方の獲得)→類推・転用

2. 各教科学習と ESD

各教科学習を通して、各教科特有の見方・考え方を身につける。

各教科学習を通して、各教科特有の資質・能力を身につける。

教科横断的な学習（総合・生活）を通して、汎用性のある見方・考え方、資質・能力を身につける。

社会を教材化した学習（社会に開かれた教育課程・ESD）を通して、より洗練化され、汎用性のある、見方・考え方、資質・能力の育成を図る。

3. ESD に関して

(1) ESD で育てたい見方・考え方 (ESD の視点)

	多種多様な要素からなる視点	互いに作用し合う視点	ある方向へ変化している視点
自然環境・社会環境 (実態概念)	「多様性」	「相互性」	「有限性・ 循環性」
人・集団の意思や行動 (規範概念)	「公平性」	「連携性」	「責任性」

国立教育政策研究所より改変

多様性：色々ある方がいい

相互性：つながっている、つながりを尊重する

有限性・循環性：有限なものである。それが循環していればいい。

公平性：世代内と世代間の公平を考えていることが重要。

連携性：排他的でなく、異なるもの（異文化を背景とする人々など）とも妥協点を見出し、協働する。

責任性：最後までする。リーダーシップを発揮する。協力する。

(2) ESD で育てたい資質・能力

①クリティカルシンキング（批判的思考力、代替案の思考力）

②システムズシンキング（総合的に、背後のシステムをとらえる）

③長期的思考力（データに基づき、見通しをもつ力）

④コミュニケーション力（異質な集団でも意見を述べる、聞く、妥協する）

⑤協働的問題解決力

(3) ESD で育てたい価値観（見方・考え方の背景となる生き方の基準）

①世代内の公正と世代間の公正

②生物多様性などの自然環境の保全を尊重する

③互いの人権・文化を尊重する

(4) ESD の学び方 (主体的対話的で深い学び・アクティブ・ラーニング・問題解決学習)

- ①身近な課題の発見・教師による提示
- ②既有的な見方・考え方を生かした仮説の作成
- ③調査活動
- ④調査結果に基づく話し合い
- ⑤留保条件付きの解決 → 自分の生き方やライフスタイルへの問い直し
- ⑥行動化

この反復によって ESD で育てたい資質・能力が身につく、見方・考え方が洗練化され、それが子どもの中に価値観としてゆっくりとしみこんでいく (内化)。

(5) ESD の条件

持続可能な社会の担い手づくりを通して、持続可能な開発目標 (SDGs) に貢献する教育
→ 構想する授業実践が、SDGs の何に貢献することになるのかを考える必要がある。

3. ESD 学習指導案 (各教科・総合・生活) の様式

- ①単元名
- ②単元の目標 (3 観点で 知・技、思・判・表、主学)
- ③単元の評価規準 (3 観点で)
- ④単元について
 - ・教材観：学習の中心
 - ・児童観：学習に入る前の、学習内容 (単元) に関する児童の実態 (アンケート結果など)
 - ・指導観：指導上の工夫、配慮すること。評価方法など。
- ⑤ESD との関連 (箇条書きではなく、なぜそれが可能かの理由を記す)
 - ・学習を通して主に養いたい ESD の視点
 - ・学習を通して主に育てたい ESD の資質・能力
 - ・育てたい ESD の価値観
 - ・SDGs のどれに貢献できるのか
- ⑥学習活動の概要

全○時間

主な学習活動	学習への支援	◇評価 ・備考

⑦本時について

- ・目標 (1 つ)
- ・評価基準 (1 つ)
- ・本時の展開

主な学習活動	学習への支援	◇評価 ・備考

4. ESD 実践事例の作成 (マスター・スペシャリスト)

- ESD 学習指導案と形式は同じ
- 本時は不要
- 考察に重点を置く

次のことについて「たまねぎ」形式で2つか3つの切り口で考察を作成

考察内容は、他の教材開発や他の実践者にとって有益なものとするのが目標です。

○教材について

ESD 教材として、SDGs への貢献について

○指導方法について

特に学習前後の児童の変容を比較し、その要因について考察する。

- 考察だけで、A4 で 1 ページ以上は必要

第3回奈良 ESD 連続セミナー概要報告

奈良教育大学 北村 恭康

開催日時 平成30年7月5日(木)

会場 奈良教育大学次世代教員養成センター2号館多目的ホール

参加者 大西・圓山・阿彌・乾(飛鳥小)、樋口・三木(都跡小)、中澤哲(平群北小)、河野(附属小)
蔵前(真美ヶ丘第一小)、堀口(奈良学園小)、島(郡山西小)、今井()、
中澤敦(きんき環境館)、後藤田(成蹊大)・北村(奈良教育大)
糸・谷垣・片山・藤井・阿部・山田・丸本・藤本・西城・上田(奈良教育大：学生)
【新たな学生と教員のマッチング】

堀口—阿部、蔵前—上田

内 容

実践事例の検討

① 奈良市立飛鳥小学校 阿彌 美央先生

奈良町探険 — 奈良町の「ひみつ」を知りたい —

- 良い点
- ・地域が子どものフィールドになっている。
 - ・ガイドブックの作成で、外部に発信している。
↳ 伝えたいことを発信できた。
 - ・自分の住んでいる地域を見直しできる。

疑問点

- ・調べるグループ分け



身代わり猿グループ・からくりおもちゃ館グループ
町名の看板グループ・元興寺グループ

「もの」で構成している。

住んでいなければわからないことも多くあるので、住民の視点も大切にしなければならない。

⇒ 人にもフォーカスする必要がある。

①得られる ESD の視点

連携性 (観光客も住民も奈良町を大切にしていることから)

公平性 (残ってきたものを未来につなげる)

②ESD の資質・能力

未来的思考 (自分たちはどんなことができるのか)

住民にインタビューが必要

コミュニケーション能力

③SDGs の何に貢献できるか

11: 住み続けられる街づくり

4: 質の高い教育

④ESD の価値観

人と人とのつながり

世代間の公正



② 平群町立平群北小学校 中澤 哲也先生

地域のお祭り ～平群に伝わる勧請縄を通して～

勧請縄 古来悪霊や疫病が村に入らないように阻止するとともに、五穀豊穡や子孫繁栄などを願って村の入り口に縄(勧請縄)を張った、民俗行事。

- ・ 1月3日に村の男たちが縄をなう。女性は昔炊き出しなどをしていたが、今はして見ている。
- ・ 見るのが楽しみ。
- ・ 女の人たちは綱に触っていない。
- ・ 村の若い人が老人から教わりながら行っている。
- ・ 楽しそうにやっている。

- ・ 藁は地元のものを使っているが、農家の減少でこの先困ることになるかもしれない。

良い点 ・子どもが目にしてはいるものだが「なに」という疑問がわいてくる教材である。

- ・ 地域の人のために頑張っている様子がわかる。

疑問点 ・作っているのは一年で数日なので人とのかわりが見えにくい

写真より VTR のほうが良いかも



①得られる ESD の視点

連携性 (町の安全を願って地域住民が協力しながら行っている)

公平性 (女性が一緒になって作れない、触れられない点に問題があるのではないかと)

- ・ 民俗行事なので難しいが、地域住人の考えも聞く必要があるのではないかと。
- ・ 地域の話・・・昔からの伝統なので、自分たちの代で変更するのは怖い。

責任性 (勧請縄を守り残していこうという姿勢)

②ESD の資質・能力

未来 (世代間を超えてみんな幸せでありたい)

協力 (地域住民の幸せを願って、みんなで勧請縄を作り上げている)

批判 (女子が勧請縄を作るのに参加できないことから、地域の民俗信仰的なこともあるが、話し合う必要があるのではないだろうか)

③SDGs の何に貢献できるか

5: ジェンダー平等を実現しよう

11: 住み続けられる街づくり

17: パートナリーシップ

④ESD の価値観

地域住民のつながり、世代間の公正



※次回は8月21日(火) 19時より 次世代教員養成センター2号館多目的ホールにて行います。

第4回奈良 ESD 連続セミナー概要報告

奈良教育大学 北村 恭康

- 開催日時 平成30年8月21日(火) 17時～19時30分
- 会場 奈良教育大学次世代教員養成センター2号館多目的ホール
- 参加者 梶原(平城西小)、島(郡山西小)、中尾(平野小)、圓山・大西(飛鳥小)、三木(都跡小)、中澤・長澤(平群北小)、石田(左京小)、中澤(きんき環境館)新宮(平城小)、梶原(ESD学会事務局)、後藤田(成蹊大)谷垣・糸・丸本・藤井・板口(奈良教育大学院・学部生)北村(奈良教育大)

○内容

1 実践報告から研究論文へ ―実践の質を高めるために―

奈良教育大学前学長 長友恒人氏

(1) 研究に必要なこと

- ・先人、他の人の研究を調べる。
- ・自分が行おうとしていることを俯瞰的に相対化する。(位置づける)
⇒ **オリジナルであること**
- ・メモ魔になれ。(ただし長文はだめです)
- ・一見無駄と思われることをしなさい。(世の中には無駄なことはない)
⇒ ただし、無駄と思われることに没頭するな
- ・研究の目的、方法を明確にする。
⇒ 授業についての実践的研究であれば、クラスの規模、地域性、子どもの実態などを明示する。・・・他で応用するためにも必要
- ・分類せよ! そして 統合せよ!
(相対化:共通点を見つけよ)
⇒ 幼児であっても 親と他人を区別
甘いと苦いを区別
を分類している → 科学の芽生え
⇒ 資料より : 分類は科学的思考の原点ある。
- ・自然科学の論文 → 同じ方法で又は別の方法で再現できる。
人文科学の論文 → 厳密に再現することは不可能である。
⇒ 時間をもとに戻すことができない。
人、社会をもとに戻すことができない。
→ アーミッシュの社会においても過去に戻すことはできない。
(アーミッシュの生活を否定するものではない)

実践報告から研究論文へ ―実践の質を高めるために―

研究に必要なこと

1. オリジナルであること
全く新しい・・・ということは難しい
先行研究(事例)を精査する・・・先達の仕事をリスペクト、自分の研究を相対化する
先行研究に類似しても新規の視点、分析法 etc.があれば、オリジナル性は担保される
2. 目的と方法が明確であること
何の為の研究かを明確にする
条件を明示する
授業についての実践的研究であれば、クラスの規模、地域性(都市・郊外・農山漁村 etc.)、困難児はいるか、等々・・・他で応用するためにも必要
3. 実証的であること
客観的なデータまたは事実が不可欠
4. 分析的であること
分析の手法を明示する
その分析手法の限界を踏まえる
5. 結論と課題が明確であること
分析に基づく結論であること
分析で明確にできなかった点(残された課題)を明示すること
結論に基づく提言があれば、明示する
主観的な結論であってはいけない
単なる報告であってはいけない

事例研究

(誤解のないように:実践報告は実践報告としての価値と重要性がある)

(2) 「エッセイ」と「科学記事」の違いを考察

- ・ 例文 1羽のガラ類が牛乳瓶のふたを開けて、うえのほうのクリームを食べる。
その後多くの町でこの行動がみられるようになった。1羽の鳥が別の鳥の技をもほう
することで広まったのは明らかだ。
 - ・ 鳥が「もほう」という学習行動をとったという根拠が示されていない。
 - ・ 「明らかだ」と断定するだけの根拠が示されていない。

↓
「エッセイ」である。

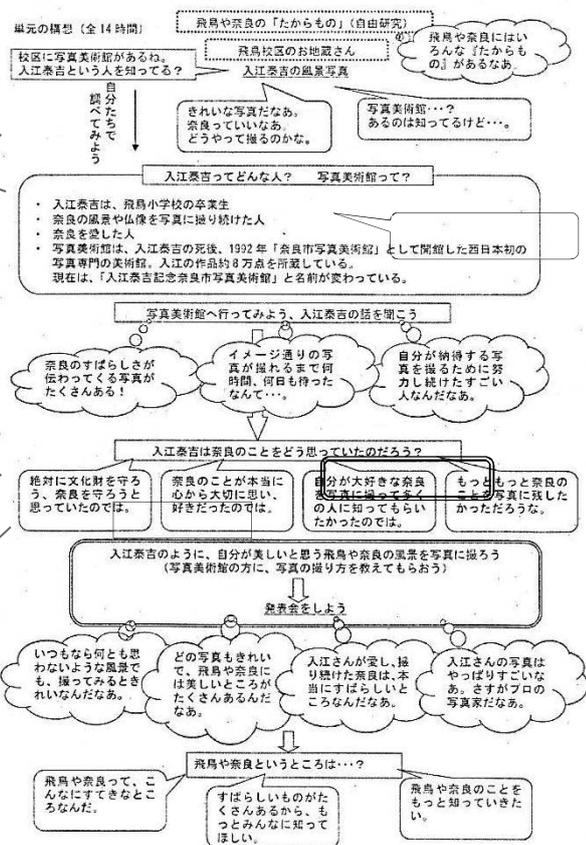


(3) 日本 ESD 学会第 1 回大会研究発表要旨集より

- ・ 「ならまちを活用した ESD 活動の実践」
 - 参加した子どもの変容
 - 指導した学生の変容
 - 宿泊から日帰りに変更した結果
- } ポイントとしては良いが、主観的である。
- ・ 資質・能力の育成 ⇒ この二つを・で併記するのはどうだろうか。
 - ・ 学習指導要領 ⇒ ベースにしているが、金科玉条にはいけない。(実践が大切である)

2 単元構想図の表し方

奈良市立飛鳥小学校 大西浩明氏



- ・ 「子どもの思考の流れを追いかけていこう」と始めた。
- ・ 指導案を書く前につくり、後で文字に起こす。
- ・ 持ってほしい思い
- ・ 発言してほしい言葉(出させたい言葉)つけてもらいたい力
- ・ 吹き出しは、多くあればよいものではなく、厳選したほうが 良い。
- ・ 固定したものではなく、実践していく中で変えてもよい。指導案も変えられる。
- ・ 単元の核になるもの
- ・ 発問
- ・ 他の先生と共有しやすい。
- ・ ゴールが見やすい。
- ・ 思いやつけたい力を可視化することも含め、一目で流れがわかる。
- ・ 何を核にするのか。
 - ⇒ 教材、資料、子どもの活動
- ・ 吹き出しの言葉は、
 - ⇒ 学級の子どもをイメージして書く。

第5回奈良ESD連続セミナー 概要報告

奈良教育大学 中澤静男

- ◇開催日時 2018年9月20日(木) 19時00分～22時30分
- ◇会場 奈良教育大学次世代教員養成センター2号館
- ◇参加者 圓山(飛鳥小)、河野(附属小)、新宮(平城小)、後藤田(成蹊大)、中澤敦(きんき環境館)、梶原(平城西小)、高良(筒井小)、近藤・島(郡山西)、蔵前(真美ヶ丘)青山(京エコロジー)、堀口(奈良学園小)、西口(奈良市教委)、
糸・西田・片山・菱谷(奈良教育大学学生)、北村・中澤(奈良教育大学) 19名

◇内容

1. ミニコミュニケーション
2. ESD学習指導案の相互検討会

(1) これからの食料生産と

わたしたち(新宮先生)

- ①農業の多面的機能をしっかり押さえて、農業の大切さについての理解を十分に。
- ②耕作放棄地に着目させたい
- ③日本の稲作をまず学習した上で展開してはどうか。
- ④農業を活性化することで環境が保護される。消費行動を変えることで農業を支援できる。
- ⑤地産地消の範囲について
輸入物よりも国産品、国産品よりも県内産、県内産よりも地域(校区)産
その理由をしっかりとおさえる(輸送エネルギー・CO₂、地域経済の活性化)
- ⑥耕作放棄地の増加とともに、農家数の減少もおさえる
- ⑦日本の農業をシステムとして捉える学習(社会科)がまず必要。そこをとばして地産地消に持っていくと社会科として成立しない。まず、教科書を用いて、日本の稲作を学習し、システムとして行われている稲作を学ぶ。その中で、農業の多面的機能や食料自給率、農家数の減少などの日本全体の課題についても学習しておき、「平城小校区ではどうだろうか」と展開していくとよいのではないかな。
- ⑧授業展開について
教科書で稲作(日本の農業を俯瞰的に捉える)→平城小校区の現状(農家数の減少・耕作放棄地)
→奈良市の現状(農家数・耕作放棄地)→日本の農業の課題を具体的に認識(自給率・農家数・耕作放棄地)→フードアクション(日本の農業を消費を通して活性化させる1つの方法として)
→校区の農業を活性化させる方法として「地産地消」(このときに地産地消の意義をおさえる)
→これからの消費行動を考え、実行する

(2) 国際連合のはたらきと日本人の役割(島)6年生社会科

☆ESD的な社会科をしたい

世界の課題から教育にフォーカスしていく

教育:濱田さん・ガーナを招へい

その他の課題解決にむけた国連の働きについては、個々の調べ学習で



オープンエンド（自分たちにできること）

①国際協力の意義

個人的成長 濱田さん（JICA）－ODA（国連ではない） 濱田さんの成長・喜び・やりがい
国として 平和主義（日本の平和を維持するうえの布石）、

SDGs への貢献（貧困撲滅はエネルギー問題、気候変動の緩和につながる）

②ゴールとしての子どもの姿

自分に何ができるかではなく、どんな大人になりたいかの方がいいのでは

③国際協力という大きな単元の中に国連の働きがあるので、それも合わせて取り扱う。

④教育のフォーカスするしかけ

ノーベル平和賞のマララさんの演説を参照

(3) 日本の工業（河野先生）

・ねじ工場に焦点化

・海外で人気の日本車（中古車・日本の文字を消さずに使っている）

丈夫で安全な自動車、質の高さ、長持ち それを支えるねじ工場

・SDGs との関連

やりがいのある仕事：SDGs の目標 8（はたらきがい）

質の高い工業製品：目標 9（イノベーション）

燃費のいい自動車：目標 7（エネルギー）

長持ちする車をつくる、修理して長く使う：目標 12（生産と消費）

①車の長期使用の是非は問わないが、修理して長く使うこともよい、ということに気づかせたい

②学びの中心は

自動車産業を切り口に日本の工業への理解を深める

ねじ工場だけを学ぶのではなく、自動車産業の一部として学ぶ。さらに関連工場や関連工場が海外にある場合など、多様な工業システムにふれる。このねじ工場は、関連工場というよりも、協力工場？。そういうつながり方もあること（多様性）に気づかせる。

働く人の思いにふれることで、修理して長く使うことへの気づきにもなる

学びの中心については整理の必要がある

③ローテクとハイテクを結ぶ

ねじ工場の方針

（新しい自動車等の製品開発のためには、少数でも受注生産する：ハイテクを支えるローテク魂）

(4) ダンボールコンポストから考えよう（圓山先生）

☆ダンボールコンポストによる生ごみのたい肥可 — 奈良市環境リサイクル課との連携

☆学級だけではコンポスト利用が困難なので、学校全体の取組にしたい（パートナーシップの意義）

・食品ロスの学習より、食べ残しのない学級を目指しており、食べ残しがでないという実態。

・アレルギー体質のため、関わるできない児童がいる。

・食べ残しのたい肥化ではなく、給食室で出る野菜くずならできのでは。

→給食委員会や環境委員会にもちかける

→児童代表委員会に提案する

学級にも実行部隊を組織

かきまぜる、できたたい肥を畑に活用する

学級にも広報部隊を組織

ダンボールコンポスト自体はいいものなので、ポスター化。

低学年には紙芝居で

☆自分のクラスでは実行は難しいがパートナーシップでやろう

①ゲストティーチャーの話

落ち葉利用の話もあった。ただし時間がかかる。

②連携をテーマにしているのは目の付け所がいい（目標17）

③誰にとっていいのか（地球環境にとっても意義あるダンボールコンポスト）

ダンボールコンポスト自体のよさをしっかりおさえる

生ごみが減ることで、食品廃棄・燃焼のためのエネルギーの無駄やCO₂排出を低減できる。

資源の循環（食物連鎖）について学ぶ教材となる。

④次年度も学校として継続できるのか

3か月生ごみを入れる → 3週間の熟成期間（水を入れてかきまぜる）→たい肥として使用可
今年もらったダンボールコンポストは今年で終わり。次年度も配布されるかどうかは未定

3. 全国各地のESD学習指導案検討会（指導案を持参必須）

（1）東京：10月7（全日）・8日（AM）

（2）仙台：10月27日（PM）

（3）長崎：11月18日（AM）

4. 先進地視察

（1）世界遺産学習全国サミット in 宗像：11月17日

（2）ESD活動フォーラム：12月1日

（3）ユネスコスクール全国大会（横浜）：12月8日

次回は10月17日（水）19時～

会場：次世代教員養成センター2号館

※検討したいESD学習指導案・授業構想を持参してください。（30部印刷）



第6回奈良ESD連続セミナー概要報告

奈良教育大学 中澤 静男

- ◇開催日時 2018年10月17日19時～22時
- ◇会場 次世代教員養成センター2号館多目的ホール
- ◇参加者

辰巳（広陵中）、中澤哲（平群北）、阿彌・池見・大西・圓山（飛鳥小）、河野（附属小）、島（郡山西小）、西口（奈良市教委）、後藤田（成蹊大）、三木・樋口（都跡小）、中澤敦（きんき環境館）、堀口（奈良学園小）、蔵前（真美ヶ丘小）
糸・阿部・菱谷・丸本・山田・西田・板口・藤本・藤井・片山・谷垣（院生・学部生）北村・中澤（奈良教育大学） 計28人

◇内容

1. 授業構想の検討

(1) 「さまざまな心と体について考えよう」板口咲希



- ・LGBTについて知る。
 - ・性別を4つの枠で捉えて、自分の性について考える。
 - ・多様な性のあり方に触れ、自分の性は自分で決めていいことがわかる。
- 導入の工夫 アニメ・雑誌・芸能人の語りを使うというのも子どもには身近である
その人についてどう思うかな？という展開もあるが、クラスと同じ悩みをもつ子どもを傷つけることにならないか？配慮が必要

取り扱う教科：道徳・総合 → 中学校2年生道徳に取扱いがある

自分の性について考えるより、ジェンダー（ランドセル：男の子は青・女の子は赤といった）への関心を高める、再考させるという方向

昔は認められなかったが、今は認めるか、将来は認めるか という方向に
自分はどのように生きたいか、という方向

(2) 「地方自治・よりよいまちづくり人間になろう」阿部孝哉

- ・地方自治の概要を理解する。
- ・地域の課題を多様な立場人々の対立・合意へのプロセスを通して地方政治に主体的に関わることの必要性を理解
- ・地方自治に関わりたいか

○福山市鞆の浦の架橋計画での賛成派と反対派のロールプレイ

合意に挑戦することで、問題解決においてカギになることを探す

→学習内容がよく練られている

ロールプレイの役割 意見の根拠資料はあるのか。（文献に掲載されている発言を根拠に）
他地域から来た人の立場に立つことはできるか。地方から来た人が地方の政治に関われるか。
興味がない人（なぜ興味がないのか）に着目すると政治参加の意義が見えてくるのでは。
最後は地域に返すという流れもあるのでは（地域調査をからめて）。時間数が足りない。



(3) 「ことわざ紙芝居を作ろう」 丸本まりな

- ・ことわざは知識や教訓を短く表したもの
- ・ことわざは平安時代からあった(時間軸)、海外のことわざ(空間軸)

→ SDGsとの関連は

国による違いを提示するなら国際理解教育に SDGsの平和を単元目標に加えてもいい。地域に由来のあることわざを調べると地域を知ることになる SDGsの11に自分たちでことわざを考えさせることで、意欲化が図られるのでは。

年齢的に時代を取り扱うのは難しいのでは

海外のことわざを扱うのは年齢的に難しいのでは

ことわざを分類することで、SDGsとの関連が見えてくるのでは

(4) 「チャンス逃すな！箕面っ子！」 菱谷

「きたきた通信」実はアクセスが悪い。北大阪急行線・延伸工事中

- ・人が増えてくる2020年に向けて箕面のよさを伝えることができるようにしたい
- ・今は車社会で排気ガスも問題に
- ・鉄道ができることで病院やお店ができ、雇用も生まれる。住み続けることができる街に
- ・地下鉄なので、緑の多い環境も守ることができる
- ・反対意見もある
- ・鉄道完成にあわせて自分たちにできることを提案できるように

→

3・4年の地域学習の方に内容があっているが、広げるには6年生がいいかもしれない
町の移り変わりや道路の関わりをとらえると、鉄道ができることで町がどう変わっていくかを考える意欲になる。考える手立てにもなる。そのことを考えると、3年生では難しいだろう。

学習後の子どもの姿を明確にする

メリット・デメリットの両面を取り扱うのがよい

様々な立場の人をゲストティーチャーに招いてはどうか。

他市からきている住人が多いので、よさを見出す学習は意味がある SDGsの11



(5) 「不老不死の追求と持続可能な社会」 藤本 七彩

- ・生命倫理について取り扱いたい。不老不死の追求は社会にどのような影響を与えるのか。
- ・小説「百年法」の問題点を考える。百年で人生が強制終了
- ・医療倫理の四原則の意義を考える
- ・百年法の施行に対してディベートを行う。

→



フィクションを教材にする場合、机上の空論になりかねないので注意

不老不死とE S Dの関わり 人間が生き続けることで資源を浪費する、

ゴミ問題・居住地がなくなる

終末医療や終活、延命治療を考える方向へ持っていくとどのような意見が出てくるのか

※導入はフィクション ディベートのテーマは現実の問題を取り扱っては。

人生の最後を他人に決められること

高校生だけでなく、異年齢で話し合う場面をもつと学びが豊かになる。

長さより生き方を考えさせる学習

(6)「過去の経験に学ぶ～自然と共に生きるわが町、府中町づくり～」藤井 愛華

- ・つたわってきたことと地域の歴史をつなげる
- ・今回の水害を導入に
- ・防災に対する行動の変革を目指す

→

生徒にとって身近な問題なので当事者意識をもちやすい

総合でなく、地理的分野でも地形の特徴を押さえたうえで取り扱うことができる

水害発生時に自分がどう行動すればよいかを考えさせる（自分だけ・自分だけでなく）

カルタの使い方：防災カルタといえるものがある

石碑：大正時代の水害に関する石碑

町の誇り、防災に焦点化してはどうか

小学校の防災教育と中学校の防災教育（地域の防災・減災の主体としての中学生）

防災と町の良さをどうつなげていくか

行政の防災基本計画も学習資料として活用してはどうか ハザードマップなども

防災：自助（地形）・公助（行政）・共助（いいつたえ）・歴助（歴史から学ぶ）



※次回の第7回奈良E S D連続セミナーは11月14日（水）19時～ です。

第7回奈良ESD連続セミナー概要報告

奈良教育大学 中澤 静男

- ◇開催日時 平成30年11月14日(水) 19時～22時
- ◇会場 次世代教員養成センター多目的ホール
- ◇参加者 梶原(平城西小)、圓山・大西(飛鳥小)、中澤哲(平群北小)、島(郡山西小)、
後藤田(大阪成蹊大)、青山・掘・藤田(京エコロジーセンター)、高良(筒井小)、
中澤敦(きんき環境館)、三木・樋口(都跡小)、蔵前(真美ヶ丘第一小)
板崎・山田・藤井・阿部・西田・片山・糸・菱谷(学生)
北村・吉川・中澤(奈良教育大学)、 計25名

◇内容



1. 柳生街道とわたしたちの暮らし 西田侑壱
 - ・3年生の社会科よりも高学年の総合の方が発達段階としてふさわしいのでは
 - ・なぜ現代も残されているという問い方(道は残るもの)
 - ・奈良の人にとっての生活道、清水通りから迫ってはどうか(インタビュー調査)から地域活性化を考える授業にしてはどうか
 - ・SDGsのどこと関連するのか:目標11かな

- ・調査の方法:聞き取り調査の方法
国語教材「インタビューしよう」
モデルを見せる→児童相互→校内の先生方へ→実際のインタビューというプロセスを踏む
事前に根回しをしておく
- ・奈良安全策動などに関連して取り扱うと面白い
- ・単元の目標:過去→現在→未来
- ・何年ぐらい前までを扱うか
- ・社会科なら3年生の地域の変遷
- ・中心発問の再考:柳生地域の課題をふまえて、これからの考えるなど

2. 秋吉台の観光化とこれから 片山健太

- ・中学校1年生の「地域」:市町村より小さな地域
- ・秋吉台はカルスト地形の教材だけでなく。人とのかかわりの中で景観保全が行われていることに気づかせたい
- ・畑作地・畜産業 → 日本軍の演習地 → 米軍の空軍演習地への反対から観光化へ
- ・草地として維持するための山焼きとその担い手・受益者の問題
苦勞しているのは畜産業の方 利益は観光関連の方 という問題
- ・景観の維持について考える
- ・ジオパークとしての価値も伝える
- ・地域学習で取り扱う(どこの生徒を想定しているのか):自分の地域に転移する

- ・畜産と観光のほかに自分たちにできることも考えさせては
- ・地理学習の内容と発展的な内容をどうつなぐか
- ・新学習指導要領の新しいところなのでチャレンジングな内容
- ・学習内容が多すぎるので「山焼き」に焦点化してはどうか。
- ・この地域の産業（観光業）を維持するうえで必須な草地の維持
今後も草地は維持できるかどうかから、他地域の草地の維持と比較して考える

3. 水を大切にしよう 山田つきみ

- ・水是三島の宝物
- ・バーチャル・ウォーターを紹介する。
(P46 参照)
- ・バーチャル・ウォーターの使い方
水は限られた資源であること
食料を輸入することはその地域の水を奪っていること
→ 食べ物を残さない
→ 食料自給率をあげることの重要性
→ 知ることは重要
→ 見えない水の見えるかはそのような見方を養うことになる
- ・バーチャル・ウォーターを持ち出さなくても、ペットボトル水のことから、ゴミのリサイクル（ペットボトルリサイクルは今後可能か・中国ショック）。
- ・（イ）を先にして（社会科学習としての中心）、（ア）へつなげることで地域の特色の学習になる。
- ・社会科の内容を整理するといひ。
- ・水をメインにした学習としては
- ・バーチャル・ウォーターを持ち出すと三島が薄れるのでは



4. 「英語の歌」 Heal the World by Michael Jackson 糸綾香

- ・歌が発表された時代背景を考える
- ・子どものモノローグ 25年度、better place になっているのか。
- ・英語の教科でする必要性は？英語としての学びはどこにあるのか？ボキャブラリー？
- ・PVがいいので、それから考える学習、作者が描いている社会についての学習にしては
- ・PVを見ると社会的背景を類推できる。
- ・all English で指導するといひのでは
- ・「私たちに何ができるか」を歌で表現するのはどうか
- ・あなたにとってのよりよい場所を考えさせてはどうか？
同時代の異年齢の子どもが考える better place を比較する。

5. 信貴山縁起絵巻をよむ 中澤哲也先生

- ・国語教材「鳥獣戯画をよむ」の発展として学習する
鳥獣戯画の解説文に述べられた4つの観点を信貴山縁起絵巻に活用する

・信貴山・校区の宝もの 信貴山朝護孫子寺・信貴山縁起絵巻

900年前 作者不明 伝説

登場人物の表情、しぐさ、色彩、生活風景が描かれているという特徴がある

・教育委員会、ボランティアガイドとの連携

絵巻のよさ、価値、見どころを聞き、解説文を作成し発信する。

・学芸員・ボランティアに話してもらいたいこと：

ガイドをやろうとしたきっかけを聞くといいのでは

・ストーリーにはふれないのか？→学芸員に巻物を見せてもらいながら、解説してもらおう。

・ストーリーにそった紹介文でなくてもいい。児童の着目点にこだわった解説文でいい。

・国語の中に総合 国語の「書く」が中心。国語で通すことも。

・国語の教材化があるので、導入としてよい。

・地元の宝物を知ることは重要だ（高校日本史の内容だが）

・道の駅での発信の仕方についてのアイデア

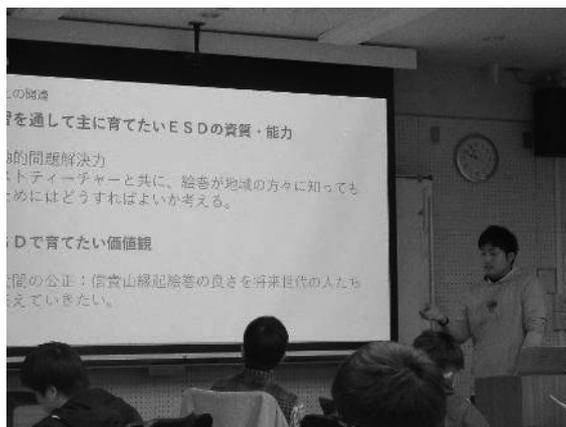
好きな場面を絵ハガキで

パンフレットは中途半端 アップとルーズをつかって想像を練りあう

自分らなりの絵巻をつくる

直接伝えて反応をもらうのが達成感がある。場面設定して。

・高畑勲さんから入っていくことで解説の面白さを学んだので、そこでの観点で絵巻の読んで考えたこととボランティアさんの観点を比較するといいのでは。



6. わたしたちの願いと政治のはたらき 島俊彦先生

・シティズンシップ教育を援用して単元デザインを考えた

地域社会が学習の土台になる

社会科・社会系の学習が中心

・日本社会の問題として人口減少 → 川上村 → 大和郡山市（消滅可能性都市）

・川上村は人口減少率日本一 一方、ベビーブームでもある←村の施策がある（手厚い助成や補助金）

習い事補助金事業 人びとの願いや地域の実情を反映した施策

大和郡山市 人びとの願い（保護者インタビュー）と行政施策の比較

市の総合戦略と比較するには、保護者だけでは不十分。現状をしっかりと把握するために、地域住民へのアンケートをしては。聞く分母を増やす。

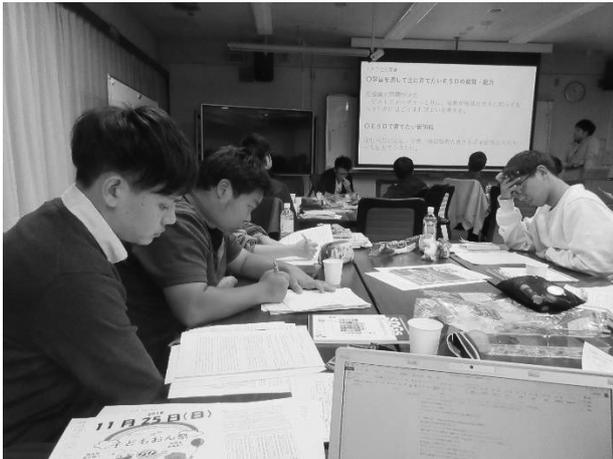
・大和郡山市の未来ビジョンを描いてもいいのでは

・私たちの政治とのかかわり方は？具体的に。（川上村の小学生がしていることを参考にしては）。

・人口減少としてのモデルとしては川上村は有効だが、大和郡山の課題を矮小化しかねないので、注意。

・社会科+総合で組み立てては。

・国の行政の学習へ発展させる。



今回で学生の皆さんの ESD 学習指導案の検討は終了です。ご指導いただいている現職の先生方と連絡を取り、1 月末日までに仕上げ、中澤までメールで提出して下さい。先生方の方から、進捗状況を問い合わせてくださいとありがたいです。

第 8 回奈良 ESD 連続セミナーは、12 月 04 日（火）19 時～次世代教員養成センター 2 号館で開催します。

12 月 26 日・27 日に実践発表していただく、河野先生、阿彌先生の実践発表をお願いします。

第8回奈良ESD連続セミナー概要報告

奈良教育大学 中澤 静男

開催日時：平成30年12月4日（火）19時～21時

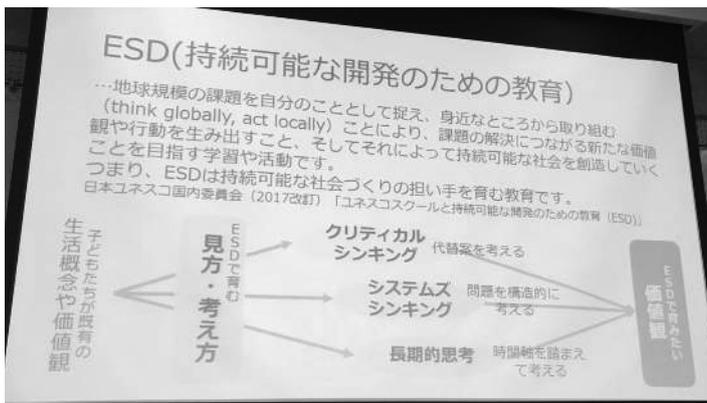
会場：次世代センター2号館

参加者：池見・西口（奈良市教委）、三木・樋口、河野（附属小）、中澤哲（平群北）、島（郡山西）、大西・阿彌（飛鳥小）、新宮（平城小）、藤田（京エコロジーセンター）
菱谷・阿部・藤本・山田・片山・西田（奈良教育大学学生）、中澤（奈良教育大学）

計18名

内容：実践事例の検討会

1. 「日本の食糧生産」(河野先生)



ESDの理論的解釈

児童の持つ生活的概念・価値観が学習を通して作り替えられていく

ESDの学習を通してESDで育みたい見方・考え方を身につける

→これを繰り返すことで価値観が育っていく

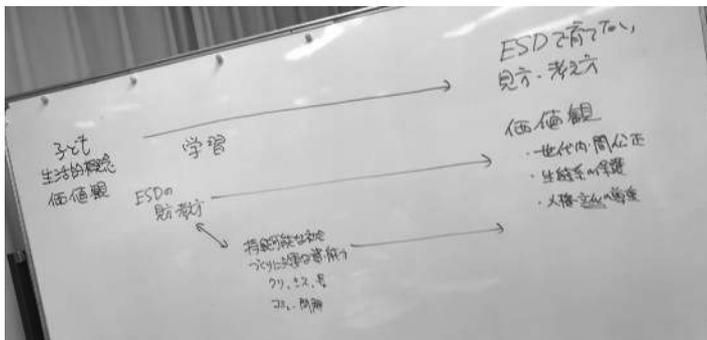
ESDの学習を通して資質・能力を身につける。

ESDで特徴的な資質・能力

クリティカルシンキング・

システムズシンキング・

長期的思考力



○私たちが食べている食べ物はどこから？ → 日本地図ではおさまらない

輸入相手国の事情で食料輸入に不安が ← 食料安全保障

北海道地震でもコンビニから品物がなくなった ← 輸入だけではない・国内事情も影響する

○なぜ食料自給率は下がったのか

他の国と仲良くしていたら、気にすることはない？

食生活の変化が影響しているのか

なぜ、国産品を選んで購入しているのか →安全だから ←でもトレーサビリティのことは知らない

安い方がいいのがお母さんの本音

○農家の声：後継者不足に困っている

○栄養士の先生の声

国産品の方がいい。特に地産地消がいい。

○国産品のメリット

「農業の基本的価値」

地域経済の活性化、雇用の創出、防災・減災、生態系の保全、気温の調節、文化の保護

○地産地消のデメリット

大量の注文に対応できない、高いことがある

気候の変動に対応できない、地域で生産できないものがある

○食料自給率をあげることより、地産地消を大事にすることの方が大切

消費者としてできること ①選んで買い物する ②地産地消

③外食はしない方がいい

(一年中同じものが食べることができるのはおかしい。量も決めることができない)

④地産地消のイベントに参加

※やった方がいいことはわかっているが、100%地産地消できないことを考えていくのがESD的。

2. 校区にある世界遺産ー春日山原始林 (阿彌先生)



・春日山原始林にはどんな生き物がいるのか

シカ、ヒル

・ヒルってどんな生き物 血を吸って生きている (主食はシカ・イノシシの血液)

湿ったところが好き

ヒルは春日山原始林を形成している、何かの役割を担っている

・ヒルが少なくなっている という問題

現在と 40 年前の写真の比較 下草がない、スカスカ

・下草が減っている → 乾燥 → ヒルにとって生活しにくい

→今の春日山原始林は、本来の春日山原始林ではない ← 世界遺産の条件を示すとよい
原因はシカの増加にある。

食べない植物だけが残っている

ナラ枯れという問題もある

・どうすればよいか

・どのような生物環境がいいのか?

いろいろな生き物がいた方がいい ← 昔の生き物の多様性をどのように示すか

○生き物のつながりを図に表す。それをつなぐ。← 原始林をシステムとして理解する

○実現可能性について、専門家にたずねてみる。

○世界の動植物の絶滅につなげる

○ヒルは生物多様性の指標になっている ヒルを切り口に生物の分布に目を向けさせる

○世界遺産としての価値をしっかりと理解させる

3. 「日本の自動車工業」(河野先生)

- ・日本の工業にとって自動車工業は基幹産業(12人に一人は自動車工業に関わっている)
- ・自動車のCM
- ・日本の自動車のよさ 快適・広さ・燃費・乗り心地
- ・年代ごとにニーズによって変わってきた自動車
- ・日本の自動車は海外でも人気
- ・日本の中古車は海外でも人気 日本語の表記をそのまま残している車がある
日本車をもっていることがひとつのステータス
- 海外の人にとっての日本車の魅力
丈夫、壊れにくい、長く乗れる、修理できる
→日本人にとって当たり前すぎて、アピールポイントにならない
- 丈夫で長持ちする自動車を支える部品 ねじ工場訪問
不適格品は引き取り(ほとんどない) →大量廃棄の原因←なんか、あかん気がする
- ・都市鉱山としてまた使える。
- ・自動車の部品の95%はリサイクルできる
- 金属製品のつながりの図
- 日本人はすぐに自動車を乗り捨ててしまう
- ・今あるものをもっと長く使うべき

4. 東大寺寺子屋での子どもの学び方をモデルにした世界遺産学習(新宮先生)

- ・東大寺にある様々なお堂について調べた
- ・東大寺の行事について調べた
- ・東大寺の僧侶について調べた
- すべてが大仏様とつながっていることに気づいた。
- 東大寺は大仏様を中心としたシステム
システムとしてやっていること → 動植物ごとく栄える世の中にしたい
- ・様々なものをシステムとして捉える見方考え方で平城校区を再発見
平城校区の宝もの・価値・行事・人物などをマップにしてつながりを考えさせる

1月26日の韓国教職員のエクスカージョンチーム

西口さん、松浦君、池見君、三木君(都跡小)、中澤哲也君(平群北小)、(山方君・都跡小)
山方先生については未確認

次回は、1月7日(月)19時～

まだ出ていない指導案の検討と及川先生のご講演「ESDの最新情報」について学びます。

第9回奈良ESD連続セミナー 概要報告

奈良教育大学 中澤 静男

- ◇開催日時 2019年1月07日(月)19時~22時
- ◇会場 奈良教育大学多目的ホール
- ◇参加者 中西・西口(奈良市教委)、大西・圓山(飛鳥小)、三木・樋口(都跡跡小)、
蔵前(真美ヶ丘第一小)、河野(附属小)、中澤哲(平郡北小)、島(郡山西小)
藤田(京エコロジーセンター)、中澤敦(近畿地方ESD活動支援センター)
菱谷・藤本・西田・片山・藤井・山田・丸本(学生)
北村・中澤(奈良教育大学) 計21名

◇内容

1. 学習指導案の相互検討

(1) 昔の道具と人びとの暮らし(3年生社会科・蔵前先生・真美ヶ丘第一小)



- ・象印の商品開発と昔のかまど(大和民俗博物館)
- ・七輪、洗濯板を都跡小から借りた
- ・地域の人に昔の道具の使い方を学ぶという人材は
いない
- ・深める(話し合い)のテーマは何にすべきか
← 単元目標に関わって必要な話し合い

◇アドバイス

- ・昔の暮らしは自然を生かした暮らし
- ・人の力が少なく、機械の力が大きくなってきた
- ・象印は「深める」で使うとよいのでは
← 子どもの既成概念を崩す

- ・SDGsとの関連では11、9もあるのでは
- ・新しいー古い、良いー悪いで4つの象限で分類してはどうか
- ・暮らしをシステムとしてとらえる。生活スタイルの変化
- ・機械は一つの目的に特化している。道具はいくつもの役割を兼務している。

(2) ことわざ紙芝居を作ろう(5年生国語科・丸本さん)

- ・世界のことわざに発展することをふまえ、3年生から5年生に対象学年を変更
- ・日本と同じようなことわざがあること
- ・ことわざの分類(経験、教訓、遊戯、批判的)
- ・SDGsでは16の平和と公正
- ・好きなことわざを選び、紙芝居にする

◇質問・アドバイス

- ・5年生の学習指導要領にこの学習内容はあるのか
- ・インターネットを使用する必要はあるのか
- ・故事成語なら、その背景の話を紹介するという中学生の学習内容にある



- ・海外では真逆なことわざがある。そこから文化の対比に発展するというのもあり。
- ・公平性よりも相互性のほうが適当ではないか。
- ・海外の生活の様子が垣間見えることわざ、奈良のことわざにしばって提示しては
- ・似ているもの、日本にはないもの、同じ意味のもので分類しては
- ・そのことわざを選んだ根拠を書かせる
- ・どのような紙芝居をイメージしているか。

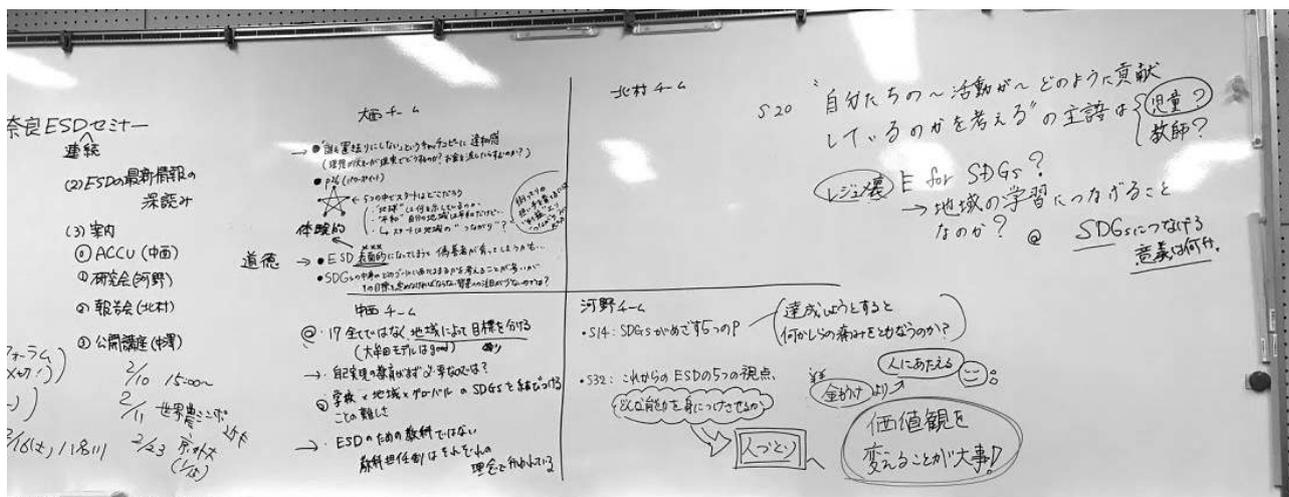
(3) 不老不死の追求と持続可能な社会 (高校1年生現代社会・藤本さん)

- ・不老不死社会が実現した設定
- ・医療倫理の4原則：自律尊重原則、無危害原則、善行原則、正義原則
- ・積極的安楽死と尊厳死、植物状態 東海大安楽死事件、富山県射水市民病院事件

◇質問やアドバイス

- ・導入は百年法や漫画でもよい(さらっと)が、ディベートでは本当にあった事件を取り扱い、医師の判断の是非を問うのではどうか。現実社会とのリンクが必要だ。
- ・不老不死と安楽死がつながるのか？101歳になったら死ななければならないのは安楽死か？
- ・色々な世代の意見を聞くのは意義がある。
- ・百年法を使わない方がシンプルでいいのでは。

2. ESDの最新情報の深読み



- ・偽善者を育てることにならないためには、体験的な学習、ほんものの体験、人物との出会いを学習過程で重視する必要がある。
- ・地域の学習をSDGsにつなげる意味
地域埋没を避ける。〇〇ファーストのように、自分の地域さえよければいい、と言う時代ではない。地域の課題は全国的課題や地球的諸課題と結びついている。地域を突き抜けて地球的諸課題に至る。
- ・17の目標は互いに関連している。すべてを学ぶというよりは、地域の課題に近いものを最初の目標にすえ、そこから広げていくとよい。
- ・自己実現のための教育を否定しているのではない。自己実現のための教育だけでは、優れた能力も悪いことに使われることもある。

- ・目標を達成しようとする、何がしかの痛みが伴うのではないか。しかし、その痛みの原因は、例えば経済至上主義といった既存の価値観にとらわれているためであろう。社会全体で価値観の変革ができれば、目標達成への努力が幸福感や達成感をもたらすことになるだろう。

連絡

- (1) 次回(第10回)は1月29日(火)19時～ 次世代教員養成センター2号館
- (2) ESD学習指導案、実践報告の提出締め切りは1月31日(木)です。
現職教員の提出先 中澤 nakazawa@nara-edu.ac.jp
学生の提出先 中城さん k-soumu@nara-edu.ac.jp
- (3) 第11回は2月15日(金)です。このときに差し替えは可能です。
- (4) 2月10日(土)15時から16時30分に第5回学ぶ喜び・ESD連続公開講座を開催します。
講師は東京大学の及川幸彦氏で、テーマは市民性教育・グローバル・シティズンシップエデュケーションとESDです。会場はいつもとは違い、次世代教員養成センター1号館です。

第10回奈良ESD連続セミナー 概要報告

奈良教育大学 中澤 静男

- ◇開催日時 2019年1月29日(火) 19時～21時30分
- ◇会場 次世代教員養成センター2号館 多目的ホール
- ◇参加者 阿彌・大西・圓山(飛鳥小)、三木・樋口(都跡小)、島(郡山西小)、
蔵前(真美ヶ丘東)
糸・藤本・板崎・片山・藤井・西田・阿部・山田・菱谷(奈良教育大学・学生)
北村・中澤(奈良教育大学)

◇内容：ESD学習指導案の検討

(1) Let's Listen 6 「英語の歌」(中学英語：糸綾香)

- ・歌を通してよりよい社会とは何かを考える。
- ・第一次：曲を聞く、映像を見る
- ・第二次：歌がつけられた背景理解：湾岸戦争、紛争
- ・第三次：未だ解決できていない現代的課題について、自分ができることを英作文で発表する
- ・第三次で生徒がすることが明確になった。
- ・現代の課題について具体的に生徒から出るかどうか。
 - ← 第二次終了時に課題を出し、家で調べさせる
- ・第三次の英作文はどの程度のものを想定しているか。
 - ← 戦争・紛争の原因について考えさせる。それをもとに英作文させる。
- ・最後にはみんなで歌う。
- ・第二次では、貧困や飢餓など幅広く扱うのか。作者の意図を汲んで。
- ・インタビュー映像など追加資料は、できるだけ英語のものを扱い目的意識をもって聞く機会とする。
- ・英語・総合として扱うのがいいのでは。→ 英語でも可能



(2) 少子高齢化と持続可能な社会(高校1年生・現代社会：藤本七彩)

- ・少子高齢化社会と生命倫理を取り扱う
- ・「長生きするのはよいことだ」という一般的な見方を批判的にとらえる(クリティカル・シンキング)
- ・高齢化の一つの要因が延命治療
- ・現実の企業活動を取り上げた(株式会社いろどり)
- ・自らの人生設計を考えレポートさせる。
- ・クリティカル・シンキングの場面設定が効果的だ。
- ・時間数の問題があるので、総合と一緒にしてはどうか。7次は時間外に設定する。
- ・高校1年生にとってレポートはハードルが高いのでは。
- ・人権文化の尊重も含むのでは。百年法は世代間の公正、人権についても十分考えられる。
- ・レポート例が示され、授業者の意図がよくわかる。
- ・「長生きすることが幸せなのか」の方が人生設計を考えるにはよいかも。



- ・延命治療より医療の進歩の言葉がよいのでは→延命治療（医療の進歩）とする
- ・少子高齢化の課題は深めることができるのでは。

(3) 「性別ってなんだろう？」(第6学年道徳・板口咲希)



- ・性別の多様性について考えさせる
- ・固定観念を揺さぶる教材が重要
- ・心の性・体の性・好きになる性・表現する性は確定できていない子がいるので、取り扱わない。
- ・カミングアウトにもっていくことはよくない。
- ・発達段階として自分ごととして取り扱うのは難しいが、道徳として取り扱ことは、多様性を認める上で意義がある。最後のところを「自分にと

って」では、考えにくいのでテレビなどに出てくる人を例に考えさせる方がいいのでは。ゆさぶりつつ、一般的に取り扱う。

- ・クラスに当事者がいる場合、特に配慮が必要になる。いじめの原因になりかねない。←学級経営が重要になる。
- ・「日常生活で困っていること」は具体的なタレントなどを教材化してはどうか。
- ・「見た目」で判断していることを意識させるために、教材としてタレントについて4つの観点から子ども考えさせてはどうか。
- ・写真などは引っ張られるので、イラストの方がよいのでは。
- ・「日常」のところ「性別ってなんだろう」について考え、感想文をかかせる。

(4) 「秋吉台の観光化とこれから(中学1年社会科・片山健太)



- ・秋吉台の地域の実態を理解し、これからのあり方を多角的に構想し、表現する。
- ・草原と森林の植生の違いの要因を考える(昔の地図や自然環境調査を資料とする)
- ・土地利用の変化と草原と農業・畜産業について考えさせる。
- ・農業・畜産業のために草原は必要だった。草地を維持するための山焼き。
- ・農業・畜産業が衰退したにもかかわらず、山焼きが継続している理由を考える。景観維持・観光のための山焼き
- ・持続可能ではない山焼き →若草山の山焼きは持続可能か？

- ・秋吉台の観光の課題(秋芳洞?カルスト台地?)導入に工夫が必要。
- ・観光の課題を景観維持に文言変更した方が、焦点化しやすい
- ・住民の意識のところ:高齢者だけでなく他の年齢も参照にすべき
- ・奈良の若草山の事例は第5次に移動した方がいい。
- ・第4次では、焼きを続けていく価値を明確に押さえるとよい。(生態系など)
- ・学校間交流で聞き取り調査を依頼する。
- ・かつては必要性があったが、なくなった事例としては曾爾高原の方がふさわしいのでは。

(5)「私たちの「府中町」と共に生きる」(中学3年総合・藤井愛華)



- ・カルタを通して災害の多い地域であったことに気づかせる
 - ・8月の災害時に自分の行動を振り返る
 - ・東日本大震災時の釜石の中学生の行動から、自らの行動を考えさせる。 率先避難者
 - ・地形と防災ぐらいいとどめておいていいのでは。
 - ・避難する人が少なかった。
 - ・第三次で「率先避難者」と「正常化のバイアス」をしっかりとおさえることが重要。
 - ・災害時の切実感をどのように引き出すか。
- ・伝承を導入にしなくても、8月の災害からはいった方が切実感がある。その後でカルタで歴史にあたるとよい。
 - ・釜石の前に、自分たちで考える時間をとる。
 - ・宣言に終わらず、避難所運営をしてみてもいい。

(6)「柳生街道とわたしたちの町」(小学4年・総合：西田有壱)

- ・つながりを意識させたい。(他地域とのつながり、人と人のつながり)
- ・なぜ、昔の清水通りはにぎわっていたのだろう。(昭和初期の地図とインタビューを参考に)

→ 他地域とのつながりの大切さ

→ 車社会になったことで人通りが少なくなった

- ・なくならなかった店の理由は：攻めの商法
- ・教材研究がすばらしい。特に手書きの地図
- ・地図の現代版は子どもに作成させる。→このままではいけないという切実感をもたせるために。
- ・文言の統一(東部山間など)
- ・導入に昔の写真をつかってもいい。
- ・交通の変化をどのように感じさせるか。インタビューで。
- ・にぎわいの中身に観光客ではなく、地元民であること。
- ・負い子の重さを体感させてはどうか。
- ・新しくできたお店はなぜここで始めたのかを聞き取ることで新しい側面が見えてくるのでは？



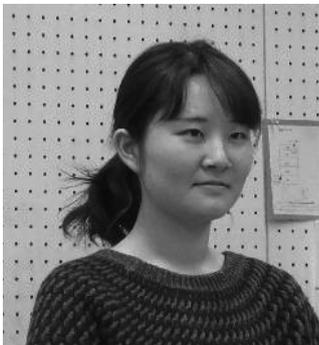
(7)「香芝市のいいところプロジェクト」(中学2年・総合：阿部孝哉)



- ・人口増加中のニュータウンの将来を構想させたい。
- ・千里ニュータウン(成功例)と泉北ニュータウン(今ひとつ例)を対比させ、香芝市の将来を考える。→視点を育てる。
- ・システムとしてニュータウンのよさをとらえさせる。
- ・高齢者に向けたサービスを市役所の方と相談するのは、現実的でいい。
- ・「住みよいまち」の主体をどうするのか。自分にとって?未来の人たちにとって?

- ・「より良さ」の主語を自分にした方が考えやすいのでは。
 - 時間を越えて「誰にとっても」を想定した
- ・将来帰ってきたい街でもいいのでは。
- ・データと共にそれに対する施策として市役所の方の話があった方が具体的でいい。

(8)「水を大切にしよう」(小学4年・社会科：山田つきみ)



- ・給水→水の使用
- ・源平衛川の美しい水辺環境→汚染→再生の取組
- ・取水している？農業用水になっている。
- ・4年生で世界の水の話は難しいだろう。
- ・源平衛川を出すためには下水についてもふれる必要がある。
- ・バーチャルウォーターの復活をお願い。(実践としての新しさ)
- ・前半の学習は4年生社会科で実践されている「普通の」授業展開になっている。その後、「世界の水事情」「源平衛川」と続き、水

の使い方を再考させる内容となっており、後半部分を5年生社会科の環境学習として実践する方がレベルが高い。

- ・前半部分は取水と浄水が内容となっており、後半の排水とはこのままではつながらない。簡単でいいので、排水にも触れることで、源衛川の汚染問題につなげることが可能となる。
- ・前半部分を切り離し、5年生の環境に特化する。その際、前半部分は4年生の学習を振り返るという内容で1時間とする。
- ・学習展開の概要
 - 1次：4年生の学習の振り返り（上水と下水）：1時間
 - 2次：世界の水事情（水不足の原因としての森林破壊、気候変動にもふれる）：2時間
飲料水だけでなく、農作物栽培のための農業用水の不足が深刻
水質と水量の保全
 - 3次：源平衛川の水質の変遷：3時間
水質汚染と原因、復活のための取り組み、現状
源平衛川の水の利用のされ方
水質・水量の保全の問題は海外だけではない。
 - 4次：バーチャルウォーター
農産物の輸入は、その地域の水を買っていることにもなる。
輸入量を増やすことで、その地域ではより多くの水が農業に向けられ、負荷をかけることになる。
 - 5次：自分たちができること（源平衛川の水、あるいは世界の水問題を対象に）



【重要な連絡】

- ・ ESD学習指導案の修正・提出 1月31日締め切り 中城さんへメールで提出
- ・ 第11回奈良ESD連続セミナー 2月15日(金)19時～
- ・ 認定証授与式 3月25日(月)3時から 学長室で行います(スーツ着用)

【参加者募集】

- ・ 第5回学ぶ喜び・ESD連続公開講座

開催日時：2月10日(日)15時～16時30分

会場：次世代教員養成センター1号館

テーマ「グローバル・シティズンシップ教育とESD」

講師：東京大学 主幹研究員 及川 幸彦 氏

奈良教育大学 名誉教授 田淵 五十生 氏

- ・ 世界農業遺産シンポジウム

開催日時：2月11日(月・祝)10時～12時

会場：次世代教員養成センター1号館

テーマ「世界農業遺産のESD教材開発を通じたESDの視点の研究」

コーディネーター 奈良教育大学 名誉教授 田淵 五十生 氏

指定討論者 東京大学 主幹研究員 及川 幸彦 氏

シンポジスト

奈良市立飛鳥小学校 大西 浩明 氏 阪南大学 祐岡 武志 氏

奈良市立都跡小学校 山方 貴順 氏 米子市立加茂中学校 山下 欣浩 氏

奈良教育大学 中澤 静男

第11回奈良ESD連続セミナー 概要報告

奈良教育大学 中澤 静男

- ◇開催日時 2019年2月15日(金) 19時～21時
- ◇会場 次世代教員養成センター2号館
- ◇参加者 大西・圓山(奈良市立飛鳥小)、島(郡山西小)、後藤田(成蹊大)、新宮(平城小)
中澤哲(平郡北小)、中澤敦(きんき環境館)、青山(京エコロジー)
糸・片山・菱谷・西田・山田(奈良教育大学学生)
北村・中澤(奈良教育大学) 計15名

◇学生のESD指導案の検討

1. 「チャンス逃すな! 箕面っ子!」(小学5年生総合: 菱谷君)

- ・2020年に北大阪急行が延伸される。2つの新駅がつけられる
- ・箕面船場阪大前駅に注目

箕面船場: かつては繊維産業のまち

現状: さびれている駅前

学習テーマ: 駅前の再開発を考えよう

ゲストティーチャー:

北大阪急行延伸会議の方、大阪船場繊維卸商団地組合の方

箕面市の条例 まちづくり推進条例施行規則第4条 緑化もしなければならない

多様性 これを機に様々な人が活動し始めている。

連携性 様々な立場

長期的思考力: 世代内・世代間の公平

SDGs: 8・9・11・12・15(条例より)

・導入について

いきなりゲストティーチャーではなく、事前に児童の知識を増やし関心を高めておく

2時間目の衰退している原因・今後のことを考える場面でゲストティーチャーを招へいする

導入の工夫: 工事の写真、観光資源(観光客の移り変わり)、地域の名物

住みたいまちランキングより衰退していることを把握させる

ゲストティーチャーと出会う必要性を感じさせる

3年生の地域学習を思い出す

完成予想図・マスタープランを見せて関心を高める

・「チャンス」は誰にとって

- ・生活は便利になるが、そのメリット・デメリット(例えば、商店の人たち)

様々な立場の人の立場から考える ← クリティカルシンキング

- ・提案先を再考した方がよいのでは

- ・PRについて おさえてほしいPRポイントは?(利便性と緑化、観光)

- ・緑化条例からSDGsの15との関連 外来種ではかえって問題になる。緑化の内容が重要。

・なぜ、船場繊維卸商団地組合がそこまで力を入れているのか。そこを考えると何かが見えてくるかも。



◇現職教員のESD実践報告検討

2. 「ダンボールコンポストから考えよう」(第4学年特別活動・圓山)

- ・食物アレルギーの視点、食育の視点、食品ロスの視点なども学ぶことができた。
- ・校内だが、教職室や委員会など多様な人と連携することができた。
- ・自分達でできることを考えるのが困難であった。
- ・動画は子どもだけで作成するのは困難。
- ・熟成中・温度が上昇しているのを体感している。
- ・紙芝居を読みに行かせてもらう低学年へは、打ち合わせを指示したが、その他には自分たちで打ち合わせをするようになった。

→ 主体的な行動化に成果が見られた。

- ・市の施策をクリティカルにみることができている。
- ・連携性について加筆した方がよい。
- ・ダンボールコンポストの機能を紹介するポスター
- ・考察の書き方
子どもの変容について
(1) ESDの視点について
(2) ESDで育てたい資質能力について
(3) ESDで育てたい価値観について (SDGsの達成との関連を含む)
という分析的な書き方のあと、全体的な子どもの変容でまとめるとよいのでは。



3. 信貴山縁起絵巻をよむ(小学6年生総合・中澤哲)

考察について

- ①地域の教材化の意義
- ②地域との連携の意義
- ③児童の変容

- ・地域の方が子ども発表を期待していた。貢献度がかなりあった。発信した場所が校内にとどまらなくてよかった。(発信の仕方)
- ・会場に感想カードなどを用意するとよいのでは。(子どもにとっての最大の評価)
- ・発表した児童の変容を記載することで分析材料になる。
- ・しっかり見させる指導方法(ボランティアガイドと一緒に見たのが効果があった)
- ・振り返りカードや児童の作品を分析材料にする。
- ・発信は伝えて終わりでは、児童の本当の変容は見えにくい。受けての感想を子どもに伝えて、それに対して子どもがどう感じたかが大切。
- ・考察の1つ目と2つ目は、授業方法に関する振り返りになっている
- ・児童の変容を(1)(2)(3)でまとめてはどうか



4. これからの食料生産とわたしたち（第5学年社会科：新宮）



成果・課題

(1) 授業後のアンケートの分析

- ・耕作放棄地について児童も地域も関心が高まった
- ・児童の発信が地域の人に影響を与えた（フードアクション）
- ・8に書かれていることを9で考察
- ・引用文が長いので、もっと簡潔に。
- ・引用を跡付けるだけでなく、実践を通して新たな児童の変容もあるほうがいい。

- ・子どもの具体的な姿をもとに考察すべき
- ・平易な文章で考察すること。内容的には問題ないが。

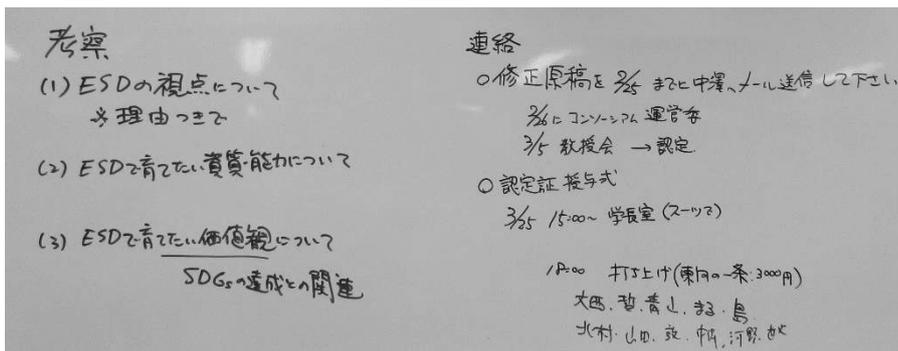
5. 総合学習（大学生：青山）・指導案の検討

- ・環境教育だけでなく、ESDやSDGsへの認知度を高めることが目的
- ・刺激を受けた学生が行動化するように 活動の深化・多様化に
- ・スタジオ（インタビューツアー）
企業へのインタビュー調査
- ・ラボ（スキルアップゼミ）
企業と一緒に課題解決の行動化
- ・交流会・報告会
- ・意欲のある大学生が対象



第1次の前段階の「なぜ、今SDGsなのか」が重要。ここを第0次ではなく第1次に位置付ける。空中戦に終始しないために、この共通理解が重要。地域の課題と結び付けて考えさせる。

- ・自分の活動や考えを出し合う、交流し合う場面があった方がいい。視野を広げるためにも。
- ・想定される学生 プログラムを学生と一緒に7か月かけてつくっている。すでに企業と連携して活動している学生もある。なるべく広く声をかけたい。
- ・このプログラムを通して、自分たちの活動がレベルUPしてもらうのが目的。現状を具体的に把握させ、終了後の自分や活動と比較して考察する。
- ・4人組のチームの運営を大切に。合宿が効果的。
- ・第一次産業とのかかわりが少ないのでは。



平成 30 年度 橋本市教育委員会第 1 回 ESD 連続セミナー概要報告

奈良教育大学 北村 恭康

- 開催日時 平成 30 年 6 月 22 日(金) 16 時 ~ 18 時
- 会場 橋本市教育文化会館
- 参加者 五十川純輝・野田直香・川西真由・中谷咲貴(三石小)、西田典史(清水小)
岡村久恵・西淵健太(紀見小)、米山真寿・白木香澄・辻本貴久(あやの台小)
森 和子(教育委員会)

○内容

1.開催日時(全 5 回)

6 月 22 日(金)16 時・8 月 8 日(水)14 時・27 日(月)14 時・12 月 7 日(金) 16 時・
1 月 11 日(金)16 時

2.研修の主な内容

- ・ 持続可能な開発目標(SDGs)の内容理解
 - ・ ESD の学習理論
 - ・ 優良実践事例の分析
 - ・ ESD 学習指導案の作成と相互検討
- ※ 1 月末日をめどに修正した ESD 学習指導案を提出
- 2 月 提出された ESD 学習指導案及びミニレポートの審査
- 3 月 ESD ティーチャー認定証の授与

1 ESD について Education for Sustainable development

1972 年 国連人間環境会議(ストックホルム会議) 「環境教育」概念の提起

1980 年 世界自然(環境)保全戦略 「持続可能な開発」概念の提起

1987 年 環境と開発に関する世界委員会(ブルントラント委員会)

持続可能な開発の表現が使われる

「将来世代のニーズを損なうことなく現在の世代のニ
ーズを満たす開発」

◎世代内の公正と世代間の公正

1992 年 国連環境開発会議(地球サミット) リオデジャネ

イロ

「持続可能な開発」についての行動計画(アジェンダ 21) 教育の重要性

1997 年 テサロニキ会議

持続可能性という概念は、環境だけではなく、貧困、人口、健康、食糧安全、
民主主義、人権、平和をも包含する者・・・その規範には敬意を払われるべき
文化的多様性、伝統的知識が内在している。



- 2002年 持続可能な開発に関する世界首脳会議(ヨハネスブルク)
 ※2005年～2014年 国連ESDの10年(DES)として推進
- 2014年 ESDに関するユネスコ世界会議
- 2016年 持続可能な開発目標(SDGs)発効

2. ESDの視点とSDGsの関係

裏にSDGsの目標が印刷してあります。

SDGs	ESD視点	SDGs	ESD視点
1		10	
2		11	
3		12	
4		13	
5		14	
6		15	
7		16	
8		17	
9			

3. 目指す方向性は同じ

SDGs ⇒ 経済、環境、社会の諸課題を包括的に扱い、課題相互の関連を重視

ESD ⇒ 人格の発達、自立心、判断力、責任感等の人間性を育む



他者との関係性、社会との関係性、自然環境との関係性を認識し、「関り」「つながり」を尊重できる個人を育む(日本ユネスコ国内委員会 2012. 1)

(環境、平和、貧困、平和、・・・課題相互の関連を重視)

4. SDGsの構造からの捉え方

1～17を4つのグループに分けてみましょう。【番号を】

--	--	--	--

Think globally act locally (地球規模で考えて 地域で行動する)

5. ESD に関する解釈の変化

持続可能な社会作りの担い手を育成する教育 ⇒ 持続可能な社会作りの担い手を育成する教育を通して、SDGs の達成に貢献する教育へ

ハーマン・デイリー 地球からの供給源と吸収源の持続可能な限界について

- ・再生可能な資源を持続可能な形で利用するには、その資源が再生するペースを超えてはならない。
- ・再生不可能な資源を持続可能な形で利用するには、その再生不可能な資源に代わりうる再生可能な資源が開発されるペースを上回ってはならない。
- ・汚染物質を持続可能な形で排出するには、自然や環境がそうした汚染物質を循環し吸収し、無害化できるペースを超えてはならない。

6. ESD で育てたい見方・考え方(視点)

	多種多様な要素	互いに作用し合う	ある方向に変化
自然環境・社会環境 (実体概念)	多様性	相互性	有限性・循環性
ヒト・集団の意志行動 (規範概念)	公平性	連携性	責任性

6. ESD でつきたい資質・能力

- ① クリティカルシンキング(批判的思考力・代替案の思考力)
- ② システムズシンキング (全体を見ていくことで大事なことを何か、解決策などを考える)
- ③ 長期的思考力(データーに基づき見通しを持つ力)
- ④ コミュニケーション力
- ⑤ 協働的解決力

7. ESD で育てたい価値観(見方・考え方の背景となる生き方の基準)

- ① 世代内の公正と世代間の公正
- ② 生物多様性などの自然環境の保全を尊重する
- ③ 互いの人権・文化を尊重する

8. ESD が必要とされる背景

- ①地球温暖化
- ②エネルギー問題
- ③食糧問題
- ④生物多様性の劣化

第2回橋本市ESD連続セミナー 概要報告

奈良教育大学 中澤 静男

- ◇開催日時 2018年8月7日(火) 14時～16時
- ◇会場 橋本市教育文化センター
- ◇参加者 岡村・西口(紀見小)、野田・中谷(三石小)、米山・中谷・辻本・(あやの台小)、森(橋本市教委)、北村・中澤(奈良教育大学)

テーマ：次期学習指導要領とESD

次期学習指導要領に即した各教科・総合等でのESDの授業

ESDで育てたい見方・考え方(ESDの視点)

1. 次期学習指導要領について

(1) これまでの学習指導要領との違い

- ・ 予定調和の世界で生きる子どもの育成が先行き不透明な世界で生きる子どもの育成に変化

問い1. 先行き不透明な原因を3つ書いてください。

- ・ 気候変動の影響などで、災害が多発するかもしれない。
- ・ 南海トラフを原因とする巨大地震もある。
- ・ 国家間の緊張が高まっており、戦争が勃発する可能性、あるいは日本においてもテロが発生する可能性もある。

- ・ AIの発達によって、今ある仕事の多くがなくなってしまう。

- ・ 特に日本では人口減少が進み、労働力も購買力も低下する。また医療や年金の問題などある。

☆社会に適應できる力の育成というよりは、社会の創り手の育成 適應→創造

(2) 子どもにつけたい3つの学力(資質・能力)

①各教科で育成する教科固有の学力

②すべての教科の基盤となる学力

問い2. たとえばどのような学力でしょうか。

- ・ 言語力、情報活用能力、問題解決力、クリティカルシンキングなど

③地球的課題に対応する力

問い3. 地球的諸課題を5つあげてください。

- ・ 気候変動
- ・ 食料問題
- ・ 平和・紛争・戦争
- ・ 生物多様性の劣化
- ・ 資源の枯渇
- ・ 人口爆発
- ・ 海洋資源の枯渇
- ・ エネルギー問題

(3) 学力(資質・能力)を構成する3つの柱

①知識・技能

事実的知識(断片的知識)

what, when, which, where, who などで問うことができる、答えが1つの知識。

②思考力・判断力・表現力

概念的知識(構造化された知識)

Whyで問うことができる知識

知識の構造化: 事実的知識を比較したり、総合したり、因果関係でつないだりすることで、説明できる知識に。

③学びに向かう力・人間性

価値的・判断的知識(深い学び)

how 自分はどうするかと自らに問いかける。自分に問い直し、生き方や考え方に迫る

問い4. 深い学びとは、どのような学びでしょうか? また、深い学びを促す要因は何でしょうか?

- ・子どもの考え方の基本や生きたかに影響を与える、変容を促す学び。
- ・知識だけでは人は変わらない。感動が必要である。
- ・感動と知識(情報)の融合がある学び方。体験の重要性。

(4) 見方・考え方の育成について

見方・考え方とは視点と同じ。教材や社会事象に対する構え・アンテナ

子どもは、白紙の状態では教室にいるのではなく、生活経験を通して、様々な見方・考え方を身につけている。

子どもは既存の見方・考え方を使って、課題を発見する。

子どもは既存の見方・考え方を使って、仮説を立てる

(学習前にできる範囲での知識の構造化を行って)。

学習によって、見方・考え方が洗練化される。(汎用性のある見方・考え方の獲得) → 類推・転用

2. 各教科学習とESD

各教科学習を通して、各教科特有の見方・考え方を身につける。

各教科学習を通して、各教科特有の資質・能力を身につける。

教科横断的な学習(総合・生活)を通して、汎用性のある見方・考え方、資質・能力を身につける。

社会を教材化した学習(社会に開かれた教育課程・ESD)を通して、より洗練化され、汎用性のある、見方・考え方、資質・能力の育成を図る。

→ 各教科と同様、ESDの見方・考え方、資質能力を育成する。

3. ESDに関して

(1) ESDで育てたい見方・考え方(ESDの視点)

自然環境・社会環境 (実態概念)	「多様性」	「相互性」	「有限性・循環性」
人・集団の意思や行動 (規範概念)	「公平性」	「連携性」	「責任性」

国立教育政策研究所より改変

多様性: 色々ある方がいい

相互性: つながっている、つながりを尊重する

有限性・循環性: 有限なものである。それが循環していればいい。

公平性：世代内と世代間の公平を考えていることが重要。

連携性：排他的でなく、異なるもの（異文化を背景とする人々）とも妥協点を見出し、協働する。

責任性：最後までする。リーダーシップを発揮する。協力する。



第3回橋本市ESD連続セミナー

奈良教育大学 中澤 静男

- ◇開催日時 平成30年8月27日(月)14時～16時
- ◇会場 橋本市教育文化センター
- ◇参加者 川西・野田・中谷(三石小)、岡村・西淵(紀見小)、米山・辻本(あやの台小)
森(橋本市教委)、北村・中澤(奈良教育大学)

◇内容

テーマ：ESD学習指導演

1. 前回のふりかえり

(1) ESDで育てたい見方・考え方(ESDの視点)

※ESDの視点は、教材に内在する。

自然環境・社会環境 (実態概念)	「多様性」	「相互性」	「有限性・循環性」
人・集団の意思や行動 (規範概念)	「公平性」	「連携性」	「責任性」

国立教育政策研究所より改変

多様性：色々ある方がいい

相互性：つながっている、つながりを尊重する

有限性・循環性：有限なものである。それが循環していればいい。

公平性：世代内と世代間の公平を考えていることが重要。

連携性：排他的でなく、異なるもの(異文化を背景とする人々)とも妥協点を見出し、協働する。

責任性：最後までする。リーダーシップを発揮する。協力する。

問い1. 次の教材(ネタ)に内在するESDの視点は何でしょうか?(複数可)

①唐招提寺の釈迦如来立像

多様性・連携性・公平性

②薬師寺の百万巻写経勧進

連携性・公平性・責任性

(2) ESDで育てたい資質・能力

※資質・能力の育成は指導方法に依存する。

①クリティカルシンキング(批判的思考力・代替案の思考力)

②システムズシンキング(総合的・多面的思考力)

③長期的思考力

④コミュニケーション力

⑤協働的問題解決力

問い2. このような資質・能力を養うのに適切な指導方法とは?

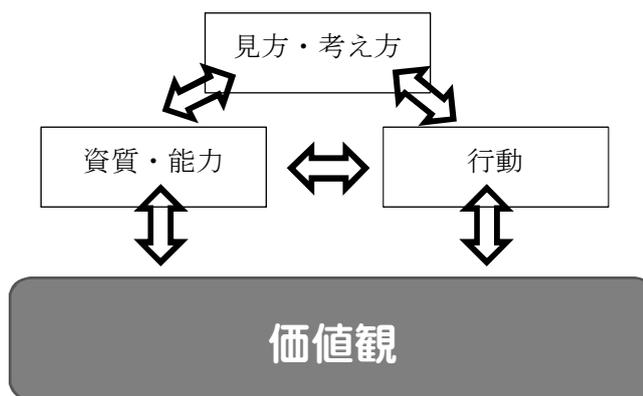
問題発見ー調査活動ー話し合いー行動化 といった問題解決型の学習

(3) ESDで育てたい価値観

※ESDの目的は、持続可能な社会創りに関する価値観と行動の変革です。

※価値観とは、見方・考え方、資質・能力、行動の基盤となるものです。

- ①世代内・世代間の公正を重視する
- ②生態系の保護を重視する
- ③互いの人権・文化を尊重する
- ④経済よりも幸福感を重視する



見方・考え方、資質・能力、行動は、互いに影響しながら、強化されていきます。その繰り返しによって、基盤となる価値観も形成されていきます。

(4) 価値観の形成・行動化と深い学び

価値観を形成したり、行動化を促したりするには、表面的な学びを繰り返しても効果はありません。

どのような学びが価値観の形成や行動化を促すでしょうか？

感動のある学び。人は知識だけでは変わらない。知識と感性が融合したときに変容する。

(5) ESDとSDGs

ESDはSDGsの達成に貢献する教育です。(資料参照)

2. ESD教材開発について

ESD教材開発に関する2つの方向

(1) 小学校低・中学年

- ・地域を大切に思う心を養い、地域社会の担い手意識、当事者意識を育てることを目的に、地域のよさを見つける学習（世界遺産学習も同じ）。
- ・教材化するもの：地域遺産（建造物・郷土の食文化・伝統行事・伝統工業・方言・生活習慣など）
世界遺産、産業、風景、生き物、人物、などなど

(2) 高学年・中学校・高等学校

- ・地域の課題を見だし、その解決方法を追究する学習
- ・課題の切り口として、SDGsの17のゴールを参考にする。
- ・1つの切り口から入った学習が、他のゴールにつながっていく
- ・地域課題を追究することで、他の地域の課題ともつながっていき、地域を突き抜け、地球規模の学習へと発展する。(真のグローバル教育)
- ・地域課題と関連すると思われるゴールを選び、そのターゲットを読み込む。

3. ESD 学習指導案の様式（各教科・総合・生活）

(1) 単元名

(2) 単元の目標（3観点で 知・技、思・判・表、主学と、文末に括弧書き）

(3) 単元の評価規準（3観点で：規準の数は授業時間数とだいたいあわせる）

(4) 単元について

①教材観：教材の価値、他学年の学習との関連、SDGs との関連（ゴール名とその理由）

学習全体を通して養いたい価値観

②児童観：学習に入る前の、学習内容（単元）に関する児童の実態（アンケート結果など）

③指導観：指導上の工夫、配慮すること。評価方法など。

④ESD との関連

・学習を通して主に養いたい ESD の視点

【多様性】：○△を調べることを通して、○○の多様性に気づくことができる。

【責任性】：△◇氏の行き方を調べることで、責任性の重要性を理解することができる。

・学習を通して主に育てたい ESD の資質・能力

どのような学習方法を実施することで資質・能力の何を育てることができるのかを記す。

(5) 単元展開の概要

全○時間

主な学習活動	学習への支援	◇評価 ・備考
1.		◇評価は評価規準のどれかをコピーし、括弧書きで（知・技）などを書く
2.		
3.		

※本時案は不要です。ただし、授業する場合にはもちろん必要。授業する場合は、呼んでいただければ参観させていただきます（森先生に相談してください）。

※本時案の目標は1つです。また、評価基準も1つです（評価は1時間に1つだけ）。

後は本時の展開（様式は、単元展開の概要と同じ）。

4. ESD 実践事例の作成 (マスター・スペシャリスト)

- ・ ESD 学習指導案と形式は同じ
- ・ 本時は不要
- ・ 考察に重点を置く

次のことについて「たまねぎ」形式で2つか3つの切り口で考察を作成

考察内容は、他の教材開発や他の実践者にとって有益なものとするのが目標です。

○教材について

ESD 教材として、SDG s への貢献について

○指導方法について

特に学習前後の児童の変容を比較し、その要因について考察する。

- ・ 考察だけで、A4 で 1 ページ以上は必要

※次回は、12月7日(金)16時~です。

※宿題

次回までにESD学習指導案を作成し、人数分コピーして持参してください。

第4回橋本市ESD連続セミナー 概要報告

奈良教育大学 中澤 静男

- ◇ 開催日時 2018年12月07日(木) 16時～18時
- ◇ 会場 橋本市教育文化会館
- ◇ 参加者 野田・五十川・(川西)(三石小)、岡村・西淵(紀見小)、辻本(あやの台) 森(橋本市教委)、北村・中澤(奈良教育大学)



◇ 内容

1. 学習指導案分析の視点

学習内容の分析・学習方法の分析

(1) 学習内容の分析

教科学習の場合：教科の目標 + ESDの視点・価値観

総合的な学習：ESDの視点・価値観

これらが単元の目標・教材観に記されていること

① ESDの視点(見方・考え方)

	対 象	要素について	作用について	性質について
実態概念	自然環境・社会環境	多様性	相互性	有限・循環性
規範概念	人や集団の行動や意思決定	公平性	連携性	責任性

多様性：色々ある方がいい

相互性：つながっている、つながりを尊重する

有限性・循環性：有限なものである。それが循環していればいい。

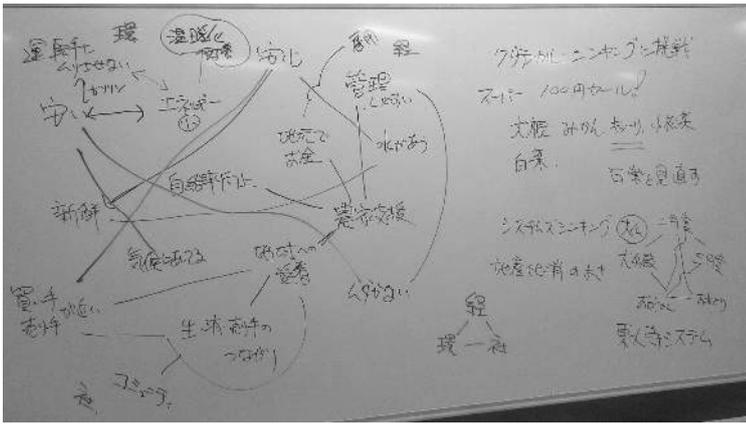
公平性：世代内と世代間の公平を考えていることが重要。

連携性：排他的でなく、異文化を背景とする人々などとも妥協点を見出し、協働する。

責任性：最後までする。リーダーシップを発揮する。協力する。

② ESDで育てたい価値観

- ・ 世代内の公正を尊重する
- ・ 世代間の公正を尊重する
- ・ 生態系・自然環境の保全を優先する
- ・ 人権・文化を尊重する
- ・ 幸福感(与える・得る)を中心にすえて判断・行動する。



(2) 学習方法について

以下に注意して、指導観に記載されていること

「主体的・対話的で深い学び」がキーワード

・説明・納得型の授業展開ではなく、問題解決型の授業展開

○インパクトのある導入が工夫されている

○学習の流れ（問題解決型）

課題（問題）の発見 → 調査内容・方法の話し合い（仮説をもつ） → 調査活動

（個人→全体）

（全体→グループ化）

（グループ）

→ 仮説の修正 → 表現・発信 → 学級全体での話し合い → 一応の解決と発信・行動化

（グループ）

（グループ→全体）

（全体→個人）

（個人・全体・グループ）

○児童生徒相互のコミュニケーション・対話中心の授業展開

○教室外での学習

- ・フィールドワーク・見学
- ・大人へのインタビュー
- ・体験的な学習

○ESDで育てたい資質・能力を養う工夫がある

- ①クリティカル・シンキング（批判的思考力・代替案の思考力：当たり前を問い直す）
- ②システムズ・シンキング（総合的思考力：つながりをとらえたり、つなげたりする）
- ③長期的思考力（データを分析して、将来への影響を考える）
- ④コミュニケーション力
- ⑤協働的問題解決力

2. ESD学習指導案の相互検討

①西淵

「つくろう あそぼう くふうしよう」（生活科）

- ・廃材を利用するとESD的な学習になる。
- ・活動する目的意識があると主体的になる。（1年生の時にしてもらったことを思い出す場面）
- ・活動後の振り返りでESDの見方・考え方をおさえることができる。ESDの観点で価値づけする。
- ・おもちゃづくりをグループで相談したり、やってもたり、1年生役を決めたりして思考錯誤した。
- ・生活科では振り返りが重要。個人的な振り返りも重要。適切なアドバイスを行うことで、学びのレベ

ルをアップさせる。

- ・ルールも大切だが、楽しくするにはどうすればよいか、という前向きなアドバイスがよい。
- ・幼稚園での学びと生活科で学びの違いがあるはず。工夫させてもよい。

②野田

「調べて作ろう～冬野菜編～」(総合的な学習の時間)

- ・単元名にお雑煮でおもてなし などを明記する
- ・お雑煮でというのをまずもってきて、そのために何を植えるか、どんなお雑煮にするか、など主体的にできる。
- ・インターネットで調べるのもいいが、人にインタビューするのがいい。
- ・材料などの由来(日の出ニンジンを丸く切るのは「まるく平和的に暮らせる」ように)
- ・もちまきだけでなく、もちをつかった各地の行事を調べることで多様性に気づかせる。

次回の順番 ③辻本、④五十川、⑤米山、⑥岡村、⑦川西



次回は、平成31年1月11日(金)です。

第5回橋本市ESD連続セミナー概要報告

奈良教育大学) 中澤 静男

- ◇開催日時 2019年1月11日(金) 16時~18時
- ◇会場 橋本市教育文化会館
- ◇参加者 川西・五十川・野田(三石小)、米山・辻本・中谷(あやの台小)
岡村・西淵(紀見小)
森(橋本市教委)、中澤(奈良教育大学)
- ◇内容 ESD学習指導案の相互検討会

(1) 読み取ったことや感じたことを表現しよう(6年国語科:辻本)

- ・絵を鑑賞して作文を書く
はじめ:自分の体験(防災キャンプ・語り部の話)を踏まえて書く
中 : 4つの絵を鑑賞して詳しく書く
終わり:作者の思いを想像して書く
- ・防災キャンプ
避難所を自分たちで運営する体験
- ・国語と防災との関連のさせ方・導入



◇アドバイスなど

①国語科におけるESD

- 時間・空間をこえて、伝わる言葉で書き表す・言葉をみがく
- 教材:防災・自己の体験を踏まえて、自分の言葉で書く

②教材観

- 教材の価値、内包されているESDの視点、SDGsとの関連

③指導観

- 指導の工夫、ESDで養いたい資質能力

(2) 命とくらしをささえる水(4年総合・五十川)

- ・浄水場の学習と減災をつなぐ:家庭での貯水
- ・年間の総合のカリキュラム:「生活の安全」
- ・浄水場の人の願い:水道水は飲み水ということを知ってもらいたい
- ・校内での子どもの行動の変容:蛇口の流しっぱなしは減っている、他学年に伝える
牛乳パックの洗い方が他の学年と違う。水を丁寧に使うようになっている。
- ・体験的な活動を授業に取り入れた
- ・水を無駄にしない
- ・水をきれいに使う

◇アドバイスなど

- ①水を節約する意味:川の取水量が減る→川の水量が増え、きれいになる
浄水のためのエネルギー使用量が減る
- ②人物の活用について

- ・高岡さんという「人物」と2回出会う
コミュニケーション力が高まる（高岡さんとの対話）
理解が深まる
「深い学び」に必要なもの
価値観や行動の変革にいたる深い学びには「知識・情報」だけでなく、「感動・実感」など感性にう
ったえける必要がある。人物との出会いは、「感動・実感」をともなうことになる。

③上流・中流・下流をつなぐ流域という考え方
水の恵みに焦点化した学校間交流

(3) エコマート～地球を支える会社をつくろう～

- ・販売し、利益を環境団体に寄付
- ・販売活動を通して、地球環境について地域住民に啓発していく 連携性
- ・環境に配慮した商品づくり ESDの視点を身に付ける
- ・自分も環境を作っている一員だという自覚 責任性

- ・商品：木工、手芸、野菜、リサイクル
野菜を育てて売る 一番売れる
購入してもらえぬものを考えさせる（ニーズ調査）活動になっている
会社が増えると担任の目が行き届かなくなる
- ・外とのつながりに苦労する

◇アドバイスなど

①経済活動と環境・社会の融合がこの実践の優れた点である。経済的な裏付けがないと、よい取り組みも継続できない。

②販売終了後の子どもの変化：

- 授業では考えてしているが、生活レベルでの変容までには至ってない。
- ← 他者からの承認が自己実現につながる（マズローの欲求の階層説）
保護者からの感想・手紙、地域の人々の声を届ける
一生懸命取り組んでいることを教師がほめる

③計画段階でしっかり話し合わせる事が重要

(4) わたしたちの町 みんなの町（4年総合）

- ・福祉の学習 前期：障害者福祉、後期：高齢者福祉
→ みんなが暮らしやすい町ってどんな町かな？
- ・全盲の方のお話から、障害者の視点を得る
- ・「調べたことをまとめるグループ」と「考えて行動するグループ」に分かれる
（スロープの制作、障害者用スペース）、マップ作成

◇アドバイスなど

①SDGsとの関連は？

②してあげるといふ感覚になっていないか。



わいそうからのスタートはしかたがない。行動しながら気づいていく。

③障害のある人は「不幸な人」なのか。声をかけること自分がで変わっていく。声をかけた方が「幸せ」になる

④誰かにとってのバリアフリーが、誰かにとってバリアになることがある。多様な人と出会わせ、ユニバーサルデザインまでもっていくといい。

⑤振り返りのさせ方

単元の目標に照らし合わせ、振り返り・問い直しのポイントを与えることで学びが深まる

(5) 昔の暮らし (3年社会・川西)

・地域の高齢者と出合わせる 七輪 (5年生のもちまきのもちを焼く)

◇アドバイスなど

①昔の暮らしをシステムとしてとらえ、今の生活システムと比較する。

②昔は遅れている、だけではないことに気づかせる。(クリティシンキング)

不便だけど、自分で考えることができる。

コミュニケーションのきっかけになるものもある。

木を切ることで里山を守ることにもなっている。

価値を見つけていく学習

◇どんどん便利になることっていいことなのか?

◇昔の道具に対する感動を味あわせる

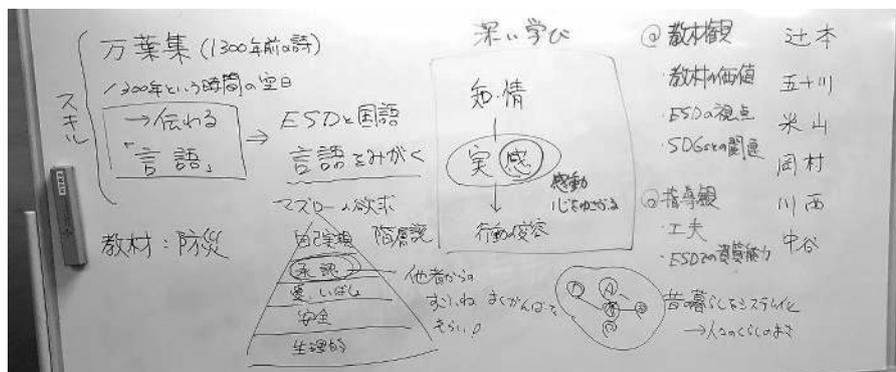
◇新しく生まれているものと失われていったものを比べることで、絶対に失われてはいけないものを考えさせる。

◇発表する目的 (相手意識) を明確にすることで意欲の向上になる。

(6) SDGs 食堂ゲーム (あやの台6年・総合)

◇松前町 (愛媛県) 消費生活相談窓口

◇消費を通してSDGsを意識してもらう



学ぶ喜び・EESD 連続公開講座

あらためて世界遺産とは

—世界遺産の真意を問い、ESD との関係を考える—

- 1 「世界遺産」の真意：誰もが「遺そう！」と声を上げた時に「世界遺産」の概念
 - ・1972 年 「世界遺産条約」の成立 アブシンベル神殿の危機 「人類の宝」の保存と次世代への継承」を目的 「世界遺産基金」 他への配慮 ボロブドール アンコール
 - ・切実感があった とくに自然遺産 「生物多様性」が危機に瀕していた 絶滅危惧種 「顕著な普遍的価値」（その消失が人類にとっての損失）「文化・個性の多様性」へ
- 2 50 年経過した現状
 - ・日本の条約締結は 20 年間も遅れた 国際的視点が弱かった
 - ・1992 年：法隆寺 姫路城 屋久島 白神 93 年：京都 95 年：白川郷 96 年：厳島 原爆ドーム 98 年：奈良 99 年：日光、と登録 世界的水準の有形遺産は登録された
 - ・その後は「産業革命遺産群」、「宗教的巡礼路遺産群」とシリーズ化 登録遺産数の制限 巡礼路 魂の浄化（サンチャゴデコンポステーラ）熊野古道 精神性が問われていた
 - ・国際紛争の激化：世界遺産であることが破壊の標的 ドブロブニク モスタルの橋
 - ・世界遺産に登録されることで 自然破壊の進行 観光公害 自然だけでなく日常生活も
- 3 世界遺産教育と ESD、SDGs への接続
 - ・1994 年 UNESCO は「世界遺産教育」の提起 ASP に ex バルト海プロジェクト
 - ・地域へのアイデンティティを育む 「世界遺産条約」の義務 保存責任 当事者意識
 - ・「地域・世界遺産教育」 「地域自慢」「地域埋没主義」からの脱却 「自己を知り、他者を知る 他者から見ての自己相対化」 スパイラルな学びの深化 普遍性と個別性
 - ・世界遺産のないところでも実践可能 地域の美しい景観を守る 次世代に伝える教育
 - ・ESD のツールとしての「地域・世界遺産教育」 「SDGs」への発展を目指す
- 4 新しい学びの模索 現代的な課題（学習内容だけでなく、学習方法の見直し）
 - ・学びの間直し 正解がない 自分で問いを立てて自分で答えていく 生涯学習の基礎
 - ・「知る」ことの吟味：言葉主義の知識 分かったつもり 生徒・学生の学びからの逃避 「外発的動機付け」から「内発的動機付け」 受験 就職に役立つから学ぶ その目標が達成されれば雲散霧消する知識
 - *面白いから学ぶ 学ぶ喜び その一つの方途が直接体験ではないか？ 本物との出会い 直接体験の持つ意味 ネット社会の陥穽 フィールドワークの導入 人格的邂逅
 - *他者から必要とされる体験（学生が嬉々としてバイトで見せる能動性） 上級生が下級生に見せる姿 アンテナを尖らせ 雪だるま式知識の獲得 それがペルソナ 人格
 - *「仲間の教育力」に依拠する 教授者と学習者の分離ではなく学習者同士の学び会い “いい教育とは、いかに価値ある体験を獲得させるか” ではないか ハチドリ一滴

原爆ドーム

広島に朝が訪れました。百万人以上が暮らす近代都市、ここに一つの廃墟が残されています。原爆ドームです。1945年8月6日、人類史上初めて、広島に原子爆弾が投下されました。廃墟となった町を目にしたあるアメリカ人ジャーナリストは、「ここはまるで砂漠のようだ」と書き記しました。原爆ドームは、受難の日から時を止めたまま存在し続けることで、あの日の事実を語っています。核兵器廃絶と人類に平和を願う記念碑として、1996年、原爆ドームは世界遺産に登録されました。

6本の川に囲まれた三角州に位置する広島市。町の中央にある中州。ここに平和公園があります。原爆の爆心地近くに造られた広い緑地帯は、市民の憩いの場であり、平和を誓う祈りの場になっています。公園に沿った川岸を歩くと、時間に置き去りにされた建物が顔を見せます。剥き出しになった鉄骨。吹き飛ばされたままのレンガの壁。原爆ドームには、半世紀余り前の夏の日の記憶が残されています。

1945年8月6日、いつもと同じ朝を人々は迎えていました。その頃上空には、原子爆弾を積んだエノラゲイが近づいていました。午前8時15分、強烈な閃光が町を覆い、巨大な火柱ときのご雲が上がりました。猛烈な爆風と4000℃にも達する熱線は、爆心地近くの人と建物を一瞬にして消し去りました。広大な瓦礫野原と化した広島町。ところが、爆心地からわずか160mの場所に、産業奨励館が巨大な残骸となって残っていたのです。いつしかそれは、原爆ドームと呼ばれるようになりました。もの言わぬ残骸は、古い写真のように、その姿で破壊されたその日を訴えかけています。

原爆ドームがかろうじて残ったのは、爆心地に近く、爆風をほぼ真上から受けたからだと言われています。建物の外壁は、一階部分を残してほとんど吹き飛ばされたものの、中央部は破壊を免れ、ドームの鉄骨を残した独特の風貌が生まれたのです。

原爆ドームは、広島県産業奨励館と呼ばれていました。チェコ人の設計家ヤン・レツルの設計で1915年に建設され、物産品の陳列や博覧会等に利用されました。軍事都市として発展した広島の中で市民に身近かな施設となり、ライトアップされることさえありました。ヨーロッパ風の洒落た近代建築が、破壊を経て平和のシンボルになるとは、想像さえできないことでした。

8月6日、平和公園には、夜明け前から世界中の人々が集います。午前8時15分、参列者は、原爆で犠牲になった人々に黙祷を捧げます。

平和公園の中にある、広島平和記念資料館。1万2000点に及ぶ被爆資料が収められています。時を刻むことをやめた懐中時計。原爆で亡くなった59歳の男性のもので、息子から贈られ、肌身離さず持ち歩いていたといひます。13歳の少年は、母親の作った弁当を大事に抱えたまま息絶えました。18歳の少女の髪の毛です。被爆から二週間後、少女の髪の毛はぱっきり抜け落ちました。

原爆が投下されてまもなく、広島には雨が降りました。原爆が巻き上げた塵や土の混じった黒い雨です。それは、放射能も含んでいました。黒い雨は、1時間以上降り続いたのです。

「被爆から75年は草木も生えない。」そう断言する学者もいました。しかし、荒地で木々

は育ち、町は復興を遂げました。原爆の傷跡が取り除かれ、生まれ変わった町。その中で原爆ドームの存在感は際立っています。原爆ドームの管理は、広島市の手によって行われています。壁や柱の状況が点検され、倒壊の危険を避けるため、様々な対策が進められています。今にも倒れそうな壁は、内側から鉄骨のブリッジを縦横に何十本も張り巡らせ、支えています。雨や太陽にさらされ脆くなったレンガや壁のひび割れた部分には、特殊な樹脂が注入されています。広島市では、原爆ドームのデータベース化を進めています。「これが原爆ドームの図面です。」レンガ一つ一つの形や大きさ、そしてひび割れの箇所や補修した内容など、チェック項目などは2万箇所を上ります。このデータにより、例えレンガ一つが落下しても直ちに対処できるようになりました。どれだけ時を経ようとも、この場所だけはあの日の状態が保たれているのです。

1950年頃、市民の間から原爆ドームはいらないという声が上がりました。忌まわしい事実を蘇らせるものは消し去りたいとの思いからでした。当時、原爆ドームは放置されたまま崩壊していく運命にありました。これを救うきっかけになったのは、一人の女子高生の書いた一文でした。一歳の時に被爆した楳（かじ）山ヒロ子さんの高校時代の日記帳。そこには、学校での出来事、家族や友人との会話などが綴られていました。しかし、ある一日だけその内容は大きく違っていました。1959年8月6日、楳山さんは原爆に対する思いを初めて日記に綴りました。「恐るべき原爆は 二十世紀以後忘られて あの痛々しい産業奨励館だけが いつまでも後世に 訴えてくれるだろう。」産業奨励館、後の原爆ドームに思いを託した翌年の春、楳山さんは16歳で亡くなりました。被爆15年目に発病した白血病が原因でした。楳山さんは、被爆したことを親しい友人にも話していませんでした。放射線障害への不安を抱えながら綴った思いを、友人達は、彼女の死後、知ることになりました。「自分でも死がくるような気がするとか、とても怖かったと思います。それを隠していつも明るく私達の前でと思うと、今思うと、で、放射能の怖さですとか、被爆者の不安、これは口に出せない分だけどうしたらこの怖さ、恐怖心を伝えられていくかということが、彼女にとっては、日記を綴ることで、そしてもう原爆ドームを保存してほしいということになったんだと思います。」楳山さんの友人達は、原爆ドーム保存のため、募金と署名運動を始めます。小さな運動の輪はやがて世論を動かします。

1966年、広島市議会は、原爆ドームを永久保存することを決議し、初めての保存工事が実施されました。楳山さんの死から6年の時が経っていました。「当時、ドームを残すということが、戦争の怖さを思い出させるから壊したほうがいいとか、もう壊れかけているものを、どうしてお金をかけて残すんだとか、とにかくまあ、随分言われたんです。だけど私達は、原爆ドームを残すことによって、核の恐ろしさ、とにかく戦争の恐ろしさ、で楳山ヒロ子さんの希望を叶えてあげたいと思います。目から消えるものは、心からも消える。そういう気持ちで、一生懸命やっただけです。」

目から消えるものは、心からも消える。原爆の犠牲となった16歳の少女の思いは、同じ世代の若者に受け継がれ、原爆ドーム保存に導きました。

8月6日午前8時15分、人類史上初めて原爆が兵器として使われたとき、それは虚構でも物語でもありません。原爆ドームは、その一瞬を留めるため、世紀を越えた今も時を止めています。

第2回学ぶ喜び・ESD連続公開講座 概要報告

奈良教育大学 中澤 静男

- ◇開催日時 2018年10月23日(火) 19時～20時30分
- ◇会場 次世代教員養成センター2号館多目的ホール
- ◇参加者 学生38名、現職教員等17名 計55名
- ◇内容

「教師として大切にすべきことは…」

— 出会ってきた子どもたちが教えてくれてこと —

講師：森井 弘先生



1. 教師として大切にすべきこと：私が大切にしてきた教育の根幹

「ディズニーランドでの話」

- ・亡くなった娘の誕生日のお子様ランチ

両親に連れられて歓声をあげる子どもたち、この風景をこのご夫婦はどのように思いつながめておられたのか。その気持ちに思いをはせると涙が止まらなかった。レストランの心温まる対応にも涙がこぼれた。

- ・教師になって4年目に教え子を失くした。卒業して4か月の夏休みに笠置の川で中学校の友達とキャンプに行き亡くなった。棺が霊柩車に運ばれるときの母親の「行ったらあかん。行かんといて」という声が、今も耳に残っている。

「修学旅行での話」

- ・32歳の時、スキー実習でクラスの女生徒が木に激突し、眉の上を骨折した。明朝、タクシーで駆け付けた母親は、麻酔で眠っている娘を見て泣いていた。女生徒のつらい思い出を学級のみんなですしでもいい思い出に変えようと、呼び掛けた。それに応えたクラスメートが千羽鶴を折ったり、手紙を書いたり、それぞれ活躍してくれた。子どものやさしさ、温かさが身に染みた。

- ・その子たちの卒業文集・その女生徒が記した「班日誌」3月4日

3年間で一番うれしかったこと：それは修学旅行でのこと・クラスの友達がいろいろとはげましてくれたこと・みんなが心配してくれたこと・そのおかげで早く学校に行きたいと思った。

「スキーの技術を学んだり、美しい山の景色を見ることができなかったけど、その何倍もすてきなみんなの優しい心にふれることができた。こんなクラスになれたことが3年間で一番よかったこと。」

班日誌を読むと、クラスメートは泣いていた。

- ・女生徒の脳に腫瘍。医者から「この事故はあってよかった。この事故がなければ、腫瘍を見つけることができなかった。腫瘍が大きくなり、自覚症状が出てから、手術をしたら、間違いなく後遺症が残った。だから、この事故はあってよかった。」と。

- ・高一の夏、脳腫瘍の手術後（顔半分がマヒ状態）、学校に行かないといった女生徒。

どうしたものかと思い、自分の中に回答がないまま、女生徒と話し合い、学校に行かなくてもいいと言った。「リハビリがんばろな」とだけ言って帰った。

でも、9月1日から女生徒は登校した。それを聞いて、お母さんと泣いた。

- ・結婚時の相談。腫瘍の再発で結婚が破棄されるのが怖く、プロポーズに返事できなかったとなく女

生徒。腫瘍のことを彼に伝えるよう話す。

女生徒と結婚相手と私の3人の面談でのこと。腫瘍のことを気にしない、という返事。

再プロポーズの依頼に応えた彼。プロポーズに素直に応えた女生徒。

今、幸せに暮らしている。

→ 修学旅行時、教員はほとんど寝ることができない。

修学旅行は中学校生活で最も大きなイベント：生徒にとって最も思い出に残る行事

でも、何より大事なことは、「生徒を無事に連れて帰ってくること」

◎教師にとって一番大事なことは 親御さんからお預かりしているかけがえのない「**子どもの命を守ること**」。

「縁を生かす」

・教師の出会いによって子どもが変わる。子どもの人生が変わる。

子どもの背景に気づき、正面から向き合い、よりそったことで、子どもの人生が変わる。教師冥利につけるが、逆に考えると怖い。責任を感じる。反省や悔やむことの方が多い。

教え子に今もあやまりたいこと：体罰したこと

これは人として許せない、命にかかわる失敗をしたとき、体罰をした。

「先生の厳しい指導のおかげで、立ち直れました」と言ってくれるが、体罰は絶対に許されない行為。体罰は、力量のない教師がすること。

時間をかけてもいいから、子どもと本物の人間関係をつくって指導してほしい。

◎教師にとって2つ目に大事なこと「**子どもを幸せにすること**」

◎3つ目に大事なこと「**子どもの心を育てること**」

先生方の日々の語らいの中で、声掛けの中で、終わりの会での話の中で子どもは心を育てていく。

「子どもの心を育ててやってください」

教師自身が経験した話、感動した話は子どもの心に届く、心に響く、心を揺さぶる。

そうすることで、子どもの心の引き出しが増える。この引き出しが、悩んだり苦しんだり挫折した時、子どもを守り救う。

○私は「想定外」という言葉は、間違っていると思っている。それで事故があったとき、保護者はけっして納得しない。最悪の事態を想定して対応を考えておくことが危機管理だ。



2. 事例研修

事例1：「いじめ」

中2女子 母親から子どもが学校で十数名の男子生徒からいじめられている。娘は、もう学校に行きたくない、死んでしまいたいと、今も部屋にこもって泣いていると、担任に電話があった。担任は夕食時に飲酒している。その担任から、生徒指導主任にどうしたらいいかという、相談があった。

→ これからすぐ行こう（すでに飲酒していたが）。命守るのが一番。すぐに行く。もし、その子が死んだら、どれだけ悔やむ。最悪の想定はその子が死んでしまうこと。

A子にいじめに気付かなかったことを謝罪。状況把握後、いじめをしていたBの家に12時過ぎだが行った。Bの父親はBの頬をなぐった。

「お前の頬の痛みは10分もすればとれる。でもおまえがいじめたA子さんの心の痛みは一生とれへんのや。」

Bの父はA子の家に行こうとしたが、夜中なので、教員がA子の家に行って伝えた。

翌朝、Bの父はBを連れてA子の家に行き、土下座してあやまった。

事例2：「体罰」

清掃時間中、掃除をせずに走り回っていた男子生徒5人を、他学年のA先生が呼び止め、指導。その指導に対し、B君が反抗的な態度をとったため、A先生はB君の頬を平手でたたいた。A先生とB君の話し合いの場を設け、双方共に謝罪。解決したと判断した担任は、B君宅に電話。電話に出た父親にことの概要を伝えると共に、詳しく説明と謝罪をしたいので、学校に来ていただけないかと言うと、「うちはラーメン屋やっているから忙しい。謝罪なんかいいから、うちの子なぐったその先生、クビにしてくれ。」と、言われた。

→ この報告があったのは、父親から電話を切られてからだった。ハウレンソウが大事だと言っていたのに報告がなかった。担任は、「解決した」と思ったと、話す。

学校に非があるのに、学校に呼び出すのは間違っている。

11時30分にラーメン屋に行った。そして、謝罪（体罰のこと、呼び出したこと）。学校に落ち度があったら、教師に落ち度があったら、素直に謝ること。そして、誠意を尽くせば、ほとんどの問題は解決する。

事例3：「虐待」

中三女子 A子は担任に反抗的。遅刻、化粧、ピアスなど、問題行動がある。その都度、指導するものの、素直に指導に従わないばかりか、ますます反抗的な態度をとる。まずは、人間関係をつくろうと、声かけしたり、家庭訪問をするが、なかなか心を開いてくれない。ねばりづよく、声かけや家庭訪問を繰り返す中で、ようやく担任の話に耳を傾けるようになってきた。夏休みに入る直前、「私の母親は再婚で、父親は本当の父ではない。その父親から、母親がいないときに性的虐待を受けている。」との相談があった。ただ「このことは、絶対誰にも言わないで。もし言ったら、先生のこと、信用しない。」と、強く言う。

→ この担任はえらかった。人間関係を作っていたから、この子から事情を聞き出すことができた。

「しゃべったら、先生のこと信用しない」と言われた。教員は、その子との人間関係を失いたくないと思って、しゃべらないことが多い。でも、それは間違っている。

「どうしても君を守りたい、でも自分だけでは無理だ。校長と養護の先生には言う」と言い切った担任の対応はすばらしい。

◎対応に正解はない。大切なのは「子どもを守ろうとしているか」「子どもを幸せにしようとしているか」だ。

学校では色々なことが起こる。次の3つを基準にして、何をどうすればよいかを考えてほしい。

「子どもの命を守る」

「子どもを幸せにする」

「子どもの心を育てる」

→ 誠意をもって対応しても、どうしてもうまくいかない場合もある。その場合は、教育委員会や教育委員会を通して弁護士に相談する。そのとき、時系列に事実の概要や保護者との対応の記録を残しておくことが、大切です。



第3回学ぶ喜び・ESD連続公開講座 概要報告

奈良教育大学 中澤 静男

- ◇開催日時：2018年11月29日（木）19時～20時30分
- ◇会場：次世代教員養成センター2号館多目的ホール
- ◇参加者数：72名

◇内容

「学びに向かう学習集団をつくる」

講師：奈良教育大学キャリアアドバイザー 阪本 さゆり 氏

1. 学級経営とは

子どもに自信を持たせることが大切だと思う。

教師に必要な資質（教師力）は何でしょうか。

- ①対応力（臨機応変な対応）
- ②共感力（子どもによりそう）
- ③感性（人権、色々な人の思いを感じ取る）

授業は学級の状態に左右される。（教師は授業で勝負する、
と言うけれども）

子どもの心が安心感に満たされていてこそ、自身をもって
挑戦できる。いろんな学びが生まれてくる。

○校長時代・荒れた学級の例

道徳の授業も効果がなかった

ソーシャルスキルトレーニングができない：担任とのいい人間関係があることが前提

そのクラスの児童の携帯保有状況：47パーセント

メールがいじめの一端になっていた。

いじめや荒れの原因

- ・担任との信頼関係ができていない
- ・集団の中に存在する配慮を要する児童について理解できていない
- ・家庭で子どもの心が満たされていない（大人を信用できない）

→未然防止で大切なのは学級経営

○学級経営とは何か「生徒指導提要（文科省、平成22年）」

人と人との交わりの中で子どもは成長していく。どのような人間関係を整備するかが大事。

小・中・高の学習指導要領の総則に学級経営の重要性が述べられている。

担任が学級づくりを構想し、それに向けて日々努力することが重要。

①学級開きの日がとても重要

どんな学級にしようとしているのかを熱く語ること

子どもの第一印象それは保護者にも伝わる

自分ですること（最低限のこと）を伝えておく

②気持ちよく一日のスタートを切るために

子どもは教師のことをよく見ている

元気よくあいさつ、持ち物の整理整頓、宿題や提出物の提出（学校での生活習慣）



朝の会（子どもと朝と一緒に過ごすことが大事だと思っている）

朝読書、プリント学習等、元気調べ、スピーチや日記の発表、今月の歌

- ・元気調べ

総合や生活科の学習のきっかけにできる（取り上げたもらった子どもの意欲の向上）

元気がない子への配慮ができる集団に

時間をしっかり守る（遅刻は他の人の時間を奪ってしまうという意識）

- ・スピーチや日記の発表

話す・聞く力を高める

日々取り組んでいくと、小さな積み重ねが子どもの力になっていく

友達の新しい一面に気づくきっかけになる

- ・今月の歌・学級の歌（替え歌での可）

子どもと一緒に自分たちの歌を作る。学級集団をまとめる力になる。子どもの心が一つに。

学級会や発表会、話し合い活動の前に歌う。

③子どもとの信頼関係を築く

○子どもの願いに気づき、実現できるように配慮する

- ・私たちのことをわかってくれる
- ・頑張っていることをほめてくれる
- ・悪いことをしたときは、叱ってくれる
- ・困っていたら助けてくれる

→40人の子どもと信頼関係を築くのは大変だが、信頼感が失われるのは一瞬。

→子どもたちにいい姿を見せてほしい。

先生は影響力が大きい 話し方・服装・手本となる姿は何なのかを考えること

授業中と休み時間のメリハリを考える

③自発的・自治的な活動の充実を図る

先生がいちいち押し付けていては子どもは育たない

- ・学級目標 どんなクラスにしたいかを子どもたちに考えさせる
- ・当番と係活動 係活動は子どもの自発的・自治的な活動を発揮させるチャンス
仕事の中身を子どもにまかせて、工夫させる。

友達が喜んでくれた → 自己有用感が高まる → いじめはない



- ・みんな遊び 遊びやルールを自分たちで考えさせる
満足感や達成感が成長に結びついていく

○学級経営の中で担任がちょっとした工夫をすることで子どもの自発的・自治的活動意欲が高まる

④学びに向かう学習集団づくりⅠ

○学習規律を理解させる

- ・時間を守ることを徹底させる
- ・聴き方、話し方 傾聴の態度、自分の考えを伝えることができるスキルを磨く

⑤学習形態（座席の配置）を工夫する

- ・いい関係性をつくるために学習環境を工夫する
スクール形式 コの字型（話が聞きあえる・見あえるように、机間指導もやりやすい）
4人グループ（学びの共同体）での学びが一番よかった

○子ども同士の学びあいはどうすれば活性化するかを考えることが大切



⑥学びに向かう学習集団づくりⅡ

- ・気づきの交流
気づいたことをしっかり伝えること・聴き合うことが次の気づきにつながっていく。
掲示を工夫する（気づきカードを掲示する、新聞なども）。更新することが重要
- ・協働（協力して）と協同（役割を分担して）
グループの中に役割をもたせる（給食担当・掃除担当・集め配り担当）

⑦学びに向かう学習集団づくりⅢ

- ・先生からの声掛けは重要
具体的に認める・ほめる（どこを見てほめているのかが子どもに伝わっていること）
ノートへのコメントも、どこがいいのかわかる具体的なコメントが大事（価値づける）
- ・怒るではなく叱る
よくない点を明確に伝える、理由を理解させる
指示しすぎるのは逆効果（子どもに考えさせることが重要）
いつまでも引きずらない、さかのぼってあれこれ言わない
- ・子どもの個性や可能性を伸ばす声掛け
プラスポイントを気づいて声掛け
子どもの協力の姿を評価して声掛け（よさを認めて）

⑧人との関りから学ぶ（生活科）

2年生が1年生に関わる活動・学校を案内、朝顔の育て方を教える
町のすてきをみつけよう 行ってみたいところを自分たちで考える
動物と仲良し（命の学習：心音を聴き合う）

リバーウォッチング（佐保川）・タウンウォッチング（東大寺）→もっと住みよい町にするために

⑨子どもの心をつかむ

子どもの心をつかんで、より良い学びの方にもっていくのが担任の力の見せどころ

子どもの力を信じて任せる 役に立つ自分の発見が意欲の向上につながる

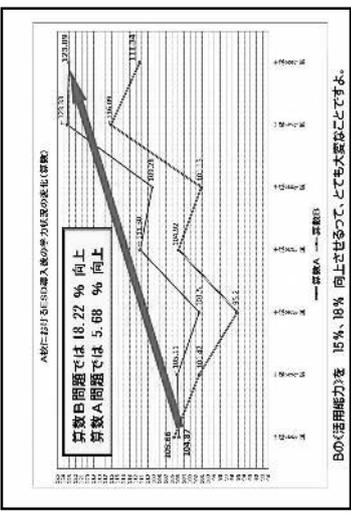


平成30年12月21日(金)

近畿ESDコンソーシアム連続公開講座 第4回

「これからの時代に求められる 学校教育と教師の姿」

江東区立八名小学校 前校長
手島 利夫
Eメール: contact@esdteijima.com
TEL: 0470-8398-0891
URL: https://www.esdteijima.com/



皆様方とこのように出会えること、子どもたちの幸せと学びの充実、結びつけたいです。

今日の話は、新聞でもテレビでも報道されていません。記者さんが理解できなかったからです。でも、今日はわかりやすくお伝えします。よろしくお願ひします。

さて、今日の研修会は

「皆様の考え方や問題意識を大切にしがら」

進めたいと思います。

工夫してまいりますので、ご協力をお願いします。

ハーバード大学、エリック・マズール教授による
ラーニングピラミッド
授業で学んだ内容の半年後の記憶
National Training Laboratories 3

講義を聴くだけ 5%
グループでの話し合いや
討論、あるいは他者に教える
体験なども取り入れながら
進めてまいります。
よろしくお願ひします。

グループでの話し合いや
討論、あるいは他者に教える
体験なども取り入れながら
進めてまいります。
よろしくお願ひします。

データの数値が驚い
すぎて、信用できない
という話があります。

学んでも頭に
残りにくい

学んだことが
頭から離れに
くい

ところで、最近では

社会が大きく変化したことって 例えればどんなことがあるかな？

私たちが生きてきた
時代

昔

今

未来

その結果
としての

戦後の焦土の中から、
様々な課題を乗り越えて
より良い社会を目指して
みんなが頑張ってきた。

より良い未来を創るには、
今がどんな時代なのか、どん
な課題があるのか、どのよう
に立ち向かうのかが重要。

情報が世界を瞬時に駆け巡り、世界を変える

- ・どんな知識も瞬時に取り出せる環境の構築で特約
- ・コンピューターなど連動して、後進も瞬時に更新
- ・727の春... エジプト政府は1週間...
- ・個人の情報を知らぬうちに...
- ・「イスララム国」という偽朝国が世界を脅かす
- ・カショウ氏の問題でも、サウジアラビアの言い分が
- ・どんな裏からささるを怖くなくて...

9. 11 ニューヨークのビルに
ジェット機が突っ込んだ悲劇から
イラク戦争が始まったのも
忘れられせんね。

あのあたりから...
紛争・難民問題も深刻になり、
国内にも広がる
子どもの貧困

あれから5年
3.11
東日本大震災写真展

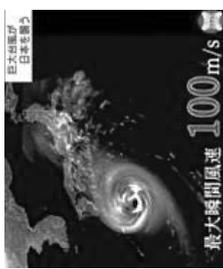
いやいや、もう7年以上...

福島第一原発汚染水処理
B CALONIE(コールニア)
福島第一原発汚染水処理

東海各都府道39度都庁 名古屋39.5号多治見39.9度

岐阜県下呂市で8月6日午後、
観測史上最大2位タイとなる41.0度を観測
日本気象協会 2018/8/6

巨大台風の発生
 (NHKローニュースアップ時代2013年11月18日フジテレビ「巨大台風の襲撃」)
 中心気圧は900ヘクトパスカルを下回り、
 最大瞬間風速は100メートルを超えます。



その勢力を振ったまま、台風は関東に直撃する可能性が指摘されています。
 この時、最も恐れられているのが、東南海で発生する高潮だそうです。
 東京に住んでいる人は、あまり意識がないですけど...

皆さんが思い出された様々な変化の中から、
 世界を持続不可能にしそうな事柄も、
 出てきましたね。
 深刻な課題のある社会ですね。つまり..



— これが私たちの社会の現実 —

- 1, 情報機器の発達により、 がつながり、
- 2, 私たちの世界は大きく している。
- 3, この世界を させることは、できない。
- 4, そして、まだまだ変化は そうだ。
- 5, 変化は、加速度的に なりそうだ。
- 6, 社会の 危うくなっている。
- 7, だけではうまくやっっていけない。

子どもたちを取り巻く世界はグローバル化・情報化が進む中、激しく変化しております。
 世界の条件が変われば、**物ごとの正解も** どんどん変わります。
 そして、そのような時代に求められる**人間像も** 大きく変わってきています。
 中学校の、小学校の**教育だけが変わらずにいられるわけがありません。**

では、日本の教育を変えたら、
どのように変えていく
 必要があるのでしょうか。
 皆さんは、次の視点から中央教育審議会の委員になったつもりでカードに提言用のメモを書いてください。
 (相談なしで、やりましょう。3分間でなるべくたくさん！)
 (1枚のカードには一つの提言を、横書きで！)

学校教育をどのように変えたいか

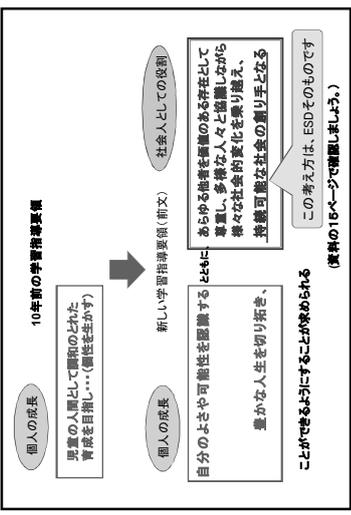
- ・目標、目的、実現したい世界
- ・育てたい資質や能力、人間性等
- ・教育方法(教え方、学び方)
- ・重視したい要素、配慮すべきこと
 (その他の視点からでもいいですよ。)

次は、仲間と協力して、カードを項目ごとに読み合い、構成してみましょう。
 同じ事・似ていることを書いていたら重ねてもいいです。
 関連があるものは、線でつなぐとか工夫して、すっきりと構造的にまとめましょう。

自分たちの班の考え方を説明できるようにしましょう。
 説明係を1人決めてください。
 その人は、回ってくる人たちに何回か説明をしてもらいます。
 後の人は、他班の説明を聞きに、学びの旅に出ます。

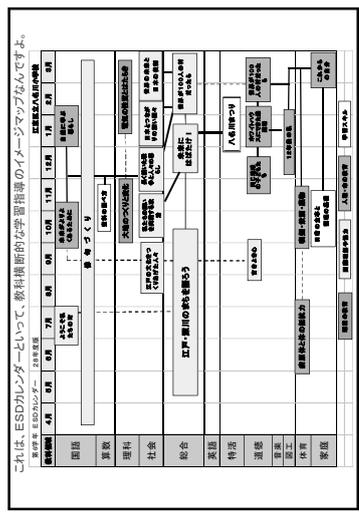
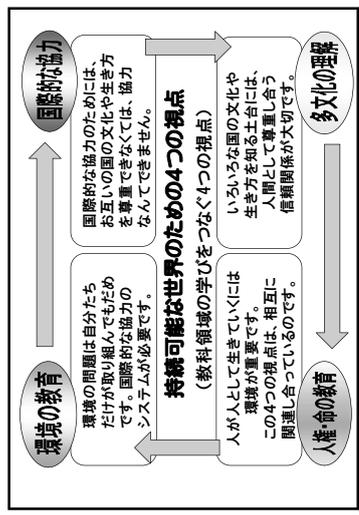
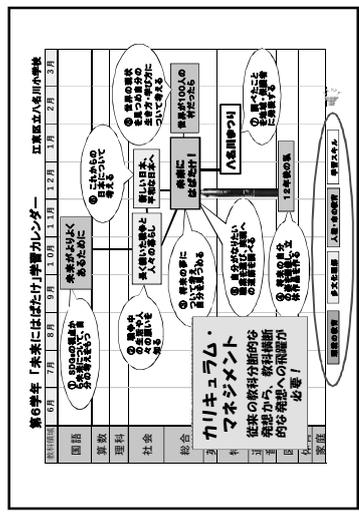
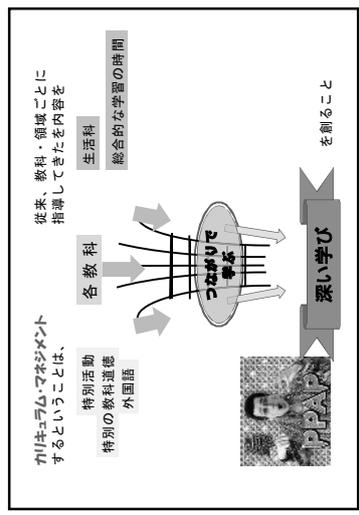
次は
フリーマーケットスタイル
 新しい時代に向けて有効そうな
 改革案を探します。
 気に入った部分には、シールを
 傍に貼ってあげましょう。
 つまり、「いいね」マークです。

今の活動は、指導要領を読み解くための意識や視高づくりにつなげたのです。
 視点や問題意識を持たずに資料を読むと、意味がわかりにくいのです。
**新しい学習指導要領では
 どのように言っているでしょう**
 2020年から本格実施される学習指導要領の前文等を読んでみましょう。
 この中で、今までにない、重要なことも言っています。
 皆さんが考え、提案したキーワードが、どのように活かされているでしょうか。
 探して、正確な引き直しよう。○で囲みながら探してもいいですよ。



学習指導要領では、具体的に **知識や技能だけでなく**
「生きる力」を育む
1、課題解決に必要な
 ・思考力
 ・判断力
 ・表現力
 ・主体的に学習に取り組む態度
 ・多様な人々との協働 コミュニケーション能力
2、豊かな心や創造性(道徳)
3、健康で安全な生活と
豊かなスポーツライフ (17ページ)

それには、学んだ知識を活用し、
①教科横断的に学ぶ (18~19ページ)
 (カリキュラム・マネジメント) だけでなく
②主体的・対話的で深い学び
 (問題解決的な学び) (22ページ)



◎主体的・対話的で親型に近い型の変遷に向けた授業改善を
通じて、生きる力を育むことを目指す。

- 基礎的・基本的な知識・技能の習得と活用
- 思考力・判断力・表現力等の育成
- 主体的学習態度や多様な人々との協働
- 豊かな心や創造性の涵養

などが、どうしたら自然に身に付いてくるのか。
詰め込み教育を主とする主体性も、量かなも育ちにいい。
別々にやろうとしても時間ばかりかかると、
だから

ESDカレンダーを工夫して、
その中で学習をつなげカリキュ
ラム・マネジメントすること。
関係横断的な学習課題を重視
して、その中に、対話的な
協働場面を位置づけること。

平成26年10月8日 参観型授業委員会にて(NHK国会中継画面より)

持続可能な開発のための教育を
視野に、ESDカレンダーの
活用をしてほしいかが。

（公明党荒木参議院議員）
これが、カリキュラム・マネジメント
につながっているのですね。

江東区立八名川小学校の取り
組みについては承知している。
ESDカレンダーは、ユネスコ
スクールだけでなく全国の学校
教育に広めていきたい。

ESDカレンダーと、この具体的な指導計画がセットになっていることが重要です。

1. 授業の準備
2. 授業の展開
3. 授業の振り返り

授業の準備
① 授業の準備
② 授業の展開
③ 授業の振り返り

授業の展開
① 授業の準備
② 授業の展開
③ 授業の振り返り

授業の振り返り
① 授業の準備
② 授業の展開
③ 授業の振り返り

【学びに火をつける】 ⇒ (まどめる・実行する) ⇒ (伝え合う)

1. 授業の準備
2. 授業の展開
3. 授業の振り返り

2. 授業の展開
3. 授業の振り返り

3. 授業の振り返り

『子どもの学びに火をつける』際の3つのステップ

1) 体験活動や掲示資料
をもとに基本的な
事実と出会う

2) 体験したり資料を見
たりしたことから、
多様な気づきや感想
などをもち、それを
共有する

3) 教師が提示したり、子
どもが調べたりして出
てきた事象や事実等
をまとめた書類や資料等
をつくる

4) グループや学級全体で疑
問を出し合い、分類・整
理してまとめた、学習問題
をつくる

5) 問題について、自分な
り予想をする

主体的・対話的な学習過程

【学びに火をつける】 ⇒ (まどめる・実行する) ⇒ (伝え合う)

1. 授業の準備
2. 授業の展開
3. 授業の振り返り

2. 授業の展開
3. 授業の振り返り

3. 授業の振り返り

総合的な学習の時間と学力との相関

H25全国学力・学習状況調査（中学校3年生）
「総合的な学習の時間」は、自分で課題を立てて、情報を集めて整理して、調べたことを発表
するなどの学習活動を通して、自分の学びたいテーマの探究と平均学力の向上が図れる。

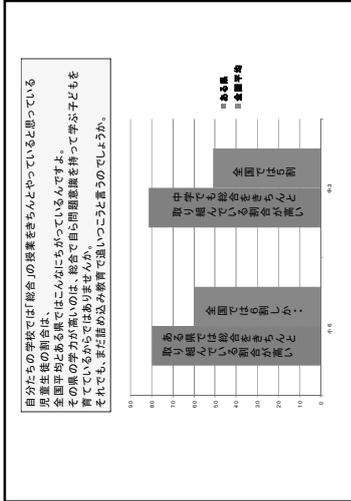
「総合的な学習の時間」の導入に関した話題に取り組み
ている生徒ほど、平均正答率（特に自由問題）が高い。

総合的な学習の時間と学力との相関

H25全国学力・学習状況調査（小学校5年生）
「総合的な学習の時間」は、自分で課題を立てて、情報を集めて整理して、調べたことを発表
するなどの学習活動を通して、自分の学びたいテーマの探究と平均学力の向上が図れる。

総合的な学習の時間と学力との相関

H25全国学力・学習状況調査（小学校5年生）
「総合的な学習の時間」は、自分で課題を立てて、情報を集めて整理して、調べたことを発表
するなどの学習活動を通して、自分の学びたいテーマの探究と平均学力の向上が図れる。



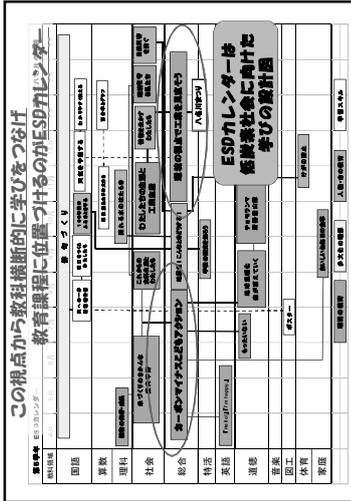
全校でESD (持続可能な開発のための教育) に取り組む八名川小学校

5年生はCO2削減!

教科課程に位置づけて
行政・企業・地域・家庭と連携し
主体的な学びとして実践し
世界に向けても発信!

ESDが学ばれ、
地球が救われ、
未来が輝く。

ESDが学ばれ、
地球が救われ、
未来が輝く。



カーボンマインナ 子どもアクション 記録シート

行政・企業と連携
江東区では、区内の
小学5・6年生の全てを
対象にカーボンマインナ
子どもアクションへの
参加を働きかけていま
す。
江東区温暖化対策課の
取り組みです。

みんなのでCO2を減らそう!

取り組みの意味がわからないままに
CO2を減らさせても、
主体的な学びにはなりません

一人ひとりの力が小さくても、みんなが取り組むと大きな力になります!
地球の温暖化を防ぐためにがんばりましょう!

主体的な学びのために、プレゼンで
問題意識を持たせます

私たちは今、
どういう世界に生きているのでしょうか。
そして、どういう世界を
生きていくのでしょうか??

私は2008年の夏にインターネット上で、このよさを資料を見つけてから、
ESDの必要を感じたように思います。

2010年

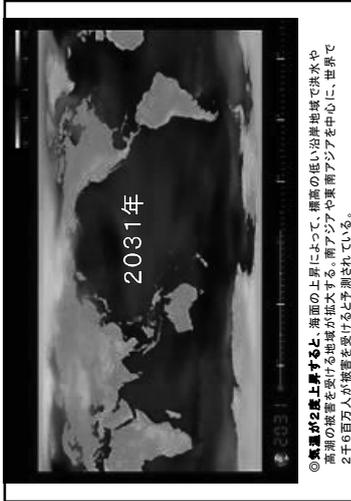
◎地球シミュレーションの温暖化予測によると、2010年には地球の気温は1900年と比べて1.4度高くなる。地球の平均気温が1度上昇すると、世界各地の珊瑚礁がこの白化現象を起こし、珊瑚は死滅してしまう。

「地球温暖化による環境の変化」

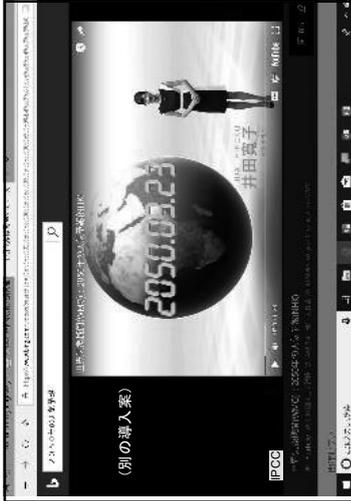
- 水不足になる
- 水が枯渇する
- 氷河が溶ける
- 砂漠化
- 植物の減少
- 熱帯化
- 水不足になる
- サンゴが枯死する
- 水不足になる

2017年度の夏は暑い
東京は暑くて電車が止まる

暑く入りにくくなる
暑い夏は暑くて電車が止まる



◎気温が2度上昇すると、海面の上昇によって、標高の低い沿岸地域で洪水や高潮の被害を受ける地域が拡大する。南アジアや東南アジアを中心に、世界で2千6百万人が被害を受けると予測されている。



(別の導入案)

私たちの生きていく世界（2050年の天気予報）

1. 私たちはいつまで生きていられるのか。 2050年の私は、きっと……

2. 私たちはどんな世界を生きるのか。

【2050年9月23日の天気予報……を予想しよう。】

① この日の気温の気温……（ ）度 この日の最高気温は……（ ）度。

② 真夏日（30度以上の日）は……（ ）日。

③ 2050年まで（45年の間）の寿命の寿命……（ ）歳。



(別の導入案)

フゼシンの詳しい内容は省略します。
 世界各地で進む環境の変化や、その影響について事実を知らせます。

児童は心配なことや疑問を書き出し、カードを操作して学習問題にまどめます。

このようにして「学びに火が付き」主体的な学習が始まるのです。

カードで問題意識を集約

- ・疑問をカードに着き、集約化する。

温暖化比較実験
 （企業との連携）

温暖化とCO2の増加の相関関係を確かめ、CO2削減の重要性に気づく。

温暖化とCO2の増加の相関関係を確かめ、全員に、CO2削減の重要性に気づかせる。

CO2削減率 (%)	CO2削減量 (トン)	気温上昇 (度)
0	0	0.0
10	100	0.1
20	200	0.2
30	300	0.3
40	400	0.4
50	500	0.5
60	600	0.6
70	700	0.7
80	800	0.8
90	900	0.9
100	1000	1.0

江東区との連携

カーボンマイナースの取り組み方について説明を受ける

伏せ字を使って短時間で確認

子どもたちは、家族に協力を呼びかけ、6月1日から1ヶ月間、CO2削減に取り組みました。それは

- ・誰もいない部屋の電気を
- ・給食【昼食】を
- ・エレベーターを使わずに
- ・シャワーの使用を1分間
- ・水を出しっぱなしに
- ・冷房の設定温度を

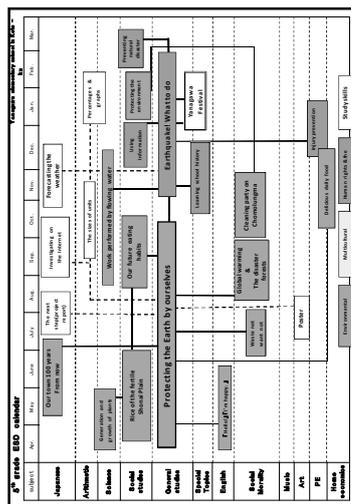
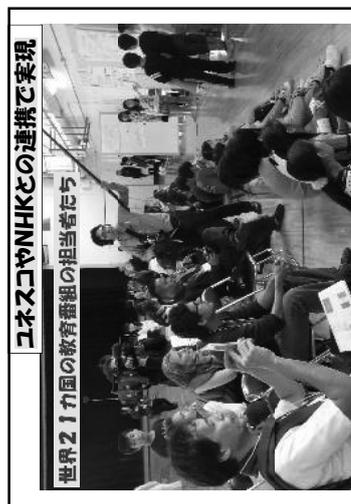
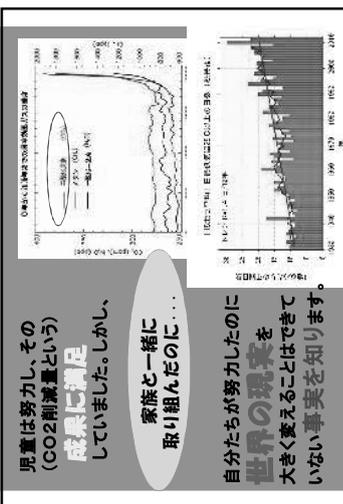
度Cにする

みんなでCO2を減らそう!

ことどもたちは本気になって、家族に働きかけて、CO2削減に取り組みます。そこに学ぶ価値があります。

一人ひとりの力が小さくても、みんなで取り組むと大きな力になります!

地球の温暖化を防ぐためにがんばりましょう!





10月頃には工業の学習ともつなげて企業を見学し



12月にはエコフェアダクワ展でも調べ



1月の八名川まつりで、企業の取り組みについて発信

インドネシア版ESDカレンダー
Papan Informatasi

本校の発信と、姉妹校(グリーンスケール)の連携で
インドネシア政府も、ESDカレンダーをもとに
ESDの推進をすることに!

インドネシア政府に説明するSONI校長

第7回八名川まつり開催内容

1年 物の持ち手やのび
パンクが作って遊ぶ体験あり

2年 ちくちくもちゃ入れのうさぎ
ゲームを遊んで、園遊会も楽しませます!

3年 八名川タイムラベル
町の歴史や自然を楽しく学びます。

4年 やせじおびパーフォーマンス大作戦
お楽しみが盛りだくさん、好評の……

5年 多やあう!
地産地消の身を守る備えを!

6年 未来にはばばば!
～小学校卒業生が、未来を語りつづける～

八名川まつりのような「全校児童(生徒)によるESD学習発表会」をすることを価値

- ① 一人一人の子どもの「大人から子どもまで様々な世代の方に向かって、自分の学びを、何回も語る。」という経験ができる。
- ② 多くの人に認められ、自信と誇りと課題意識が育つ。
- ③ テーマごとにグループを作って学び・まとめ・発表することで、開かれた学年ができる。
- ④ あこがれをもって上級生の取り組みを見る中で、毎年、無意識のうちに、前年の取り組みを越えようという工夫され、全校の学びの質が、自動的に高まる。

これを教育課程に位置づけるのもカリキュラムマネジメントです

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

世界を変えたい17の目標

最近、SDGsのロゴを目にするようになってきました。そのこと自体は悪いことではないのですが、ばらばらに、部分的な取り組みを、コンクールや競争的に進めても、ダメなのです。

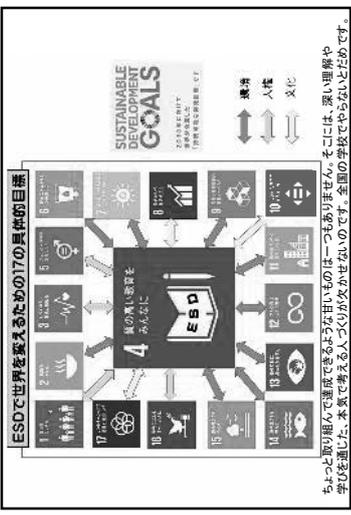
環境 多文化理解 人権

3つの視点で取り組んできた生活・総合の単元名をSDGsのロゴに対応させてみると、小学校6年間で、全ての課題に向き合った学びが進められています。このような学習がESDであり、SDGsの中心に位置するものなのです。

子どもたちが生きていく時代を踏まえた社会的な課題

目標	ESD	人権
目標1 貧困をなくそう	目標1 貧困をなくそう	目標1 貧困をなくそう
目標2 飢餓をゼロに	目標2 飢餓をゼロに	目標2 飢餓をゼロに
目標3 健康と長寿を追求しよう	目標3 健康と長寿を追求しよう	目標3 健康と長寿を追求しよう
目標4 質の高い教育をみんなに	目標4 質の高い教育をみんなに	目標4 質の高い教育をみんなに
目標5 ジェンダー平等を実現しよう	目標5 ジェンダー平等を実現しよう	目標5 ジェンダー平等を実現しよう
目標6 安全な水とトイレを世界中に	目標6 安全な水とトイレを世界中に	目標6 安全な水とトイレを世界中に
目標7 持続可能なエネルギーを	目標7 持続可能なエネルギーを	目標7 持続可能なエネルギーを
目標8 働きがいも経済成長も	目標8 働きがいも経済成長も	目標8 働きがいも経済成長も
目標9 産業とイノベーションに力をかかろう	目標9 産業とイノベーションに力をかかろう	目標9 産業とイノベーションに力をかかろう
目標10 人や国の不平等をなくそう	目標10 人や国の不平等をなくそう	目標10 人や国の不平等をなくそう
目標11 持続可能な都市を創ろう	目標11 持続可能な都市を創ろう	目標11 持続可能な都市を創ろう
目標12 持続可能な消費と生産を実現しよう	目標12 持続可能な消費と生産を実現しよう	目標12 持続可能な消費と生産を実現しよう
目標13 気候変動に具体的な対策を	目標13 気候変動に具体的な対策を	目標13 気候変動に具体的な対策を
目標14 海の豊かさを守ろう	目標14 海の豊かさを守ろう	目標14 海の豊かさを守ろう
目標15 陸の豊かさを守ろう	目標15 陸の豊かさを守ろう	目標15 陸の豊かさを守ろう
目標16 公正で平和な社会を築こう	目標16 公正で平和な社会を築こう	目標16 公正で平和な社会を築こう
目標17 パートナーシップを世界に	目標17 パートナーシップを世界に	目標17 パートナーシップを世界に

何を学ぶか



さて、レジュメにある最後の話題です。

学習指導要領にESDの理念が明記され、その重要性や、実践の具体例についてお示しました。

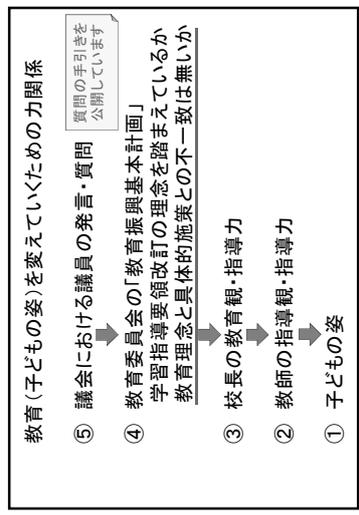
それが皆さんの市や町の教育で推進されるには、たくさん壁があります。

どこに、どんな壁があるでしょう。どこをどう改善したら、教育改革が始まるのでしょうか。

学校内の壁

- ① 教師・・・自分が教え込みの学びで育ってきた。今までの授業に問題意識がない。きちんと教えるのが教師だと思っている
- ② 校長・・・学習指導要領のどこが変わったか、理解できていない。自校の学力向上と大過なく過ごすのが大事だと思っている。自分はある教科・領域の専門家だと思っている。

教育委員会の指導がないと動かない。



教育委員会を変えるために、議員さんに教えていること「ESD議会質問マニユアル」

- ① 教育振興基本計画に「持続可能な社会の創り手の育成」等を掲げているか。それとも明治以来の「知・徳・体」で済ませているか。
- ② 目標や基本方針に「生きる力」「生き抜く力」を掲げているか。それとも「学力向上」至上主義か。
- ③ 施策に向けて「確かな学力」を掲げているとしても、それが「基礎学力の向上」を意味しているのか、思考力・判断力・表現力等の育成の意味で書かれた施策になっているか。
- ④ 指導観、指導法の改善、工夫として「主体的・対話的で深い学び」つまり問題解決的・協働的な学習を目指しているか。それともペナラ教師を活用した「教え込み技術」の伝承か。「少人数指導」で基礎・基本の徹底を目指しているのか。

「議員用ESD議会質問マニユアル」

- ⑤ カリキュラムマネジメントとして「ESDカレンダ―」の作成がもくろはそれ以上の教科等横断的な指導計画を明示しているか。
- ⑥ 各学校の「教育課程」に上記のことがどれだけ記述されているか。そして、年度末の学校評価でどれだけ検討・改善が進んでいるか。
- ⑦ これらのことを校長・教頭あるいは教務主任等に対してどの程度の指導をしたのか。
- ⑧ その成果として、全校の子どもの主体的・対話的に学び合う姿がどのような場で、どのようにもみられるのか。また、実践を踏まえた発表・発信の場が確保できているのか。

【学びに火をつける】 ⇒ 【調べる】 ⇒ 【まとめる・実行する】 ⇒ 【伝える】

世界の現状を踏まえ、学習指導要領の改訂に主体的に取り組む必要がある。教育改革に取組む必要を高める。

【1. 調べる】

- ① 調べる
 - 世界の現状を踏まえ、学習指導要領の改訂に主体的に取り組む必要がある。教育改革に取組む必要を高める。
- ② 調べる
 - 学習指導要領の改訂に主体的に取り組む必要がある。教育改革に取組む必要を高める。
- ③ 調べる
 - 学習指導要領の改訂に主体的に取り組む必要がある。教育改革に取組む必要を高める。
- ④ 調べる
 - 学習指導要領の改訂に主体的に取り組む必要がある。教育改革に取組む必要を高める。
- ⑤ 調べる
 - 学習指導要領の改訂に主体的に取り組む必要がある。教育改革に取組む必要を高める。

【2. まとめる・実行する】

学習指導要領の改訂に主体的に取り組む必要がある。教育改革に取組む必要を高める。

【3. 伝える】

学習指導要領の改訂に主体的に取り組む必要がある。教育改革に取組む必要を高める。

【学びに火をつける】 ⇒ 【調べる】 ⇒ 【まとめる・実行する】 ⇒ 【伝える】

世界の現状を踏まえ、学習指導要領の改訂に主体的に取り組む必要がある。教育改革に取組む必要を高める。

【1. 調べる】

- ① 調べる
 - 世界の現状を踏まえ、学習指導要領の改訂に主体的に取り組む必要がある。教育改革に取組む必要を高める。
- ② 調べる
 - 学習指導要領の改訂に主体的に取り組む必要がある。教育改革に取組む必要を高める。
- ③ 調べる
 - 学習指導要領の改訂に主体的に取り組む必要がある。教育改革に取組む必要を高める。
- ④ 調べる
 - 学習指導要領の改訂に主体的に取り組む必要がある。教育改革に取組む必要を高める。
- ⑤ 調べる
 - 学習指導要領の改訂に主体的に取り組む必要がある。教育改革に取組む必要を高める。

【2. まとめる・実行する】

学習指導要領の改訂に主体的に取り組む必要がある。教育改革に取組む必要を高める。

【3. 伝える】

学習指導要領の改訂に主体的に取り組む必要がある。教育改革に取組む必要を高める。

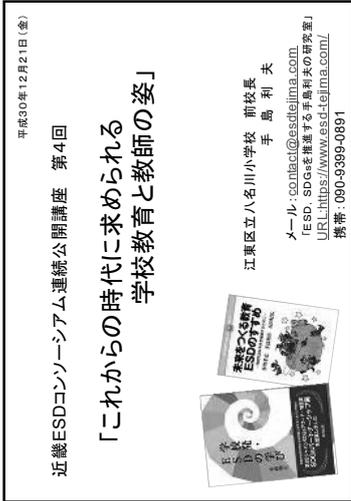
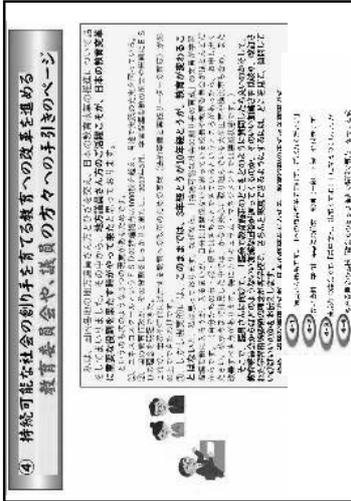
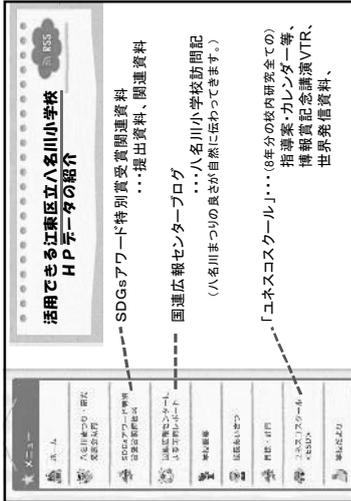
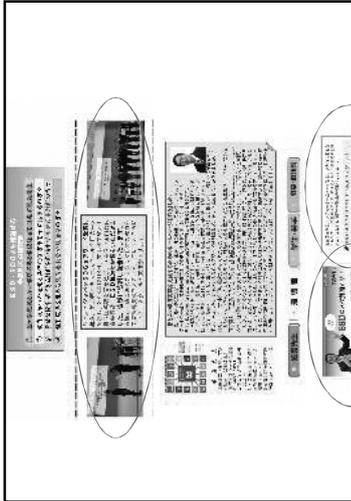
上記の画面は先ほどお見せしました。ここでもう一度お示したのは、次のような意味があります。

皆さん、ESDを進めるには、主体的・対話的で深い学びが大事です。主体的とは・・・対話的とは・・・深い学びとは・・・ESDとは、SDGsとは・・・

主体的な学びの重要性を知識伝達型の講義で伝えたとしても、この人は言っていること、やっていることが一致していない。信用できない。と思われれます。そういう人の唱えるESDは信用されにくいのです。伝え方も重要です。

皆様方のお取り組みによって、ESDが広まり、成長し、変容する子どもたちの姿を通じて保護者や、地域の理解・納得、そして協力を得られるよう、各校が実践を重ねていかれることを期待しています。

さて、最後に資料の紹介をいたします。



第5回学ぶ喜び・ESD連続公開講座概要報告

奈良教育大学 中澤静男

◇開催日時 2019年2月10日(日)15時~17時

◇会場 次世代教員養成センター1号館

◇参加者数 22名

◇内容

「グローバル・シティズンシップ教育とESD
-GCEDとESDの関係性とシナジー-

講師:東京大学海洋アライアンス海洋教育

促進研究センター 主幹研究員 及川 幸彦 氏



1. GCEDとESDの関係は

ESD = GCED あるいは ESD ≠ GCED

GCEDとは教育がいかんして世界をより平和的、包括的で安全な、持続可能なものにするか、そのために必要な知識、スキル、価値、態度を育成していくかを包含する理論的枠組み

2012年国連事務象徴が開始したGEFI (Global Education First Initiative) の3つの優先分野の一つ

現在進行中のポスト2015開発・教育アジェンダ策定に向けた議論では、教育の質を向上させるものとしてESDと併記されてターゲットに明記されている

目標: ESDの目標と重なる部分が多い

学習方法・能力も重なる部分が多い

2. SDGsとGCED 4.7にも明記されている

「2030年までに、持続可能な開発のための教育及び持続可能なライフスタイル、人権、男女の平等、平和及び非暴力的文化の推進、グローバル・シティズンシップ、文化多様性と文化の持続可能な開発への貢献の理解の教育を通して、全ての学習者が、持続可能な開発を促進するために必要な知識及び技能を習得できるようにする。」

3. GCEDとESDの関係性について

GAPレビューフォーラム in オタワ

ESDおよびGCEDについての好事例や経験の共有、教授法及び実践について

→ 国によってとらえ方が違う

・日本ユネスコ国内委員会

○教育の中核がESD 持続可能性の山頂がESD アプローチの仕方は多様だが

ESDは17の目標達成のカギである

国際理解教育の発展系がGCED

・韓国ユネスコ国内委員会

GCEDは17のゴールすべてを達成する

ESDは環境教育の発展系

ESDはメイドインジャパン。GCEDはハン・ギムン(国連事務総長)発・韓国発

・ユネスコの捉え方

ESDは環境教育の発展系

GCEDは国際理解教育の発展系　それで両論併記

国によって違っていかまわらない

4. GCEDの限界と有用性

- ・ 気候変動や貧困、災害など持続可能性に関わる喫緊の課題に対して貢献できるのか？
- ・ 理念や価値的な教育だけで、具体的な社会行動化が促されるのか
- ・ 地域の課題に向き合い、当事者意識を持たせることができるのか

5. 重要性

- ・ 素養としてはグローバル・シティズンシップは重要
- ・ 変革者の育成にはグローバル・シティズンシップ教育のアプローチが必要
- ・ 参政権が18歳に引き下げられる中で市民教育は重要（投票率の低下）
市民としての権利と義務

6. 日本の捉え方

ESD > GCED

国際理解教育とGCEDの整理が必要

7. ESDにおけるGCEDの実践

◇地球探索型環境教育の推進：海外との協働による地球的視野の育成

日米両地域のローカルなテーマの教材化　地域・文化による違いと人間としての共通性

学びの共有（テレビ会議）による地球的視野の育成

異文化を理解しながらコミュニケーション能力を育成

グローバルな存在としての自分の理解

※最近ではローカルに閉じられている傾向が強い

8. まとめ

- ・ GCEDは〇〇教育の一つ
- ・ ESDはfor 方向性・目的の教育
内容は規定しない
→ 教育のレベルが違う
ESDの傘の中にGCED



◇全体協議：グローバル・シティズンシップ教育とは

米田

- ・2014年あたりから日本のESDが変わりつつあると感じている。韓国と日本のギャップを感じる。1990年頃まで、日本は国連が提起する教育に関心がなかった。日本教育に足りないのはシティズンシップだ。韓国は国際的な状況を捉えて進めようとしている。ESDで大切なのは地域だが、世界への発信が弱い。そこが課題だ。
- ・グローバル化が進んでいった。多様性をどうつないでいくかで始まったのがシティズンシップ教育だ。ユネスコの捉え方
 - ①教育の平等
 - ②質の高い教育
 - ③地球市民の育成

中澤

政治共同体が税金を使って共同体を支える市民を育てるのがシティズンシップ教育。グローバルの場合、どこが資金を提供することになるのか、進捗に責任を持つことになるのが不明だ。

田淵

国民をどう作るかが教育だった。国にこだわっている限り、地球諮問は育たない。

国際理解教育は、国を相対化する視点を育てることが重視された。国を相対化する視点としてグローバルになっていった。

◇グループディスカッション

- ・ESDの実践に環境教育が多いのは事実。
- ・GCEDは理念の教育で理想論に聞こえる。
- ・国による多様性が出てくるのは仕方がない。
- ・韓国の実践や捉え方を調べる必要がある。
- ・シティズンシップ教育の現場での活かし方。子どもの個性を認める教育に深めていけばいいのではないか。
- ・ESDは黒船だ。みなが同じ方向になびいていくのが日本。子どもサイドに立って、多様な考え方ができる、多様なルーツをもつ人に共感できる、競争的な国の在り方を批判的に客観視できる人を育てることが重要。
- ・海外の人と関わるが増えている。グローバル教育は重要だ。SGHでは、総合と各教科が分離していた。
- ・シティズンシップの中にも国際理解があるのに、グローバルが入ってきて混乱している。
- ・ローカルでいいのではないのか。

及川先生

- ・韓国とは国での違いがある。歴史的背景が影響している。韓国では留学が当たり前。母親と子どもが留学。父親は年に1回海を越えて会いに来る（ガンパパ）。韓国は資源がない。学歴社会。国内に仕事が少ないので海外で活躍するという傾向がある。彼らにとって生きる場所はグローバル。その素養を育てるためにグローバル・シティズンシップを提唱している。

- ・日本ではグローバルに活躍している人は女性が多い。女性が活躍できる場が国内に少ないのが影響しているのかもしれない。
- ・韓国のユネスコスクールは地域との連携がない。逆にいうとそれが日本のE S Dの特徴。
- ・それぞれの国で重要視している教育がある。
- ・ローカルは重要だが、つながりを考えるならローカルで閉じていることはできない。つながっているという意識を持つことが重要。そのツールにSDG sを使える。
- ・SGHの統括している行政官がE S Dを知らないのが原因。縦割り行政。やっとかわってきた。
- ・P B L プロジェクトベースドラーニングを文科省が持ち出している。

加藤学長

- ・SGHも答えの出ない問いに取り組むことで悩んでいる。いいきっかけになっている。
- ・インチョン宣言：E S DとGCESを併記

長友先生

- ・現在の関係性はどうなっているのか。ユネスコの文書ではアンドでつないでいる。

米田先生

・日本のE S Dを確立することが重要だ。日本ユネスコスクールの実践で少ないのが人権だ。1992年フィリピンでの会議、「平和・人権・民主主義のための教育」を打ち出した。1997年にドローレレポート共生や市民がでた。これがシティズンシップ教育の源流だ。なぜ、人権や差別に対する認識が低いのか。教育の4本柱を基盤にしていく。人権の問題はGCEDを考えていくにあたり、重要になっていく。誰も置き去りにしない、はGCEDに近い。

ユネスコ憲章の基盤が人権だった。平和だけが独り歩きした。

及川先生

人権や不平等などはGCEDが強いところだ。

平和な社会の捉え方。SDG sのすべてが達成された状況だ。矮小化すべきでない。

両方をつなぐのが「命の尊重」

社会に「適応する人材」を育成する

社会を「変革する人材」を育成するのがE S D。

理念だけでなく行動化を促進していくことが重要。



平成30年度 近畿ESDコンソーシアム・森と水の源流館
「水の恵み」に着目した授業づくりセミナー 開催要項

1. 目的

ESDを指導できる教員の資質・能力の向上には、継続的な研修を実施する必要がある。近畿ESDコンソーシアム活動の一環として、川上村森と水の源流館と「水の恵み」に着目した授業づくりセミナーに協働的に取り組む。森と水源流館スタッフによる、自然環境保全の取組や水生生物などに関する情報提、大学教員等による単元デザイン作成に関する助言のもと、現職教員が指導案を作成し、授業実践を行うことで、教員としての資質・能力の向上を目的とする。

2. 主催

近畿ESDコンソーシアム、森と水の源流館

3. 会場 森と水の源流館・奈良教育大学等

4. 開催日時と研修内容

第1回 平成30年7月14日(土) ESDの授業について・優良実践事例の検討

第2回 平成30年7月30日(月) 指導案の共有

第3回 平成30年8月7日(火) 水生生物観察会と指導案の共有

第4回 平成30年9月2日(日) ESD学習指導案の相互検討

第5回 平成30年12月9日(日) 授業実践の交流

※ 開催時間はいずれの回も13時～16時

5. 参加者

近畿ESDコンソーシアム構成団体に所属する教員等

奈良教育大学の大学生・大学院生・教職大学院生

森と水の源流館 事務局長 尾上忠大 及びスタッフ

奈良教育大学 准教授 中澤静男・北村恭康

森と水の源流館 第一回授業づくりセミナー概要報告

奈良教育大学 北村 恭康

- 開催日時 平成 30 年 7 月 14 日(土) 13 時 ~ 16 時
- 会場 森と水の源流館
- 参加者 尾上・木村・上西・成瀬・古山(森と水の源流館)、奥田(関西学院大学大学院)、島(郡山西小)、川崎(川上小)、新宮(平城小)
谷垣・藤本・北村(奈良教育大学)、
- 傍聴 栗山忠昭(川上村村長)、弓場盛正(教育長)、今福和男(水源地課長)、福本彰(川上小校長)
吉田志帆・加藤満(水源地課)

○内容

1. 開催日時(全 5 回)

6 月 22 日(金)16 時・8 月 8 日(水)14 時・27 日(月)14 時・12 月 7 日(金) 16 時・
1 月 11 日(金)16 時

2. 研修の主な内容

○今までの取組について概略説明

ESD ⇒ Education for Sustainable development

持続可能な社会づくりの担い手を育成する教育

1987 年 環境と開発に関する世界委員会(ブルントラント委員会)

持続可能な開発の表現が使われる

「将来世代のニーズを損なうことなく現在の世代のニーズを満たす開発」

◎世代内の公正と世代間の公正

2016 年 持続可能な開発目標(SDGs)発効 (17 の項目と 169 のターゲット)



◇持続可能な社会づくりの担い手を育成する教育を通して、SDGs の達成に貢献する教育へ



近畿 ESD コンソーシアム

- ・ 持続可能な開発のための教育を実践できる教員の養成
(学習指導要領の中にも ESD の理念が反映)
- ・ ESD 実践への支援活動
- ・ 大人への ESD ⇒ ユネスコ協会などと連携して進めている
- ・ 構成団体 教育委員会 4 小中学校 45 高校 2 社会教育関係 5 など 85 団体

授業づくりセミナーでは

年 5 回実施 授業構想 ⇒ 指導案作り・検討 ⇒ 実践 ⇒ 分析
森と水の源流館スタッフとともに現地に行き学ぶ
森と水の源流館スタッフの専門的知識から学ぶ

村長さんの話より

- ・ 川上宣言は村民の思いの発信であるが、下流域の住民に理解されているのだろうか。
- ・ 先生方が授業されているので、村がバックアップしていきたい。

- ・大雨の後、流木が家を壊すという話が出ると胸が痛む。
木は悪くないのだ。⇒ 山の管理が大切なのだ。
- ・山、森、川は、人の責任で整備していかなければならない。

教育長の話より

- ・山の荒廃は人の責任である。
- ・都会にはない村の暮らしがある。源流の村に誇りを持っている。
- ・山と平野はつながっているということを村人は考えている。
- ・山を守る ⇒ 水を守る ⇒ 環境を守る ⇒ 故郷教育でもある。

○島 俊彦先生の実践報告（大和郡山市立郡山西小学校）

実践を4つの観点から話し合いまとめていった。



得られる ESD の視点

責任性…川上宣言にもあるように源流に住むものとしてのきれいな水を下流に流す。

連携性…川上宣言の実現に住民が協働して取り組んでいる。

相互性…川上村の取組から、自分たちの生活排水や富雄川の汚れの改善に目を向ける。

ESD の資質・能力

長期的思考力…大和川の汚れの 70%は生活排水であることから、どのようにすれば、きれいな排水ができるか考え、実践していく。

関連…大和郡山に流れる吉野川分水のきれいな水は川上村からきている。また、自分たちが流す水は大阪湾に流れ込んでいる。

世代間・世代内の公正…山や森を守りきれいな水をいつまでも下流域に流す。

文化の尊重…山で育まれてきた産業や生活を誇り、都会にはない豊かな生活を守っていく。

⑪**住み続けられる街づくり**…森林の保全や活用を通して豊かな生活を創ろうとしている

⑫**作る責任使う責任**…上流域のきれいな水を流そうとする考えと、中下流域のきれいな水の恩恵と流す水への配慮。

⑭**海の豊かさ**…自分たちの流す水によって海の環境が良くも悪くもなる。

⑩**不平等をなくそう**・⑰**目標を達成しよう**という意見もありました。

ESD の価値観

SDGs の何に貢献できるか

第2回森と水の源流館 授業づくりセミナー

奈良教育大学 中澤静男

1. ESDで育てたい見方・考え方： ESDの視点

実態概念 自然環境や 社会環境	多様性 色々ある 方がいい	相互性 つながりを 尊重	有限性・循環性 資源制約を考慮
規範概念 人は集団の意 思決定・行動	公平性 世代内・ 世代間	連携性 非排他性・ 寛容性	責任性 協調性・リー ダーシップ

※ESDの視点は教材に依存する部分が大きい。
 ※世界遺産には、ESDで育てたい見方・考え方
 (ESDの視点)を含むものが多い。
 ※同じ教材を扱っていても、指導者の注力するポイントが
 変わること、教材の取り扱い方も変わっていく。

2. ESDで育てたい資質・能力

- ①クリティカル・シンキング
(批判的思考力、代替案の思考力)
- ②システムズ・シンキング
(総合的・構造的に考える力)
- ③長期的思考力
(データに基づき、将来ビジョンを構想する力)
- ④コミュニケーション力
(意見と聞く、意見を述べる力)
- ⑤協働的問題解決力
(**課題の**資質・能力は、**学習の**進め方に**依存する部**
分が大きい。)

3. ESDで育てたい持続可能な社会づくりに 関する価値観

- 世代間の公正：将来世代の人たちへの配慮
- 世代内の公正：途上国の人たち、貧困層の人
たちへの配慮
- 自然環境の保全を優先する
- 互いの人権・文化を尊重する
- 経済よりも幸福感を重視する。

持続可能な開発目標 (SDGs)



SDGsに関する日本ユネスコ国内委員会からのメッセージ

「教育が全てのSDGsの基礎」であるとともに、「全てのSDGsが教育に期待」している、とも言われています。ESDもまた、ターゲット4.7に書いてあるから取り組むべき、というだけのものではなく、持続可能な社会の担い手づくりを通じて、17全ての目標の達成に貢献するものです。

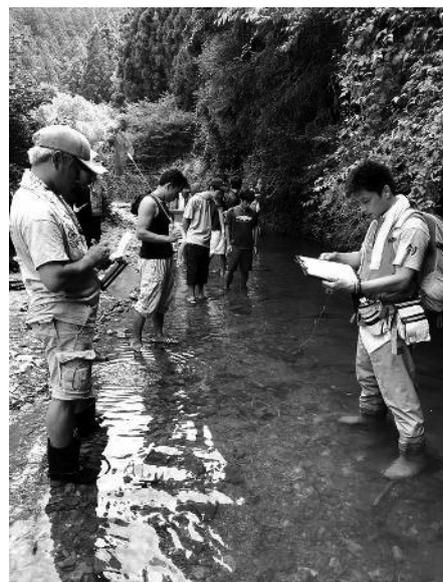
※教材化する世界遺産は目標の何に関わるのかについて目星を付け、目標に含まれるターゲットをしっかりと読み、注力するポイントを把握する。

授業作りセミナー③ 水生生物の観察

1. 日 時 : 平成 30 年 8 月 7 日 (火)
13:00～16:30
2. 参加人数 : 20 名
3. 場 所 : 蜻蛉の滝周辺 やまぶきホール研修室
4. 内 容 : 12:45 蜻蛉の滝駐車場集合 (スタッフが待機しています。)
13:00 水生生物の観察 開始
14:00 水生生物の観察 終了

14:10 やまぶきホールへ移動
14:30 授業作りセミナー
16:30 終了
5. 目 的 : 環境指標生物として取り上げられる機会が多く、学習教材としても注目をされている水生生物について、生息場所の確認、採集方法を実際に体験してもらうことにより、教材として使用する際の利点、注意点、問題点、工夫の仕方などの感想や意見を出し合うことを目的とする。
6. 持ち物等 : 動きやすく濡れても良い服装、帽子、長靴またはマリンシューズ、採集道具 (あれば)、水筒、タオル、着替え (濡れた時用)
7. 備考 : 採集道具、観察器具は森と水の源流館で用意いたしますが、水生生物の観察に使えるのではないかと思うものがあれば持参いただけますと、意見交換時に役立つと思います。

- ◇開催日時 2018年8月7日(火)12時45分～15時30分
- ◇会場 水生生物観察会 音無川蜻蛉の滝
授業検討会 森と水の源流館
- ◇参加者 森井(田原小中)、圓山(飛鳥小)、早崎・赤松・
中山(和歌山市立有功東小)、川崎(川上小)、
尾上・古山・上西・木村(源流館)、
佐藤(川上村役場)、雲雀(奈良教育大3回生)、
北村・中澤(奈良教育大)



◇内容

1. 水生生物観察会

観察シートの解説

生きものは住みたいところに住んでいる。

昔の環境に近い形にすることで、生物は戻ってくる。

その地域の環境の良さを追求する

高齢者への聞き取り 川の利用、食べていた川魚調べ、などの聞き取り

観察シートの項目が聞き取りポイントとなる。

地域の川を好きになってもらうことがまず重要。その中から生物に関心を持つ子が表れてくる。

子どもと川の距離を身近くすることがポイント

いい川だと子どもが認識するポイント

よさも多様であっていい(水質調査オンリーではない)

生物の多様性、いこいの場、遊びの場、利用の方法、運搬、流通、親しみやすさ

感覚的なよさ 涼しさ、気持ちがいい、 言語化することで明確に意識される

生態系(生物種、生態系、遺伝子)の多様性

音無川と佐保川は生態系の多様性

万葉集—ツカノマ

ガサガサどり

注意事項

- ・川底の石の上などよく滑るので、観察地点までは川に入れないこと
- ・それぞれの間隔は2メートル以上あける
- ・特に網を使うときは、柄の部分でケガしないように注意させる
- ・水深はくるぶしより上に行くところには行かないように
- ・全体を見る担当が一人は必要
- ・日射病や熱中症に注意する。
- ・時間は15分～30分が限界
- ・長靴かマリンシューズがいい。ガサガサどりのときにガラスがある場合もある。
- ・クツの場合は、クツの上から布の靴下をはく
- ・生きものだけバケツに入れる。砂や石は入れないようにする。

- ・都市河川の場合、ゴミ、空き缶などがあるため、軍手やゴム手袋がいることもある。
- ・急に水温が下がってきたら、流量が増えるので上がった方がいい。

2. 指導案の検討

「ダムカレーから学ぶ「水源地の森」」川上小：川崎貴寛

- ・川上村のダムカレーが導入
 - 3つのダムがある 大滝ダム・大迫ダム・緑のダム
- ・森林の果たすダムの役割の学習
- ・川上村はなぜ水源地の森を購入したのか
- ・川上宣言
- ・学習前の児童の姿と比較して学習後の児童のビジョンは（森井）
 - 12月に総合の発表会がある。地域の人も見に来る。それにむけて総合を頑張ろうという意欲がある。
 - 1学期：林業の特徴 林業家を招いた学習 森林が果たす役割：光合成、土壌の保全
 - 学習後：川上村を支えていこうという当事者意識、川上村を大事にする気持ちを高めたい
- ・ダムカレーをつくられた人の思いにもふれるといい。地域の子の思いを代表している。
- ・時間数は5時間でできるか？（赤松）
 - 総合でもっと時間をかけてやってみようか。子どもの疑問からダムカレーの理由を考えさせる
 - これがぼくたちのダムカレー をつくってみる
 - 4人だとできるが、深まりにかけられることが多い。
 - 川上村の人がされている「きれいな水をながす」行動を聞き取り調査をすることで、当事者意識を育てることになる。
 - 行政がしていること（水源地の森の購入、川上宣言）だけでなく、村民の行動
 - 水源地の森と他の森の違い
 - 生物多様性 色 風景 コケ、土、よさは多様であっていい それを意識できることが大切
 - 川上村の森林は当たり前ではない。特別な環境であることを子どもから発信していければ
 - 川上村のダムカレーのポイントはブロッコリーと言える子どもに。
 - ブロッコリーが大量にあるダムカレーをデザインできるといい。
 - ダムカレーの認定基準をつくった人の思い（地域振興課）



次回は9月2日（日）13時～

第4回森と水の源流館 授業づくりセミナー概要報告

奈良教育大学 中澤静男

開催日時 2018年9月2日(日) 13時～16時
 会場 川上村森と水の源流館
 参加者 阪本・川西・五十川(三石小)、島(郡山西小)、川崎(川上小)
 尾上・上西・古山(源流館)、雲雀(奈良教育大学生)
 北村・中澤(奈良教育大学)

1. ESDで育てたい見方・考え方 (ESDの視点)

自然環境・社会環境	「多様性」	「相互性」	「有限性・循環性」
人・集団の意思や行動	「公平性」	「連携性」	「責任性」

多様性：色々ある方がいい

相互性：つながっている、つながりを尊重する

有限性・循環性：有限なものである。それが循環していればいい。

公平性：世代内と世代間の公平を考えていることが重要。

連携性：排他的でなく、異文化を背景とする人々などとも妥協点を見出し、協働する。

責任性：最後までする。リーダーシップを発揮する。協力する。

2. ESDで育てたい資質・能力

※資質・能力の育成は指導方法に依存する。

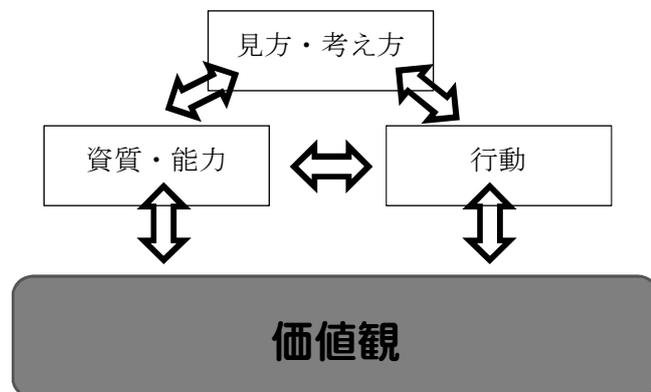
- ①クリティカルシンキング (批判的思考力・代替案の思考力)
- ②システムズシンキング (総合的・多面的思考力)
- ③長期的思考力
- ④コミュニケーション力
- ⑤協働的問題解決力



3. ESDで育てたい価値観

※価値観とは、見方・考え方、資質・能力、行動の基盤となるものです。

- ①世代内・世代間の公正を重視する
- ②生態系の保護を重視する
- ③互いの人権・文化を尊重する
- ④経済よりも幸福感を重視する



見方・考え方、資質・能力、行動は、互いに影響しながら、強化されていきます。その繰り返しによって、基盤となる価値観も形成されていきます。

【参考資料】持続可能な開発目標（SDGs）

目標 1（貧困）

あらゆる場所のあらゆる形態の貧困を終わらせる。

目標 2（飢餓）

飢餓を終わらせ、食料安全保障及び栄養改善を実現し、持続可能な農業を促進する。

目標 3（保健）

あらゆる年齢のすべての人々の健康的な生活を確保し、福祉を促進する。

目標 4（教育）

すべての人に包括的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯学習の機会を促進する。

目標 5（ジェンダー）

ジェンダー平等を達成し、すべての女性及び女児の能力強化を行う。

目標 6（水・衛生）

すべての人々の水と衛生の利用可能性と持続可能な管理を確保する。

目標 7（エネルギー）

すべての人々の、安価かつ信頼できる持続可能な近代的エネルギーへのアクセスを確保する。

目標 8（経済成長と雇用）

包括的かつ持続可能な経済成長及びすべての人々の完全かつ生産的な雇用と働きがいのある人間らしい雇用（ディーセント・ワーク）を促進する。

目標 9（インフラ、産業化、イノベーション）

強靱（レジリエント）なインフラ構築、包括的かつ持続可能な産業化の促進及びイノベーションの推進を図る。

目標 10（不平等）

各国内及び各国間の不平等を是正する。

目標 11（持続可能な都市）

包括的で安全かつ強靱（レジリエント）で持続可能な都市及び人間居住を実現する。

目標 12（持続可能な生産と消費）

持続可能な生産消費形態を確保する。

目標 13（気候変動）

気候変動及びその影響を軽減するための緊急対策を講じる。

目標 14（海洋資源）

持続可能な開発のために海洋・海洋資源を保全し、持続可能な形で利用する。

目標 15（陸上資源）

陸域生態系の保護、回復、持続可能な利用の促進、持続可能な森林の経営、砂漠化への対処ならびに土地の劣化の阻止・回復及び生物多様性の損失を阻止する。

目標 16（平和）

持続可能な開発のための平和で包括的な社会を促進し、すべての人々に司法へのアクセスを提供し、あらゆるレベルにおいて効果的で説明責任のある包括的な制度を構築する。

目標 17（実施手段）

持続可能な開発のための実施手段を強化し、グローバル・パートナーシップを活性化する。

第5回森と水の源流館授業づくりセミナー概要報告

奈良教育大学 中澤 静男

- ◇開催日時 2019年1月06日(日)13時～15時
- ◇会場 川上村森と水の源流館「川上村劇場」
- ◇参加者 尾上・木村・上西・古山(森と水の源流館)
新宮(平城小)・島(郡山西小学校)・奥田(関西学院大)・赤松(和歌山市立有功東)
川崎(川上小)・北村・中澤(奈良教育大学)

◇内容：実践報告の報告・検討

(1) ダムカレーから学ぶ「水源地の森」(川上小5年生：川崎)

○導入：ダムカレーの観察

川上村のダムカレーには3つのダムが表現されている
大滝ダム・大迫ダムはわかるが、3つ目のダムとは何か？
→ 緑のダム(森林)

森林の持つダムのはたらき

○水源地の森のフィールドワーク

(川の色の違い、地面がふかふか・ルーペを使った観察・裸地の川と水源地の森の川の比較)

・川上村が10億円で購入・自然豊かな森

(下流の人たちや、未来の人たちのことを考えて購入)

→川上宣言

・山の神様

・自然を守ることの大切さと難しさ

○村長さんへのインタビュー「川上宣言に関して」←川上村民のアイデンティティのシンボル

○村民へのインタビュー「自然を守るために心掛けていること」

→自分たちも何かしたい・みんなに知ってもらいたいという意識の変化

自分たちで育てているブロッコリーをダムカレーに使ってもらおう(有料)

売り上げを森に寄付したい

ダムカレーにのせるフラッグのデザインの作成、チラシの作成

◇感想・質問

- ・マズローの欲求の階層説 お店の人や地域の人からの承認が自分も何かしたいという気持ちにつながった(自己実現の欲求)のではないだろうか。
- ・授業に入る前の子どもの実態を記録しておき、授業後の変容と比較することで、子ども自身が学びの価値を実感できるとともに、教員にとっても自己の実践を振り返って改善する材料とできる。
- ・地域住民・村長からの聞き取りが子どもに与えた影響：本物の体験
- ・自治体の新しい取組(今回はダムカレー)を教材にすることで、協力も得やすい。
- ・森林の役割を明確に学ぶことができていた。そこからアイデンテ



ィティの形成に発展している。

- ・源流館の専門家と連携したことがよかったのではないか。(地域の教育施設との連携の価値)

(2)「わたしたちの生活をよりよくする政治」(郡山西小6年生:島)

小学校ESD実践における児童の市民的資質

(持続可能な社会の創り手に求められる資質・能力)の育成
社会の動きを自分ごととして捉えて関わっていくことができる力の育成

シティズンシップ教育の理論の援用

- ①地球市民としての資質の育成
- ②民主主義を支える能動的な市民の育成

○人口減少という社会的課題 消滅可能性都市

(5月4日の新聞記事)

人口減少率が高い全国の市町村に10位以内に奈良県の市町村が5つも入っている。

川上村は減少率がトップ⇔ベビーブームでもある

→村としての取組があるはずだ 聞き取り調査

市民の願いをふまえた施策を展開している

○郡山市の市政はどうなんだろう?

◇感想・質問

- ・地方自治をとらえる見方・考え方を育てている。
- ・川上村だけでも社会科としての学習として成立している。
- ・川上村を取り上げた学習を学級全体で行い、そこで身につけた学習スキルで郡山市では、グループ単位で取り組ませる。
- ・郡山市を教材化するうえで具体的にとりあげたい施策はあるのか?
- ・人口減少の要因を掘り下げることで、学びが深まるのではないか。人口減少の見方・考え方の獲得と、それに対する行政の施策との相互性を学ぶことができる。

(3)「紀の川を探ろう～紀ノ川がつなぐ水とくらし」(有功東小6年:赤松広志)

1学期 千手(せんず)川を探ろう

- ・地域にある川だが、子どもとの心の距離は遠くなっているように感じる
生き物調査・歴史調査(役行者関連)・歩いている人への聞き取り調査
カモの営巣

地域の魅力を見つけることから地域への愛着を育てる

かつて水質が悪化したことがあったが、地域の人々の取組で改善したという歴史

2学期 千手川から紀ノ川へ

- ・紀の川じるしのポスターの提示で「人と川のかかわり」への関心を高めた
上流・中流・下流、林業・農業・漁業
- ・和歌浦(日本遺産)の見学

○しらす漁師さんの横田さんとの出会い 漁船の見学・しらすの試食

「しらすを次世代に残してことが大切だ」

漁の期間を限定、山に木を植える



「和歌浦のアピールが足りない」

でも、しらすをアピールするとしらすを食べる人が増えてしらすが減ってしまうのでは

→ しらすだけでなく和歌浦全体をアピールしたいのでは

・川上村・源流館の見学

川上宣言・水の旅のはなし

○尾上さんへのインタビュー

「森・川・海を大切にしてほしい」「紀の川と人のつながりを知ってほしい」

→ 紀の川を守っていかう ← 横田さんの思いとの共通点

川上村のフィールドワーク よさだけでなく課題も見つける

(人口減少・高齢化・不便)

○エリックさんとの出会い (地域おこし協力隊)

地域おこし協力隊について調べる

エリックさんのインターネットで調べる、その後電話で、連絡を取りエリックさんと村上さん (元地域おこし協力隊) に学校に来てもらう。

- ・地域を元気にする活動
- ・地域行事などへの参加
- ・地域の人との交流

→ 人に喜んでもらえる活動っていいな

- ・エリックさん：協力隊を終えた後も川上村に住みたい
- ・村上さん：デザイナーとして川上村のために関わっていきたい

2人からの宿題

- ・六十谷のいいところを教えてください どの地域にもそこにしかない魅力がある

○出会った人に共通するもの

自分の地域を盛り上げたい、大切にしたい

◇感想・質問

- ・上流・下流の人のつながりに焦点化された実践だった。中流の人との交流もあれば。
- ・子どもの声や視点をくみとった実践だと思った。
- ・人の思いは子どもたちに伝わっている。
- ・感心・あこがれから子どもたちの行動化が生じている。
- ・地域から始めて地域に戻る学習が行動化につながる (空中戦をさけることができる)

(4) 源流館と共同研究した総合的な学習の時間 (平城小4年生)

水道水を入りに

上水 きれいな水を 川上村

下水 きれいな水に 浄水場

秋篠川の生態系調査 (谷幸三氏)

源流館でのフィールド体験

きれいな川での生き物調査

生き物調査の楽しさ、比較のおもしろさ、違いの要因を川だけでなく、広い視野でとらえる



音無川と秋篠川の共通点を見つけよう

ややきれいな水にいる生き物が多い。

人と自然のかかわりは一筋縄ではいかない

◇感想と質問

- ・ 専門家と連携することで科学的知識を授業に生かすことができる
 - ・ かつての秋篠川に関する聞き取り調査・時間軸を入れることでE S Dとして行動化を促進できるのではないか。(かつての遊べる川に戻したい)
 - ・ 「きれい」「きたない」の言葉が先入観を生んでしまうので、言葉の定義を子どもたちと共有することが必要。
 - ・ 「きれい」な水、その背景となる豊かな自然環境にも目を向ける。
 - ・ 周辺環境が同じでも水質が違うところ その理由を考える。
 - ・ 一緒に勉強していくというスタンスで取り組むことが大切
- (5)「資料を生かして考えたことを書こう」(平城小学校 5年生国語科・新宮)

- ・ 木使い運動の発展
- ・ ポスターで表現する (資料を活用し文章を作成する)

源流館のポスターの製作者：尾上さんの教材化

思いが伝わるポスターになっているか

言葉を磨く

ポスターに込められた思いを知ることから。

◇感想・質問

- ・ まず伝えたい思いを明確にすることが大切。
- ・ 木使い運動とは違うポスターを教材に、尾上さんに作成に関わったの思いを話してもらう。
- ・ 導入：まず気に入ったポスター・チラシを児童に持ってきてもらって、その理由を説明させる
- ・ 教科書越えが意欲化になる



近畿ESDコンソーシアム・奈良県立万葉文化館

「万葉集」を題材とした授業づくりセミナー 開催要項

1. 目的

ESDを指導できる教員の資質・能力の向上には、継続的な研修を実施する必要がある。近畿ESDコンソーシアム活動の一環として、奈良県立万葉文化館と連携し、「万葉集」を題材とした国語科や総合的な学習の時間等での授業づくりを中心とした連続セミナーを開催する。学芸員による万葉集の内容や時代背景等に関する情報提供、大学教員等による単元デザイン作成に関する助言のもと、現職教員が指導案を作成し、授業実践を行うことで、教員としての資質・能力の向上を目的とする。

2. 主催

近畿ESDコンソーシアム

3. 会場 奈良県立万葉文化館内

4. 実施日

平成30年 7月21日(土) 講演および質疑
平成30年 8月10日(金) 実践事例の分析
平成30年 9月15日(土) 学習指導案の検討①
平成30年 11月23日(金) 学習指導案の検討②
平成30年 12月15日(土) 実践事例の報告会

※ いずれも10時30分より開催

5. 参加者

近畿ESDコンソーシアム構成団体に所属する教員等
奈良教育大学の学部生・大学院生・教職大学院生
奈良万葉文化館 指導研究員 井上 さやか氏
奈良教育大学 准教授 中澤静男
奈良教育大学 特任准教授 北村 恭康

万葉文化館第一回授業づくりセミナー概要報告

奈良教育大学 北村 恭康

日時 平成30年7月21日(土) 10時30分～12時30分

場所 奈良県立万葉文化館 会議室

参加者 新宮 濟・石原宏一(平城小)、河合摩子(佐保小)、中澤哲哉(平群北小)、中矢和美(学校支援員)

井上さやか(万葉文化館)、北村恭康(奈良教育大)

内容

初めに、万葉文化館指導研究員井上さやか氏より、「万葉集と飛鳥」という題で万葉集の魅力を語っていただき、子どもたちが興味を抱くような万葉クイズの例も示していただいた。

○万葉クイズ (一のところはどう読むのか)

- ・ 寒過 暖来良思 朝鳥指 滓鹿能山尔 霞軽引

【一が終わって一が来たらしい。朝日のさす春日山に霞がたなびくことよ】

- ・ 若草乃 新手枕乎 卷始而 夜哉将間 二八一不在国

【若草のように初々しい手枕を初めてまいてどうして夜を隔てよう。一などないものを】

○飛鳥宮 一飛鳥と明日香一

- ・ わが里に大雪降り大原の古りにし里に落らまくは後 (天武天皇 ⇒ 藤原夫人)

└ (現 小原)

(距離感)



雪を自慢している(政治が良いから天変地異も起こらない)

当時は一夫多妻であり別居婚であった。

- ・ わが岡の霨に言ひて落らしめし雪の摧けし其処に散りけむ (藤原夫人 ⇒ 天武天皇)

(竜神・水神)

(おこぼれ)

- ・ 采女の袖吹きかへす明日香風都を遠みいたずらに吹く

(距離感)

飛鳥時代には「庭」という発想がない

「采女」 地方豪族の娘 聡明であり美人だったかも

飛鳥 明日香

現村名は「明日香」 大字命に「飛鳥」もある。

『万葉集・古事記・日本書紀』での表記は 「飛鳥」「明日香」「阿須可」「安須可」などがある。

飛鳥池工房遺跡(7世紀後半)から「飛鳥寺」と書かれた木簡が出土(現存最古)

- ・ このころには「飛鳥」が定着していたのではないだろうか。

○その後の飛鳥

- ・ 飛鳥の明日香の里を置きて去なば君があたりは見えずかもあらん

(とぶとり)

飛鳥は明日香という土地に係る枕詞。 明日香をほめる言葉であったのが、「飛鳥」と書いて「アスカ」と読むようになったのではないか。

○石原宏一先生の 単元構想より (奈良市立平城小学校)

いにしえから学ぶ ～わたしの夏～

万葉集は四季をよんだ歌が多い。昔の人が心動いたことと風景を結び付けて表現したように、指導にも夏休みで一番心動いたことについて、その景色の描写を七音五音に凝縮して表現させたい。

- ・四季の分類は ⇒ 春(1月～3月)・夏(4月～6月)・秋(7月～9月)・冬(10月～12月)
各季節の変わり目に土用がある(今の土用のウナギの土用、この時代には年4回あった)

中国江南地方の季節感に合う

持統天皇の

春過ぎて 夏来るらし 白袴の 衣乾したり 天の香具山

四季を初めて読んだ歌

春 生命の息吹を感じる 芽吹く

秋 収穫があり 満ち足りている

農耕からの感覚ではないだろうか。



- ・万葉集全 20 巻のうち四季分類がされているのは 8 巻と 10 巻のみです。この 2 巻の編纂は、奈良時代に大伴家持が編纂したといわれています。
- ・奈良時代になると四季が意識されるようになりました。
- ・たくさん読まれている季節は

四季分類がされている 8 巻と 10 巻を見ると (784 首)

秋 441 首 春 172 首 夏 104 首 冬 67 首 秋が一番多い

動物では

ホトトギス 154 首 **カリ** 65 首 **シカ** 58 首 ウグイス 51 首 タズ(鶴) 45 首

植物では

ハギ 141 首 ウメ 118 首 **ヌバタマ** 80 首 **モミヂ** 78 首 マツ 77 首

太字は秋のものである。

◇終了後、新宮先生は「稲・田」・石原両先生は「季節」を読み込んだ歌を図書室にて検索。

連絡

※ 次回以降の授業セミナーの実施日

8月10日(金)・9月15日(土)・11月23日(金)・12月15日(土)

第2回万葉文化館授業づくりセミナー 概要報告

奈良教育大学 中澤静男

- ◇開催日時 2018年8月10日(金) 10時30分～12時
- ◇会場 奈良県立万葉文化館
- ◇参加者 梅原(西宮甲英高等学校)、中矢(佐保台小)、中澤哲(平群北小)、井上(万葉文化館)、北村・中澤(奈良教育大)

◇内容

1. 前回の振り返り:「万葉集」と明日香

- 万葉クイズ 寒いと書いて「ふゆ」と読ませる
暖と書いて「はる」と読ませる
朝鳥と書いて「あさひ」 太陽信仰
二八十一 「にくく」は「に」と九九
十六は「しし」
掛け算九九はすでにあった
山上復有山 「やまのうえにまたやまあり」で「出」
◇かたいイメージをくずす



飛鳥と明日香

- 雪は当時、めでたいもの 祝福のあかし
- 一夫多妻で別居婚 夫人: 臣下の中でも身分の高い者(三位以上)
皇后: 皇族に限る
内親王: 皇族
嬪 : 地方豪族出身

明日香の宮と藤原の宮は意外と近い

これは心の中の距離(かつては天皇になるかもしれなかった自分が今は忘れられている)

明日香(音にも忠実な読み)

- 飛鳥: 木簡資料にある 当時すでに飛ぶ鳥と書いて飛鳥と読ませることが定着していた
(とぶとりのあすか という枕詞的な修飾語と一緒に用いられた): 豊かな土地
(まくらことばは、今は意味がないものとされているが、かつては意味があったのでは)

元興寺(今の世界遺産)

- 故郷の明日香 (明日香はふるさととして捉えられていた): なつかしく
- 平城の明日香 (平城京のあすか)
あをによし は平城京のまくらことば ほめる意味がある
※漢字の使い方がゆるい(意味だけ、音だけ、両方): はじめから意味ありきではない
語り物 リズムにのせて歌う方が覚えやすい

外来の文化の流入によって、日本人を意識し始めた時代 : 日本文化を形づくった

- 白村江の戦い後 様々な国の人々が明日香に住んでいた。
話す聞くはできないが読み書きはできない
話す聞く文化を書き始めたものが万葉集

歌垣でも聞いて覚えたことをやり取りして結婚相手を探していた
意味を重要視しはじめたのは、日本書紀や古事記からか。

文化の多様性

中澤哲：万葉集を活用した授業づくり

現在の漢字が平安時代以前にはどんな漢字で表されていたのか

万葉仮名一覧表

たたみこも平群

昔の地名を万葉仮名で書くとどうなるか

奈良時代に良い文字二文字で地名を表すよう命令があった

市町村単位の地名



第3回万葉文化館授業づくりセミナー 概要広告

奈良教育大学 中澤 静男

- ◇開催日時 平成30年9月15日(土)10時30分～12時
- ◇会場 奈良県立万葉文化館
- ◇参加者 繁田・石原・新宮(平城小)、中澤(平群北小)、井上(万葉文化館)
北村・中澤(奈良教育大学)

◇内容

1. 「いにしえから学ぶ ～わたしの夏～」平城小学校教諭石原宏一郎

目的：自らの感想を言葉で表現できる力の育成

(1) 導入 夏の思い出 と 夏の万葉集：周りの様子を切り取った歌

卯の花の 過ぎば惜しみか 霍公鳥 雨間も置かず こゆ鳴きわたる
天の川 霧立ちわたり 彦星の 楫の音聞こゆ 夜の更けゆけば
天の海に 雲の波たち 月の船 星の林に 漕ぎ隠る見ゆ

◇音読を繰り返し、リズムを楽しませる

◇文法などにはこだわらない。解釈よりも感性、イメージ化を重視する

※季節ごとに万葉集歌を検索できる(巻8と巻10)

※この時代にはまだ季語はない。



(2) 古典へのアプローチ

- ・子どもたちが古典に近づいていく
- ・古典を子どもたちに近づけていく ← こちらを重視
万葉集：表現に特徴がある。今の表現に近いものがある。

しかし、子どもとの距離がある。そこで、現代詩の鑑賞を加えた「入道雲」

入道雲：夏の様子が伝わる

現代詩の入道雲と対比することで、万葉集歌の理解が進む。学びに向かう動機づけ。

子どもの感想

なんとなく伝わってくる。想像できる。1300年前の人も同じこと(表現)、不思議だなあ。

伝わっていることがすごいと思った。1300年前のものなのにきれいな言葉を使っている。

5・7・5の方より5・7・5・7・7の方が難しい。

古代は長歌が普通。5・7でつなげていく。5・7で続けていき、おしまいに7を足す。

うらしまたろうはその形式になっている。

文字のない文化なので、リズムが大切。

枕詞はインデックスの役割 あをによし とくるところから奈良の歌 だよ

(3) 歌の創作

材料集め 周囲の様子を表す言葉 目・耳・鼻・手・口

伝えたいこと（感じたこと・思ったこと）をまず明確に

「言いたいんだけどしっくりこない」→交流→語彙を増やすことに

※最も適切な（自分の思いや感性を伝えるために）表現方法について、子ども同士の意見交流を促すことで、①表現方法・語彙が豊かになる、感じ方の多様性に気づくことができる。

（４）万葉集を用いた効果

- ・きれいな言葉が強烈に残っていて、それが子どもの学びのエンジンになった。万葉集歌がモデルになった。解釈にこだわらなかったのがよかった。
- ・五感から入っていったのが子どもにはよかった。
- ・受け継がれてきたのは、そのまま残すと別にその時代その時代の解釈や変化もあった、古典文化の多様性、多様なものとして受けとっていく。これしかない、絶対的なものとしてとらえるのではなく、変化するもの、これからも自分たちで解釈していいもの。
- ・「ヤバイ」などの最近の言葉については、言葉として貧困。認めつつも、古典に出会わせることで古典の語彙も獲得できる、表現が豊かになる。
- ・古語が方言に残っている場合がある。
- ・感情は 1300 年前も同じ。背景は異なっている（時代の変化で常識も変わる）。子どもの意外性が、学習の切り口になる。

（５）教材研究のしかた

古典に関しては、「おもしろさ」「つながり」をもとめたい。

指導要領の指導事項にどのようにすれば対応するものにできるかを考えなければいけない。

類似点を探すことで「つながり」を見だし、切り口とする。

（６）万葉集について

万葉文化館は言語文化とその背景となる社会事象を研究するところ。

万葉集や古事記、日本書紀を書き残そうとしたきっかけは、百済滅亡で多くの渡来人がやってきたこ

とで、海外文化にふれたこと。海外文化に触れ、あらためて自分化を見つめ直すことになったのでは。



（７）掲示の教育的活用について

子どもにとって発信の場として用いる

掲示物を用いた交流について

- ・観点を示す
- ・付箋に書かす（プレゼントとして）。
- ・モデリング
- ・できあがってしまったものに対してはホメホメタイムでいい。同じことをしないとすぐには使えない。完成する前にまねさせる、自分の表現に生かす時間をもつようにする。

(8) その他

・万葉子ども賞コンクール 冬休みの宿題の時期 モチベーションになる。

作文と絵画の部門があり、小学生～中学生が対象 (添付資料参照)

・井上先生の新著『スッキリわかる!マンガはじめて読む古事記と日本書紀』

(井上さやか監修、ナツメ社、2018年10月4日発行、1350円)

※次年度は万葉集だけでなく、古事記、日本書紀の教材開発もテーマとしてセミナーを開催したい。

次回は11月23日(金・祝)10時~12時です。指導案の相互検討を行います。

第4回奈良県立万葉文化館授業づくりセミナー概要報告

奈良教育大学 中澤静男

開催日時 平成30年11月22日(金・祝)
会場 奈良県立万葉文化館
参加者 石原(平城小学校)、梶原(平城西小学校)、吉原(万葉文化館)
北村・中澤(奈良教育大学)

内容

1. 自己紹介

2. 万葉集からのぞくESD(石原)

夜ぐたちて 鳴く川千鳥 うべしこそ 昔の人も しのひ来にけれ 大伴家持

(1) 万葉集

・末永く伝えられるべき歌集

奈良を題材とした歌が多く読まれている

5音7音の独特のリズム

作者は様々



(2) 国語科

「言葉」そのものを扱う教科

教材内容そのものを扱うものではないのでESDとなったときに難しさがある

(3) 実践について

いにしへから学ぶ～わたしの夏

万葉集を導入に位置付けた

いかにして万葉集を児童に近づけるかがポイント 現代の叙景詩も紹介し、形は違いが、やっていることは同じ

自分の感動が相手に最も伝わるように工夫して五音七音にまとめる

言語活動の特徴

○学習のプロセス ESDでは問題解決の学習プロセスを通して行動化を促進する 国語科も同じ

「書く」ところ:「書く」ことは問題解決学習になる

「書く」ことにフォーカスした学習 どうすれば伝わるかを試行錯誤する学習

・自分の気持ちや考えが読み手(未来の私を含む)に伝わるように

言葉にこだわることで、言語感覚を磨く

・自分の気持ちと関連する場面を五音七音にまとめる

・それぞれの生活体験にうったえかける 情景で表現する

・「書く」活動には、まず、自分の思いがある。それが切実であればあるほど、学びの原動力になる。

・万葉集 過去と今をつなぐ

1300年前のその人の思いをそのまま感じられる。

つながっていることそのことがすごいと感ずることができる

自分たちのやっていることも未来につながっていく という実感へ

いにしへ 往にし方 行ったことがあるところ 「昔の人も」
往にし方と自分をつなぐ「言葉」
「言葉」が過去と今と未来をつなぐ基盤
だから「言葉」を磨くことがESDでもある

ESDで育てる「つなぐ」力

そのツールとして「言葉」を磨く

時間を超える、未来の人にも伝わる「言葉」の探求

言葉は当たり前すぎて自覚しにくい

万葉集を持ってくることで、「時間を超える言葉の力」に着目できる

「言葉」を学びの目的にできる

国語科とESD 「つなぐ」力

伝え方を交流することで洗練化を図る

読み方も同じ

それら（言葉の選び方）は生活経験に依存している

それに気づくことが「メタ認知」を育てることができる

「相対化」する力の育成 それはESDになる



次回は、12月15日（土）10時～12時に開催します。会場は、奈良県立万葉文化館です。

平成 30 年度 近畿 ESD コンソーシアム 春日山原始林授業づくりセミナー 開催要項

1. 目的

2015 年に持続可能な開発サミットにおいて「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」が採択され、持続可能な開発目標（SDGs）が掲げられ、世界中でその達成に向けた取組が行われている。SDGs の達成に貢献する教育である ESD を推進するにあたり、教員の ESD 実践力向上は喫緊の課題である。近畿 ESD コンソーシアムでは、身近な世界遺産である春日山原始林をテーマに授業づくりセミナーを開催することで、学生及び教員の ESD 実践力を養成することを目的として、本セミナーを実施する。

2. 協力 春日山原始林を未来につなぐ会

3. 実施日時及び内容

- | | |
|-------------------------|---------------------------|
| 6 月 10 日（日） 10：00～16 時 | 春日山原始林フィールドワーク |
| 7 月 3 日（火） 18：30～20：30 | SDGs の理解・ESD の学習理論 |
| 7 月 31 日（火） 15：00～17：00 | 優良実践事例の分析・ESD 学習指導案の検討 |
| 8 月 30 日（木） 15：00～17：00 | ESD ティーチャープログラム学習指導案の相互検討 |
| 12 月 6 日（木） 18：30～20：30 | 実践事例の報告会 |

4. 参加対象

奈良教育大学学生・大学院生・教職大学院生
近畿 ESD コンソーシアムの教員等
ESD ティーチャープログラム参加者

5. ESD ティーチャープログラムとの関連

- ・本セミナーへの学生の参加は、ポートフォリオ作成をもって ESD 演習としてカウントする。
- ・本セミナーへの教員等の参加は、ミニレポート作成をもってセミナー参加にカウントする。
- ・本セミナーで作成した ESD 学習指導案は、ESD ティーチャープログラムの認定要件である ESD 学習指導案にあてることができる。

第1回春日山原始林授業づくりセミナー 春日山原始林フィールドワーク 開催要項

1. 目的

本授業づくりセミナーでは、春日山原始林の教材開発を目的としているが、学生及び教員にとって、春日山原始林は身近であるものの、心理的には遠い存在であり、一度も足を踏み入れたことがない者がほとんどである。そこで、まず、春日山原始林にふれ、関心を高め、教材開発の切り口を見いだすことを目的に、フィールドワークを実施する。

2. 主催

近畿ESDコンソーシアム、春日山原始林を未来につなぐ会

3. 開催日時

平成30年6月10日（日）10時～17時

4. 講師

春日山原始林を未来につなぐ会 事務局長 杉山 拓次 氏

5. 参加料 無料

6. 主な日程

10時 春日大社宝物殿前に集合

春日山原始林・若草山を杉山氏の解説の元、散策する。

滝坂の道 → 春日山原始林遊歩道 → 若草山

17時 解散

7. 持ち物等

①弁当・水筒・おやつ、②敷物、③雨具、④簡単な救急セット、⑤カメラ
歩くので、はき慣れた靴、及び活動しやすい服装（スカートは不可）



第2回春日山原始林授業づくりセミナー 概要報告

奈良教育大学 中澤静男

- ◇開催日時 平成30年7月20日（金）18時30分～20時30分
- ◇会場 次世代教員養成センター2号館 多目的ホール
- ◇参加者 講師：杉山拓次氏（春日山原始林を未来につなぐ会事務局長）
新宮（平城小）、吉田（済美小）、圓山（飛鳥小）、島（郡山西小）
中澤敦（きんき環境館）、谷垣・北村・中澤（奈良教育大学）

◇内容

1. ESDの学習理論

ESDのポイントは現代社会の相対化である。現代社会を「それ以外にはないと絶対化してしまうと、「よりよい社会づくり」も社会の「改善」で終わってしまう。空間軸や時間軸を取り入れることで現代社会を相対化することで、「ちがった形の社会」のビジョンを描くことができるだろう。

(1) ESDで育てたい見方・考え方（ESDの視点）

実態概念 自然環境や社会環境	多様性 色々ある方がいい	相互性 つながりを尊重	有限性・循環性 資源制約を考慮
規範概念 人は集団の意思決定・行動	公平性 世代内・世代間	連携性 非排他性・寛容性	責任性 協調性・リーダーシップ

- ※ ESDの視点は、取り扱う教材に依存する部分が多い。
- ※ 同じ教材を扱っていても、指導者の注力するポイントが変わることで、教材の取り扱い方も変わっていく。
島先生は「責任性」を重点ポイントと挙げているが、川上村の水源地の森の生態系に焦点を当てることで、「多様性」を学ぶことができるだろう。また、上流・中流・下流といったつながり、きれいな水と言った公平性も重要なポイントとなる。

(2) ESDで育てたい資質・能力

- ①クリティカル・シンキング（批判的思考力、代替案の思考力）
- ②システムズ・シンキング（総合的・構造的に考える力）
- ③長期的思考力（データに基づき、将来ビジョンを構想する力）
- ④コミュニケーション力（意見と聞く、意見を述べる力）
- ⑤協働的問題解決力（協調・リーダーシップ・粘り強くやり遂げる力）

- ※ESDの資質・能力は、学習の進め方に依存する部分が多い。
- ※ 1週間分の給食の食べ残しを写真で見せたことで、自らの日常的な行動をクリティカルに見直すきっかけとなり、それが当事者意識を生んだのだろう。
- ※ 水を汚さないようにするにはどうしたらよいかと考えたところで、システムズ・シンキングの育成ができたのではないか。
- ※ 自分の行動を帰ることで、将来世代に美しい大和川を残すという発想が、長期的思考力を育てるの

ではないか。

※ 地域の高齢者に過去の大和川のことを聞き取り調査することで、現在の大和川を相対化することができ、それが行動化に結びつくのではないか。

(3) 育てたい持続可能な社会づくりに関わる価値観

- ①世代間の公正：将来世代の人たちへの配慮
- ②世代内の公正：途上国の人たち、貧困層の人たちへの配慮
- ③自然環境の保全を優先する
- ④互いの人権・文化を尊重する
- ⑤経済よりも幸福感を重視する。

2. SDGsについて

※持続可能な開発目標 (SDGs : Sustainable Development Goals)

目標 1：あらゆる場所のあらゆる形態の貧困を終わらせる。

目標 2：飢餓を終わらせ、食料安全保障及び栄養改善を実現し、持続可能な農業を促進する。

目標 3：あらゆる年齢のすべての人々の健康的な生活を確保し、福祉を促進する。

目標 4：すべての人に包括的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯学習の機会を促進する。

目標 5：ジェンダー平等を達成し、すべての女性及び女児の能力強化を行う。

目標 6：すべての人々の水と衛生の利用可能性と持続可能な管理を確保する。

目標 7：すべての人々の、安価かつ信頼できる持続可能な近代的エネルギーへのアクセスを確保する。

目標 8：包括的かつ持続可能な経済成長及びすべての人々の完全かつ生産的な雇用と働きがいのある人間らしい雇用（ディーセント・ワーク）を促進する。

目標 9：強靱（レジリエント）なインフラ構築、包括的かつ持続可能な産業化の促進及びイノベーションの推進を図る。

目標 10：各国内及び各国間の不平等を是正する。

目標 11：包括的で安全かつ強靱（レジリエント）で持続可能な都市及び人間居住を実現する。

目標 12：持続可能な生産消費形態を確保する。

目標 13：気候変動及びその影響を軽減するための緊急対策を講じる。

目標 14：持続可能な開発のために海洋・海洋資源を保全し、持続可能な形で利用する。

目標 15：陸域生態系の保護、回復、持続可能な利用の推進、持続可能な森林の経営、砂漠化への対処、ならびに土地の劣化の阻止・回復及び生物多様性の損失を阻止する。

目標 16：持続可能な開発のための平和で包括的な社会を促進し、すべての人々に司法へのアクセスを提供し、あらゆるレベルにおいて効果的で説明責任のある包括的な制度を構築する。

目標 17：持続可能な開発のための実施手段を強化し、グローバル・パートナーシップを活性化する。

※島先生の実践では、目標 6 に関わるのではないかと目星を付け、目標 6 のターゲットを読み込む。

3. 春日山原始林に関して

目標 15 に関わるのではないかと予想し、ターゲットを読み込む。

また、ターゲットに関係のある事象を杉山氏に紹介していただく。

外来種：ナンキンハゼ、

ダンドボロギク（車の轍より）→小笠原との関連

下層植生が育たない → 雨による土壌流失 → 土砂災害

下層植生をシカが食べてしまう

シカは神鹿、ナギは神木として保護されている 文化的側面

過去のシカの頭数と、その頃の山の様子を、現在と比較する。

春日山は奈良町の水源だった。水の神様が祀られている。（高山神社など）

美しい水を利用した酒造りが奈良町の産業だった。（奈良晒も、川で晒していた）

川の水質、水量の変化をみる。川上町や能登川流域の農家は、春日山からの水を利用しているので、聞き取り調査するのもいい。その変化を構造的に捉えることが大切。



ヤマビルを切り口に考える「春日山原始林」の問題

春日山原始林にヒルがたくさんいた。

なぜ？



近年ヤマビルが全国的に増加している。

- ・ヤマビルの吸血源であるニホンジカの増加
- ・マツクイムシを駆除する薬によって増加？



ヒルがたくさんいるのは、
春日山原始林の生態系が変化していった結果…？

○授業の流れ

1. ヒルについて知る。
 - ・ヒルはシカやイノシシの血を吸って生きている。
 - ・ヒルの増加→シカの増加
2. 春日山原始林について知る。
3. 春日山原始林の生態系がどのように変化していったのか考える。
 - ・フィールドワークを行い、現在の山の様子を調べる。
 - ・昔の山の様子を調べる。
 - ・昔と現在の春日山原始林の違いを考える。
 - ・シカの増加によって、山に変化があったことに気づかせる。
 - ・山がスカスカ（シカが下層植生を食べる。）
 - ・シカが食べない植物が残っている（ナンキンハゼ・ナギ）
4. 春日山原始林を守るための取り組みについて知る。
5. 自分たちに何ができるか考える。

(3) 生物と環境

生物と環境について、動物や植物の生活を観察したり資料を活用したりする中で、生物と環境との関わりに着目して、それらを多面的に調べる活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア 次のことを理解するとともに、観察、実験などに関する技能を身に付けること。

(ウ) 人は、環境と関わり、工夫して生活していること。

イ 生物と環境について追究する中で、生物と環境との関わりについて、より妥当な考えをつくりだし、表現すること。

(内容の取扱い)

(4) 内容の「B生命・地球」の(3)については、次のとおり取り扱うものとする。

本内容は、第4学年「B(2)季節と生物」の学習を踏まえて、「生命」についての基本的な概念等を柱とした内容のうちの「生物と環境の関わり」に関わるものであり、中学校第2分野「(7)ア(7)生物と環境」の学習につながるものである。

ここでは、児童が、生物と水、空気及び食べ物との関わりに着目して、それらを多面的に調べる活動を通して、生物と持続可能な環境との関わりについて理解を図り、観察、実験などに関する技能を身に付けるとともに、主により妥当な考えをつくりだす力や生命を尊重する態度、主体的に問題解決しようとする態度を育成することがねらいである。

(ウ) 人の生活について、環境との関わり方の工夫に着目して、持続可能な環境との関わり方を多面的に調べる。これらの活動を通して、人と環境との関わりについて、より妥当な考えをつくりだし、表現するとともに、人は、環境と関わり、工夫して生活していることを捉えるようにする。その際、人の生活が環境に及ぼす影響を少なくする工夫や、環境から人の生活へ及ぼす影響を少なくする工夫、よりよい関係をつくりだす工夫など、人と環境との関わり方の工夫について考えるようにする。

ここで扱う対象としては、(ウ)については、例えば、科学技術を活用して水や空気など周囲の環境に与える影響を少なくする工夫や、情報を活用して環境の変化を事前に予測し受ける影響を少なくする工夫、また、人が自然に働きかけることでよりよい関係をつくりだす工夫について扱うことが考えられる。

ここでの指導に当たっては、観察、実験が行いにくい活動については、児童の理解の充実を図るために、映像や模型、図書などの資料を活用することが考えられる。

(ウ)については、これまでの理科の学習を踏まえて、自分が環境とよりよく関わっていくためにはどのようにすればよいか、日常生活に当てはめて考察するなど、持続可能な社会の構築という観点で扱うようにする。

- | | |
|---------|--------------------------------|
| ①見方・考え方 | 有限性・循環性、責任性、 |
| ②資質・能力 | システムズ・シンキング、協働的問題解決力、 |
| ③価値観 | 自然環境の保全を優先する |
| ④SDGs | 目標6(水)、12(つくる・つかう責任)、15(緑の豊かさ) |

単元の構想

金魚のまち 大和郡山市

市内には、金魚に関係のあるものが沢山あるね。

金魚を育てる人へのインタビュー

金魚を育てるのには、きれいな水が必要なんだね！

昔は佐保川や富雄川の水を使っていたんだけど、今は吉野川分水を使っているんだね

吉野川分水の源流は川上村なんだね！

川上村では、きれいな水を下流に流すために、どのような取組をしているのだろうか？

・村の取組 ・村民の取組

村として源流の森を管理(手入れ)しているんだね。

村民は、アクリルタワシなどを使っているんだね。

川上村や村民は責任感をもって環境とより良くかかわっているね。

ならまち (水の名所「清水通」)

・春日山原始林の山麓から伸びる道 ・酒蔵や醤油の醸造元が多く軒を連ねていた。

清水通りの水質が悪くなってきた？

水質はの変化と春日山原始林の変化には関係があるのかな？

清水町の水質をよくするために、人々は春日山原始林の環境とどのように関わればいいのか？

※春日山原始林を未来へつなぐ会の杉山さんと対話

「僕たちは奈良市で頑張るよ！」 「大和郡山市に住む君たちはどうする？」

大和郡山市では？

・身近な河川である富雄川や大和川は、水質が悪い。→原因は生活排水 (自分達の生活様式が原因)。

身近な河川を改善しなければ！

きれいな水を下流に流すため、わたしたちにはどのようなことができるのだろうか？

アクリルタワシを使う

食器の汚れをふき取る

多くの人に伝える

入江 泰吉

・飛鳥小学校の先輩・校区に美術館

・奈良大和路を撮り続ける

仏像を写真で残そう!

思

春日山原始林

・春日山原始林を未来へつなぐ会

残したい自然

生物・植物・在来種
生態系など

時間軸

写真で残そう

- ・ポストカード作成?
- ・写真展開催?

校区にある世界遺産

－春日山原始林－

奈良市立飛鳥小学校 阿彌 茉央

1. 単元名

校区にある世界遺産 ー春日山原始林ー

2. 単元の目標

- ・世界遺産である春日山原始林について調べ、その魅力や現在の問題について理解している。(知識・技能)
- ・春日山原始林の現在の問題について調べたり、話し合ったりする活動を通して、どのような生物環境がよいか考えたり、表現したりする(思考・判断・表現)
- ・春日山原始林に関心を持ち、今と昔の春日山原始林を意欲的に調べ、春日山原始林を大切にしていこうとする意欲をもつ。(主体的に取り組む態度)

3. 単元について

○教材について

「春日山原始林」は、春日大社の神山として、千年以上もの間守られてきた森である。シイ・カシ類の常緑広葉樹で構成される照葉樹や、針葉樹、落葉広葉樹、ツル性植物、シダ類、苔類など、温帯性や寒帯性の樹木も混成し、希少種を含む多様な植生が残っている。「原始林」と名がつくが、豊臣秀吉によるスギの植栽や、台風被害からの回復のために在来種を補植するなど、人の手が加えられた森である。都市近郊に接し現市政と特異な林相、学術的価値の高いことから、1955年(昭和30年)に国の特別天然記念物に指定され、さらに、1998年(平成10年)には、ユネスコの世界文化遺産「古都奈良の文化財」の一つとして登録された。しかし、今、様々な問題に直面している。一つは、神の使いとされているシカと森の関係である。シカが下層植生を食べてしまうことから、後継樹となる下層植生が育たず、雨による土壌流出や、土砂災害の危険がある。一方、シカが食べないナンキンハゼなどの外来種が残ってしまい、森林生態系が変化してしまっている。また、今まで心配ないとされてきたシイ・カシ類はナラ枯れ被害が拡大してしまっている。このような問題がある中で、奈良県はさまざまな団体と協力し、春日山原始林の保全に取り組んでいる。

○児童について

本学年の児童は、1年生から4年生までの総合「なら」の時間に、身近な飛鳥地域の魅力やすばらしさについて学んできた。5年生になって、1学期の世界遺産学習では、薬師寺・唐招提寺の見学に行き、奈良の世界遺産の素晴らしさについて学ぶことができた。児童からは「これから世界遺産についてもっと学んでいきたい。」という感想がみられたため、世界遺産に興味をもっていていると考えられる。しかし、「世界遺産についてまだよくわからない。」という感想もみられたことから、世界遺産そのものについての理解はまだ乏しい。

また、春日山原始林は、本校の校区に含まれているが、校区にある世界遺産として「元興寺」しか学習したことがない。そのため、春日山原始林が世界遺産であることや、どのような場所であるかほとんどの児童は知らないだろう。

○指導について

まず、春日山原始林に興味をもつきっかけとして、原始林に住むヒルの生態を知る。ヒルがシカなど動物の血を吸血して生きていることや、湿った場所を好むことなどをおさえない。同時に、春日山原始林が世界遺産であることや、さまざまな動植物が生息することなど、春日山原始林の魅力を紹介する。おそらく、今まで学習した元興寺以外で、身近な世界遺産があることは知らず、驚くだろう。

次に、フィールドワークへ行き、現在の春日山原始林の様子を調査する。自然に注目させる中で、シカが食べてしまったために下層植生が育っていないことや、シカが食べないナンキンハゼなどの外来種が残っていることなどを伝え、その実情を目で見て確認させたい。また、後から比較するために写真を撮らせる。その後、今と昔の春日山原始林の様子を比較する。今と昔の写真を見比べることで、同じような場所であっても、生態系が変化してしまったことに気づけるだろう。また、なぜ変化があったのか、生物を関連付けて考えさせたい。フィールドワーク時にシカについて学ぶことから、シカや他の生物との関係が原因と気づける児童もいるだろう。そして、ヒルにとって今の春日山原始林はどんな場所か考え、どのような生物環境がよいか話し合う。児童は、前時に昔の春日山原始林について学習しているため、理想の生物環境が、昔の春日山原始林の生物環境と重なると気づけるだろう。

次に、春日山原始林を守るための取り組みについて学ぶ。奈良県がさまざまな団体と協力し、春日山原始林保全計画を立てていることや、その団体の一つである「春日山原始林を未来へつなぐ会」の取り組みについて紹介したい。そして、同じ自分たちにできることはないか考えさせる。

最後に、春日山原始林の魅力や問題を発信するために、学んだことをパンフレットにまとめさせる。その後の世界遺産学習や、飛鳥校区の遺産をみつける学習に向けて意欲をつけさせたい。

4. ESD の観点

○学習を通して主に養いたい ESD の視点

- I 多様性…春日山原始林には、さまざまな生物がいるほうが良いということ。
- IV 公平性…時代を超えて春日山原始林が守られてきたこと。

○学習を通して主に養いたい ESD の資質・能力

④コミュニケーション力

春日山原始林の問題について学習し、どのような生物環境がよいと思うかを話し合う。

○SDGs のどれに貢献できるか。

目標 15 陸の豊かさを守ろう

春日山原始林の生物環境を守っていこうということ。

5. 単元の評価規準

ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に取り組む態度
<p>①春日山原始林が古くから守られてきたことを知り、魅力を理解している。</p> <p>②春日山原始林の問題について理解している。</p>	<p>①調べたことをもとに、どのような生物環境がいいか考え、表現している。</p>	<p>①春日山原始林に関心を持ち、意欲的に調べている</p> <p>②春日山原始林を大切にしていこうとする意欲をもつ。</p>

6. 展開の概要 (全9時間)

時	主な学習活動	学習への支援	評価・備考
1	<p>○ヒルがどんな生物か知り、春日山原始林がどんなところだと思うか意見を出し合う。</p> <p>・ヒルがシカの血を吸って生きていることや、<u>湿った場所を好む</u>ことを知る。</p> <p>・世界遺産に登録されていることや、シカが生息していることを確認する。</p>	<p>・ヒルや春日山原始林の写真を提示し、イメージしやすいようにする。</p> <p>・春日山原始林についてあまり知らないことに気づかせる。</p>	
2 ~ 5	<p>○現在の春日山原始林の様子を調べる。</p>	<p>・自然に注目するよう伝える。</p> <p>・シカが下層植生を食べたり、シカが食べないナンキンハゼ・ナギが残ったりすることを伝える。</p>	<p>ア①</p> <p>ウ①</p>
6	<p>○今と昔の春日山原始林の様子を比べる。</p> <p>・なぜ今と昔で春日山原始林が変化したのか考える。</p>	<p>・昔の森の写真を提示する。</p> <p>・シカの増加によって、山がスカスカになってしまったことや、シカが食べない植物が残っていることに気づかせる。</p>	<p>ア②</p> <p>ウ①</p>
7	<p>○<u>ヒルにとっての</u>春日山原始林について考え、どのような生物環境がいいと思うか話し合う。</p> <p>・下層植生があったほうがよかった。</p> <p>・今の春日山原始林は乾燥して生きづらい。</p> <p>・様々な生物がいたほうがいい。</p>	<p>・ヒルはどんなところに生息するか確認する。</p> <p>・春日山原始林に限らずどのような生物環境がよいか考えさせる。</p> <p>・昔のほうがよかったことに気づかせる。</p>	<p>イ①</p>

8	<p>○春日山原始林を守るための取り組みを知る。</p> <p>・奈良県や、春日山原始林を未来へつなぐ会の取り組みを知る。</p>	<p>・HP を見せるなどして、イメージしやすいようにする。</p>	
9	<p>○春日山原始林のパンフレットを作成する。</p>	<p>・春日山原始林の魅力と問題をまとめさせる。</p>	ア①②

15分間 2.7 分 10分

作2

<p>春日山原始林を守るための取り組みを知る。</p> <p>・奈良県や、春日山原始林を未来へつなぐ会の取り組みを知る。</p>	<p>春日山原始林を守るための取り組みを知る。</p> <p>・奈良県や、春日山原始林を未来へつなぐ会の取り組みを知る。</p>	<p>春日山原始林を守るための取り組みを知る。</p> <p>・奈良県や、春日山原始林を未来へつなぐ会の取り組みを知る。</p>	<p>春日山原始林を守るための取り組みを知る。</p> <p>・奈良県や、春日山原始林を未来へつなぐ会の取り組みを知る。</p>
--	--	--	--

第4学年 総合「なら」科学習指導案

平成 年 月 日 () 第 校時

4年2組 (男子 名 女子 名)

指導者 教諭 牛丸 智衛

1. 単元名

春日山原始林の自然を写真に残そう

2. 単元の目標

- ・春日山原始林には豊かな自然環境があることや様々な課題があることを理解する。

【知識・技能】

- ・春日山原始林の自然環境の変化を考察するなかで自らの考えをもち、発信する。

【思考・判断・表現】

- ・春日山原始林の自然観察を通して春日山原始林の自然環境の様子やその変化について調べようとする。【主体的に学習に取り組む態度】

(評価規準)

ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
① 春日山原始林に生息する動植物やその生態系について理解する。	① 考察した結果を基に自分の考えをもち、伝えている。	① すすんで自然観察を行ったり、春日山原始林の歴史について調べたりしている。

3. 指導について

(教材観)

奈良市の東部にある春日山原始林は、古来春日大社の神山として信仰の場であったためほとんど人の手が加えられることなく原始性を保ってきた。市街地に近接して原生林が存在することは世界的にみても珍しく、1955年には特別天然記念物に指定され、1998年には古都奈良の文化財の一部として世界遺産に登録された。800あまりの樹種やモリアオガエル等の希少な生物も豊富に生息している。

「古都奈良の文化財」は本校から徒歩圏内に位置しており、縦割活動では奈良公園内をグループで散策するなど本教材は児童たちにとって身近なものとして捉えやすく関心をもち主体的に取り組むことができると考える。また、地域において社会づくりに貢献してきた先人や今も活動を続けている人との出会いが児童の意識を変え、持続可能な地域社会づくりへの当事者意識を育てていくと考える。

(指導観)

児童は始めに本校の卒業生である入江泰吉について学習する。児童に豊かな自然と美しい社寺がある古都奈良の風景を好み故郷である古都奈良の風景や先人の思いが詰まった歴史ある仏像を、写真を通して次世代に残そうとする入江泰吉の感性や思いに触れさせる。

本単元の学習は理科の「秋の生き物」の学習と関連づけて行い、自分たちの身近で豊かな自然環境がある場所として春日山原始林を取り上げ、自然観察の活動に移る。昔に撮影された春日山原始林の写真と比較しながらの自然観察や「春日山原始林を未来へつなぐ会」の方の話聞くなかで、先人が守り続けてきた豊かな自然が自分たちの身近に存在すること(春日山原始林の価値)や、外来種の拡大やナラ枯れなどの被害(現在の春日山原始林における様々な課題)があることに気付かせ、人に伝えたい現在の春日山原始林について自分なりの考えや思いをもたせたい。

行動化として、本校の卒業生である入江泰吉に倣い児童が現在の春日山原始林の自然を写真におさめ、美術館で写真展を開催する。撮影する写真については児童の感性を尊重し、写真を通して伝えたい思いが明確であれば、春日山原始林の課題について問いかけるようなものであったり、次世代に伝えたい現在の春日山原始林の美しい風景であったりしてもよい。

4. ESD との関連

SDGs への貢献	15 陸の豊かさを守ろう		
学習活動	視点	資質・能力	価値観
入江泰吉の業績や生い立ちを知り、感性や思いに触れる学習をする。			責任性
自然観察や調べ学習を通して春日山原始林の価値や様々な課題について考える学習をする。	多様性	システムズシンキング	生物多様性
自分が残したい春日山原始林の写真についてその理由や根拠をもち、行動化につなげる。	公平性	コミュニケーション力 クリティカルシンキング	世代間公正

5. 単元の展開

早稲田大学

	主な学習活動	指導上の留意点
第一次	<p>入江泰吉について知る</p> <p>○入江泰吉さんの生い立ちや業績について知る。</p> <p>○奈良の風景を写真におさめ続けた入江泰吉の思いを考える。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・飛鳥小学校の卒業生であることを押さえ、自分たちの身近な存在であることを知らせる。 ・戦争の影響で奈良の仏像が接収されるということで、写真に記録することを決意した入江泰吉の思いを考えさせる。
第二次	<p>春日山原始林の自然を調べる</p> <p>○昔に撮影された春日山原始林と比較しながら、自然観察をする。</p> <p>○「春日山原始林を未来につなぐ会」の方からお話を聞く。</p> <p>○資料を使って春日山原始林について調べる</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・昔の写真と比較しながら、自然観察を行い、何がどのように変化しているのか細かく考察させる。 ・春日山原始林の自然環境を守るために働く人がいることに気付かせる。
第三次	<p>春日山原始林について発信する</p> <p>○<u>写真におさめたい春日山原始林のシーン</u>を1つ決める。</p> <p>○選んだ理由を交流し合う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・写真を見た人にどんなことを伝えたいのかを考えさせる。

第1回 基礎学習理論研究会 概要報告

奈良教育大学 中澤静男



- ◇開催日時 平成30年4月20日(金)19時～21時
- ◇会場 中澤研究室
- ◇参加者 島先生(郡山西小)、河野先生(附属小)、新宮先生(平城小)、中澤哲(平群北小)、中澤敦(きんき環境館)、中澤(奈良教育大)
- ◇テキスト 「見方・考え方 社会科編」(澤井陽介・加藤寿昭、東洋館出版社、2017年)第1章

◇内容

1. 概要

見方・考え方と資質・能力は相互関係にあり、双方向的に成長する。

見方・考え方は手段である。「視点・方法」である。

見方・考え方が授業改善の鍵

社会をわかり、対応できるという概念的知識だけでなく、価値的・判断的知識を養い、よりよい社会の形成者を育成するところに重点がある。

なぜ、だけでなく「どのように」という問いに対する答えも概念的知識を育成する。

概念的知識を他の地域や事象にあてはめ、類推する。それを確かめようとする学習を展開することで、「見方・考え方」の洗練化が図られる。

「見方・考え方」は「視点や方法(思考の枠組み)」である。

2. 考察

(島) ①教科等の特色に応じた見方・考え方

示された見方・考え方を批判的に検討し、見方・考え方を明確にすべき

見方・考え方を働かせて社会事象をとらえることで、問いが生まれるのではないか。

教師と子どもは共同研究者であるというとらえかた。

②授業づくり

資質・能力の育成が一番重要である。

(哲) ①問いの質

子どもの既存の知識を活用しながら新たな知識を獲得するような問いが重要(今井・澤井・哲)

②見方・考え方で終わらせない

見方・考え方を評価することも重要

見方・考え方は評価できるか。働かせ方というプロセスを評価する。

③「見方・考え方」を意識した授業づくり

既習事項を確認し、見方・考え方を予想した授業づくり

(河) ①知識について

ジェネリックスキル(どこでも通用する知識)は存在するのか。科学的根拠はない。

類似した文脈でのみ可。

汎用性のある知識そのものより、知識を構造化するプロセスが重要

②省察

自己の考え方を批判的に熟考すること。これが見方・考え方を働かせることではないのか。

見方・考え方の対象は外にある。省察の対象は自分の中にあるのではないか。

(新) ①問い

社会事象の特色・意味を考える問いがあるが、問いには追究のエネルギーを向上させる役割もある。「ひっくり返し」「ゆさぶり」意外性

追究のエネルギーを持続させる

「単元を貫く問い」ではなく「どんどん問い変がわっていてもいいのではないか」

②教材

教科書の教材だけでなく地域教材の開発の重要性（時間・空間・相互関係に着目し）

(静) ①見方・考え方の評価

自己評価は困難である。（ビゴツキー）

②価値的・判断的知識の評価

チェックシート等を使って、客観的資料をもとにすることで自己評価が可能になる。

③見方・考え方の捉え方

わかり方のための道具だけでなく、社会の創り方のための道具でもあるべき。

3. この勉強会の名称について

基礎学習理論研究会とする

4. 次のテキスト

「「タイムリー・ウィズダム（いまこそ必要な知恵）」を育む」アーヴィン・ラズロ、『持続可能な教育社会をつくる』日本ホリスティック教育協会、せせらぎ出版、2006年

次回は、5月18日（金）19時～



「タイムリー・ウィズダム」を育む アーヴィン・ラズロを読んで

奈良教育大学 中澤静男

平成 16 年度教育改革国際シンポジウムにおいて、哲学者で未来学者でもあるラズロ氏が行った基調講演を基に ESD についての考察を深めたい。

ラズロ氏は、システムの安定の限界に到達したことによって、転換の時代に突入する社会進化の一過程を大転換期と名づけ、社会における根本的変化の過程を 4 つの局面に区切っている。第 1 場面が引き金的局面であり、第 2 場面は社会が非常に不安定に、持続不可能な状態に入る局面、第 3 場面が決定的な臨界点に近づいた局面、そして崩壊局面打開の第 4 場面を迎えると述べている。そして、人類の持続可能な発展のためには、一人ひとりが革新的な洞察と倫理を身につける必要があり、そのために教育が果たす重要な役割は、世界情勢に関する適切な概説を行い、偏りのない今日の状況の全体像とその状況がはらむ肯定的可能性、否定的可能性を伝えるという、学習プロセスの機会を提供することであると主張する。

このラズロ氏の主張について、次の 3 点から考察を加える。一つ目に現代社会の大転換期としての位置づけについて、二つ目にタイムリー・ウィズダムの学び方、三つ目が社会変革のスピードについてである。

一つ目の現代社会の位置づけについてである。ラズロ氏によると、第 2 局面においては、人口増加と資源の大量使用に伴い、社会が複雑化すると述べられているが、産業革命以降の人口増加の事実から、農業社会から工業社会への移行に合致すると考えられる。その後、グローバル化や格差社会の出現について述べられており、まさに現代社会を体現している。また、第三の局面において転換を誘発する初期条件として「持続不可能な経済、社会、文化的条件」と「持続不可能な環境的条件」に言及されているが、貧困層の拡大、テロリズム、熱帯雨林の消失と生物多様性損失、気候変動の加速といった事象に目を向けると、現代社会はすでに第三の局面にあると思われる。

二つ目のタイムリー・ウィズダムの学び方についてである。ラズロ氏はその方法として 2 つ述べている。一つは、今日の世界を支配している原則の多くがすでに時代遅れであるという認識を浸透させることであり、もう一つは世界情勢に関する適切な概説を行い、偏りのない今日の状況の全体像とその状況がはらむ肯定的可能性、否定的可能性を伝えるということである。時代遅れの原則について、ラズロ氏は 2004 年のブダペスト・クラブでの世界賢人会議で採択された宣言を引用して具体的に指摘するだけでなく、現実に危険な思想についても明らかにしている。このような主義主張が時代遅れであることを若い世代が認識することが重要であると述べているが、例えば日本の大学生のほとんどは、ここに述べられている認識はすでに獲得している。しかし、日本の若い世代からは社会変革に関する意見や行動は表明されておらず、例えば社会変革の契機とすべき選挙における投票率も、20 代が最低である。また、新聞、テレビ、インターネットなど、ラズロ氏が述べるような世界情勢を伝える手立ては多様となり、知る機会は拡大しているものの、それによって創造力を働かせて考え抜いた独自の結論に到達しているとは思えない。若い世代には社会に適応して流されていくのではなく、社会に対する関心を高める手立てが必要である。その方法が不明であるだけに、ラズロ氏の主張は画餅であると言わざるを得ない。

三つ目の社会変革のスピードである。ラズロ氏は、局面打開のシナリオにおいて、2005 年～2010 年が局面打開の第一歩として、一人ひとりが世界を平和で持続可能なものに変えていく有効な担い手になれるという考えが次第に多くの人々の心をとらえると述べているが、まったくその気配はない。誰もが自然環境の保全や差別や貧困・飢餓のない社会の実現、世界平和の構築が重要であると認識している。

しかし、その考えを行動面で示すことを、社会の勝ち組である権力者や企業は決して許容しない。ラズロ氏は軍事費のことについて言及しているが、兵器の主要な生産・輸出国、また核兵器を保有する国々の多くが、国連安全保障理事会の常任理事国であり、拒否権を持つという事実からも、社会変革がラズロ氏が述べるようなスピードで展開していくとは考えられないのである。

以上のラズロ氏の基調講演を踏まえ、現代社会を支えるシステムや価値観は時代遅れであり、それにしがみつ়くことは、崩壊（ブレイクダウン）へのシナリオそのものであるということが確認できた。一方、局面打開に対する教育の役割については、スローガンは理解できるが、実践面では不明なままである。2015年に持続可能な開発目標が示され注目されている。日本ユネスコ国内委員会は、持続可能な開発目標の17の目標達成に貢献する教育がESDであると述べている。持続可能な開発目標が本当に持続可能な社会の実現に寄与するとされる「世界の常識」についても、ラズロ氏の「個人や社会は人間の社会生態系の安定の限界と調和を図る必要がある」という観点から検証する姿勢を、教育者は持ちたいものである。

「持続可能な教育社会をつくる」（日本ホリスティック教育協会、せせらぎ出版、2006年）
『「タイムリー・ウィズダム」を育むー現代教育の最重要課題ー（アーヴィン・ラズロ）』

大和郡山市立郡山西小学校 島 俊彦

持続可能な開発を実現させるためには、新しい洞察と新鮮な創造力（「タイムリー・ウィズダム：今こそ求められる知恵」）が必要であると主張するアーヴィン・ラズロ氏は、現代教育の最重要課題として、若い世代におけるタイムリー・ウィズダムの育成に向けたプログラムづくりの重要性を説いている。

ラズロの論考について、次の2つの観点から検討する。1つ目に社会力について、2つ目に倫理についてである。

1つ目の社会力についてである。ラズロは「国内外の市場の目先の要求に応える知識ではなく、その先の、現在の社会を持続させるのに必要な知識を伝えること（未来を見通した適応）」が教育のさらなる課題であると主張しているものの、課題の解決に向けた方法については言及していない。そこで、門脇厚司の主張を援用する。門脇は、「社会をつくり、つくった社会を運営しつつ、その社会を絶えず作り変えていくために必要な資質や能力」を社会力として定義した上で、社会力形成においては、3つのステップ（①社会的原基の形成、②社会的要素の共有、③社会的行為の日常化）が重要であると主張する。授業者が、3つのステップを辿るような、探究的な学習プロセスの充実を意識することによって、ラズロの懸念する課題を解決することができるのではないかと思われる。

2つ目の倫理についてである。ラズロは探究的な学習プロセスの機会によって、学習者の中により適切で信頼できる倫理が育まれると主張している。ラズロの言う倫理とは、世界市民として普遍的な価値観や態度を意味するのであろう。倫理とは教えられるものではなく、探求的な学習プロセスにおいて、学習者が構成するものである。筆者は小学校第四学年総合的な学習の時間において、探求的な学習プロセスを通じて、児童に倫理（持続可能な水の使い方）を構成させる実践を行った。実践を通じて見えてきたものは、倫理を構成する過程において決定的に重要なことは、対話だということである。ラズロは「学習者は適切な判断力と、洞察を行動に変えていく想像力を働かせ、考え抜いた独自の結論によって、これを学ぶことができるのである」と指摘する。学習者が独自の結論を導くには、自己と他者の価値観を交流させる必要がある。一面的な見方・考え方から結論を導くのではなく、多面的かつ多角的な見方・考え方を知った上で独自の結論を導くことで獲得する倫理は、より世界市民として普遍的な価値観や態度となりうるだろう。

以上2つの観点からラズロの論考について考察した。ラズロが今日の教育システムに求める、若い世代におけるタイムリー・ウィズダムの育成に向けたプログラムづくりは、持続可能な社会の創り手を育む上で、喫緊の課題である。学校現場に目を向けると、そのような学習プロセスの機会が与えられているとは言い難い現状がある。教員自身が知識偏重の客観主義パラダイムの教育観から、学びに焦点を当てた構成主義のパラダイムへと速やかに移行できなければ、持続可能な社会の創り手を育むという次期学習指導要領改訂の理念も、机上の空論に終わるだろう。学習指導要領の改訂という教育界の大転換期に好機を見出し、理論に裏付けられた大胆な実践を重ねていくことが、我々現場の教師に託された使命である。知識注入型授業からの脱却を図り、知恵の習得を標榜とした授業実践へと転換していきたい。

第3回基礎学習理論研究会資料

『資質・能力と学びのメカニズム』第4章「各教科等の特質の応じた見方・考え方」考察

奈良教育大学 中澤 静男

平成29年3月に公示された次期学習指導料のキーワードの一つが、「見方・考え方」の育成である。この「見方・考え方」と教科の関わりに関して、筆者は、カリキュラムの3つの編成原理の一つが「文化遺産の継承・伝達」であり、教えるべき内容が文化遺産であるとする。そして「親学問の固有なもの」「見方・考え方」と、それを達成する認識なり表現の方法を身につけ、自在の活用できるようにすることが、「本来の系統学習、系統指導なのです」と述べる。そして教科の系統を感得することで、事象の見方や取り扱い方が洗練化されると指摘するが、「感得」が促される指導方法については述べていない。しかし、「見方・考え方」を働かせて個別具体的な対象にアプローチすることで、それに見合った「思考力・判断力・表現力等」や「学びに向かう力・人間性等」、「知識・技能」も無理なく習得できるとまとめている。

上記について、次の3点から考察を加える。1つ目に教科の本質、2つ目に非常識である教科の捉え方、3つ目が野生の思考についてである。

1つ目の教科の本質について、筆者は「学習の主体としての子どもや、子どもが生きる社会的文脈とはひとまず切り離れたところに教えるべき内容が超然と存在すると考える（本質主義・エッセンシャルイズム）」と述べているが、社会的文脈と切れているものを教える意味はないであろう。すべての知識もスキルも文脈的であり、子どもの生活経験と学習内容を結びつけるのが教員の役割である。（よく数学などの授業でまず公式を暗記し、それを使って問題を解く授業がある。数学の教員にならない限り、一生使わないであろう公式を暗記させ受験対策の解法スキルを教え込んでも、大学入学と同時に忘れ去られるのがオチである。）

2つ目の教科の捉え方について、「教える知識や価値の多くは現在では常識であっても、生み出された当時はおよそ非常識な代物」、「教科は非常識であるがゆえに素晴らしい」と筆者は捉えている。筆者は現代の教科内容が「常識」であり、絶対的なものと捉えているようである。それでは、ガリレオ時代のカトリック教会と同じである。すべての知識や価値は、その時代、その状況に依存する文脈的なもの、相対的なものであり、発見や研究によって変容していくものとして教えるべきである。教科の本質主義を信奉する筆者自身は、教科の捉え方が2004年の国立天文台の研究者と同じである。

3つ目の野生の思考である。レヴィ・ストロースが紹介する「野生の思考」は、未開人たちのガラクタ思考で、企画なしにありあわせのガラクタを組み合わせて構造を作る「器用仕事」と呼ばれるものである。出来上がりを彼らも予測しておらず、出来上がった作品には無限の意味づけが可能だというもので、言語・メディア論の研究者である花村（2015）は浪費的思考と名づけ、「これほど人間的で純粋なつくる喜びというものが、他に考えられるだろうか」と述べている。つまり、図画工作科の中でも特に工作に没頭する子どもの思考は野生の思考に近いかもしれないが、命題論理的な操作を行う国語科や算数・数学科や理科に「野生の思考」が同居する可能性は低いであろう。また、家庭生活における調理は「でっちあげ」かもしれないが、食べることができるかどうかかわからないものをつくっているのではない。筆者の「野生の思考」の理解は不十分であると言わざるを得ない。

上述したように、筆者の教科の本質主義志向は、柔軟な「見方・考え方」の育成を阻害するだけであり、突然持ち出した「野生の思考」は混乱を招くだけである。ただ、内容ではなく「見方・考え方」の角度から教科等を眺め直すという提案には首肯できる。そうすることで、先行き不透明な社会においても、よりよく生きていく資質・能力を育成するという新学習指導要領の趣旨が生かされていくと考える。

『第4章：資質・能力を基盤とした教育』

大和郡山市立郡山西小学校 島 俊彦

新学習指導要領では、「何を知っているか」から「何ができるか」への転換が、教育に関する主要な問いであると捉えられ、児童に育成を目指す資質・能力が三つの柱（「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」）に整理された。これらは、学習の過程を通して相互に関係し合いながら育成されるものであり、資質・能力の育成を基盤とした教育を通して、児童に知・徳・体のバランスの取れた生きる力を身に付けさせることが狙いとされている。

本稿では第2章について、次の3つの観点から考察を加える。1つ目に修飾語句について、2つ目に子どもの学ぶ力を生かすことについて、3つ目に省察についてである。

1つ目の修飾語句についてである。先に挙げた資質・能力の三つの柱には、それぞれ修飾語句が付されている。「生きて働く」「未知の状況にも対応できる」「学びを人生や社会に生かそうとする」という文言である。教師は、この修飾語句に着目する必要がある。なぜなら、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」という文言にだけ着目するのであれば、現行の四観点から三観点に移行しただけであると、ミスリードする危険性があるからである。修飾語句に着目することで、新学習指導要領が、学校教育を通じて実社会や生活に生かすことのできる力の育成を求めていると理解することができる。新学習指導要領の理念を読み解き、将来どのような社会になろうとも自らの人生を切り拓いていける逞しさを兼ね備えた児童の育成を、我々教師は意識する必要がある。

2つ目の子どもの学ぶ力を生かすことについてである。著者は「人はそもそもアクティブに、コンピテンス的に学ぶ」ことを指摘している。このことは、子どもの学ぶ姿を見れば明らかである。多くの場合、学齢が低い子どもの方が、意欲的に学んでいる。ここの事実から、学校教育が児童の学びに向かう力を奪っているという可能性が推察できる。今までの学校教育は、生きて働かない知識を、児童に注入することに躍起になっていた。断片的な知識をどれだけ蓄えているかを評価される旧態依然の教育現場に、長く在籍すればするほど、児童の学習意欲は低下していくのである。また同時に、固定的マインドセットが強化されていくのである。このような状況を打破するには、授業で得た学びが、実際の問題解決場面に有効であるという実感を、児童にもたせる必要がある。

3つ目の省察についてである。著者は省察がOECDの議論でも、常に学力論の中核や基底をなす最重要要素であると言う。省察はドナルド・A・ショーンが提起した概念であり、リフレクション（振り返り）のことである。ショーンは「現象を理解するにつれてひとは、行為の中で暗黙のままになっている理解について振り返るようになる」ことを明らかにしたが、これは成人の学習プロセスそのものと指摘している。一方、中澤(2004)は『『理解』に関わっては、子ども同士のやりとりが大人とのやりとり以上に効果的である』とし、相互評価による自己評価によって、子どもの省察力が高まることに言及している。小学生の発達段階を鑑みれば、子ども同士の相互評価によって、省察力（メタ認知力）が向上すると考えられる。しかし、自己評価と相互評価のあり方についての研究は、今後の課題でもあると中澤は言及している。これらの評価によって、学習者にどのような省察力（メタ認知力）が、どの程度育成されるかについて、さらに研究を進める必要がある。

以上、3つの観点から第2章について考察した。資質・能力の育成は、新学習指導要領における改訂の本丸である。我々学校現場の教師は、児童が見方・考え方を働かせて問題解決や探究を繰り返す過程を通じて、資質・能力を高めていけるような授業を創っていくことが求められる。教師が速やかに学習観の転換を図り、新学習指導要領の理念実現、ひいては国際標準の学力であるキー・コンピテンスを育成できるような、より良い学校教育の在り方を模索していきたい。

第5回基礎学習理論研究会

『無気力の心理学』（波多野誼余夫・稲垣佳世子著、中央公論新社、1981年）第1～第3章

奈良教育大学 中澤静男

本書は、心理学的知見を利用することで、教育活動をより「人間らしい」やり方に改革していくことを目的に記されており、第1～第3章は、特に「獲得された無力感」をめぐる研究が紹介されている。「獲得された無力感」は、アメリカの心理学者であるセーリックマンによって実験的に証明された。セーリックマンは、回避できない苦痛刺激に繰り返しさらされることで、①環境に能動的に反応しようとする意欲の低下、②学習する能力の低下、③情緒的混乱の3つのマイナスの効果がもたらされることを明らかにした。著者はこの「獲得された無力感」が動物だけでなく人間にも適用できることを、乳幼児を例に紹介するとともに、幼少時に自分の活動により苦痛や不快を取り除いたという経験が、効力感の形成につながり発達に好ましい影響を及ぼすと述べている。また、誰でも失敗するものであるが、無力感に陥るのは失敗そのものよりも、その失敗を何のせいにするかが決定的に重要であると指摘し、自分の「能力不足」と思うと無力感に陥り意欲が低下するが、「努力不足」と思うことで失敗を克服可能なものと捉えることができ、粘り強く取り組む傾向が見られると説明する。

この失敗経験と無力感・効力感の獲得について、次の3つから考察する。ひとつは、中学生を対象とした稲城哲郎の実験に関して、もう一つは、小学生を対象に行われたドウェックの実験に関して、三つ目が正確なメタ認知についてである。

一つ目の稲城の実験では、中間テストの結果を「失敗」と評価した者について、失敗の原因を能力不足においた者が、努力不足においた者よりも次回の成績を低く見積もる傾向が認められたことより、ウェイナーのいう安定-不安定、コントロールの可能性の次元が達成行動に影響を及ぼすことが教育現場で実際に確かめられたとしている。ここで問題にしたいのは、次のテストの結果と原因との関連である。「能力不足」と捉えた者の次のテストの成績と「努力不足」と捉えた者の成績とを比較し、努力不足と捉えた者の成績が優位であれば、達成行動に影響を及ぼしたと言えるであろう。しかし、「見積もる」ことを分析しただけで、達成「行動」に影響を及ぼしたとまでは言えないであろう。

二つ目のドウェックの実験では、テスト課題を解くのに要した時間を測定し、無力感型とがんばり型とに全被験者を二分し、がんばり型の者は、無力感型の者に比べ、失敗を努力不足のせいだとし、また成功は自分の努力のたまものとみる一般的な傾向が強かった。この実験結果から、失敗・成功の原因を「努力」におくことでがんばり型の子どもになったと解釈できるとしている。しかし、この実験においてテスト課題を解くための制限時間はたったの20秒である。20秒間に解けた場合は成功で、20秒以上かかると失敗とみなされ、課題解決時間が大きい者が無力感型、小さい者ががんばり型である。たった20秒でがんばり型というのには違和感がある。20秒以内にテスト課題ができるかどうかは、粘り強さというよりも「反応」を表しているにすぎない。

三つ目に正確なメタ認知についてである。著者は本当の自信を得るためには、正確なメタ認知にもとづく、「自分にとってやりがいのある課題の選択」とそこでの「努力の有効性の確認」が重要であると指摘する。しかし、「自分の能力や適性や興味を正確に知っておくことは、よりよく人生を生きるためには重要であろう」と述べるにとどまっており、どのようにして正確なメタ認知を獲得できるかについての言及はなされていない。これが明らかにされないなら自信の獲得方法も不明なままである。

以上、「獲得された無力感」の理論をもとにした「効力感」の獲得方法について考察を加えた。失敗経験や成功経験における無力感・効力感の獲得については、短期間の実験心理学的方法ではなく、教育現場での長期的な観察による説明が必要であると考える。

『無気力の心理学：第1～3章（波多野誼余夫・稲垣佳世子、中公新書、1980年）』

大和郡山市立郡山西小学校 島俊彦

本書は、豊かな社会に蔓延する無気力という現象を、「獲得された無力感」や「効力感」という概念を用いて、心理学の立場から明らかにしようとしている。再来年度から小学校で全面实施される新学習指導要領では「学びに向かう力、人間性等」が、資質・能力の三つの柱に位置付けられている。また、国際標準の学力であるキー・コンピテンシーでも、「自律的に活動する」がカテゴリーの一つに位置付けられている。昨今の教育における世界的な潮流として、今まで目に見えない学力と捉えられてきた情意や態度面についても、しっかりと育成することが求められているといえる。

本稿では第1-3章について、次の3つの観点から考察を加える。つ目に効力感と意欲について、2つ目に粘り強さについて、3つ目に努力万能主義についてである。

1つ目の効力感と意欲についてである。著者は乳児の泣き声に対する母親の反応を例に挙げ、より早く母親が反応した方が、乳児の効力感の獲得に良い影響を与えることを示している。「自分は環境に好ましい変化を及ぼすことができる」という一般化された期待を乳児が形成することによって、自信や意欲的な態度などの効力感を獲得する。奈須(2002)も、「人は、自分の行動がまわりになんらかの変化をもたらすと思っているからこそ、何かを為そうとする」という。行動に伴う結果が期待される環境が整うことで、人は効力感と同時に意欲を高めるのである。第1-3章では学校教育において効力感や意欲をどのように高めていくのかについては言及されていない。具体的な手立てとして、相互交流によって友達から正の評価が得られるような場面設定を、意図的に設けることを提案したい。

2つ目の原因帰属についてである。テスト結果の原因を「能力」に帰属する群と「努力」に帰属する群を比較し、学習者の意欲や行動の違いを明らかにしようとした実験事例が紹介されている。「能力」に帰属する群は、課題に対して投げやりな態度をとるなどの特徴がみられたという。そのような態度をとる子どもに努力することの意義を教える方法として、著者は「得意分野を見つけさせること」「具体的改善策を思いつかせること」という2点を提案している。上記の2点は、子どもが一人で考えて実践できるものではない。そのため、子どもに様々な経験を積ませることを通して、教師と子どもが共になって見出していく必要がある。「〇〇さんは、～が得意なのだね。」「～をさらに良くするために、できることは何かな？」など、子どもに省察を促し努力することの意義に気付かせるような声掛けや問いかけを、教師が試みてはどうだろうか。

3つ目の努力万能主義についてである。著者は子どもの失敗の全てが、個人の努力不足に帰属されてしまうことに対して警鐘を鳴らしている。努力万能主義を突き詰めると、能力不足に原因帰属せざるをえず、子どもが手ひどい無力感を味わいかねない。その結果、無気感が学習されてしまうのである。教師は子どもの可能性を信じようとするあまり、努力万能主義の指導に陥ることがある。児童が努力で乗り越えられそうであるか否かを冷静に見極めた上で支援を行うためにも、教師は日頃から児童理解や関係構築に努める必要がある。

以上、3つの観点から第1-3章について考察した。無力感が獲得されると、社会に無気力が蔓延する。「子どもや社会が変わったから」と、その原因を自分の外に求める教師もいるだろう。しかし、人を相手に仕事をしている我々教師こそ、どのような時に子どもが無気感を獲得するか、効力感や意欲を高めるかを把握し、確かなエビデンスや理論に基づく指導を行う必要がある。子どもがどのように学ぶかのメカニズムを明らかにし、「学びに向かう力、人間性等」や「自律的に活動する」などの、情意や態度面の資質・能力を向上させられるような指導の在り方を検討していきたい。

努力してもよい方向に変化がみられないため、意欲を失うのが無力感である。この、「獲得された無力感」に関する実験的研究を行ったセーリックマンは、回避できない苦痛刺激の連続が、意欲や学習能力の低下をもたらし、情緒の混乱さえも引き起こすことにつながることを示した。一方、ルウィスが乳児に行った実験は、泣けば抱いたりあやしたりと母親の手が差し伸べられることにより、自分が環境に対して影響を及ぼすことができるという自信となり、新しい事に対し意欲的になるだけでなく、将来、失敗を経験しても、打ち負かされる事が少なくなるという結果を得た。つまり、物理的環境からの応答的経験を通じて効力感が形成され、自分の能力を積極的に使い知力の発達をも促進するというのだ。一方、失敗が無気感を生むのだが、失敗それ自体よりも、その原因を「能力」「努力」どちらに置くかにより、後の行動の仕方や意欲が変わってくると指摘する。また、自分の能力や適正や興味を正確に知っておくことが重要で、自分にとって「やりがい」のある課題を選び、そこで努力の有効性を確認してはじめて本当の自信が得られる。失敗に対して、どのように努力するか具体的な改善策を思い出すことが必要であると著者は述べている。

ここで、筆者は3つの考察を加える。1つ目に乳幼児期の応答的体験の重要性について、2つ目にメタ認知について、3つ目に成功・失敗の能力について、

はじめに、乳幼児の無力感・効力感については、確かにその時期の応答的経験は効力感となり、望ましい発達の要因となるであろう。ただし、それが後の人生全てを左右するほどの重要事項となりえるかと言われると、疑問が残る。乳幼児以降の学齢期における体験も十分に人生に影響を与えると考えられる。成長過程での人との出会いや、回りの環境が影響を及ぼすであろうし、教育の成果が人間形成に発揮されてしかるべきであろう。

次に、メタ認知について、自分はどのような能力あり、どういったことに適しているかなどを自分で把握することはとても大事なことではあるが、それによって行動が抑制されるようなことは避けなければならないと思う。失敗経験を活かして成長することの大切さを、体験を通して子どもたちに教えていくのが望ましいと思う。人間は、自分の無力さを認識したとき、以前にもまして無気力になり、挑戦することから脱退する傾向にあるが、辛抱強く励ましを与え見守ることで、子どもの自信となり前向きな行動につながってくると思う。

最後に、失敗を自分の能力不足とみなすか努力不足とみなすかにより、課題への挑戦意欲に大きな差があると言う説が実証されている。やればできる、つまり「もう少し頑張ればできるようになるから、あきらめないで頑張ってみよう。」と言う声かけを、教師は様々な場面において子どもに投げかけている。往々にして、成功に導くのは努力であり、決して能力が無いなどとは言わない。ここで、著者は努力万能主義を批判している。確かに、行き過ぎた「やればできる。失敗したのは、努力が足りないからだ。」などと追い込み、到達できないこと全てを努力不足のせいにするのは間違っているし、一転「そこまで努力してもだめなのなら、やはり能力が無いのだろう。」などと言われれば、誰しも落ち込むのは当然だ。学校の教育において一番必要なのは、教師が子どもの状態をよく理解することであり、本人の努力が足りないのなら、「もっと頑張れ。きっとできる。」の言葉かけも有効であろう。

人間は、自分の無力さを認識したとき、以前にもまして無気力になり、挑戦することから脱退する傾向にあるが、辛抱強く励ましを与え見守ることで、子どもの自身となり前向きな行動につながってくると思う。

第6回基礎学習理論研究会

『無気力の心理学』（波多野誼余夫・稲垣佳世子）第4～6章

奈良教育大学 中澤静男

本書では効力感を「自分が努力すれば、環境や自分自身に好ましい変化を生じさせうる、という見通しや自信をもち、しかも生き生きと環境に働きかけ、充実した生活を送っている状態」としている。そして、効力感の獲得の前提として自律性の感覚、自らの努力や行動のコントロール感が不可欠であると述べる。また、効力感を育てる条件として仲間との交流を指摘し、協同的な学習の効果を例示している。さらに、構造化された知識、スキーマにも言及し、熟達することでスキーマも発達し、自他の行動をスキーマにそって評価するようになることで、人間の実存的な要求の様相である創造と愛と自己統合がもたらされることから、効力感の問題を人間の実存的な要求と関連づけて考察することの重要性を訴えている。

以上、効力感獲得の前提、育てる条件、人間の実存的な要求と効力感の関連について、次の2点から考察を加えたい。一つ目に熟達を可能にする条件に関して、二つ目に協同的な学習がもたらす効果の要因についてである。

一つ目の熟達を可能にする条件についてである。著者は、自分の行動やその結果が自分なりの内的な枠組みから評価できるようなスキーマを発達させることができるという意味において誰もが熟達者になれば、そのためには粘り強く努力する必要性を指摘している。著者が述べるように「ごほうび」が興味を低下させ、外的評価が向上心を低下させるのであれば、熟達者が粘り強く努力を継続できた要因に疑問が生じる。熟達者の例として職人を挙げているが、職人は熟達するまで、それ以外の仕事で報酬を得ながら、努力を継続してきたのではない。職人集団の一員として、初めは周辺の仕事に携わり、先輩の職人や親方の技術を模倣することで次第に中心的な仕事を担う技術を身につけてきたはずである。そのプロセスの中にごほうびはあったであろうし、先輩職人や親方からの外的評価があったはずである。その上でスキルの向上と共に発達したスキーマが内的評価である自己評価力の獲得につながり、仕事に対するコントロール感の獲得、そして効力感の獲得につながっていくものと捉えることができるだろう。一言で効力感といっても、その内容やレベルは多様であり、心理学的実験のような、個人にとって価値の低い場面で獲得できる効力感と、職人の仕事のような個人の生きざまに関係する場面において、時間とともに形成されていく効力感を同列に扱うべきではないだろう。

二つ目に協同的な学習の成否の原因についてである。著者は協同的な学習の効果として、自信が増すことと人生を左右するのは運ではないと考える傾向、一生懸命努力すれば結局力がつくものだという考え方を指摘している。これらの効果をもたらす要因を考えるにあたり、職人の熟達過程における先輩職人や親方との交流と協同的な学習の場面を比較したい。そこに共通しているのは、小さな効力感の積み重ねである。仕事の良し悪しもよくわからない徒弟が、先輩職人や親方にほめられることで、仕事の成否を判断できるようになっていく。先輩職人や親方のプラスの外的評価や「ごほうび」がスキーマの発達を促したのである。協同的な学習において、著者は仲間とのあたたかいやり取りを強調しているが、そのやり取りは、仲間との間に形成された文脈に即した肯定的な意見のやり取りであるはずである。全否定ではなく、深めたり前進させたりするような意見のやり取りが協同的な学習を個人にとって好ましいものにする。この前向きなやり取りは「小さな効力感」の源泉であり、その蓄積が著者が指摘する協同的な学習の効果を生むのである。

以上のことから、効力感の獲得にとって重要なものが明らかとなる。親方や先輩職人による徒弟を一人前にしてやろうという厳しくも暖かい接し方やまなざしであり、協同的な学習においては仲間意識である。著者は効力感の問題を人間の実存的な要求と関連づけて考察することの重要性を訴え、この章を結んでいるが、実存的な要求のなかでも「愛による自己実現」が特に重要なのではないだろうか。

『無気力の心理学：第四～六章（波多野誼余夫・稲垣佳世子、中公新書、1980年）』

大和郡山市立郡山西小学校 島俊彦

効力感とは「自分が努力すれば、環境や自分自身に好ましい変化を生じさせる、という見通しや自信をもち、しかも生き生きと環境に働きかけ、充実した生活を送っている状態」を指す。筆者は効力がもてるためには、「無力感からの自由以上のものが必要」と言う。具体的には自己選択の機会をもたせること、他者との暖かい交流（協同的学習）、自己向上の実感や本人にとっての価値づけが、効力感にとって重要な意味をもつことを主張しているのである。

本稿では、効力感の形成について3つの観点から考察を加える。1つ目に外的評価による向上心の低下、2つ目に自己選択における選択肢の設定、3つ目に協同学習場面における児童の関係性である。

1つ目の、外的評価による向上心の低下についてである。著者は、ディシやレッパーらの実験結果から、外的な評価や報酬の導入が自律性の感覚を失わせるばかりでなく、向上心をも低下させると指摘する。筆者は、担任する児童が市販テストの発展問題に取り組む姿から、以下のような場面に出会ったことがある。児童Aは、発展問題が外的評価(得点に反映)されないことを知り、「だったら、やろう。」と挑戦したのである。児童Aは、外的評価から解放されたことによって自律性を取り戻し、自らの向上心を掻き立てたのであろう。一方、児童Bは上記の場面で、「じゃあやらない。」と答えた。半強制的に取り組まされ、外的評価を加えられるテストから解放されたにも関わらず、問題に挑戦しなかったのである。これは、外的評価に晒され報酬を与え続けられてきた児童が、その蓄積によって自律性の感覚を失い向上心を低下させて状態であるからだと考えられる。今までも児童Bは、テストで低い得点を取り続けてきた。本人にとって失敗を強く意識する経験の数々が、児童Bの向上心を低下させているのではないか。だとすれば、予習を行い児童に自信をもたせた上で、授業やテストを行えば、その児童も向上心をもって取り組むことができると考える。

2つ目の、自己選択における選択肢の設定についてである。多くの選択肢のなかから、自分で自分の好む活動を選ぶことができる機会をもたせることが、効力感の発達につながっていくだろう(68頁)という著者の考えが示されている。しかし、この場合における著者の想定は、予め用意された選択肢の中から児童が選ぶというものに思えてならない。筆者は選択肢自体を児童が思考し設定することを提案する。それは、我々が育成すべき持続可能な社会の創り手に求められる資質・能力は、既存の枠の中で納まるものではないからである。新たな枠組みを創りだす、そのことに価値を見出す児童を育てるためにも、選択肢を設定する段階から児童に思考させる必要があると考える。

3つ目の、協同学習場面における児童の関係性についてである。著者は仲間同士の教え合いや、ジョンソンらが提唱する協同的学習における他者との暖かなやりとりを通じて、児童が効力感を高めていくという。しかし、教える側の効力感を高める根拠は書かれているものの、教えられる側の効力感を高める根拠が書かれていない。無批判に教え合いや協同的学習を取り入れることで、教えられる側の役割が固定化し、かえって効力感を低下させる恐れもある。学校現場では、班や小グループによるメンバーが、1か月程度固定されることが多い。教えられる側の児童は、活動を重ねるにつれ、能力による序列を下位に位置付けられてしまう。それらを回避するため、流動的な関係性の構築を目指すべきである。学習活動に応じて、児童に様々な関係性を結ばせるのである。児童の長所を多面的・多角的に見出すことができるため、能力の序列化や役割の固定化を打破することが出来ると考える。

以上、第4-6章の購読を通じて、効力感の形成について3つの観点から考察した。著者が示した考えに加え、筆者が示す3つの観点を意識することで、効力感の形成がより円滑になるのではないだろうか。教育実践を積み重ね、効力感の形成に資するものの正体を、児童の学ぶ姿から探究したい。

子どもの効力感を伸ばすにはどうすれば良いのか。「子どもが自分なりの選択基準、評価基準を自分のなかにつくりあげる(111頁)」ことが不可欠であると、著者は主張する。生活の場である家庭教育においては、親が子どもの内的な感覚を受け止め共感することや、子どもの自己選択を尊重することが大切であるという。また、学習や知的発達を促す場である学校教育においては、自分の努力によって結果が生じたと思えるような評価を与えることや、友だち同士教えあう機会を多く持たせることが大切であると説く。更に、家庭教育や学校教育が、実社会との繋がりの中で位置づくことの重要性も主張している。

本稿では、効力感を伸ばす教育的条件について、次の3つの観点から考察を加える。1つ目に課題設定のレベルについて、2つ目に内的基準をつくる参加について、3つ目に対話による価値観形成についてである。

1つ目の、課題設定のレベルについてである。著者は、自転車の運転を例に挙げ、「子どもの技能が繰り返しのよって進歩していくと、子どもは、いわば、内発的によりむずかしい課題に興味をもつようになる」という。子どもはやさしくてつまらない課題が与えられると、より難しい課題を求める。ならば、その特性を生かすことを提案したい。授業において、教師がやさしくてつまらない課題を、あえて子どもに提案するのだ。子どもは間違いなく反発し、むずかしい課題を求めるだろう。その時、教師は子どもに付き合うのである。子ども達は、自分達の手で課題のレベルを高められたことや、ルールを変更出来たことに対して、効力感をもつだろう。佐藤(2012)は「ほとんどの授業の失敗は課題のレベルが低すぎることによって生じている。」と批判する。しかし、低すぎる課題のレベルを子ども自らが高めていける場を意図的に設定すれば、佐藤の批判は乗り越えられる。

2つ目の、内的基準をつくる参加についてである。著者は「子どもなりの内的な基準をつくるうえで、親として大事なものは、子どものなすべき活動を定めるさいに、できるかぎり参加させる」ことが重要であるという。この働きかけは、教師にとっても重要である。我々が児童に対して育成を目指す、「持続可能な社会の創り手に求められる資質・能力」は、より良い社会づくりに自ら参加していく行動力及び実践力である。内的な基準とは、価値観であると換言できる。子どもが自己決定し参加した活動が有する価値について考えることで、内的基準は確立される。行動力や実践力の源泉となる内的基準を形成させるために、子どもの活動への参加を適切に支援することが、大人には求められる。

3つ目の、対話による価値観形成についてである。著者は、「子ども同士のやりとり」が価値観形成に資すると指摘する。権威が排された場において、多角的に議論することで、相対主義的な見方が育成される。それにより、子どもが絶対主義的な見方から脱却することで、価値観が形成されるのだろう。しかし、子ども同士のやりとりに際しては、教室内における同質性の高さを考慮するべきである。その点を踏まえ、学年間交流や学校間交流、校種間交流を意図的に仕組むことで、子ども同士のやりとりによる価値観形成が成立すると考える。

以上、効力感を伸ばす教育的条件について3つの観点から考察した。子どもによる課題設定、(学習)活動への参加、対話による価値形成。これら一連のプロセスは、まさに問題解決的な学習である。それを充実させることが、子どもの効力感を伸ばすことにつながると言える。私は、実践者として、価値観形成に留まらず、価値観の変革や行動化までを射程に入れた、問題解決的な学習の単元学習を、今後も研究開発していきたい。

第8回基礎学習理論研究会

開催日時：2018年12月05日

『問題解決学習入門』（藤井千春、学芸みらい社、2018年）はじめに～第1章

奈良教育大学 中澤 静男

新学習指導要領では「新しい時代に必要とされる資質・能力の育成」が求められており、中央教育審議会答申においては、「主体的・対話的で深い学び」がその資質・能力を養う学習活動として提唱されている。著者はこの主体的・対話的で深い学びを「文脈性のある学び」と捉え、「自ら問い、調べ、考え、判断し、表現する」という学びの経験である問題解決学習という枠組みで考察を展開している。そして問題解決学習の利点として、知識・技能が活用可能な形態で習得されること、子どもたちの仲間関係が互恵的なものに高め合えること、知識・技能と学び方を統一的に指導できること、生活指導も達成できること、などを挙げている。

この問題解決学習の捉え方について、次の3点から考察する。第1に文脈性のある学び、第2に教師の役割、第3に抽出児の設定についてである。

第1の文脈性のある学びについてである。ヴィゴツキーは小学生段階の子どもの思考の特性として、非随意性、非自覚性を挙げている。それが学んだことを随意的に生かすことができない原因の一つとなる。そこで著者は文脈性のある学びが重要であると述べている。文脈性のある学びを行うことで、知識・技能と活用の仕方が統一的に学ばれることについては同感である。しかし、文脈的知識・技能はその文脈の中でのみ通用する知識・技能である。他の場面における転用が重要であり、そのためには一般化による汎用可能な知識・技能への作り替えが必要であり、作り替えの技能の習得も必要であろう。

第2の教師の役割についてである。著者は「一人の学び手としての教師」を提唱し、教える、教えられる固定的な関係性を超越した学びの場面の構築の重要性を述べている。一方で、「教えるべき知識・技能」を単元の学習活動の中に計画的に配置する、「切実な問題」に遭遇させる、「学ばせる」といった教える側からの一方的な指導方法の提唱である。著者自身が否定されたものとして紹介している「実証主義的な知識観」から脱却できていないのではないか。

第3の抽出児の設定についてである。著者は抽出児を設定する意味として、「子どものため」という思想の具体化、一人の子どもを見ることで、その子とのつながりの中で別の子どもが具体的・個性的な存在として見えてくると述べている。しかし、著者は構成主義の考え方を援用し「知識・技能は、人間集団に「文化」として蓄積されている」と紹介している。この考え方と抽出児の設定、「一人学習の時間」、例として示される教師から子へのアドバイスの仕方に整合性が感じられない。知識・技能が間主観的なものである以上、はじめから間主観的にコミュニケーションを主体とした学び方が求められるのであり、教師のアドバイスも、個ではなく集団に対して行うべきであろう。

以上、文脈性のある学び、教師の役割、抽出児の設定に焦点を当て、問題解決学習について考察を加えた。著者は構成主義の学び方を紹介してはいるものの、学びの根底は従来の実証主義的な知識観から脱却できていないことが明らかにできた。学習指導要領で学習内容が規定されている教科学習の現実の中で、構成主義の考え方にもとづく問題解決学習は可能なのであろうか。可能にするための必要とされる前提について考えていく必要があるだろう。

問題解決学習とは何か。本章では、著者に寄せられる多くの疑問や質問に答える形で、その全体像が論じられている。再来年度から実施される新学習指導要領（解説編総則）では、学習の基盤となる資質・能力の一つに、問題解決力が挙げられている。例えば社会科においては、従前から問題解決的な学習（小学校）の充実が求められており、そのことは今回の学習指導要領改訂においても、変わりはない。学校現場では今後ますます問題解決学習の重要性が高まっていくと推測される。

本稿では、問題解決学習が内包する子どもの学びに資する価値や可能性について、次の3つの観点から考察を加える。1つ目に文脈性のある学びを成立させる教師の専門性について、2つ目に実践共同体について、3つ目に教師の立ち位置についてである。

1つ目の、文脈性のある学びを成立させる教師の専門性についてである。教師であれば誰も、文脈性のある学びを教室で実現させ、児童の資質・能力を高めたいと願う。しかし、学ぶ価値ある文脈性は、児童任せでは決して生じない。本章で著者が繰り返し主張するように、文脈性のある学びが成立するか否かは、教師の専門性にかかっている。この主張に、筆者も大いに賛同する。児童にどのような資質・能力を育成したいのか。教師が児童の具体的な学びの姿を描き、その実現に向けて必要な学習活動を、単元を通じて仕組んでいくことが重要である。児童自らが問題を発見したように演出し、解決に向けた主体的な学習意欲を維持させるなど、教師に求められる専門性は、児童の学びをコーディネートしたり、ファシリテートしたりする能力である。そのような能力は、一朝一夕で身に付くものではない。単元構想図を作り単元を見通した授業改善を行うなど、地道な教師修行によって身に付くものである。

2つ目の、実践共同体についてである。著者は構成主義の立場から「知識・技能は、人間集団に『文化』として蓄積されていると考えられる」と説明する。正統的周辺参加論が示すように、知識・技能は個人のみが有するものではなく、実践共同体の中に埋め込まれたものである。学級に置き換えて考えると、児童が学習に参加することを通じて、実践共同体の文化が蓄積され、結果として個人の知識・技能が高まるということである。正統的周辺参加論に立脚すれば、問題解決学習は単なる知識・技能の獲得の場ではなく、アイデンティティの形成に資する学習であると価値づけられる。

3つ目の、教師の立ち位置についてである。教師は教える人、児童は教えられる人といった固定的で古い学習観は、もはや学校現場では通用しない。柔軟で新しい学習観においては、著者が主張するように、「教室と一緒に学んでいる一人」つまり協同探究者という立ち位置で教師は児童に関わることが求められている。ここで意識したいのは、教師が児童と並走するのではなく、児童の少し先を行く立ち位置をとることである。教師が児童から憧れられるような存在（新参者にとっての古参者）、また頑張れば乗り越えられそうな存在となることで、学習に対する児童の十全的参加を促すことができると考えるからである。

以上、問題解決学習が内包する子どもの学びに資する価値や可能性について3つの観点から考察した。問題解決学習成立の要件は、教師の専門性にあることを痛感した。教師の専門性とは短絡的なハウトゥーではない。教師としての専門性を、著者は「哲学（教育観、学習観、子ども観）」と称す。本会発足当時の理念（「理論をもつと、大胆な授業改善ができる」）に立ち戻り、哲学を確立させ、児童にとって価値ある学びを構成できる教師へと成長したい。本書の購読を通じて、問題解決学習の理論を学び、授業改善に役立てたい。

学生による ESD 活動支援報告書

【学生によるESD活動支援】

岡山県災害復興支援ボランティア 実施報告書

英語教育専修 修士1回生 谷垣 徹

平成30年7月、西日本豪雨が発生し、岡山県や広島県、愛媛県などを中心に、西日本各地で大きな被害をもたらした。この豪雨被害を受け、近畿ESDコンソーシアムでは構成団体である奈良教育大学ユネスコクラブを中心に災害復興支援ボランティアチームを組織し、被災地である岡山県岡山市西区、倉敷市真備町でボランティア活動を行った。豪雨発生直後の平成30年7月から10月にかけて、計11回活動を実施し、ユネスコクラブを中心とする本学学生、本学現職教員を含む現職教員等、計42名が参加した。

◆支援実績一覧

	実施日	活動場所	作業概要	参加学生
第1隊	7月15日(日)	岡山県倉敷市 真備町有井地区	封鎖された道路から土砂の 掻き出し、運搬等	下垣内、谷垣
第2隊	7月16日(月祝)	岡山県倉敷市 真備町川辺地区	浸水家屋から家財道具の運 び出し、運搬等	奥平、西條、坂本、 谷垣
第3隊	7月28日(土)	岡山県岡山市 西区平島地区	支援拠点の清掃、住民への ニーズ調査等	尾崎、西條、種瀬、 谷垣、西田、守部
第4隊	8月1日(水)	岡山県岡山市 西区平島地区	用水路から土砂の掻き出 し、清掃等	西條、坂本、谷垣、 松崎
第5隊	8月13日(月)	岡山県倉敷市 真備町川辺地区	浸水家屋から土砂の掻き出 し、運搬等	奥平、西條、谷垣
第6隊	8月28日(火)	岡山県倉敷市 真備町川辺地区	浸水家屋から家財道具の運 び出し、運搬等	木村、近藤、谷垣、 森本
第7隊	9月2日(日)	岡山県倉敷市 真備町川辺地区	浸水家屋の内装解体、清掃 等	宇都宮、木村、谷垣、 山本
第8隊	9月6日(木)	岡山県倉敷市 真備町川辺地区	浸水家屋の内装解体、清掃 等	栗谷、谷垣、山本
第9隊	9月23日(日)	岡山県倉敷市 真備町川辺地区	浸水家屋の庭の整備等	近藤、下垣内、谷垣、 新田
第10隊	9月25日(火)	岡山県倉敷市 真備町川辺地区	浸水家屋の内装解体、清掃 等	足立、西條、谷垣、 山本
第11隊	10月21日(日)	岡山県倉敷市 真備町川辺地区	浸水家屋の内装清掃、廃棄 物の運搬等	狗飼、木村、谷垣、 森本

被災地ボランティアシンポジウム開催要項 開催報告書

報告者：奈良教育大学大学院 谷垣 徹

1. 目的

2018年度には6月18日の大阪府北部地震、9月6日の北海道胆振東部地震、7月の西日本豪雨災害、9月には複数の大型台風が上陸するなど、自然災害が数多く発生した。その際、多くの方々が被災地ボランティアとして活動されている。本学にも被災地ボランティアとして活動に参加した学生がいる一方で、自分事として捉えることができていない学生もいる。被災地ボランティアに参加されたNPOの方、教員、学生による被災地ボランティアに焦点を当てたシンポジウムを開催し、必要とされる活動やボランティアを通して獲得できるものについて理解を深め、ボランティア活動への参加・参画意欲を高めることを目的とする。

2. 主催

近畿 ESD コンソーシアム、奈良教育大学ボランティアサポートオフィス

3. 会場

奈良教育大学次世代教員養成センター2号館 多目的ホール

4. 開催日時

平成30年12月1日（土）14時30分～16時30分

5. 参加者

計27名（内訳）本学学生17名 本学教職員3名 一般7名

6. 内容

【第1部】

◆実践発表（15分×4）

被災支援ボランティア団体 Take action	新田 響子 氏
震災・学校支援チーム EARTH	坂本 和宏 氏
西日本豪雨災害被災地ボランティア参加学生	谷垣 徹 他
東日本大震災被災地ボランティア参加学生	上田 薫

◆東日本大震災被災体験談

奈良教育大学教育学部	狗飼 菜々子
------------	--------

【第2部】

◆グループでの座談会形式の情報交換会

- ・ 実践発表に対する質疑・応答
- ・ 参加動機、参加しての感想、参加することで得たもの
- ・ 今後必要とされる活動

◆全体総括

7. 発表の概要

(1) 被災支援ボランティア団体 **Take action**

2018年7月上旬に発生した西日本豪雨災害で被害を受けた岡山県岡山市西区平島地区において、発災当日に立ち上げて支援活動に取り組まれているボランティア団体「Take action」の新田響子氏から、団体設立までの経緯、現地の被害状況、活動理念、具体的な活動などについてお話しいただいた。「住民の方の声を大切に」「初めてボランティアに来てくれた方が、また活動しやすいように」を理念に、住民へのニーズ調査、被災した家屋の清掃、災害ゴミの撤去、側溝の泥出しなどを継続して行っている。住民のニーズに寄り添って、マッサージ、移動スーパーの導入、カーシェアリング、落語やおでんの屋台など、多様な支援に取り組まれている。現地での活動を通して感じたこと、住民の声、今後の支援についての方針などを、熱く語っていただいた。



Take action の活動紹介をされる新田氏

(2) 震災・学校支援チーム **EARTH**

学校再開に向けての様々な活動を支援する教職員の組織「震災・学校支援チーム EARTH」の坂本氏から、兵庫県の防災教育の理念、平成16年の台風23号における学校避難所での支援活動について報告いただきました。学校再開に向けて、学校現場の最前線で活動された経験を語っていただいた。学校現場における災害時の対応や学校再開に向けての取り組みなど、大学の講義などでは学ぶ機会のあまりないことについて知ることができ、教員を目指す学生にとって非常に学びの多い報告であった。



EARTH の活動紹介をされる坂本氏

(3) 西日本豪雨災害被災地ボランティア

2018年7月上旬に発生した西日本豪雨災害を受けて、奈良教育大学ではユネスコクラブを中心に復興支援ボランティアチームを組織し、岡山県岡山市東区及び倉敷市真備町で活動を行ってきた。発災直後の7月15日以降、10月までに計11回の支援活動を行い、のべ42名が参加した。本シンポジウムにおいては、ボランティア活動に至った経緯についての説明と、十戒に活動に参加した学生らを代表し5名から、現地での活動を通して学んだこと、感じたことについて発表を行った。「大雨を甘く見ない」「一人ひとりが誰かの大切な人」「変化」「自分から行動する勇氣」「つながり」というキーワードを掲げて、それぞれが現地での活動を通して感じたことを発表した。テレビや新聞などのメディアで見ただけでは分からない、実際に現地に足を運んで、現地の方々と関わることでしか感じられないことを、生の声で聞くことができた。

(4) 東日本大震災被災地ボランティア（奈良教育大学陸前高田市文化遺産調査団）

奈良教育大学では、2011年に発生した東日本大震災以降、陸前高田市への文化遺産調査団を派遣して7年目となる。本シンポジウムでは、第7次陸前高田市文化遺産調査団 ESD・防災教育研究調査班に参加した学生から、現地でのインタビュー調査などを通して考えた「7年たったいま必要とされているボランティア」についての発表を行った。家屋の再建やライフラインが整ってきている中、仮設住宅を離れる住民も多く、安心して暮らせるコミュニティの縮小が進んでおり、不安を取り除くケアが求められているという。現地での被災を経験していない第三者としてのボランティアが、どのように被災者の方々と関わるべきかについての意識や留意点についての発表がなされた。

(5) 東日本大震災被災体験談

東日本大震災で被災した本学学生（当時小学校5年生）から、被災体験談の発表がなされた。被災後の学校生活や日常生活の様子、原子力発電所事故による放射線の影響、風評被害の実態などについて、福島県で実際に体験したことをもとに語られた。断水や停電状態が続く状態での生活の苦労や、放射線の被害によって屋内の暑く狭い空間での生活を余儀なくされた厳しい学校環境、メディアによる間違った情報の流出やそれによる風評被害など、実際に被災した人



東日本大震災の被災体験を語る学生の様子
でないとわからないことを、生の声で聞くことが出来た。普段の何気ない生活が当たり前でないこと、メディアの情報に対する捉え方、人と人とのつながりの温かさなど、



グループでの情報交換会の様子



発表者と参加者の集合写真

災害を受けた場所へ実際に訪れることでわかること

社会科教育専修1回生 足立 繁郁

岡山県災害復興支援ボランティアは本学ユネスコクラブが2018年7月15日から行ってきた活動である。2018年6月28日から7月8日にかけて、西日本を中心に全国的に広い範囲で記録された台風7号及び梅雨前線の影響による集中豪雨による、西日本豪雨災害が発生した。岡山県倉敷市真備町は西日本豪雨災害によって甚大な被害を受けた。私たちユネスコクラブは実際に被害を受けた真備町に出向き、復興の支援を行ってきた。私は、9月25日に行われた第10隊の支援活動に初めて参加した。今回の支援の内容は、豪雨の被害を受けた真備町のお宅を訪問し、家屋内装の解体作業を行うことであった。家屋の解体を行うには解体費用がかかり災害を受けた方への負担になるため、そういった負担を軽減することを目的とした支援である。私が参加した当日は、ユネスコクラブから谷垣、西條、山本と私の4名が出向き、それぞれ分担して支援した。

今回の支援を通して三つのことを感じた。一つ目は真備町で人が生活しているイメージが浮かばなかったこと、二つ目は復興がまだまだ必要であるのに支援者の数が少ないように感じたこと、三つ目は人の温もりを感じたことである。

一つ目は、真備町で人が生活しているイメージが浮かばなかったことについてだ。私は、初めて災害を受けたところに訪れた。昼に到着し夜に現地を出発したのだが、昼間は車の通りがあまり見られず、支援のためのトラックが多く見られた。また家は一階の窓ガラスと床が外され、家具が見られないことが多かった。夜になると家の明かりが消えているところが多く、生活感があまり見られなかった。そのような様子からまだまだ人が安心して住むことのできる状況までに復興することはできていないと感じ、支援がまだまだ必要な場所であるのだと改めて痛感した。

二つ目は復興がまだまだ必要であるのに支援者の数が少ないように感じたことである。真備町を支援で回っていると、まだ解体やリフォームができていない家屋がたくさんあるように感じた。しかしそのような家屋に対してボランティアの人が明らかに少ないように感じられた。私は西日本豪雨後、北海道の地震など様々な災害があったことや、西日本豪雨から2ヶ月が過ぎたことなどで、風化されつつあるのではないかと思った。私は被災地がこれからも風化されず復興していけるように、もっと多くの人が支援に訪れてほしいと感じた。そのため今回体験したことを色んな人に伝えていき、身近なところから岡山とのつながりを広げていきたいと思った。また私自身もこれからも岡山への継続した支援を行い、岡山が復興していけるように取り組んでいきたいと感じた。そして岡山へのつながりを切らさないようにしていきたいと思った。

三つ目は人の温もりを感じたことである。私が支援に出向いた日である9月25日は、月見会と呼ばれるイベントが小学校にて行われており、私たちユネスコクラブのメンバーも月見会に参加させていただいた。月見会では炊き出しやフリーマーケットなどが開かれ、まるでお祭りのようににぎわっていた。笑顔で接してくれるスタッフや地域の人たちと関わることで、私自身その人たちから元気をもらい、人のぬくもりを感じた。

今回の支援を通して以上のことを感じた。私は、災害が起き、復興のための支援が必要とされる場所に出向いたのはこれが初めてだった。行く前は人の立ち入ることのできない場所のような偏見を持っていたが、実際に訪れるとそうではなかった。人のぬくもりを感じる場面や、人と人との支え合いが見られた。そして支援を行うことは、そのぬくもりを感じることでできるものだと実感した。一人の力では何も変わらないと思っていたが、そうではなく少しでも多くの力が必要であるのだと実感した。

自身の経験と岡山県倉敷市を重ねて

音楽教育専修1回生 狗飼 菜々子

私は平成30年10月21日の日曜日に、7月6日から8日にかけて西日本豪雨で浸水被害を受けた岡山県倉敷市真備町へ行き、災害復興支援ボランティアに参加した。奈良教育大学ユネスコクラブでは西日本豪雨の発生当初から継続的にこのボランティアに参加しており、私が参加した活動で11回目である。今回の参加人数は私を含め4人で、奈良市から自動車で倉敷市災害ボランティアセンターセンターまで向かい、そこで受け付けを済ませた後ボランティアの手助けを必要としている個人の受け入れ先へ向かった。

私がこのボランティアに参加しようと思ったのは他でもなく、自身が7年前に福島県で東日本大震災で被災した経験があるためである。当時小学5年生であった私の取り巻く状況は、原発事故による放射線の影響で信じられないほど大きく変化した。当たり前だと思っていた生活が全て当たり前ではなかったのだと気付いた。西日本豪雨で日常の生活が失われてしまった方々のお気持ちが痛いほど分かった。私にできることがあるのであれば少しでも力になりたいと心から思い、活動に参加した。

私がこのボランティアに参加して感じたことが二つある。一つ目は被害の風化、二つ目は人と人のつながりのあたたかさである。

一つ目は、被害の風化である。水害の発生当初こそメディアでの報道が盛んであったが、最近は報道を見かけなくなった。そのため、水害の被害を受けた方々は被災前の生活を取り戻しつつあるのだと思い込んでいた。このように思っていた人は私だけではなく多くいると思う。しかし実際はそうではなく、豪雨が発生して3ヶ月が経過した今でも、被害を受けた方々は土砂で埋まった住宅等の後片づけなどの作業に1日中追われていた。私達が伺った住宅は、骨組みを残し立て直す住宅であったため、骨組みに詰まっている土砂を歯ブラシや雑巾で掃き出し、拭き取る作業をした。私達が1日だけ行うのはまだしも、この地道な作業を延々と行うのは想像以上に大変である。多くの方が元住んでいた住宅から離れ、自治体が設けた、2年間借り上げることができる住宅から通って片付け作業を行っているという。被害を受けた地域とそうではない都道府県との間には復興の状況の考え方に関して大きなギャップが生じていると感じた。風化が進むことで、被害を受けた地域が支援の手を必要としていたとしても災害復興支援ボランティアの人数は確実に減少する。このことは東日本大震災と同じことが言えると感じた。報道ではなく、自らの目で見て、伝えることの重要性を感じた。

二つ目は、人と人のつながりのあたたかさである。休憩時間に、作業をした住宅の方とお話をさせていただいたときに知ったことである。水害後、住む場所が変わってしまった子どもたちは用意された通学バスで一時間以上の時間をかけて通学しているという。しかし低学年の子どもたちは高学年の授業が終わるまでバスが来ないため、学校で待たなければならず、帰宅するまでにさらに時間がかかってしまうという。そこで立ち上がったのが地域の人々で、子どもたちが授業が終わってからバスに乗る時間になるまで、宿題をみてあげたりするスペースを学校内に設けたそうだ。互いに被害を受けている方同士で支えあうことは並大抵のことではないことは私自身よくわかっている。きめ細かな部分を地域の方同士で支えあっていることに地域の輪のあたたかさを感じた。

私が現地で知り合った女性に言われた言葉が今でも心に強く残っている。「水害でたくさんものを失ったけど、でも水害がなかったらあなた達に会えなかった。」天災だけはどうしても免れることができない。失うものも多い。それでも、私たちが勇気を出して行動したことが、こうして大切なものを失ってしまった方々の心の癒しや救いに少しだけでもなれているのであれば、これからも継続して活動を行っていくことが必要だと感じた。

人の想いと災害復興

国語教育専修2回生 奥平 茜

平成30年6月の豪雨により、中国・四国・近畿地方を中心に日本は甚大な被害を受けた。奈良教育大学ユネスコクラブからのべ42人が災害ボランティアとして参加した。私は7月16日と、8月13日との2回参加した。1回目は、3～4人ごとにグループで家を訪ねてお手伝いをした。2回目は、先輩方が何度も支援に行くうち繋がった方と連絡を取って下さり、一軒の家のお手伝いをした。

私が2回の災害復興支援活動から学んだことは三つある。一つ目は昨日までは誰かの日常であったということ、二つ目は100%正しい判断はないということ、三つ目は言葉の大切さである。

一つ目の、昨日までは誰かの日常であったということについて述べる。バスで活動先に向かう途中、とある場所を境に地面に砂の色が濃くなっていくのが見て取れた。徐々に「非日常感」を濃くしていく窓の外の様子から目を離すことができなかった。バスの降車場所について、土煙や砂のようなにおいを感じたとき、決してこの災害は画面の向こう側で起こったことではないのだということを実感した。災害が起こってからというもの、テレビではもっぱら“地域の被害状況”として川や家の画像が報道に使われていた。災害が起こった場所として連日の報道を見ているうち、無意識のうちに「そこに誰かが住んでいた」という事実が頭から抜け落ちていたのかもしれないということに気が付いた。また、実際に住民の方と話をしているうちに、「日常があったからこそ、復興させようと思えるのではないか」という考えがふとよぎった。今まで「それがなくなるかもしれない」ということがよぎらないくらい、確固たる日常があるからこそ、「そこへ戻ろう」という気持ちになれるのではないだろうか。「被災者」ではなく、そこに住んでいる方々一人ひとりが、自分たちの生活をしているのだという、文字にすると当たり前のように見えることがいかに大切かということを感じた。

二つ目の、100%正しい判断はないということについて述べる。1回目の支援に参加した際、同じグループで活動をしていた方が熱中症になりかけてしまった。私はそのとき、「作業をやめてください」と言い、作業を休んでもらうことができなかった。結局、私たちより少し長めに休憩をとってもらい、手のしびれなど症状が治まったことを確認したのち、作業に復帰された。その方は、水分もペットボトル2本しかなく、昼食も持ってきておらず、万全の準備をして挑むことを条件に参加した私たちとは意識の差も大きく、今思い出しても「止めるべきだった」と思ってしまうくらいである。「止めきれなかった」「症状が治まったと勝手に判断して作業に戻らせてしまった」と、帰る途中もずっと気に病んでいたが、先輩方から「そのとき出せる最良の判断だった」と言っていた。「そのとき出せる最良の判断」という言葉が気になり、支援から帰ってから調べたところ、「人間の判断は65%確信を持っている状態と100%確信を持っている状態とでほとんど変わらない」ということを知った。（「地頭力を鍛える」細谷功より）65%の判断を信じて、決断に踏み切る勇気が時には重要であると感じた。

三つ目の、言葉の大切さについて述べる。支援先の住民の方から“被災地”と言われると、いつまでも被災しているようで嫌だ」と伺った。「もう復興を始めているんだ。」という言葉が印象的であった。メディアも支援参加者も、被災している状況に目を向けがちだと感じる。確かに、水害から復興するうえで、土砂の撤去など物理的なことはもちろん必要である。しかし結果を急ぐあまり、被災したのは住んでいる「人」であることが置いてきぼりになっているのではないだろうか。これからもここで暮らしていく人たちがいることを鑑みた発言がより一層求められると考えた。

2回の支援への参加から、どんな災害にも起こった先には人がいるということ強く感じた。私自身、もともと人が好きなのでより強くそう感じたのかもしれないが、「どんなことにも向こう側には誰かがいる」と思いを馳せることが重要なのだと思う。

繋がる模範を繋げる存在に

家庭科教育専修4回生 尾崎 ひな

2018年7月28日、ユネスコクラブの友人との繋がりから谷垣さんに声をかけていただき、西日本豪雨で被災地となった岡山市へ災害復興支援ボランティアに行かせていただいた。元々行くはずだった倉敷市真備町は翌日の台風直撃の心配から中止、岡山市の災害ボランティアセンターには受付時間内に間に合わず、その後、谷垣さんの繋がりから現地で活動されているボランティア団体の Take Action の方々のもとでボランティアをさせていただくことになった。

今回の災害復興支援ボランティアで学んだことは大きく二つある。一つ目に目で見ないと分からない現状があるということ、二つ目に人との繋がり大切さだ。

上に挙げた二つのうちの一つ目の、目で見ないと分からない現状があるということについて詳しく述べる。私は、卒業研究で防災教育について学んでいる。机上の知識にとどまっていたものの自分の中では多くのことを学んでいたと思っていた。しかし、実際に被災地の空気を感じたり被災地の現状を目にしたり、被災地で活動されている方々のお話を聞くと、百聞は一見に如かずとはこのことかとハッとしました。実際に見てみないと分からない被災地の現状がそこにはあった。現地の方から西日本豪雨の際にはどこまで水が来たのかを聞き、その高さが自分の背丈を超えていたと知った時は水害の恐ろしさを強く感じた。自分がそこにいたら正しい判断ができたのだろうか和西日本豪雨を改めて捉え直すきっかけもなった。また、被災地の現状を見て学んだことは災害の恐ろしさだけではなく、Take Action の方々とボランティアをさせて頂いた際に出会ったある方の言葉が心に響いた。「この地域は元々水害が多く起こっていたんだ。だけど、水害があるからと言って住まないのではない。水害を経験しているからこそその後の復興の仕方が分かる。だから水害が起こったって聞いたら自分が被害に遭っていても助けに行こうと思う。」この言葉を聞いて被災地だからこそその人の気遣いを知った。また、同じ経験をしていて痛みが分かっているからこそ、他の被災した人への気遣いができるのだと感じた。同時に自分もそんな人でありたいと感じた。

次に二つ目の、人との繋がり大切さについて詳しく述べる。災害復興支援ボランティアでは、人との繋がり大切さを強く感じた。そもそもユネスコクラブのメンバーではないのに岡山県で災害復興支援ボランティアをさせていただいたことも、人との繋がりからだった。また、ボランティアの中で Take Action の方々と関わりが持てたり、岡山大学の学生や地元の方々とお話を出来たり、様々な人と関わった。そして、その中で学ぶことが多くあった。被災地の現状や人々のニーズを知るうえでも、被災当初の状況を知るうえでも、人との関わりは欠かせない。被災地の復興において欠かせないものが人との繋がりであることを学んだ。また、人との繋がり日常生活の段階からはぐくむことができることを改めて感じた。だからこそ、私は来春以降教員として地域に自分から出て行くなど関わりを多く持ち、児童を取り巻く環境について理解したい。何かあってからでは遅い。何かある前に関係づくりができるよう、架け橋のような存在になれたらいいと思う。自分がこれまで人との繋がり大切にしてきたからこそ経験することのできた災害復興支援ボランティアでの学びを、今後にしっかりつなげていきたい。体験することの重要性を、私自身が発信していける存在でありたいと思う。

今回の災害復興支援ボランティアでは机上の話では片付けられない多くの事柄を学んだ。その中でも人との繋がり重要性は自分自身が大切にしていることでもあったため、人との繋がり模範を見せていただいた経験を生かして、次は自分が人と繋がっていく・繋げていく存在になりたいと感じた。これから教員になるからこそ、人と繋がる力はとても大切になると思う。この学びを無駄にしないよう、これからも繋がり大切にしながら防災教育について学んでいきたい。

私が岡山で出会ったもの

美術教育専修 修士3回生 木村 絃子

2018年9月2日、9月9日、10月21日の3日間、岡山県倉敷市真備町へ災害復興支援に訪れた。2018年6月28日から7月8日にかけて西日本を襲った記録的豪雨は多くの犠牲を生み出し、人々の生活を脅かす、平成に入って最悪の豪雨災害となった。今回ボランティアとして訪れた岡山県倉敷市真備町では、この豪雨により一級河川・高梁川の支流である小田川に注ぐ末政川が氾濫し、周辺の民家を襲った。

今回の岡山県倉敷市真備町における災害復興支援にて学んだこと、感じたことの中から特に印象に残ったものを三つ紹介したい。一つ目は、私が予想していたよりも復興が進んでいなかったということ、二つ目は、案ずれば即行動せよということ、三つめは、そこに住んでいる人々の生活があるということである。

一つ目は、私が予想していたよりも復興が進んでいなかったということだ。夏場の豪雨であったため、すぐに水は引くと思っていた。しかし、大量の泥水が去った後にはもはや、人々が生活できる空間は残されてはいなかった。9月になって初めて真備町の民家に伺ったとき、砂に汚れた床や壁、2階のベランダに驚いた。まだ、戦いは続いていたのだ。11月に再び訪れたときには、さすがに全民家の取り壊しは終了して新たな暮らしを建設する段階にあるだろうと考えていた。ところが、未だに窓と扉のないガラランとした風景が広がっていた。小学校や公園などの公共施設には、緑色の仮設便所が点在し、空虚な空気が辺りを覆っていた。豪雨から季節を追うごとにメディアに取り上げられることが少なくなり、現地を一旦離れた私にとって、ギャップのある風景だった。まだ、戦いは続いている。しかし、盆休みが明けて、県外からの人出は一気に減少した。私と同じく、もう既に復興の土台が整ったと思い込んでいる人も多くいるだろう。私たちはボランティア活動を終えた翌日から、スムーズに自分の街の日常へと戻ることができる。しかし、被災された方々の中には、遠い遠い日常をずっと待ち続ける生活を強いられている人がいるということを忘れてはならないと思った。

二つ目は、案ずれば即行動せよということだ。心配しているだけでは、思いは伝わらない。今回の災害に限らず、身近な場面で起こった出来事でもそうだ。もし、少しでも『大丈夫かな。』と他人の身を案じたならば、相手のために現在の自分ができる最善の手立てを考えることが大切だ。振り返ると、私が高校3年生の時に東日本大震災が起こり、新任教員だったころに熊本大震災が起きた。いずれも、自分に余裕のない状況であったことも手伝って、現地の人々の身を案じるにとどまった。いくら心配をしたとしても、行動化が成されなくては、相手の心に手を差し伸べることは出来ない。相手の暮らしを見て、作業を手伝い、言葉を交わさなくては、互いに何も得られない。災害は、私たちの今まであった生活を奪う代わりに、人と人との絆を与えてくれる。それはかけがえのないものである。自然と、前を向いて生きていく力を与えてくれる出会いの場でもある。災害は途方に暮れる空虚さや悲しみの源ではあるが、案ずる心を行動に移すことの出来る人間が周りにいれば、みんなで乗り越えていくことができるはずである。

三つ目は、そこに住んでいる人々の生活があるということだ。取り壊しの途中の民家には、確かにそこでそれぞれの暮らしがあったことを、間取りや砂に汚れた日用品から感じ取ることができる。泥水が日常を飲み込み、それを持ち主と共に掻き出す作業は、彼らの日常を浮かび上がらせる。泥水に浸された断熱材を取り除いたり、壁の骨組となる木材の砂を拭き取ったりしていると、確かにそこに暮らしが見えてくる。作業中、家の持ち主の元に建設会社の人を訪ねてきたり、彼らの勤め先から今後の雇用についての電話がかかってきたりもする。彼らの話している声を遠巻きに聞いたり、対応を終えたときの

表情を見たりすると、自然災害という不測の事態がもたらした、以前までの日常とのギャップが伝わってくる。実際に民家で作業を共にしなければ、そのような場面を見聞きすることはめったにない。そして、それらに対して支援に来た私たちは介入することは出来ない。しかし、現地の方の話にうなずいたり、作業や食事を共にしたりすることによって、ほんのわずかではあるが、想いが共有できることを知った。

以上より、今回の災害復興支援に参加して、復興には予想以上に時間がかかること、行動化することで初めて相手の心に手を差し伸べることができること、被災した現地にはそれぞれの生活が今も残っているということを学ぶことができた。これらはメディアでの報道では知り得ないことであり、現地に行って実際に被災された方々と向き合うことでしか感じ取れないものであると思った。年末にもう一度、真備町へ足を運びたい。そして、将来、災害が起きたときには自分の出来る範囲で想いを行動に移して現地の人たちと向き合っていきたいと思う。



吉備真備公園から望む風景

災害復興支援に参加して学んだこと

奈良教育大学卒業生 栗谷 正樹

2018年9月6日（木）岡山県倉敷市真備町にて、災害復興支援として浸水家屋の清掃活動に参加した。同町では7月6日（金）夜から7日（土）朝にかけての豪雨により小田川と支流の高馬川などの堤防が決壊し、町の4分の1が浸水、51名の方が亡くなった（朝日新聞、2018年7月10日）。

本活動を通して学んだこと、感じたことを以下に記したい。1点目は、復興や復旧という言葉を用いることの難しさ、2点目は被災体験を知り、自身の災害対策へ生かすことの重要性、3点目は地域の地理的特性や歴史を把握することの重要性である。

まず、1点目は、復興や復旧という言葉を用いることの難しさである。豪雨から2カ月が経過した町の道路に土砂はなく、コンビニも綺麗で通常通り営業していた。大阪で被災地の報道があまりされなくなったこともあり、復興は進んでいそうだな、というのが町に入った際の第一印象であった。しかし、清掃活動に参加した住宅の中には土砂が残り、日常生活を送るには程遠く、近隣には手付かずの住宅も数多くあった。また、活動した住宅の方によると、すでに住宅の復旧工事は開始しているが、人手不足のために自宅の工事は1年後になるとのことであった。メディアでは被害や復興報道が市町村単位でなされ、時間の経過に伴いその報道が減少しがちであるように思う。そのため、町全体が何となく順調に復興している、そんな印象を私はよく持ってしまう。だが、実際はその印象と異なり、わずか2ヶ月間ですでに世帯単位での復興に差が発生していた。報道される被災地の現状はほんの一部であり、簡単に、一概に復興や復旧とは言えないのではないかと改めて感じた。

2点目は、被災体験を知り、自身の災害対策へ生かすことの重要性である。私の住む大阪では、6月の大阪北部地震、9月に台風21号を経験した。家族や知人の間でも「まさかこんな被害になるとは」という声が多く、私自身も実際に災害を経験して、これまで災害をどこか他人事のように捉えていたこ

とに気付かされた。その一方で、災害発生後の自身の行動を振り返ると、以前、東日本大震災の被災地で教わった内容が、いくつか役に立った。今回の活動では、実際に堤防が決壊し避難するまでの体験談を伺うことが出来た。河川氾濫は長年の間大阪が経験していない災害の一つである。教わった体験談を活かし、災害発生前の準備・対策や災害発生後の対応を日常時から考えることが重要であるように感じた。

3点目は地域の地理的特性や歴史を把握することの重要性である。今回活動した住宅は、川の北部に位置する。お話を伺うと、10年ほど前に住宅を購入した際に、過去の川の氾濫やその危険性についての説明は一切なかったそうだ。帰宅後に国土地理院土地利用図を確認すると、住宅のある地域は氾濫・冠水の可能性のある区域と記載されていた。以前、岩手県陸前高田市を訪問した際に、「高度経済成長期の宅地開発で、過去に津波や河川氾濫を被災した危険な地域に建物が建ってしまった。自分は地名に水に関連する字が入った場所や過去に津波が来た場所を避けて家を建てたから3.11で助かった。」という話を被災者から教わったことがある。災害から自分の身を守るためにも、地域の地理的特性や歴史を把握することの重要性を改めて感じた。

以上3点が今回の活動で学んだことである。実際に支援活動に参加し、お話を伺うことがなければ、上記の学びを得ることは出来なかったと思われる。今後は、学んだこと、経験したことを他の人に伝えていくことも大切にしていきたいと思う。

岡山県での災害復興支援を経て

国語教育専修1回生 西條 秀哉

2018年の7月から10月にかけて岡山県倉敷市真備町や岡山市東区平島地区へ行き、7月7日に起こった豪雨災害の復興支援ボランティアに5回参加させていただいた。活動内容は来た時期によって変わっていたが、家の中の泥を掻き出す作業やゴミを回収する作業、建物の解体を手伝う作業など、その時その時のニーズに合わせた幅広い作業を行ってきた。

5回にわたる復興支援にて学んだことは3点ある。1点目は大雨の被害の甚大さと人間の無力さ、2点目は1ヵ月近く経ってもまだ復興は終わっていないということ、3点目は報告会などの事後活動で共有することの大きさだ。

1点目の大雨の被害の甚大さと人間の無力さについてであるが、5回の支援を通して一番強く感じた。私は今回の大雨の浸水被害を知るまで、大雨の警報は大げさなものだと思っていた。故に実際に岡山の被害を受けた現場へ行き状況を見た際に、これが大雨による被害だと理解することは容易ではなかった。大雨がひとたび猛威を振るうだけで、ここまで人々の生活や人生に尋常ではない影響を与えるのかと考えると、雨に対する自分の考えを改めさせられた。

2点目の1ヵ月近く経ってもまだ復興は終わっていないということについてであるが、4、5回目に支援に来させていただいた時に感じた。自衛隊の方々や、たくさんのボランティアの人たちが日夜復興支援に尽力しており、私は1ヵ月経てばある程度は元の生活に戻ることができると考えていた。しかし、4回目に支援に来た際にもまだ人が住める状況ではなく、家にこびりついた泥を掻き出す作業を継続しつつ、被災された方々に心身のケアもさらに必要となってきた。これだけ多くの人々が日夜精魂込めて協力して作業しても少しずつしか進んでいないということに驚きと絶望を感じた。このことから、改めて大雨災害の恐ろしさを痛感させられた。

3点目の報告会などの事後活動で共有することの大きさについてであるが、2回目の復興支援の際と一緒に復興支援活動に参加したメンバーを見て感じた。1回目の復興活動支援の内容や感じ取ったこと

をユネスコクラブの活動の日に、ユネスコクラブではない学生の方々も参加して頂く形で報告させて頂いた。そうすると話を聞いた他のユネスコクラブの先輩や同級生、そしてユネスコクラブではない学生の方々が2回目以降の復興活動に参加したいと名乗りを上げて下さった。情報を共有し、思いを伝えることで興味をもって協力してくれる人がいることを学び、報告会の重要性を知った。

今まで参加してきた災害復興支援を通して、自分は雨の恐ろしさや復興の大変さを、今まで全く知らなかったということを感じた。だからこそ、実際に目で見て手足で触れて体感した自分が、他のまだ知らない人に伝えていくべきだと思う。このように災害について「知らなかった」を伝えていく活動を続けていくことが、より多くの人々の災害についての知識や復興に対する想い、考え方を大きく変えていくことに繋がり、災害時の迅速な対応や、災害発生後のスムーズな復興活動に発展していくだろうと考えている。

岡山県災害復興支援ボランティアに参加して

英語教育専修3回生 坂本 和音

平成30年6月28日(木)から8(日)にかけての豪雨により、近畿・中国・四国地方が甚大な被害を受けた。気象庁はこの豪雨を「平成30年7月豪雨」と命名し、死者数・負傷者数・被害額・家屋等の被害状況から鑑みて、その被害は平成で最悪なものであるとした。倉敷市災害ボランティアセンターではこの被害から復興するために、県外からの災害ボランティアを募集した。全国から多くのボランティアが参加し、ユネスコクラブと本学学生もESDを実践し防災について考えられるという観点から11回にわたりこの活動に参加した。私は7月16日(第2隊)と8月1日(第4隊)に参加した。

私はこの活動を通して三つのことを学んだ。第1に自然災害の恐ろしさ、第2に人と人との繋がり、第3に関心を持つことの大切さである。

第1の自然災害の恐ろしさについてだが、初めて被災地に足を踏み入れた時、その変わり果てた町の姿に大きな衝撃を受けた。町中に、今までに見たこともない量の土砂とごみが山積みになっていた。第2隊の支援では家財道具等の



土砂に埋もれた庭

の整理・撤去を行った。作業を始めた時は、ひたすらに「要らない」と言われた庭に山積みの生活用品をゴミ袋に詰めていた。しかし、ふと私が「ゴミ」として袋に詰めている衣服や調理道具、電化製品は豪雨の直前まで普通に使われていて、住民の方の思い出が詰まっていることに気が付いた。豪雨によって普段の生活というものが被災地から奪われてしまったこと、自然災害はいとも簡単にそれができてしまう身近な恐怖であるということを知った。

次に第2の人と人との繋がりについてだが、第4隊のボランティアで出会った岡山市の支援活動団体TAKE ACTIONの皆さんから学ぶことができた。その中でも特にニーズ調査や実際に住民の方と顔を合わせて話すということを通して復興支援をしていたことがとても印象的だった。ニーズ調査で一軒一軒住民の家を回って、顔を見て健康状態まで把握し、暑い中で作業を続ける人には声掛けをして熱中症などの新たな被害の拡大を予防していた。また、このTAKE ACTIONの活動拠点では、無料でマッサージをするサービスも行っていた。被災された方々の心のケア・体のケアという点でとても重要であった。お互

いを思いやる気持ちから続けられているこのボランティア活動と、住民の方にいろいろな場面で何度も言われた「ありがとう」という言葉を聞いて、私は困っている人を助けるという行動の重みと、それに関わる人と人との繋がりを学ぶことができた。

最後に第3の関心を持つことの大切さについてだが、このボランティア活動に参加して想像をはるかに超える被災の状況や、それまでに感じたことのない複雑な感情を自分の中に見つけることができた。そのような貴重な体験ができたのは、そもそも私が災害・防災という分野に興味を持っていたことから始まったのではないかと考える。興味がなければ、ニュースで聞いて「大変そうだな」と思うだけかもしれないし、災害が起こった当初は関心を寄せていても時間が経つにつれて、次第に忘れてしまうかもしれない。そこで私が学んだことは、実際に自分で見る・聞く・感じることで自分の経験・記憶に刻まれるということである。また、その経験で自分が元々持っていた災害・防災への関心を更に発展できるということも学ぶことができた。

第4隊の活動に参加して以来、自分自身は他の学生が参加している様子やTAKE ACTIONがSNSで更新されている活動報告を見ることしかできていない。第4隊の活動後に感じたまた参加したいという思いは変わっていないし、もしもまた別の災害が日本で起こった時には必ず自分から行動して困っている人の助けになりたいと思う。

岡山県災害復興支援ボランティアに参加して

国語教育専修1回生 西田 朱音

私たちは今年7月に起きた西日本豪雨の被害を受けた岡山県の災害復興支援ボランティアに参加した。もともと私たちが参加しようと思っていたのは倉敷市真備町のボランティアだったが、台風の影響で応募が中止されていた。そこで岡山市東区へ向かったが、到着したところには応募が締め切られていた。しかし谷垣先輩のコネクションでTake Actionというボランティア団体の活動に参加させていただくことができた。そこでは泥にまみれてしまったものを洗い流したり、何か困っていることがないか、してほしいことがないかを聞いて回る「ニーズ調査」をしたりした。他にも、廃棄物の運搬やボランティアの活動拠点の整理整頓を行った。

私が特に考えたことは3点ある。一つ目は「官民でのできることの差異」、二つ目は「人脈の大切さ」、三つ目は「実態や要望をきちんと知ることの重要さ」だ。

一つ目の「官民でのできることの差異」について述べる。台風が来る直前であったため、万が一何か起きたときに地方自治体は責任を負いかねないということから、ボランティアセンターは募集をやめたり活動時間を短くしたりせざるを得なかった。しかし、台風が来る直前はむしろその台風に備える必要がある。そのため人手が必要となるはずである。ここで、民間だからこそできることという面が光ってくるのである。今回私たちは個人として参加したため、ボランティアセンターから来た方々よりも長時間活動することができた。そのおかげで台風に備えを間に合わせることであった家庭も少なからずあるだろう。行政任せにしていなくて、「官」ができない部分を「民」が補うという体制が必要であるということが分かった。そのように、民間による支援が必要であるにもかかわらず、災害が起きてから時間がたつとどんどん人が減っていき、人手不足になるということをTake Actionの方がおっしゃっていた。のど元過ぎれば熱さ忘れるという言葉があるが、熱さを忘れずに支援を継続することが大切だと感じた。

二つ目の「人脈の大切さ」について述べる。これはすこし前述と被るが、人脈があったおかげで今回のような活動ができた。いっどこでどんな人脈が活かされるかわからない。私自身、人とかわるの

におびえてしまう節があるので、積極的に人と関わっていききたい。また、一度結んだ人間関係を長く保ちたい。

三つ目の「実態や要望をきちんと知ることの重要性」について述べる。これは「ニーズ調査」のことである。どの地域のどんな人が何を必要としているのかをきちんと把握することで需要過多も供給過多も起きにくくなる。近年、よくテレビなどで、一部の地域にはある支援物資が多すぎて処理に困り、他の地域では全然足りないということが問題として取りざたされている。ニーズに合った的確な支援をすることが大切なことであると感じた。

以上の経験、学びから自分が成長したいと考えたことは三つある。まずは、自分にできることを見極める力をつけたい。行政に任せるべきところや、逆に行政の限界を知って、自分に何ができるのかをきちんとわきまえて行動するように心がけたい。次に、様々な方々とのかかわりを大切にしたい。災害時でなくても何かと人脈があることは強みになる。怖がらず、たくさんの人とかかわっていききたい。最後に、むやみやたらに自分の憶測で動かないようにしたい。災害時でもそうだが、たとえばいじめられている子が相談してきたとき、障害を持った方に会ったときなど、様々な場面で自分の助けが必要そうに見えることがあるだろう。そんなときに勝手な憶測や想像で動くのではなく、相手が求めることが何かをきちんと見分けられるようになりたい。

災害復興支援ボランティアから学んだこと

英語教育専修 大学院1回生 谷垣 徹

2018年7月に発生した西日本豪雨は、西日本各地で甚大な被害をもたらした。岡山県、広島県、愛媛県などを中心に、被害を受けた地域ではそれまでの「当たり前」の生活が奪われた。私はこの水害発生直後に、奈良教育大学ユネスコクラブの学生を中心に災害復興支援ボランティアチームを組織し、岡山県倉敷市及び岡山市へボランティア活動に向かった。水害発生から一週間後の7月15日（日）に初めて現地へ行き、それから通算11回、のべ42名で活動してきた。

私はこの災害復興支援ボランティアを通してたくさんを感じ、考えた。本報告書ではその中から大きく三つを取り上げたい。一つ目は「行動化」の重要性について、二つ目は自分の役割について、三つ目はたくさんの人との出会いと繋がりについてである。

一つ目は、「行動化」の重要性についてである。ESDでは価値観と行動の変革が求められ、自分たちが企画するESDのプログラム等においても「行動化」をどう設定するかを重視してきた。そうして子どもに行動化を促してきたが、この水害を受けて行動化をできていない自分に気付いた。子どもに行動化を促すには、まずは自分が行動を起こせる人でなくてはならない。そんな思いで災害復興支援ボランティアチームを組織し、現地に向かった。発災から一週間後に2日間現地で活動し、その後大学に戻って報告会を開いた。活動に参加した学生が現地で感じたことを生の声で伝えた。そうすると、「私も参加したい」「自分にもできることをしたい」という声が多く上がり、11回に及ぶ活動につながった。一人ひとりの力は小さいかもしれない。しかし、一人が「伝える」ことで、新たな行動化を生むことが出来る。自らの積極的な行動化の重要性とともに、「伝える」ことも重要な行動化の一つであると感じた。

二つ目は、自分の役割についてである。何度も現地に行く中で、たくさんの学生と共に活動することが出来た。一緒に活動した仲間から「報道を見て現地に行きたいとは思っていたが、一人では交通手段もなく、不安もあり、行くことができなかった。車を出してくれたおかげで行動することが出来た。」と言われた。チームを組織し、車を出して現地に行くことで、行きたいという思いはあっても現地に行けない学生の行動化を支えることが出来た。そのように仲間の行動化を支えることも、自分の大きな役割であったと感じた。

三つ目は、たくさんの人との出会いと繋がりについてである。11回のボランティア活動を通してたくさんの人と出会った。全国各地からのボランティア、ボランティア団体を組織している方、そして被災された住民の方々など、たくさんの出会いがあった。そうしたたくさんの人との出会いを通して、多くのことを感じ、考え、学んだ。回を重ねるごとに、誰かを助けるために行くのではなく、自分が何かを得るため、会いたい人に会うために行くようになった。ボランティアと言うと一方的に誰かを支援するような感じがするが、自分自身が得たものの方がずっと大きかった。現地での人々との出会いが、自分を成長させてくれたように思う。現地で出会った方々の中には、今でも繋がっている人もいる。人と人の繋がりは何物にも代えられない大切なものであり、これからも大切にしていきたいと思う。

復興はまだまだこれからも続く。出会った方々との繋がりを大切に、これからも継続して関わり、自分自身も成長していきたい。出会った全ての方々に感謝の意を表したい。



岡山市で出会った団体「Take action」の方と

現場のニーズに応える

英語教育専修2回生 守部 北斗

2018年7月28日、岡山県岡山市東区平島地区にて災害復興支援ボランティアを行った。今回の支援内容は、団地集会所の備品（脚立・手押し車など）の整備、被災された方々のニーズ調査、がれきやごみの回収が主であった。本地区で活動されていたボランティア団体 Take Action のメンバーに加わり、現地で知り合った10名ほどの岡山大学の学生などとも協力し合った。

この災害復興支援ボランティアを通して学んだことを以下の3点にまとめたい。一つ目に活動報告会の意義について、二つ目に人とのつながりを次に活かす大切さについて、三つ目に支援を必要とされている方々のニーズに対する柔軟な対応である。

一つ目の活動報告会の意義についてであるが、私は7月25日に行われた活動報告会にて情報を得て、本ボランティアに志願した。この活動報告会では、同じユネスコクラブメンバーが目当たりにした被災地の現状や、支援を必要とされている方々の思いに触れることができた。さらに、参加の決め手となった言葉を次に紹介したい。それは、「伝えることは、聴く人の心を動かし、彼らの行動化につなげることができる」というものだ。こうした活動報告会に参加したからこそ、自身の行動変革が生まれたのである。そして、支援後に、私自身の活動内容を家族や友人に発信することで、さらにボランティアの輪を広げることができればとも考えた。

二つ目の人とのつながりを次に活かす大切さについてであるが、現地まで車を運転してくださった先輩が以前に知り合ったボランティアスタッフからの紹介があり、私たちは先に述べた Take Action とい

う団体に合流し活動することができた。というのも、奈良を発つ段階では岡山市東区の災害ボランティアセンターを目指していたが、現地へ到着する頃にはスタッフの定員オーバーとなっており、受付を終了したと知った。そこで先輩の知り合いの協力があって、支援先を見つけることができた。こうしたことから、人とのつながりを一度きりのものにせず、次の機会にも活かすことがいかに大切であるかを実感した。

三つ目の支援を必要とされている方々のニーズに対する柔軟な対応であるが、私はがれきやごみの回収以外に、棧から外れた窓を修復するという依頼を受けた。私は元通りに直った時の家主の笑顔が今でも忘れられないほどであり、人の役に立つすばらしさをひしひしと肌身で感じた。がれきなどの回収といったボランティアスタッフが想定しているニーズと、実際に支援を必要としている方々のそれとは異なることが往々にして起こりうる。これより、その現場の状況に合わせて、できる限りニーズを見極め柔軟に対応していくことが重要だと考えた。

最後に、以上の3点をふまえてまとめを述べたい。私にとって、災害復興を支援するボランティアは初めての経験であった。参加する以前は、肉体的に大変なボランティアなのではないかと危惧していた。しかし、いざ復興現場を目の当たりにし、ニーズ調査で支援を必要とされている方々とお話していると、私にできることは他にないのだろうかと思いをめぐらし、積極的に考え、本活動を全うすることができた。災害大国ともいえる日本において、支援の方法は様々にある。今回の復興支援ボランティアは、私にできるやり方で支援の輪を広げると同時に、また実際に復興地域に赴きたいと強く考える契機となった。

被災者の方の言葉から感じたこと

英語教育専修4回生 森本 珠美怜

私は岡山県倉敷市真備町への災害復興支援ボランティアに、2日間参加した。1回目は、8月末にあるお宅の掃除に伺った。泥まみれになった窓や、さびてしまった工具を掃除した。10月に2回目の支援に参加した。床板は全てはがされており、家の骨組みの掃除を行った。どれも被災者の方一人では、終わりの見えない作業だった。

私が、今回の災害復興支援ボランティアに参加して考えたことが三つある。第1に想像と大きく異なる被害状況について、第2に日本での助け合い精神について、第3に人との出会いのありがたさについてである。

第1に、想像と大きく異なる被害状況についてである。私より先に支援を行っていた学生から被害状況を聞いていたにも関わらず、自分の目で見た被災地の状況に驚かされた。日に日にメディアで取り上げられなくなり、現在の状況はほとんど知られていない。被災者の方は、自宅の壁の取り壊しや床板はがしなど、毎日同じ作業を繰り返されており「今日が何日かもわからなくなった」とおっしゃっていた。また、災害による直接的な被害だけでなく、災害後の空き巣などの被害も多いそうだ。室内の湿気を取り除くために一日中窓を開けていると、クーラーの室外機などが盗まれることがあると伺った。災害の直接的な被害だけでなく、このような二次的な被害を防ぐために、政府からの対策や被災地の現状を人々の心に強く訴える機会が必要だと感じた。



被災者の方からいただいたキーホルダー

第2に、日本での助け合い精神についてである。私たちの他に、東日本大震災や大阪北部地震の被災者の方が多くボランティアに来られていると伺った。私たち奈良教育大学から参加した学生にも東日本大震災の被災者がいた。その学生は何度も「恩返し」という言葉を使っていた。自分が被災した際も日本中から集まったボランティアに救われたため、今度は自分がその恩返しをしたいと伺った。また、支援にあたらせていただいた方も頻りに「ありがとう」という言葉を使われていた。自らが苦しい状況にある中で、私たちに「ありがとう」と言ってくださることにとっても驚かされた。また、被災者の方の涙と気持ちのこもった「ありがとう」は、とても重く感じた。

第3に、人との出会いのありがたさについてである。私にとって1回目の支援で出会った被災者の方と、2回目の支援でまた伺うことができ、その再会にとっても喜んでいただいた。その被災者の方は、「本当に災害は経験したくなかったけれど、今はそのおかげで日本中のボランティアの方と出会えて嬉しい」とおっしゃっていた。もし災害が起こらなければ、決して出会うはずのなかった方だと考えると、人と人の出会いは本当に奇跡なのだと改めて感じる事ができた。

このように、実際に被災地に行き、自分の目で確かめないとわからないこと、感じられないことがあると考える。被災者の方からのお言葉、涙を重く受け止め、今後教員として語り継ぎたい。

行動する勇氣と人とのつながり

社会科教育専修1回生 山本 健太

平成30年6月28日から7月8日にかけて全国各地を襲った豪雨災害は、人々の平穏な日常と幸せを突然に奪っていった。この災害を受け、奈良教育大学ユネスコクラブでは岡山県災害復興支援ボランティアを結成し、被災地を訪れた。私はこのうち第7隊（平成30年9月2日）、第8隊（同年9月6日）、第10隊（同年9月25日）の計3回に参加した。

今回私が岡山県を訪れて感じたことを2点述べたい。一つ目は自分から行動することの大切さ、二つ目は当たり前があることの幸せだ。

一つ目は、自分から行動することの大切さだ。今までの私は、日本や世界で大きな災害が起こってもどこかそれに対し他人事のような、テレビやネットの向こう側で起こっている出来事として捉えてしまっていた。報道を見たときに様々な感情を抱きながらも、しばらくしてしまえば私の意識の中から、そして記憶の中から消えてしまっていた。まるで災害はもう終わったかのように。しかし、今回実際に被災地に行ってみて、まだまだ災害は終わっていない、むしろこれからもずっとずっと被災地の苦しみや悲しみは続いていくのだと理解した。そのような状況の中、今回自分から思い立ってボランティア活動を行い被災者の方と関わったことで、私がいる意味というものを感ずることができた。確かに、私ができることは少ないかもしれない。しかしながら今回、私が持っている力は微力だが、全くの無力ではないと感じた。ただ報道を見ているだけでは絶対にわからなかった被災地の現状や、被災者の方々の思いも知ることができた。私が少し勇氣を出して参加しただけで、多くのことが変わり、見えなかったものが見えるようになっていった。そして何より、自分が行動することで誰かに何かしらの影響を与えることができることを知った。例えば被災者の方と話をするだけでその方が元気になったり、逆にこちらが被災者の方々から元氣をいただいたりと。これからは何事に対しても、まず自分から行動することが大切だと感じた。

二つ目は、当たり前があることの幸せだ。思えば私は今までの 19 年間、何一つ不自由なく暮らしてきた。朝起きれば家族がいて、学校に行けば友達がいる、好きなことをやり、疲れたら眠る。こんな日常を、当たり前と思っていた。しかし、その当たり前は実は当たり前ではなく、突然奪われることがあるのだ。今回、その現実を知ったとき、平凡だと思っていた毎日が特別なものになり、この平凡な毎日こそが幸せなのだと気づかされた。

この活動は私の価値観を大きく変えてくれた。今回学んだことをただ自分のものにするだけではなく、多くの人に伝えたい。きっと経験しなければわからないし、今ある幸せな日常について考える機会もないだろう。この貴重な経験を活かし、これから頑張っていきたい。



川辺小学校で見た竹のあかり

平成 30 年度 近畿 ESD コンソーシアム

学生による ESD 活動支援 (ESD 実践)

英語教育専修 修士 1 回生 谷垣 徹

近畿 ESD コンソーシアムでは学生を対象に「ESD プログラム (ESD ティーチャー認証制度)」を開設しており、ESD を実践できる教員の養成に取り組んでいる。本プログラムは、①所定の科目の履修、②ESD 演習 (ESD・学ぶ喜び連続公開講座、ESD セミナー等) への参加、③ESD 実践への参加、④ESD 学習指導案の作成から構成されている。平成 30 年度は ESD 実践 (学生による ESD 活動支援) として、以下の計 21 の活動を実施し、のべ 333 人の学生が参加した (平成 31 年 1 月現在)。

◆コンソーシアム主催活動

活動名	実施日		参加学生数
集まれ！ESD 子ども広場	第 1 回	5 月 27 日 (日)	29 人
	第 2 回	12 月 2 日 (日)	35 人
岡山県災害復興支援ボランティア	計 11 回		計 42 人
霜ふり柚子収穫ボランティア	12 月 15 日 (土) ～16 日 (日)		7 人
陸前高田市文化遺産調査団	9 月 9 日 (日) ～12 日 (水)		6 人
親子で学ぶ奈良：まんじゅうを食べるなら	5 月 26 日 (土)		3 人

◆ユネスコスクール支援

活動名	実施日	学校名	参加学生数
野外活動支援	計 19 回 ※事前指導を含む	奈良市内小学校 10 校	計 75 人 ※事前指導を含む
ユネスコ委員会	計 8 回	奈良市富雄第三小中学校	計 15 人
親子燈花会	8 月 3 日 (金)	奈良市立済美南小学校	1 人
	8 月 6 日 (月)	奈良市立飛鳥小学校	4 人
カヌー体験教室	8 月 4 日 (土)	奈良市立飛鳥小学校	9 人
町探検フィールドワーク	6 月 28 日 (木)	橿原市立今井小学校	4 人
世界遺産学習デジタル教材指導	11 月 6 日 (火)	奈良教育大学附属中学校	9 人

◆構成団体との連携

活動名	実施日	主催	参加学生数
東大寺寺子屋	8 月 24 日 (金) ～26 日 (日)	東大寺	8 人
東大寺万灯供養会	8 月 15 日 (水)	東大寺	15 人

世界遺産を体感 東大寺に泊 まろう	10月26日(金)～28日(日)		NPO法人奈良 地域の学び推 進機構	15人
奈良市中学校生徒会リーダー 研修会	8月9日(木)		奈良市教育委 員会	9人
ストップいじめなら子どもサ ミット	第1回事前WG	12月26日(水)	奈良市教育委 員会	3人
	第2回事前WG	1月19日(土)		5人
	第3回事前WG・ サミット本番	2月2日(土)		7人
子どもおん祭	11月25日(日)		NPO法人宙塾	4人
絵画展「絵で伝えよう！わた しの町のたからもの展」			奈良ユネスコ 協会	3人

◆その他

活動名	実施日		主催	参加学生数
奈良市子ども会議	第1回	7月24日(火)	奈良市子ども政策 課	1人
	第2回	7月26日(木)		3人
	第3回	7月31日(火)		3人
	第4回	8月2日(木)		5人
	第5回	8月7日(火)		4人
英語パフォーマンス甲子園	8月24日(金)		公益社団法人ソー シャル・サイエン ス・ラボ	5人
修学旅行フィールドワーク支援	12月6日(木)		東北学院中学校	7人

【学生によるESD支援活動】

橿原市立今井小学校 第2学年生活科フィールドワーク 支援報告書

英語教育専修 修士1回生 谷垣 徹

1. 日 時 2018年6月28日(木) 10:00~11:30
2. 場 所 橿原市立今井小学校及びその周辺(今井町)
3. 参加者 橿原市立今井小学校 第2学年児童30名、引率教員5名
英語教育専修 糸綾香(修士2回生)、谷垣徹(修士1回生)、櫛乃里花(学部2回生)
社会科教育専修 仲村幸奈(学部2回生)

4. 概要報告

2018年6月28日(木)、橿原市立今井小学校第2学年生活科「どきどき わくわく まちたんけん」の授業が行われ、本学学生4名がその支援に関わった。今回の活動は同小学校の校区である、伝統的な町並みが保存されている今井町での町探検の2回目の活動に当たる。五つのグループに分かれ、地域で営んでおられる店舗を訪れ、インタビューを行うという活動であった。

今回の活動を通して私が学んだことを、以下の3点で振り返りたい。一つ目に「先生方の事前準備」、二つ目に「先生方の声かけ」、三つ目に「ユネスコ・ESDの理念と活動の往還」である。

一つ目は「先生方の事前準備」についてである。私たちは今回の活動に、児童の安全確保や児童への声かけ、写真撮影など、当日の単発的な支援として関わった。しかし先生方は、学習指導案の作成や学校内での協議・連携、インタビューに伺う店舗への連絡調整、そして本時に至るまでの学習活動の指導など、実に多様な準備をしてこられている。私たちが直接見ることでできたのはそのほんの一部にすぎないが、それら一つひとつが積み重なってこの活動が成り立っているということが分かった。



インタビューする児童の様子

二つ目に「先生方の声かけ」についてである。今回の活動では、児童が事前にインタビューしたい内容を話し合っていくつか質問を用意しており、それらを順に質問していた。児童の質問に対して店舗の方が答えられるとき、児童の理解に合わせて繰り返したり、児童の生活に関連させるような言葉をかけたり、児童の気づきやつぶやきを拾って意識化させたりと、児童への声かけの工夫をたくさん感じることができた。

三つ目に「ユネスコ・ESDの理念と活動の往還」についてである。私たちは日本で初めて大学としてユネスコスクールに認定された奈良教育大学で、ユネスコやESDの理念を核とした多様な活動を行っている。今井小学校ではユネスコスクールとして、その理念を取り入れた教育活動が行われている。先生方との打ち合わせの際に、ユネスコが目指す「教育・科学・文化の振興を通して、心の中に平和のとりでを築く」という理念をどのように教育活動に生かすことができるか、日々考え苦勞されているということを知った。私たちも日々の活動の中で、そういったユネスコやESDの理念に立ち返り、それらと活動との関わりを追求していかなければならないと感じた。

教員を志す私たち学生にとって、この活動は非常に有意義な機会であった。この経験を大切に、今後も様々な活動に精力的に取り組んでいきたい。

【学生による ESD 学習支援】

奈良市立飛鳥小学校 「カヌー体験教室」支援報告書

文化遺産教育専修 1 回生 山下 野絵

1. 実施日 平成 30 年 8 月 4 日（土）
2. 場所 奈良市立飛鳥小学校（奈良市紀寺町 785）
3. 参加者 谷垣徹、伊藤拓海（大学院生）
野瀬佳吾、坂本和音、仲村幸奈、足立繫郁、西條秀哉、義根惇司、山下野絵（学部生）
株式会社モンベル 社長をはじめとするスタッフ 複数名
奈良市立飛鳥小学校 教員、児童、飛鳥 C・S 協議会 複数名

4. 活動支援内容

平成 30 年 8 月 4 日に、奈良市立飛鳥小学校でカヌー体験教室が開催され、本学ユネスコクラブ員が活動の支援に当たった。本学ユネスコクラブ員は、毎年継続的に支援に関わらせていただいている。この活動は、飛鳥小学校区の子どもたちにカヌーを体験してもらうと同時に、ライフジャケット着用の重要性を伝える水難事故防止の取り組みでもある。

今回の活動支援より、以下の 2 点について感じた。一つ目は水難事故防止の意識について、二つ目は楽しく学び、遊べる場についてである。

一つ目は水難事故防止の意識についてである。カヌー体験というアクティビティと合わせて、東日本大震災の教訓から生まれた「浮くっしょん」というライフジャケットを実際に着用し、水中でのロープを使った救出方法を実際に見ることもできた。普段の生活では意識できないような水難事故防止の体験は、子どもたちにとって大きな学びの場になっただろう。

二つ目は楽しく学び、遊べる場についてである。水鉄砲での遊びはもちろん、カヌーの乗り方やライフジャケットの装着方法の説明などを聞いてからプールに入るという流れであった。暑い日には丁度良い環境の中で、水難事故にあわないためにはどうすればいいのかという説明を聞くことは、貴重でありとても楽しく充実した時間になっただろう。実際に、カヌーに乗っているときの子どもたちは、戸惑いながらもコツを掴んでからは、すいすいと楽しそうにカヌーを漕いでいた。

以上が、今回の活動支援で感じたことである。そして、このような体験を行うことができたのは、学校や地域、企業の方々との関わりのおかげであると改めて実感した。株式会社モンベルの方々、地域の方々や学校職員の協力により、安全に楽しく活動を行うことができた。また、このカヌー教室のような印象に残る貴重な体験は、成長していく中でも思い出として子どもたちの記憶に残り続けることができるだろうと強く感じた。本活動の支援は、ユネスコクラブ員が今まで継続して関わってきたものである。来年もぜひ参加したい。



ライフジャケット着用の説明を受ける



カヌー体験教室の様子

【学生によるESD支援活動】

奈良市立飛鳥小学校 親子燈花会 支援報告書

教育学専修 学部1回生 本江 美日

1. 日時 2018年8月6日(月) 18:00~20:30
2. 場所 奈良市立飛鳥小学校
3. 参加者 奈良市立飛鳥小学校 教員、保護者、児童 複数名
親子燈花会実行委員会2名
仲村幸奈、西田朱音、本江美日、山下野絵(学部生)

4. 概要報告

2018年8月6日(月)、奈良市立飛鳥小学校で親子燈花会が行われ、本学学生4名がその支援に参加した。飛鳥小学校の運動場に、子どもたちが一つひとつカップを並べ、ろうそくに火を灯すというのがメインの活動であった。今年は、「ドラえもん」の燈花会が完成した。また、体育館内では、カस्प飛鳥による太鼓の演奏やビンゴゲームも行われた。さらに飛鳥小学校の先生方が、かき氷やスーパーボールすくいを運営してくださっていた。こ



児童が完成させた燈花会

これらの様々な場面で、子どもたちの笑顔を多く見ることができる活動であった。

今回の活動を通して、私が学び、大切にしたいと考えたことは2つある。1つ目は子どもたちにみんなで1つのものを作る喜びを感じてもらうこと、2つ目は小学校と地域とがつながれる場を作ることである。

まず子どもたちにみんなで1つのものを作る喜びを感じてもらうことについてである。今では奈良の夏の風物詩となった燈花会だが、カップを並べるところから火を灯すまで、すべて子どもたち自身が自分たちで行うことによって、達成感と喜びを感じることができると思った。また、子どもたち一人ひとりが並べて作った燈花が、最後に「ドラえもん」の形として大きな一つの作品となることは、「みんなと一緒に頑張れば、大きなものを作りあげられる」ことを子どもたちに伝えられると感じた。子どもたちも作品を作ることに関わったことから、協調性や責任を持って行動することの大切さに気づききっかけになったのではないかと考えた。

次に、小学校と地域とがつながれる場を作ることについてである。学校でイベントなどを行うこ



燈花会のカップを並べる児童の様子

とで、自然と先生と保護者、また地域の人々とのコミュニケーションを深めることにつながると実感した。また、夏休みなどの長期休暇に学校でイベントを開催することによって、友達に会う機会にもなり、とても良いと感じた。

この活動を通し、先生方が子どもたちの安全はもちろん、臨機応変に対応されている姿を間近で見ることができ、視野を広げ、周りを見ることの大切さを改めて感じた。また、子どもたちや保護者の方々との会話の重要性を知ることができ、様々な場面での声かけを大切にしていきたいと思った。今回の活動での学びを次の活動につなげていけるよう、これからも取り組んでいきたい。

【学生による ESD 活動支援】

奈良市立済美南小学校 親子燈花会 支援報告書

心理学専修 学部 2 回 久保田真平

1. 実施日 平成 30 年 8 月 3 日(金)
2. 場所 奈良市立済美南小学校
3. 参加者 久保田真平 (学部生)
奈良市立済美南小学校 教員、児童、保護者 複数名
4. 活動支援内容

平成 30 年 8 月 3 日、済美南小学校にて、親子燈花会が行われた。本活動は毎年開催されており、奈良教育大学の学生も毎年支援を行っている。今回は、親子燈花会の準備、片付けなどの支援を行った。

今回の活動支援で、私は 3 つのことを学んだ。1 つ目は連携の大切さについて、2 つ目は臨機応変に動くことの必要性について、3 つ目は児童の動きに目を配る大切さについてである。

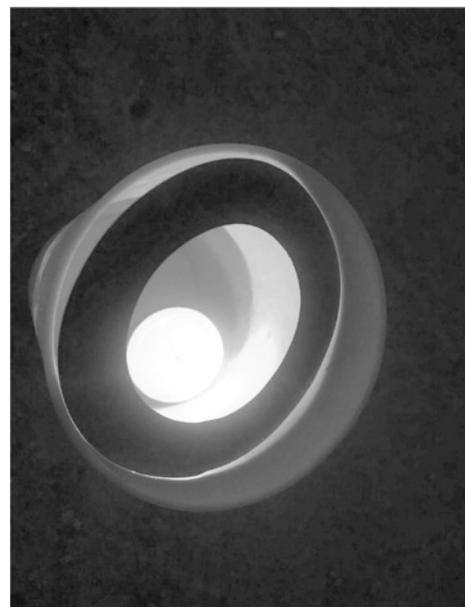
1 つ目の連携の大切さについてである。準備の際に、グラウンドに大きな文字で「済南」と書く作業があったのだが、この文字はかなり大きく書く必要があり、一人では到底できない作業であった。そこで先生方は、皆で協力し合い、短時間で文字を書いていた。このことから私は、連携して協力することの大切さを知った。

2 つ目の臨機応変に動くことの必要性についてである。子どもたちが会場に訪れ始めると、子どもたちを待たせるわけにもいかず、ろうそくを配布したり火を燈花会に点けたりと素早く準備を行った。準備では、先生方からの指示を待つだけではなく、状況を素早く把握し、行動する必要がある。実際に周りに目を配り、自ら行動を起こすこと臨機応変に動くことは、とても難しいことだと感じた。

3 つ目の児童の動きに目を配る大切さについてである。本活動は火を扱うため、子どもたちの安全を確保することも大切となる。もし誤って、燈花会を蹴ってしまうなどのことが起こり、児童が火傷をしてしまう恐れもあるため、児童にしっかりと目を配る必要があった。幸い走り回っていた児童はいなかったが、火を使う現場では、特に目を配る必要があると感じた。



燈花会で作った「済南」の文字



伝統の燈花会を並べる

以上より私は今回の実践で、みんなで助け合う大切さを学んだ。親子燈花会は一人でやるには過酷すぎるため、みんなの力でやる必要があった。なので、地元の子どもたちや、他の先生方と一緒に今回の親子燈花会の実行を行った。しかし、大勢の人と一緒にイベントを行っていくには、指示の出し方に工夫が必要で済美南小学校の教員の方々の様子を見て、指示の出し方の難しさや大変さを知ることができた。これからは指示を出す側に回ることが多くなるのでしっかりと観察して勉強していきたい。

【学生によるESD支援活動】

第5回奈良市中学校合同生徒会リーダー研修会 実施報告書

英語教育専修 修士1回生 谷垣 徹

1. 目的

- ① 各校の生徒会リーダーが交流し、共に考え、話し合うことを通して、自分たちがリーダーであることを自覚し、より良い生徒会活動を構築するための意欲を高める。
- ② 学校には様々な思いを抱えたなかまがいることを理解し、思いやりと寛容の心を持ってお互いに協力することの大切さを学ぶ。
- ③ 生徒会行事運営に向けてのスキルを高める。

2. 日時

平成30年8月9日（木）9:00～16:00

3. 会場

奈良教育大学 学生会館1階 山田ホール



参加者の集合写真

4. 参加学生

谷垣徹、伊藤拓海（大学院生）

藤井愛華、阿部孝哉、山田つきみ、後藤旭、桑田佑香、西田朱音、足立繁郁（学部生）

※奈良教育大学ユネスコクラブ及びESDティーチャープログラム履修生 9名参加

5. 参加生徒

春日（2） 若草（7） 都南（3） 登美ヶ丘（5） 田原（3） 二名（2）

京西（4） 富雄南（4） 平城東（5） 富雄第三（5） 三笠（9）

※（ ）内は参加生徒数。全11校 計49名参加

※各校引率教職員等 28名（大学教職員を含む）参加

6. 活動概要

(1) 開講式

生徒主体となつて行われた開講式。広い山田ホールの中いっばいに、静まり返つたシーンという音が響き渡つていた。生徒は、とても緊張している面持ちで真剣そのものであった。本研修の意義、目標、日程説明がなされた。今日一日を実りのあるものにしようという決意をすることができる開講式であった。事務局である奈良市教育委員会いじめ防止生徒指導課の方からは、冬に開催される「ストップいじめなら子どもサミット」についての紹介があった。（山田）

(2) アイスブレイキング

今回のリーダー研修会では11校の中学校から生徒たちが集まり、それぞれ別々の学校の生徒同士でグループを作つた。中学生という年齢も考え、緊張をやわらげるために本学ユネスコクラブの谷垣と藤井が主体となつてアイスブレイキングのレクリエーションを行つた。そうすることでだんだん生徒たちにも笑顔が見られるなど、最初の堅い雰囲気は適度に緩んだ。それでもまだ緊張している生徒もいたが、時間の経過や先生方のサポート、ユネスコクラブの学生の声掛けにより少しずつ話せるようになっていった。アイスブレイキングによって、その後の活動をスムーズに行うことができた。（西田）

(3) 研修1「生徒会行事の運営について」

研修1では、各学校での取り組みについて、班ごと5～6人で共有する活動を行った。生徒総会やいじめに関する取り組みなど、各学校での生徒会活動の取り組みを五つの項目に分けて話し合った。前後半に分け、後半ではグループを変えて、より多くの学校の取り組みを知ることができるようになっていた。学校によって様々な取り組みの違いがあり、お互いに活動や考え方を共有することで、各学校特有のものを知り、そこから新たなアイデアが生まれたり、別の角度から生徒会活動を考えたりできるきっかけになった。(伊藤)



生徒たちの真剣な様子

(4) 研修2「生徒会行事の企画」

9つの班でそれぞれのテーマに沿った生徒会行事の企画について考え発表した。テーマは抽選で決定した。私が担当した班は「良い授業を作るにはどうしたらいいか」というテーマで取り組んだ。企画を考えるにあたって、生徒たちが今まで受けた授業の中で1番良い授業を思い出し、共有した。その中で共通していたのは、生徒が主体的に参加できる授業が良い授業であると感じているということだ。企画を考えていく中で、生徒にとってどのような授業が良いと考えているのかを知ることができ、私自身学べることが多い企画であった。班の中で役割分担をしたり、補足や身振り手振りを使って説明をしたりしていて、私が指示しなくても学生たちで考えて企画を作っていたのが印象的であった。(足立)



グループでの活動の様子

(5) 研修3「スピーチ力UP講座」

三笠中学校の泉尾先生より、より良いスピーチの方法についてのお話があった。生徒の前に立ってスピーチをする具体的な場面を想定して、デモンストレーションを行った。先生がおっしゃっていたポイントを踏まえて、メモの書き方から話し方まで練習して、班内で発表があった。そして、その中から代表者を選出して、みんなの前で発表してもらった。生徒会役員の生徒たちには、これからスピーチをする機会が必ずあると思うので、今回のことを思い出して活かしてもらいたい。(桑田)

(6) 閉講式

奈良市教育委員会の方からの講評では、生徒会行事の企画やスピーチの練習など、生徒が難しいことを協力して時間内に成し遂げ、立派なものにする姿に深く感心したと、お褒めの言葉をいただいた。最後には写真撮影も行い、最初は口数も少なく探り探りだった生徒たちが、最後は笑顔で別れを惜しむ姿もみられた。第5回奈良市中学校合同生徒会リーダー研修会は大成功に終わった。(阿部)

【学生による ESD 学習支援活動】

東大寺万灯供養絵ボランティア 活動報告書

英語教育専修 2 回生 櫛 乃里花

1. 日時 平成 30 年 8 月 15 日 (水) 17 時 30 分～23 時
2. 場所 華嚴宗大本山東大寺 大仏殿
3. 参加者 谷垣徹 (大学院生)

田中健博、仲村幸奈、井奥康樹、石坂望、岸田知展、櫛乃里花、下垣内渉平、足立繁郁
北将伍、辰上亜弥子、鴨志田理奈、田中歩、西條秀哉、東温斗 (学部生)

本学職員 吉川俊美、北村恭康、中澤静男

近畿 ESD コンソーシアム現職教員 島俊彦 (郡山西小)

中澤哲也、渡邊翼、長澤たかゆき、長澤友海、吉岡昂馬、山本武 (平群北小)

杉山拓次 (春日山原始林を未来につなぐ会)

4. 活動支援内容

8 月 15 日、東大寺大仏殿にて万灯供養絵が行われ、様々な願いが込められた約 1700 基の灯籠が奉納された。大仏殿正面の観相窓からは、灯籠の明かりに照らされる大仏様のお顔を拝むことができ、非常に幻想的な景観が浮かび上がっていた。19～22 時という遅い時間での参拝だったが、地元の人から観光客まで様々な人が参列していた。

ESD 実践として、今回の活動を通して学んだことを以下の 2 点で振り返りたい。第 1 にボランティアとして活動することの意義について、第 2 に伝統行事の継承の重要性についてである。

第 1 のボランティアとして活動することの意義についてであるが、今回参加した学生からは「ボランティアの必要性を学んだ」「参加できたことを誇りに感じた」などといった、ボランティア活動の有用性を実感した感想が多数あった。東大寺のボランティアの方々に優しく指導



大仏様のお顔がのぞく幻想的な景観

していただいたり、参拝者の方から直接感謝の言葉をいただく機会があったりと、地域の人々との繋がりを強く感じる事ができた学生が多かったようである。このことから、ボランティア活動は、地域との連携を深め、自己有用感を高める効果があることがわかった。一方で、参拝者とのやり取りの中でトラブルが生じ、ボランティア活動の難しさを実感した学生もいた。

第 2 の伝統行事の継承の重要性についてであるが、学生間では伝統行事による「縦」と「横」の二つのつながりを感じたという声が上がっている。「縦」のつながりは、世代間のつながりのことで、過去の時代から受け継がれてきたものを、現代の私たちが橋渡しの役目を担い、未来へつなげているのだという自覚を持つことができたようだ。「横」のつながりは、外国人観光客とのつながりのことで、大勢訪れた観光客の中には外国の方の姿も多く見受けられた。“cool Japan”を筆頭に日本の伝統文化が今世界中から注目されていることを改めて感じるきっかけとなった。過去から受け継がれてきたものとして、また世界中の人々から期待されているものとして、現代を生きる私たちが伝統を継承し持続させていく重要性を学んだ。

暗がりの中、たくさんの灯籠が浮かび上がるのを見て、自分たちの働きがこの光景を支えていることを実感した。地域に貢献する喜び、伝統を守る喜びを心に深く感じた。

【学生による ESD 活動支援】

平成 30 年英語パフォーマンス甲子園 支援報告書

国語教育専修 1 回生 学部 1 回生 中田 航輔

1. 実施日 平成 30 年 8 月 24 日 (金) 13:00~17:30
2. 場所 DMG MORI やまと郡山城ホール (大ホール) 奈良県大和郡山市郡山町 211-3
3. 参加者 谷内裕也 (教職大学院生) 仲村幸奈、中田航輔、部谷富有 (学部生)
林翼 (奈良ユネスコ協会青年部)
他大学のボランティア 数名
4. 出場校 奈良県立郡山高等学校 大阪府立豊中高等学校 関西創価高等学校
神戸大附属中等教育学校 奈良県立ろう学校 奈良県立桜井高等学校
関西学院千里国際高等部 奈良県法隆寺国際高等学校 奈良県立青翔高等学校

5. 活動支援内容

平成 30 年 8 月 24 日、英語パフォーマンス甲子園が開催され、本学学生などがスタッフとして運営に携わった。英語パフォーマンス甲子園は ESD を大会理念とし、高校生が自ら所属する「文化」を見つめ、それを掘り下げ、英語を用いたパフォーマンスを通じて想いを伝える大会である。近畿圏内から 9 校の中高校生が集まり、「つながり」というテーマのもと、英語の劇やプレゼンテーションによるパフォーマンスを展開した。

さて、この大会への参加を通じて感じたことを、以下の 3 点で振り返る。第 1 にコミュニケーション

力について、第 2 に日本人としてのアイデンティティについて、第 3 に異文化理解についてである。

第 1 のコミュニケーション力についてであるが、中高校生のパフォーマンスは大半が英語で構成されていたにもかかわらず内容を理解することが容易であった。文法事項をマスターすることは大切なことであるが、コミュニケーションにおいては意見を相手に伝えようとすることや理解しようとする姿勢がより重要であると感じた。

第 2 の日本人としてのアイデンティティについてであるが、日本の怪談話や書道などの伝統文化が国際言語である英語で表現されているのを見ることで、改めて日本文化の美しさを実感し、自分が日本人であることに喜びを感じた。

第 3 の異文化理解についてであるが、上で述べたように文化というものの美しさを再確認したことで、日本だけでなくどの国の文化も尊重され継承し続けるべきものであると感じた。

今回、高校生がグローバルな視野から文化を見つめ ESD に取り組んでいる姿を目の当たりにしてよい刺激を受けた。来年以降の大会にもぜひボランティアとして参加したいと思う。



日本の『播州皿屋敷』を英語で演ずる高校生



書道と英語の融合によるパフォーマンス

【学生による ESD 支援活動】

東大寺寺子屋～世界遺産のお寺で、気づく、学ぶ、考える～ 支援報告書

特別支援教育専修 4 回生 板口 咲希

1. 日 時 平成 30 年 8 月 24 日（金）13:00 ～ 平成 30 年 8 月 26 日（日）11:30
2. 場 所 東大寺山内（二月堂参籠所、同北茶所、奈良親子レスパイトハウス、大仏殿、二月堂ほか）
3. 参加者 奈良市内在住の小学 5 年生～中学 3 年生 20 名
佐野宏一郎（大学院生）
森本珠美怜、板口咲希、藤井愛華、義根敦司、北将伍、足立繁郁、西田朱音（学部生）
准教授 1 名、研究員 1 名

4. 概要報告

平成 30 年 8 月 24 日～平成 30 年 8 月 26 日に、東大寺山内にて「東大寺寺子屋～世界遺産のお寺で、気づく、学ぶ、考える～」が行われ、本学学生 8 名がその支援に関わった。1 日目は蓮の花の形を模したランタンを子どもたちが作り、それを持って夜の大仏殿をお参りした。2 日目は屋参籠体験、境内フィールドワーク、法話や座禅体験をした。3 日目はこの東大寺寺子屋で感じてきた 3 日間を漢字一字にして、それをうちわに筆で書いて発表した。

今回の活動支援を通して私が学んだことを以下の 2 点で振り返りたい。一つ目は「指導のメリハリ」、二つ目は「子どもたちの学びへの意欲を引き出すこと」である。

一つ目の「指導のメリハリ」についてである。今回の活動支援では、子どもたちが集団で活動に参加するよう大学生が支援・指導する機会があった。多様な背景を持つ子どもたちが 1 つの活動に向かって協力する態度は、学生の子どもへの働きかけで変化する。それぞれの子どもの行動には、その子どもなりの理由がある。しかしそれらの行動全てを良しとしていると集団として瓦解することも考えられるため、子どもの行動に対して適宜「指導する」ということが求められることになる。その子どもに行動の理由を聞いたうえで、他者に迷惑がかかったりするような理由であれば注意し、仕方ないような理由であれば認めるということを心掛けて私は寺子屋に臨んだ。しかし、実際は理由を十分に伝えることが難しい状況や状態があり、指導するタイミングを逃してしまうことがあった。褒めるところ、許容するところ、指導するところを十分に使い分け、子どもにも分かりやすい形で指導のメリハリをつけたいと考えた。

二つ目「子どもたちの学びへの意欲を引き出すこと」についてである。今回の活動では、普段子どもたちが経験できない、特別な体験ができる。それは、いつもは行くことができない「特別な場所」という面と、いつもは関わることのできないお坊さんたちとコミュニケーションをとることができる「特別な人」という面がある。子どもたちにとって「特別」というのは非常に興味をひくものであり、この活動では、「特別な場所」で「特別な人」から直接話を聞いたり、ものを見たりすることができるため、子どもたちの学びを深めることができたのではないかと考える。

この活動は、「特別な場所」で「特別な人」とともにみんなで学びを深めることができるものである。その特別な学びを十分に得るためには、子どもたちがひとつの集団となり主体的に体験できる環境が重要である。そこでしかできない体験やそのための適切な指導・支援を学校現場で働くうえでも大切にしていきたいと考える。



お坊さんや班のメンバーと
話し合う子どもたち

サポーターとしての関わりから学んだこと

英語教育専修 4 回生 森本 珠美怜

8月24日から26日に、第5回東大寺寺子屋にスタッフとして参加した。当企画は、東大寺境内にて子どもたちが二泊三日で宿泊し、「世界遺産のお寺で、気づく、学ぶ、考える」のテーマに即した様々な体験活動を行う。境内フィールドワークや、屋参籠体験、夜の大仏殿へのお参りなど、東大寺でしかできない体験を行うことができた。大学生と僧侶でペアになり、四つの活動班に分かれ活動を行った。今回は活動班には入らず、サポーターとして活動に取り組んだ。



お風呂の待ち時間に仲を深める

今回、本活動より学んだことは大きく三つある。第1に、企画に対する自信の大切さについて、第2に非日常体験の中での学びについて、第3に、子どもの体調不良に対する対応についてである。

第1に、企画に対する自信の大切さについてである。今回、本活動では初めて、大学生の進行による就寝プログラムというものを行った。前回、いつもと違う環境の中で、子どもたちは興奮状態のままなかなか眠りに付けなかったと伺った。そのため、就寝前に歌い心を落ち着け、各班で一日の振り返りを行うというプログラムを行った。私たちにとっても初めての取り組みであり、学生同士で集まり幾度か練習を行った。しかし、当日はギターの私自身、本当にこのような形で子どもたちの心を落ち着けることができるのだろうかと不安に思い、とても緊張してしまった。その結果、自分の中であまり納得のいくものがつくれなかったように感じる。本番に、自信をもって挑むためにも、学生同士でよりしっかりと内容の確認を行い、練習すべきだったと考えた。次回、どのような企画であっても、事前準備を何度か行うだけではなく、自信を持てるまでしっかりと準備を行いたい。

第2に、非日常体験の中での学びについてである。本活動のプログラムには、非日常的な体験が多く含まれていた。空調設備のない中での就寝や夜中の大仏殿参拝、境内フィールドワークなど、東大寺ならではのプログラムとなっていた。ほとんどの子どもたちが東大寺には来たことがあると言っていたが、このような非日常体験の中では、よく知る東大寺が違って見えたのではないだろうか。また、学校も学年も違う友達と出会い、班活動の中で仲を深めていった。最後の一文字書道でも、協力の「協」といった言葉が多かったように感じる。このように、非日常体験の中でこそ、子どもたちの新しい発見や学びが生まれるように感じた。

第3に、子どもの体調不良に対する対応についてである。まさにこの非日常体験の中で、今回7名の子どもが体調不良を訴えた。学生サポーターとして、子どもたちに付き添うことが多かったが、看護担当の方に任せてばかりであり何もすることができなかった。活動班の学生ほど子どもとの距離も縮まっていない中で、子どもの本音を聞くのはとても難しかった。また、体調不良の子どもが出た場合、誰が子どもに付くのかなどが決まっておらず、すべて私が引き受けるには少し無理があった。東大寺ならではの非日常体験の中で、子どもたちの体調に合わせた活動ができると、子どもにとってもさらに良い思い出になるのではないかと考えた。

以上より、初めて学生サポーターに挑戦した私にとって、運営側としての学びも多かったように感じる。東大寺という場所での貴重な体験を通して、自分の対応力を改めて知ることができた。子どもとの直接的な関わりだけでなく、今後は活動を支える役目も学んでいきたい。

東大寺寺子屋を振り返って

理科教育専修 修士2回生 佐野 宏一郎

2018年8月24日から26日にかけて、東大寺境内で第5回東大寺寺子屋が行われた。「世界遺産のお寺で、気づく、学ぶ、考える」をテーマに、奈良県内在住の小学5年生から中学3年生、20名が参加した。奈良教育大学ユネスコクラブでは、この取り組みを教育大生という立場からサポートし、今年で3年目となる。私は本活動に学生スタッフの代表とサポート学生の一員として携わり、子どもたちの活動がスムーズになるように支援した。

本活動に携わり、東大寺の僧侶の方々や参加した子どもとの関わりの中から、三つの気づきや学びを得た。「教員以外の大人がどのように子どもと接しているのか」、「チャレンジ精神」、「奈良で文化遺産を学ぶ意義」の三つである。これらについて以下に詳しく述べる。

一つ目は、「教員以外の大人がどのように子どもと接しているのか」についてである。これは、僧侶の方々の子どもたちとの関わり方から学んだことである。私は教育現場以外で子どもたちと接する機会はあまりなく、僧侶の方々から大人としての振る舞いを学んだ。教育現場以外の環境で、子ども一人一人と同じ目線で真摯に向き合うことも、子どもの成長をサポートする上で重要なことだと実感した。

二つ目は「チャレンジ精神」についてである。前回とは異なり、今回は初めての試みとして就寝前活動を行った。就寝前活動とは、就寝前の子どもたちの感情を落ち着かせ、気持ちを共有する時間である。この活動の主たる企画と運営を行ったが、私はユネスコクラブでの活動を通して人前でゲームをしたり歌ったりする経験がほとんどなかった。そのため、当日までの時間はこのことで頭がいっぱいであつたうえ、自信がない分不安が大きかった。結果的には成功とはいえない内容になってしまった。それでも、サポートしてくれた仲間や一生懸命に応える子どもたちの姿に、気持ちが動かされた。慣れないことでもチャレンジすることによって、今までの自分には理解できなかった感動や成長を実感することができる。また、慣れないことに対して積極的にチャレンジすることに、不安が少なくなった。

三つ目は、「奈良で文化遺産を学ぶ意義」についてである。私は大学で文化遺産をテーマに研究している。文化遺産の宝庫である奈良で学ぶことは、本物という教材が身近にあるという点で、地の利を活かした学びができる。しかし、文化遺産を訪れるだけならば、観光として気軽に行くことができる時代であり、どこに居ても、本やインターネットで調べることが可能である。奈良で学ぶことによって得られる最も重要な意義は、「文化遺産に関わる人に出会える」ということなのだろう。本活動では、東大寺の僧侶の方々と関わり、宗教者として文化遺産と関わる理由や守り続ける意義を知ることができた。私は今まで、文化遺産を調査と研究の対象として捉えてきた。本活動から、文化遺産を宗教文化の観点から捉え直すことができた。このことは、お寺の文化遺産は仏教遺産であるため、根本的には当然のことである。しかし、私にとっては新鮮であつた。このように、奈良の地で学ばないと出会えない人や価値観を得ることができた。



参加者全員で一致団結！

本活動から、文化遺産を宗教文化の観点から捉え直すことができた。このことは、お寺の文化遺産は仏教遺産であるため、根本的には当然のことである。しかし、私にとっては新鮮であつた。このように、奈良の地で学ばないと出会えない人や価値観を得ることができた。

本活動で得られた、普段できない経験や出会いの数々は、全てが私自身の財産である。奈良で学んだからこそ得られた物がたくさんあつた。学校現場などの次のステップに得られた経験が活かせるように、知識を深く掘り下げ、積極的に行動していきたい。

東大寺寺子屋を通して考えたこと

国語教育専修 1 回生 西田 朱音

2018年8月24日から26日にかけて、「気づく、学ぶ、考える」というテーマのもと、二泊三日で東大寺に宿泊し小学校5年生から中学校3年生の子どもたちが仏教や集団生活について学べるよう私たち学生がサポートした。

具体的には、蓮のランタンづくり、精進料理、作ったランタンを持参しての夜の大仏殿の参拝、東大寺境内フィールドワーク、瞑想体験、三日間を総括しての一字書道などを行った。

私たちが行ったこととしては、レクリエーション、就寝前活動、会場準備、健康観察などである。私は今回、班に入っただけの活動を行った。



精進料理を美味しく頂きました

私がこの活動を通して考えたことは三つある。

一つ目は、事前準備の大切さについてである。夏の暑い時期だったので、熱中症になった子が複数人出た。また、振り返りノートを読みあうのにとっても時間がかかった。熱中症について、特に就寝時に問題があったように感じる。参籠所の広さで一台の扇風機だと、ほぼ意味をなさなかった。まして蚊帳を張っていて風が通りにくくなっていたため尚更だった。それが原因で睡眠が妨げられ、翌日の体調に影響を及ぼしてしまったと考える。それに加え朝食前の屋参籠体験は大学生である我々でも疲れた。子どもたちは尚更だっただろう。このリスクが想定できていなかった点は反省すべきだ。振り返りノートの読み合わせも、より効率的な方法や所要時間について詰めるべきだった。

二つ目は、子どもとの関係づくりや子どもへの声掛けの仕方についてである。集中力のない子どもに三日間同じようなことで何度も声をかけた。私の言いたいことがどうすればきちんと子どもたちに届くのか悩まされた。自分が声掛けをされる立場で考えて話そうと思ってはいたが、それがうまくできていなかった。また、健康観察では「元気？」と聞くと多くの子どもはたとえ元気でなくてももうなげうてしまう。そして体調不良の子どもを見逃してしまう。健康観察をする際は、全体に一斉に聞くのではなく順番に一人一人聞くことで子どもは答えやすくなるだろう。また、聞き方としては「頭痛い、気持ち悪い、おなか痛い、だるい、元気のどれかから選んで」などと選択肢を与えるとききちんと答えてくれると考える。これから先子どもも広場や野外活動支援など子どもたちとかわる機会がたくさんある。子どもたちが元気に活動できるようにサポートできるようになりたい。

三つ目は、ゲームの進行力についてである。今回初めてアイスブレイクのゲームを担当した。内容としてはグループを作っていくゲームだった。ある程度子どもたちは楽しそうにゲームをしてくれたように思う。しかし、グループができた後にどのように子どもたちに声をかけていいかわからなかった。ゲームでのコメントによってはその場をもっと盛り上げることができただろう。今後先輩の背中を見て学んだり、経験を積んだりして気の利いたコメントができるようになりたい。また、うまくゲームに参加できていない子に対してどう言葉がけをすればいいかも難しく感じた。子どもによってはなかなか緊張が解けない子もいる。今回のゲームはそういった子の緊張をほぐすにはどうすればいいのかを考えるきっかけとなった。

全体を総括して、子どもたちの学びをサポートすることはもちろん、今まで気づけなかった課題に気づくことができた。まさに、私たち学生も本活動を通して「気づき、学び、考える」ことができたように思う。今回出てきた課題は次回以降に生かし、子どもたちがもっと楽しく学び、自ら気づけるような環境づくりをできるようになりたい。

新しい体験の中で得たもの

社会科教育専修 1 回生 足立 繁郁

2018年8月24日～26日に、第5回東大寺寺子屋が開催された。東大寺寺子屋とは華嚴宗大本山東大寺主催、読売新聞社共催、奈良県・市教育委員会後援のもと本学から8名の学生が協力を行った企画である。奈良市内の小中学生20名を定員とし4グループに分かれて二泊三日東大寺で過ごした。主な活動内容は、一日目は蓮のランタンを子どもたちが作成し、その後夜の大仏殿を参拝した。二日目は屋参籠体験、境内フィールドワークを行った後、知足院にて瞑想体験や僧侶の法話を聞く体験をした。そして最終日は東大寺寺子屋を通して感じたことを一文字の漢字に表してうちわに筆で書き込み発表した。

今回の支援を通して学んだことは二つある。一つ目は、「子どもたちとの距離感について」である。二つ目は、「子どもたちが話を聞く人とはどんな人かについて」である。

一つ目は、「子どもたちとの距離感について」だ。大学生は班の中に入って子どもたちを近くで見る人と班の中には入らず運営のサポートをする人に分かれて支援をした。私は第一回子ども広場では班の中に入って支援をしたため班の中には入らず運営側で支援をするという経験は今回が初めてだった。運営側に入ることによって、一つの班の子どもたちだけではなく色々な子どもたちと関わることができた。私は少数の子どもたちと仲良くなるのではなく全員の子供たちと関わりを持つような関係が良いと感じた。教師になったとき全ての子どもたちを見つても一人ひとりを見る状況が大切であるためだ。したがって今回の経験は今後役に立って行くと思う。

そして二つ目は、「子どもたちが話を聞く人とはどんな人かについて」だ。今回スタッフとして参加された先生が子どもたちに信頼されるためには魅力がある人になるのが望ましいとおっしゃっていた。私は本活動を通して、僧侶の人たちはとても魅力的だと感じた。東大寺や仏教の知識を持っていることに加え、ユーモアがあり、メリハリも付けられる。そのため子どもたちは僧侶の話をしっかり聞いていた印象だった。私は教師になる身として、何か自分が誇れる魅力を見つけていきたいと思った。それはユネスコクラブの活動を行っていく中で自分の色を探し続ければ見つかると思った。

今回の東大寺寺子屋のテーマは、「気づく、学ぶ、考える」である。このテーマは子どもたちが二泊三日の東大寺寺子屋を通して獲得してほしい目標であったが、私自身が本活動で得たものでもあった。子

どもたちと仲良くなるのが優れた支援ではなく、様々な子どもたちと関わり彼らの学びを促進させることが優れた支援であると感じた。また自分がどのような人ならば話を聞いてくれるのかについて学び、私も私なりの魅力を見つけていきたいと思った。そして子どもたちとの距離感について考えるきっかけとなった。私は、これからもユネスコクラブの企画に参加し、そこで得たものを経験値にしていきたい。



今日のおさらいをしている様子

自身も楽しく学べた2泊3日

特別支援教育専修 4回生 藤井 愛華

2018年8月24日～26日の2泊3日で、東大寺の境内で、東大寺寺子屋が開催された。私たち大学生は、東大寺の僧侶の方々と企画者として参加し、参加者である小学生、中学生と共に東大寺の境内で、蓮のランタンづくり、夜の大仏殿へのお参り、蚊帳を張り二月堂での宿泊、屋参籠体験、境内の掃除、精進料理、瞑想体験、法話聴講、お抹茶体験、一文字書道などを行い、多くのことを学んだ。活動の間には、班のミーティングを設け、ノートに学んだことや感じたことを個人で書き、班内で回し読みをすることで、お互いの学びや気持ちを共有した。



班でフィールドワークの行き先を話し合う

活動を通して感じたことは二つある。一つ目は、子どもとの関わり方の変化について、二つ目は、子どもの学びへの意欲を掻き立てるきっかけづくりについてである。

一つ目の、子どもとの関わり方の変化について述べる。今までの子どもと関わる企画では、焦ってなかなか出来なかったが、今回の企画では、子ども一人一人の特徴に寄り添ったり、自分なりの関わり方を焦らずに見つけようとしたりすることが出来た。具体的な言葉で言葉掛けをすることや、言葉掛けの数だけでなく、ただしっかりと見守り、それが伝わるように関わるのが大切だと実感した。一人一人の個性や良さを焦らず見つけられるようになってきたことで、関係性も深まり、活動の幅も広がったように感じた。また、心にゆとりを持って関わることができたのは、一緒に班を持った僧侶と密にコミュニケーションを交わし、お互いに信頼関係が築けていたことも理由として挙げられると思う。お互いの良さを生かしながら、班づくりをすることができ、自分自身も楽しみながら活動に参加することができた。

二つ目の、子どもの学びへの意欲を掻き立てるきっかけづくりについて述べる。現地に足を踏み入れること、特別な場所で、特別な体験ができること、専門家から直接お話を聞いたり、質問したりできることが、子どもたちの学ぶ意欲を掻き立てることを強く感じた。さらに、そこで学んだことや感じたことを友達と共有することで、学びが深まり、一層学ぶことへの意欲が高まることを実感した。

今回の企画で学んだことを活かして、将来教員になった時に、授業の中で、「現地に学ぶこと」、「体験活動を充実させること」、「学んだことや思いを共有する機会を多く設けること」を大切にして、授業作りをしていきたい。また、自分自身が現地に赴き、専門家から学ぶことで教材の面白さや可能性を多く吸収し、学ぶことへの感動を感じ続けたい。さらに、児童生徒との関わりの中では、自分だからできる関わりがあると信じて、焦らずに関わる姿勢を大切に続けたい。その時に一人一人をよく見つけ、具体的に言葉掛けを行いながら児童生徒の良い部分をより引き出せるようになっていきたいと思う。



仲を深めた班員全員で最後の記念写真

最後に、教員として子どもたちの健康管理や安全管理などの危機管理に対する意識の低さを痛感したため、子どもの観察の徹底や、報告・連絡・相談の徹底を今後の課題としたい。

東大寺寺子屋で学んだこと

特別支援教育専修 4回生 板口 咲希

平成30年8月24日～平成30年8月26日に、東大寺境内にて「東大寺寺子屋～世界遺産のお寺で、気づく、学ぶ、考える～」が行われ、私含め学生8名がその支援に関わった。一日目は蓮の花の形を模したランタンを子どもたちが作り、それを持って夜の大仏殿をお参りした。二日目は屋参籠体験、境内フィールドワーク、法話や瞑想体験をした。三日目は本活動で感じてきた三日間を漢字一字にして、それをうちわに筆で書いて発表した。

今回の活動支援を通して私が学んだことを以下の2点で振り返りたい。一つ目は「指導のメリハリ」、二つ目は「子どもたちの学びへの意欲を引き出すこと」である。



お坊さんや班のメンバーと
話し合う子どもたち

一つ目「指導のメリハリ」についてである。本活動では、子どもたちが集団で活動に参加するよう大学生が支援・指導する機会があった。多様な背景を持つ子どもたちが一つの活動に向かって協力する態度は、学生の子どもの働きかけで変化する。それぞれの子どもの行動には、その子どもの理由がある。しかし、それらの行動全てを良しとしていると集団として瓦解することも考えられるため、子どもの行動に対して適宜「叱る」ということが求められることになる。その子どもに行動の理由を聞いたうえで、他者に迷惑がかかるような理由であれば叱り、仕方ないような理由であれば認めるということを中心に私は寺子屋に臨んだ。

しかし、実際は理由を十分に伝えることが難しい状況や状態があり、しっかり叱るタイミングを逃してしまうことがあった。褒めるところ、許容するところ、叱るところを十分に使い分け、子どもにも分かりやすい形で指導のメリハリをつけたいと考えた。

二つ目「子どもたちの学びへの意欲を引き出すこと」についてである。今回の活動では、普段子どもたちが経験できない、特別な体験ができる。それは、いつもは行けない所に行く「特別な場所」という面と、いつもは関わることのできないお坊さんたちとコミュニケーションをとることができる「特別な人」という面がある。子どもたちにとって「特別」というのは、非常に興味をひくものである。この東大寺寺子屋では、「特別な場所」で「特別な人」から直接話を聞いてものを見たりすることができるため、子どもたちの学びを深めることができたのではないかと考える。

この東大寺寺子屋は、「特別な場所」で「特別な人」とともにみんなで学びを深める場所である。その特別な学びを十分に得るためには、子どもたちがひとつの集団となり主体的に体験できる環境が重要である。そこでしかできない体験やそのための適切な指導・支援を学校現場で働くうえでも大切にしていきたいと考える。



朝ごはんの前にお坊さんからの挨拶

第5回 東大寺寺子屋

社会科教育専修 1回生 北 将伍

2018年8月24日から26日にかけて東大寺において第5回東大寺寺子屋が開催された。また、7月16日に学生ボランティアやスタッフ間の第1回事前研修、8月20日に第2回事前研修が行われた。本活動は奈良県内に住む小学校5年生から中学校3年生を対象としたものであり、東大寺境内に二泊三日し、奈良の良さを知ったり、「気づき、学び、考える」という実践的な生きる力を身に付けたりすることが狙いとなっている。私は学生リーダーとして4班を担当し、僧侶の北河原公慈さんとともに活動をサポートした。また、1日目のレクリエーションの担当をし、「ネームトス」というゲームの進行を行った。

今回の支援で私は三つのことを学んだ。一つ目は子どもたちとの関わり方は非常にデリケートで工夫が必要だということである。二つ目はゲームのような楽しむ場面での雰囲気作りの難しさである。三つ目は東大寺という場で伝統的価値を学ぶことの重要性である。

一つ目の学びについて述べる。私は4班の担当として多くの場面で班員たちと接することができた。その中には体調不良になる子や活発に見えて繊細な心を持つ子、少し奥手な子など様々な子どもたちがいた。彼らに対する接し方はみんなそれぞれ異なり、かけるべき言葉・ふさわしい対応の選択の難しさや、ある特定の一人に対する接し方が他の班員に様々な影響を与えることがあると学んだ。そして、それには相当なデリケートさが求められるということにも気が付くことができた。

二つ目の学びについて述べる。私は「ネームトス」というゲームを担当したが、その準備段階で諸先輩方から多くのアドバイスをいただいたり、ゲームのバリエーションの広さやその意味について学習したりすることができた。しかし準備したうえで当日行ってみると、声が思った以上に通っていなかったり、「本当にこれで盛り上げられているのだろうか？」という不安が襲ってきたりして、その難しさを感じることもできた。この点はこれからの活動で克服していきたいと思う。

三つ目の学びについて述べる。東大寺寺子屋は「寺子屋」と名乗るものの学術を教えるのではない。僧侶が行う修行の体験や境内のあちこちで東大寺についての学習をし、自ら「気づく、学ぶ、考える」という活動である。子どもたちにとって普通の学校ではやらないような体験や学習ができた。僧侶や大学生と交流したりする中で、東大寺という伝統的な価値のある場所について学び、考えることができる。それはESD的に見ると、過去から今へ繋いできたものについて考える良い機会であると思った。過去から今への継承を通じて、未来にいかに関ぐかというヒントを私自身が考えるきっかけにもなった。

東大寺で学習するという経験は子どもたちにとっても私たち大学生にとっても貴重で豊かな体験である。この経験はこれからの支援活動だけでなく、私が教壇に立ったときの教材に応用するなど恒久的に活用できるものである。今回の学びを大切にしていり高次の学習に繋げられるようにしたい。



4班班員の蓮のランタンづくり

【学生によるESD活動支援】

奈良教育大学附属幼稚園 世界遺産学習 支援報告書

英語教育専修 大学院1回生 谷垣徹

1. 実施日 平成30年11月6日(火)
2. 場所 奈良教育大学附属幼稚園 遊戯室
3. 参加者 井上日奈都、大畑和佳、岡橋菜々香、丹羽規子、東谷未来、三木菜々子、水迫ありさ、八木萌(幼年教育専修)、谷垣徹(大学院英語教育専修)
4. 内容 <年長クラス> 東大寺二月堂(お水取り、良弁杉など)、奈良公園の鹿について
<年中・年少クラス> 東大寺大仏殿、南大門(金剛力士像)、奈良公園の鹿について
5. 概要報告

奈良教育大学附属幼稚園では、世界遺産学習の一環として東大寺大仏殿・二月堂方面へ遠足に出かけるが、その事前学習として、奈良教育大学ユネスコクラブの学生がデジタル教材を用いて支援を行っている。この活動は毎年継続して行っているものであり、今回で6年目を迎えた。幼稚園児が楽しんで学習できるように、アニメーションやクイズを効果的に取り入れ、デジタル教材の作成を行っている。今回は幼年教育専修1回生の学生が中心となって行った。



クイズを交えて楽しく学習

この活動を通して感じたことを、以下の2点で振り返る。一つ目に大学生にとっての経験、二つ目にユネスコスクールとしての発展についてである。

一つ目に、大学生にとっての経験についてである。この活動は本学ユネスコクラブの学生を中心に、6年間継続して行ってきたものである。今年は幼年教育専修の学生が多く所属しているため、専門の学生が携わることができた。しかし、幼年教育専修の学生とはいえ、1回生は大学での専門的な学びを始めたばかりで、現場で実際に子どもたちと関わる経験を持つ学生はそう多くない。大学の講義で得た学問的、理論的な学びを、現場での実践とつなげることは非常に重要であり、学生にとって非常に有意義な経験の場であった。子ども理解、子どもとの関わり方、教材開発力、ICT活用など、様々なことを実践的に学ぶことができた。

二つ目に、ユネスコスクールとしての発展についてである。奈良教育大学は2007年に、大学として日本で始めてユネスコスクールに加盟した大学である。その後、附属中学校、附属小学校に続き、附属幼稚園も今年度、ユネスコスクールに加盟した。ESDの推進拠点であるユネスコスクールの取り組みとして、この世界遺産学習は非常に価値のある取り組みである。これをきっかけに、ESDの観点からプログラムを再検討し、世界遺産の価値、先人の思いや努力についてより良く学べる教材開発に取り組むたいと考える。世界遺産学習を中心としたESDを特色とした本学のユネスコスクール活動の経験を生かし、今後も本活動を発展させていきたい。

以上2点が、本活動を通しての学びと今後の展望である。6年間の経験を次世代へと受け継ぎ、今後ますます本活動を発展させていくとともに、幼稚園児からの幅広いESD・ユネスコスクール活動の発展に携わっていきたい。

【学生によるESD支援活動】
子どもおん祭 支援報告書

社会科教育専修1回生 山本 健太

5. 日 時 2018年11月25日(日) 10:00~17:00
6. 場 所 奈良市ならまちセンター(奈良市東寺林町38)
7. 参加者 仲村幸奈、足立繁郁、山本健太、山田つきみ、杉山晴菜、阿部孝哉、西條秀哉(学部生)
8. 概要報告

2018年11月25日(日)、奈良市ならまちセンターにおいて子どもおん祭が開催され、当日準備と運営に本学学生がスタッフとして参加した。このイベントは、870余年絶えることなく受け継がれてきた奈良の伝統行事である「春日若宮おん祭」について子どもたちに知ってもらうことを目的に始まった地域のお祭りである。当日は、市内の小学生によるおん祭についての解説や和太鼓の演奏、ゲームコーナーや地域の方によるバザーなども行われ、賑やかな雰囲気につつまれた一日となった。

この活動を通じて学んだことを、以下の2点を通じて振り返る。1つ目に伝統を受け継いでいくことの大切さと難しさ2つ目に地域コミュニティでの繋がりの大切さだ。

1つ目に、伝統を受け継いでいくことの大切さだ。少子高齢化が進み、次世代に伝統を受け継いでいく子どもの数が減っていく現代において、伝統を受け継いでいくことは次第に難しくなっている。日本の中には、そのような状況によって消えてしまったお祭りなどの伝統文化が数多くある。しかしながら、長い年月を経て今日まで受け継がれてきた伝統行事には、数多くの先人たちの願いや思いなどが込められている。このことを考えれば、伝統が廃れ、消滅してしまうような現状は決して看過できるものではない。こうした日本の現状を見たとき、子どもおん祭のような次世代層向けのイベントは非常に素晴らしい試みだと考えた。伝統を後世へ繋いでいくためには、祭りを引き継ぐ後継者となる次世代層の育成が不可欠である。しかしながらその育成は大変難しい。伝統を受け継ぐことの大切さと同時に、難しさを感じるまたとない機会となった。

2つ目に、地域コミュニティでのつながりの大切さだ。人と人との繋がりが希薄化している現代において、このような地域の行事を通じて自分が住んでいる地域の中で濃密かつ温かいコミュニティに関われることは、非常に重要だと考える。地元のお祭りや行事に参加し、参加した子どもがその地域に愛着を持つことは、人口流出が顕著な地域においては将来的にも重要になる。将来的にこの地域に住まなくても、この祭りがあれば帰ってくる場所ができるともおっしゃっていた。そういったお話を聞いて、地域の中でコミュニティを築くことの大切さに気付かされた。

今回この活動に初めて参加して、慣れないことも多く戸惑いながらも、自分なりに積極的に取り組むことができ、多くの学びを得ることができた。来年以降も、この行事がこの先も何年先も続くよう、積極的にかかわっていききたい。



当日参加した運営スタッフ

【学生による ESD 支援活動】
修学旅行支援 実施報告書

理科教育専修 修士 1 回生 佐野 宏一郎

1. 実施日 平成 30 年 12 月 6 日 (木)
2. 場所 奈良教育大学、ならまち
3. 参加者 東北学院中学校 3 年生 16 名 / 教員 2 名
フィールドワーク : 佐野宏一郎 (院生)・藤井愛華・畑下さつき・西條秀哉・西田朱音・北将伍・山本健太・狗飼菜々子 (学部生)
オリエンテーション : 糸綾香 (院生)・櫛乃里花 (学部生)
企画・準備 : 谷垣徹 (院生)、八木萌・奥平茜・仲村幸奈・林祐希 (学部生)

4. 活動支援内容

平成 30 年 12 月 6 日に東北学院中学校の修学旅行支援として、修学旅行生 16 名とならまちでのフィールドワークを行った。「今に残されたものから、ならまちの歴史を知る」というテーマで、地名や道の区画などからならまちの歴史を探究する活動や、老舗にインタビューすることでならまちの伝統産業や文化を学ぶ活動を行った。大学生だけで企画を立ち上げ、当日は中学生を 4 つのグループに分け、それぞれのグループに 2 名の大学生がつき、案内役とすることで運営を行った。



雨の中、地名の由来を探究！

本活動から、ならまちの魅力、フィールドワークでの学びの重要性、中学生の態度という 3 つを学ぶことができた。

1 つ目のならまちの魅力について述べる。本活動を企画するにあたって、ならまちの歴史や伝統を学ぶ必要があった。私たちにとってならまちは、大学までの通学路といった生活空間の一部程度の認識であった。しかし、いつも何気なく通過していたならまちを改めて学ぶことによって、そこに巨大な寺院があったことや、かつて産業の中心として栄えていたことなど、新たな一面を発見した。そういった各時代の痕跡が道や地名などに確かに残っていることが、ならまちの魅力の一つである。歴史が地層のように積み重ねられることで、今がある。そういった街づくりの積み重ねが色々な証拠から読み取れるということを、今回のフィールドワークから学ぶことができた。これは他の地域でもいえることなので、このような目を養って今後活かしていきたい。



真剣な態度で老舗にインタビュー

2 つ目のフィールドワークでの学びの重要性について述べる。本活動に参加した生徒の一人が「今までの中で一番修学旅行していた！」と言っていた。このように、フィールドワークでは直接現地に赴くことで体感的に学ぶことができる。本活動でも生徒のキラキラした眼差しや、どんどん意欲的になる姿に面白さを

感じた。一方で、案内役として分かりやすく明快に伝えるということの難しさを実感した。コンピュータなどの機器使用に制限がかかる分、しっかりと内容を把握して、話者である責任を持たなくてはならない。そのため、事前学習の重要性を改めて実感した。

3つ目の中学生の態度について述べる。本企画では、参加した中学生から学ぶことも多かった。彼らの真剣に話を聞く態度や純粋に物事を探求していく姿勢は見習わなければならない。私たちは授業でも何か距離感を感じてしまうのか、たとえ好きな分野でも、どこか積極的に向かうことができない。しかし、本企画で中学生が見せてくれた、わからないことや気になることがあれば臆せず聞く、といった態度は、教員を目指す私たちにとって、忘れてはならない姿勢であることに再度気づかされた。

修学旅行支援は、単に中学生に奈良の魅力を伝えるだけが目的ではない。私たちが、楽しみながら学べるフィールドワークをつくる技術を身に付けることに繋がっているのである。また、その獲得のために学んだ奈良やならまちの知識は、将来教員になるにあたって自分の財産となるはずだ。このように、本活動は企画者側にも学ぶことがとても多いのである。今後も、能動型のフィールドワークや地元の人との関わりを持った企画をしていきたい。そして、ただ見て終わるだけの修学旅行から、一歩先に進んだ修学旅行を目指して活動を継続させたい。



最後にみんなで一枚。最高の一日でした！

【学生によるESD 学習支援活動】 あつまれECOキッズ！ 支援報告書

国語科教育専修1回生 西田朱音

1. 日時 平成31年1月13日(日) 11:00~15:00

2. 場所 ならまちセンター

3. 参加者 谷垣徹(大学院生)

山本健太、足立繁郁、西條秀哉、桑田祐香、西田朱音(学部生)

4. 活動支援内容

ならまちセンターにおいて、あつまれECOキッズ！が行われた。本活動では、参加した子どもたちに人と人が触れ合う、体を使った遊びを行った。

今回の活動を次の2点より振り返りたい。1つ目はユネスコクラブやユネスコに関する知識の不足についてであり、2つ目は事前準備の甘さについてである。

1つ目のユネスコクラブやユネスコに関する知識の不足についてである。今回活動する中で、親子での参加者やまた途中で取材に来られたFMの方に、ユネスコクラブやユネスコ活動について説明する機会が



ユネスコクラブの活動紹介

あった。活動紹介に関しては自分がしてきたこととお話しすることができたが、「ユネスコスクールとは」や「ESD とは何か、どう実践できるのか、それがどう作用しているのか」といった質問には、私は自信をもって答えることができなかった。これはひとえに勉強不足であるので、これから勉強して理解を深めたうえで発信できるようにならないといけない。

2つ目の事前準備の甘さについてである。今回は多くの準備不足がみられた。例えばホワイトボードが借りられるからマーカーで歌詞などは書けば良いと思っていたが借用物品の中にマーカーは含まれていなかった。また、参加者が少ない場合、一人でもできるような遊びや親子でできる遊びを準備しておく必要があることに気が付いた。今回は、折り紙を使って人が集まるまで時間をつなぐことはできた



が、これではECOという趣旨や体を使って人と人が触れ合う遊びをするということからは離れてしまっている。様々な場面を想定すること、きちんとリハーサルをやることが必要だったように思う。

以上2点について、今回の支援で感じることができた。まだ来年度開催するかどうかは未定だそうだが、次の機会ではこれらの課題を克服する必要がある。また本活動に限らずどんな活動でも細かな物品確認や会場についての情報収集は怠らないようにしたい。

みんなで協力して知恵の輪をほどく様子

【学生によるESD活動支援】

奈良市内小学校における野外活動支援 実施報告書

英語教育専修 修士1回生 谷垣 徹

近畿ESDコンソーシアムでは、学生によるESD活動支援の一環として、奈良市内小学校において野外活動の活動支援を行っている。平成30年度は10校の小学校を対象に支援を行い、事前指導も含め、のべ75人の学生が支援に関わった。

◆支援実績一覧

実施日	小学校	場所	参加学生
5月17日(木)	奈良市立大宮小学校	奈良市青少年野外活動センター	小林、坂本、谷垣、栢山、畑下
5月29日(火)	奈良市立大安寺西小学校	奈良市青少年野外活動センター	後藤、西條、谷垣、林
6月13日(水)	奈良市立平城小学校	奈良市青少年野外活動センター	伊藤、奥平、下原、辰上、谷内、谷垣、仲村、三木
6月20日(水)	奈良市立富雄第三小学校	奈良市青少年野外活動センター	※気象警報発令のため支援中止
事前指導4回実施：5月23日(水)、30日(水)、6月1日(金)、15日(金)			
6月27日(水)	奈良市立済美小学校	奈良市青少年野外活動センター	伊藤、後藤、谷垣、取違、仲村、丸本、櫛
7月12日(木)	奈良市立六条小学校	生駒山麓公園野外活動センター	後藤、坂本、谷内、谷垣
事前指導1回実施：6月18日(月)			
9月19日(水)	奈良市立飛鳥小学校	奈良市青少年野外活動センター	木多、糸、嶋田、谷内、仲村
事前指導1回実施：9月13日(木)			
9月20日(木)	奈良市立東市小学校	奈良市青少年野外活動センター	木多、後藤、谷垣、櫛
10月2日(火)	奈良市立鼓阪北小学校	奈良市青少年野外活動センター	谷垣、櫛
事前指導2回実施：9月5日(水)、21日(金)			
10月3日(水)	奈良市立西大寺北小学校	奈良市青少年野外活動センター	岡本、糸、後藤、仲村、林、藤井
事前指導2回実施：9月7日(金)、21日(金)			

◆支援内容

【事前指導】 キャンプファイヤーのスタンプ指導、キャンプソング指導など

【当日指導】 オリエンテーリングの補助、野外炊飯の補助、キャンプファイヤーの進行・補助など

【学生によるESD活動支援】

奈良市立大宮小学校 野外活動 支援報告書

英語教育専修 学部3年生 坂本和音

1. 実施日 平成30年5月17日(木)
2. 場所 奈良市青少年野外活動センター
3. 参加者 奈良市立大宮小学校 第5学年児童101名、引率教員3名他
谷垣徹、坂本和音、栢山菜々、畑下さつき、西條秀哉、小林真理納(ユネスコクラブ)
井奥康樹(奈良ユネスコ協会青年部)
4. 活動支援内容

平成30年5月17日(木)～18日(金)、奈良市少年野外活動支援センターにおいて、奈良市立大宮小学校第5学年の野外活動が行われ、本学学生6名及び奈良ユネスコ協会青年部の学生1名がその支援に当たった。主に1泊2日のうちの1日目に行われたキャンプファイヤーの活動支援を行った。支援の具体的な内容としては、キャンプファイヤー開始前の準備(薪組みやトーチ棒の製作)、児童らへの指導(点火を行う際の動き、トーチ棒の取り扱いについて)、学生主導のファイヤーゲーム2種類と歌指導が挙げられる。

今回の野外活動支援を以下の2点で振り返る。第1に活動を通じた児童との交流について、第2に学生側の学びについてである。

第1の活動を通じた児童との交流についてである。今回の支援ではキャンプファイヤーだけでなく、それ以外の時間で児童らと交流することができた。児童らに「野外活動はどうですか?」と、問いかけるとその日のオリエンテーションや飯盒炊飯等のプログラムについて、楽しかったことや学んだこと、キャンプファイヤーをととても楽しみにしていること、などを次々に答えてくれた。私は単にキャンプファイヤーの補助だけで支援活動を終わるというのではなく、その活動以外で互いにコミュニケーションを取って知りあうという交流ができるのも、野外活動支援の大きな魅力であると感じた。

第2に学生側の学びについてである。今回の支援の参加者には野外活動支援自体が初めてだという学生もいた。児童らと一緒にいるキャンプファイヤーの雰囲気、支援する側としての意識、薪の組み方やゲームの進行などの基本的なことまで、今回の活動を通して実に多くのことをも伝えることができた。この経験は今後の野外活動支援に大きく役立てられ、学生側の意欲の向上にもつながることと思う。また、今回の野外活動では児童らがグループに分かれて行うスタンプをキャンプファイヤーのメインとしていた。学生らはその様々なスタンプから小学生の児童らならではの自由で楽しい発想や動き、練習の成果を発揮しようと奮闘する姿勢を感じることができたことと思う。

今年度初の野外活動支援を無事に終わることができた。これからもこのような貴重な機会をいただけることに感謝し、今年度の野外活動支援も精いっぱい取り組んでいきたい。



学生らが薪組みをする様子

【学生によるESD活動支援】
奈良市立大安寺西小学校 野外活動 支援報告書

国語教育専修初等教育学部 1 回生 西條秀哉

1. 実施日 平成 30 年 5 月 29 日 (火)
2. 場 所 奈良市青少年野外活動センター
3. 参加者 奈良市立大安寺西小学校 第 5 学年児童 7 8 名、引率教員 2 名他
谷垣徹、西條秀哉、後藤旭、林祐希 (奈良教育大学ユネスコクラブ)
4. 活動支援内容

今回は、キャンプファイヤーの火の準備・管理をするファイヤーキーパーとして大安寺西小学校での野外活動支援をさせていただくことになった。具体的な活動内容として、事前準備では木を組み立てて薪を製作し、トーチ棒に灯油をつけた。キャンプファイヤーが始まってからは火の大きさや明るさの調整をし、子ども達が不用意に火に近づかないように声掛けや注意をした。

今回の野外活動支援で私たちは、ファイヤーキーパーの技術と役割の 2 点を学んだ。

一点目の技術的な面においては、木を切る時は木を抑える方の手に軍手を二重にしてはめることや、灯油をトーチ棒につけるときは空のバケツに細かく折った新聞紙を敷いてつけること、スタンプ中では周りの子ども達がスタンプの代表として前に出ている子どもの顔をみえるように火の方を向いて話すことがよいことなどを学んだ。今回教わった技術は今後野外活動支援に参加させていただく際にも必ず有用になってくるものであるのでしっかり復習しておきたい。

そして二点目のファイヤーキーパーとしての役割については、ファイヤーキーパーがただ単に薪を組んだり、火の相手をしたりすればよいという単なる裏方作業なのではないということを実感した。例えば、事前準備の間に様子が気になって薪を見に来た子ども達やクワガタムシを捕まえて見せに来てくれた子どもと会話したり、スタンプ中に子ども達と挨拶や会話をしたりすることも役割の一つだ。

また、野外活動のメインイベントのひとつであるキャンプファイヤーに薪を組み立てるところから参加し、子ども達の楽しむ様子を間近で見て実際に子ども達とかかわることで子ども達の一生の思い出に深くかかわる仕事であるということの責任の大きさをひしひしと感じた。

今回の野外活動支援ではキャンプファイヤーの始めから終わりまで火の近くでファイヤーキーパーの仕事をさせて頂けた。故に普段以上に火を触り、ファイヤーキーパーとしての経験を重ねることができた。そして実際にファイヤーキーパーの仕事を実践していく中で、ファイヤーキーパーを一人でこなすことは到底厳しいものだと感じたので、今回の経験を忘れずに次回以降の野外活動支援でもファイヤーキーパーの仕事を繰り返して技術や子ども達とのコミュニケーション能力を高め、自分でもファイヤーキーパーの仕事ができるようになりたいと思う。



キャンプファイヤーの様子

【学生によるESD活動支援】

奈良市立平城小学校 野外活動 支援報告書

教職大学院2回生 谷内 裕也

1. **実施日** 平成30年6月13日（水）
2. **場所** 奈良市青少年野外活動センター
3. **参加者** 谷内裕也、谷垣徹、伊藤拓海、下原舞、櫛乃里花、
仲村幸奈、奥平茜、三木菜々子、辰上亜弥子（奈良教育大学ユネスコクラブ）
新田結子（奈良ユネスコ協会青年部）
奈良市立平城小学校 第5学年児童ならびに引率教員6名他

4. 活動支援内容

平成30年6月13日（水）に、奈良市青少年野外活動センターにおいて、奈良市立平城小学校第5学年の野外活動が行われ、本学学生9名他がその支援にあたった。オリエンテーリング、野外炊飯、キャンプファイヤーの活動支援を行った。当日は、曇天ではあったが次第に天候に恵まれ、すべてのプログラムは予定通り行うことができた。

今回の野外活動支援を通して学んだことを3つ挙げたい。一つ目に「教師という仕事」、二つ目に「学年経営」、三つ目に「本気から得られるもの」についてである。

一つ目の「教員という仕事」についてであるが、学生にとって教員という仕事はあこがれである。今回のように教員の立場で子どもと関わることができるのは、貴重な機会である。野外活動を通して子どもたちに何を学ばせ、何を感じさせたいのかを考えることが教員は重要である。考えるからこそ思いや工夫に反映されると学んだ。

二つ目は「学年経営」についてである。学年という単位で子どもたちを育てていくという考え方を学ぶことができた。そうした中で、学年の方向性を一致させることや子どもたちの目指す目標等を共通認識させることは当然である。子どもにもわかる目標を掲げ、常に意識ができるものにするのは教員の団結力も増す。オリエンテーリングでは、広いフィールドで子どもたちに班行動をさせる。安全という担保を確保するためにも、教員の分掌は事細かくなっている。教員の連携によって一つひとつの行程がなされていくのを教員の立場で見ることができたのは私にとって大きな学びとなった。

三つ目の「本気から得られるもの」である。キャンプファイヤーが始まる前から、教員と子どもが本気になって同じ思いを持っていた。私はギターとして携わったが、子どもたちの表情や声の本気を物語っていた。これまでの教員の指導もあるが、なにより教員の思いが子どもたちに伝わった時間だったと感じている。教員ももちろんだが、子どもたちが主役となってキャンプファイヤーを創っていた。

今回の野外活動支援では、教員の想いととも本気という気質を学んだ。私も子どもを本気にさせることができるような資質や技量を身につけていきたい。だが、資質や技量のみならず、野外活動を通して子どもに何を学ばせ、何を感じさせたいのかを考えることも大切にしたい。そのためにも、これからも野外活動支援に積極的に参加して、様々な教員の思いや工夫を学んでいきたい。



キャンプファイヤーに向けて
気持ちを高める様子

【学生による ESD 支援活動】

奈良市立済美小学校 野外活動 支援報告書

数学教育専修 1 回生 取違 隆馬

1. 実施日 平成 30 年 6 月 27 日 (水)
2. 場所 奈良市青少年野外活動センター
3. 参加者 奈良市立済美小学校 第 5 学年児童 66 名、引率教員 2 名他
谷垣徹・伊藤拓海 (大学院)
丸本まりな・仲村幸奈・櫛乃里花・取違隆馬・後藤旭 (学部生)
4. 活動支援内容

平成 30 年 6 月 27 日～28 日、奈良市青少年野外活動センターにおいて、奈良市立済美小学校第 5 学年の野外活動が行われ、本学学生 7 名がその支援に当たった。一泊二日のうちの 1 日目に行われたオリエンテーリング及び野外炊飯、キャンプファイヤーの活動支援を行った。当日は晴天に恵まれ、足を怪我した子どもなどはいたものの、無事に終えることができた。

この活動支援で学んだことは主に 2 つある。事前の下調べの大切さについてと、子どもとのコミュニケーションについてである。

一つ目は、事前の下調べの大切さについてである。オリエンテーリングの際、山道で最後尾の子どもたちについていったのだが、道の長さを知らなかったため、途中で私も含め全員の水分が尽き、出口にたどり着く頃にはふらふらする子どもが出てきた。また、野外炊飯において、火のおこし方を知らなかったために上手く火をおこせなくて調理にかなり手間取った班があった。これらに共通して言えるのは、予め活動支援内容に関する下調べが足りなかったために当日苦労したということである。野外活動の大変さを感じると同時に、これからの活動において気を引き締められるいい機会となった。

二つ目は、子どもとのコミュニケーションについてである。私は今回が初めての野外活動支援ということもあり、とても緊張していた。そのため、行きのバスではあまり積極的に声をかけることができなかった。しかし、オリエンテーリングで子どもたちの踊りを見て、それに点数をつけるという役割を与えていただき、その後の活動の際に、子どもたちに踊りの点数に対する喜びや文句を言われているうちに色々なことを話しかけてくれる子どもが増えた。とても嬉しかったが、同時にきっかけとなる話題がなければ子どもたちに話しかけることが簡単にはできない自分の未熟さも実感した。子どもとのコミュニケーションの大切さ、そして子どもたちと関わる魅力を感じることができた。



オリエンテーリングの様子

この野外活動では教師を目指す立場としても、人間としても必要なことを多く学び、充実した 1 日となった。今後も野外活動支援に参加し、様々なことに取り組みながら、学びを深めていきたい。

【ESD学習支援活動】

奈良市立六条小学校 野外活動 支援報告書

英語教育専修 学部1回生 後藤旭

1. 実施日 平成30年7月12日(木)～13日(金) ※支援は7月12日(木)のみ
2. 場所 奈良県生駒山麓公園内野外活動センター(奈良県生駒市俵口町2088番地)
3. 参加者 後藤旭・坂本和音(学部生)・谷垣徹(大学院生)・谷内裕也(教職大学院生)
4. 活動支援内容

平成30年7月12日、奈良県生駒山麓公園内野外活動センターにて奈良市立六条小学校の野外活動が行われた。野外活動のプログラムの一つであるキャンプファイヤーの支援に本学学生が関わった。

今回の野外活動支援で、私は3つのことを学んだ。一つ目は先生とのコミュニケーションの大切さ、二つ目は臨機応変に動くことの必要性、そして三つ目は児童の動きに気を配る大変さである。

まず先生とのコミュニケーションの大切さについてだ。私はギターを先生と一緒に弾く役割だった。そのため、どのタイミングでギターを弾き始めるのか、どのように進行するのか、などを本番前に細かく決めて共有しておく必要があった。今回は打ち合わせの段階でギターを持ち、音を鳴らしながら進行を確認した。確認し合うと、お互いが考えていることに相違が見つかったが、しっかりとその相違を話し合いながら訂正することができたので、本番は成功した。コミュニケーションをとることの大切さを大いに感じた。

次に臨機応変に動くことの必要性についてである。今回のキャンプファイヤーの会場は、参加した学生全員が初めて訪れる場所だった。そのため、いつもの会場とは様々な面で異なっていた。例えば、キャンプファイヤーの木の組み方である。今回は木を組むファイヤー台がなく、鉄製の大きな器の中に木を組んだ。その器は長年使われてきたようで、かなり変形していた。その器の変形に合わせて木を組まなければならなかったため、いつもの木の組み方とは異なる方法を用いて完成させた。私は臨機応変に動くことの必要性を感じた。これはキャンプファイヤーだけでなく、様々なことに共通して言えることだと感じた。



ゲームを楽しむ児童たち

最後は児童の動きに気を配る大変さについてである。ゲームなどをしていると児童たちは無我夢中に走り回る。中には柵を越えようとする児童もいた。人数の多い学校ほど、暗い中、児童全員に気を配るのは難しい。児童が火に近づかないようにする配慮はもちろん必要だが、児童の体調や動きにも気を配らなければならないことがわかった。

今回の野外活動支援は、会場が初めて訪れる場所だったことや人数が多かったこともあり、配慮と工夫が大きく必要とされた。そのことから、どんなときでも落ち着いて、場所や状況に合わせて行動できる力を養っていかなければならないと感じた。この意識を今後の活動にもつなげたい。

【ESD学習支援活動】

奈良市立飛鳥小学校 野外活動 支援報告書

国語教育専修 学部1回生 木多彩菜

1. 実施日 平成30年9月19日(水)～20日(木) ※支援は9月19日のみ
2. 場所 奈良市青少年野外活動センター
3. 参加者 木多彩菜・嶋田智沙恵・仲村幸奈・櫛乃里花(学部生)
糸綾香(大学院生)・谷内裕也(教職大学院生)

4. 活動支援内容

9月19日、奈良市青少年野外活動センターで飛鳥小学校の5年生による野外活動の支援を行った。支援内容は、午前はオリエンテーリングでのチェックポイント担当、午後は野外炊飯の補助とキャンプファイヤーのゲームを行うなど、児童たちと共に1日活動した。

今回の野外活動支援で、私は二つのことを学ぶことが出来た。一つ目は児童との距離感、二つ目は教員間の連携である。

まず、一つ目の児童との距離感についてである。今回の支援で私は、児童の活動にどこまで手を差し伸べていいのかということに悩んだ。私たち大学生が手を貸せばすぐにできてしまうことでも、児童たちだけで考えて工夫をしようとする、倍の時間がかかることもある。しかし、今回、飛鳥小学校の野外活動支援に参加させてもらって、児童たちが仲間と協力して工夫を凝らして、試行錯誤しながら時間をかけて活動することは、児童たちの成長にもつながり、さらにやり終えた後の児童たちは「自分たちだけで最後までできた！」という今までと違った達成感を味わうことが出来るのではないかと感じた。このことから、学校教育において児童が主体となって考えて行動できる環境を作ることで、主体的に行動できる児童が増えるのではないかと考えた。野外活動のような児童たちが自身で考えて行動しなければならない場合は特に、児童に任すことを大切にすべきであるとする。

二つ目の教員間の連携についてである。今回の飛鳥小学校の野外活動支援では施設外でのオリエンテーリングも支援させてもらった。施設の外に出て児童だけで行動するということもあり、いつ、どこを、どの班が通過したのかなどを事細かに先生方が連絡を取り合っている姿を見ることが出来た。オリエンテーリングだけに限らず、プログラムの進行が遅れた時や児童が体調を崩した時も、素早く丁寧に先生方で連絡を取り合っている様子は本当に素晴らしい、自分自身も見習っていきたくと思った。野外活動のような普通の学校生活と違う場では、教員間の連携はいつも以上に求められると考えられるが、普通の学校生活においても教員間の連携があるからこそクラス運営、学年運営、そして学校運営が出来ているのだと思う。今回の支援でこのことに気付くことが出来たのは私にとって大きな学びである。



キャンプファイヤーの様子

今回の野外活動支援は、私にとって初めての野外活動支援であった。慣れないことも多くあり、戸惑ってしまう部分も多々あったが周りにいてくれる学生スタッフ、飛鳥小学校の先生方、そして飛鳥小学校の児童のみんなに助けってもらったことで1日活動し終えることができた。今回の支援で学んだことを、次の野外活動支援や他の活動で活かし、さらに多くのことに気付き、学びを深めていこうと思う。

【ESD学習支援活動】

奈良市立東市小学校 野外活動 支援報告書

英語教育専修 学部1回生 後藤旭

1. 実施日 平成30年9月20日(木)～21日(金) ※支援は9月20日(木)のみ
2. 場所 奈良市青少年野外活動センター(奈良県奈良市阪原町25-1)
3. 参加者 後藤旭、木多彩菜、櫛乃里花(学部生)、谷垣徹(大学院生)
4. 活動支援内容

平成30年9月20日、奈良市青少年野外活動センターにて奈良市立東市小学校の野外活動が行われ、ユネスコクラブが支援を行った。支援内容は、屋内でのオリエンテーリング、アイスブレイキング、野外炊飯、雨天のためのキャンドルファイヤーである。

今回の活動支援で、私は3つのことを学んだ。1つ目は子どもたちと関わる時間の大切さ、2つ目は臨機応変に動くことの必要性、そして3つ目は先生方とのコミュニケーションの重要性である。

1つ目の子どもたちと関わる時間の大切さについてである。今回は、私にとって初めての一日を通じた支援だったので、とても緊張していた。子どもたちとの距離感が掴めず焦っていたが、子どもたちからアプローチしてくれてくれた。これまでの午後からの支援の時に比べて子どもたちとコミュニケーションを取る時間が多く、お互いに適度な距離感を取りつつ打ち解けることができた。子どもたちとの信頼関係も深くなったと感じた。そして、子どもたちの名前や性格の特徴などをいつもより把握することができた。やはり時間をかけた方が子どもたちとしっかり向き合うことができることを、支援を通して実感できた。

2つ目の臨機応変に動くことの必要性についてだ。私にとって、初めてのキャンドルファイヤーだった。キャンプファイヤーとは違い、ゲーム等を行う際もどんな雰囲気でも臨めばよいか分からなかった。先輩や経験のある同回生にアドバイスをもらいながらなんとか成功させることができた。初めての経験だとしても、もらったアドバイスと自分の経験を活用して臨機応変に動くことが大切だと感じた。子どもたちも盛り上がってくれた。子どもたちから「キャンドルファイヤー楽しかった」と言ってもらえた時には、一生懸命やってよかったと思うことができた。



キャンドルファイヤー

最後は、先生方とのコミュニケーションの重要性についてだ。当日雨天だったため、当初の予定を変更するところが多くあった。しかし、子どもたちもいるため、まとまった時間をとることができず、プログラムの合間を縫って打ち合わせを行った。先生方と学生の考えていることを共有しておくことは重要だ。短い時間でも、しっかりと先生方とコミュニケーションを取り、詳細を素早く確認することがとても大切であると感じた。

今回の野外活動支援は初めての経験が多く、先生や先輩にたくさん助けてもらった。今回学んだことを、自分のものにして次の活動に活かしていきたい。そして教員になった時、子どもたちと時間をかけてまっすぐ向き合っていきたいと感じた。

【学生によるESD支援活動】

奈良市立鼓阪北小学校 野外活動 支援報告書

英語教育専修2回生 櫛 乃里花

1. 実施日 平成30年10月2日（火）
2. 場所 奈良市青少年野外活動センター
3. 参加者 谷垣徹（大学院1回生）、櫛乃里花（学部2回生）
奈良市立鼓阪北小学校 教員、児童、複数名

4. 活動支援内容

平成30年10月2日、奈良市青少年野外活動センターにて奈良市立鼓阪北小学校野外活動が行われ、本学ユネスコクラブの学生2名が支援に参加した。事前指導として小学校を2度訪れ、キャンプファイヤーのスタンプ指導や歌の練習などを行った。当日は天候にも恵まれ、子どもたちと全力でキャンプファイヤーを楽しむことができた。

今回の活動支援より、以下の2点について考えた。第1に事前指導の重要性について、第2に子どもたちの前に立つ責任についてである。



キャンプファイヤーのようす

第1の事前指導の重要性についてである。事前指導を行うことで3つのメリットが得られると感じた。一つ目は学級の様子が見えやすくなることである。事前指導を通して子どもたちの特徴や学級の雰囲気をつかむことができ、当日の支援をスムーズに行うことができた。二つ目は歌の練習の回数を十分に確保できることである。キャンプファイヤー中は大きな声で歌う場面がある。この時にいかに、子どもたちが全力を出せるかがキャンプファイヤー全体の雰囲気を左右する。今回の支援では、事前指導時は大きな声を出すのは恥ずかしい、かっこ悪いというような様子も見られたが、本番は心を一つに全力で歌う子どもたちの姿が見られた。三つ目は信頼関係を築けることである。担任の先生との打ち合わせや事前指導での子どもたちとのふれあいによって、互いのことを知り関係を徐々に育むことができた。特に子どもたちが自分の名前を覚えて呼びかけてくれたことが心から嬉しかった。以上のようなメリットがあるため、大学の授業の合間を縫ってではあったが事前指導に参加できて本当によかったと思う。

第2の子どもたちの前に立つ責任であるが、支援当日はキャンプファイヤーの前に子どもたちの心を落ち着けるための時間を確保し、注意事項などについて話した。子どもたちは真剣に私の言葉に耳を傾けてくれたが、同時に怖気づく自分がいた。自分が間違ったことを伝えたりその場しのぎの言葉を発したりすれば、おそらく子どもたちは気付くはずである。なぜなら、子どもはこちらが思っている以上に大人の言葉に注目しているからである。支援させていただいている学生の立場だが、子どもたちから見れば立派な大人であり、そのことを常に意識して一挙一動に気をつけなければならないと感じた。

以上2点が今回の支援を通して感じたことである。前年に続き2年連続の支援であったが、去年とはまた違った雰囲気のキャンプファイヤーを子どもたちや担任の先生との協力で作ることができた。野外活動でのキャンプファイヤーは、子どもたちにとっては一生に一度といっても過言ではないので、そのことを意識しながらどの支援にも誠意をもって取り組みたいと感じた。

【学生によるESD支援活動】

ストップいじめなら子どもサミット 実施報告書

国語教育専修 学部2回生 坂元 亜衣

1. 目的

- ①奈良市の中学校の子どもたちによる、「いじめ」を許さない学校づくりに向けた取り組みについて地域の大人を交えて意見交流を行う。
- ②子どもたち自らが「いじめ」の問題を主体的に考え、未然防止の取り組みについて話し合う。
- ③子どもたちと地域や保護者が協働し、「いじめ」を許さない学校づくりを目指す。

2. 日時

平成31年2月2日(土) 13:00~15:30

3. 会場

奈良市教育センター(はぐくみセンター)

4. 参加学生

谷内裕也(大学院生)

坂元亜衣、下原舞、仲村幸奈、足立繁郁、狗飼菜々子、後藤旭、西條秀哉、下垣内渉平(学部生)

5. 参加生徒

春日(5)・若草(6)・都南(7)・登美ヶ丘(6)・登美ヶ丘北(3)・田原(3)・二名(3)・京西(7)・富雄南(4)・平城(7)・平城東(7)・富雄第三(7)・三笠(4)・伏見(4)・飛鳥(1)・富雄(3)・平城西(5)・興東館柳生(2)・都跡(2)・月ヶ瀬(2)・都祁(4)

※()内は参加生徒数。全21校 計92名参加

※各校引率教職員等 多数参加

6. 活動概要

(1)第1回事前研修

第1回事前研修は12月26日に奈良市役所で行われた。本活動ではユネスコクラブの学生3名が支援に携わり、主にアイスブレイクを担当した。今回が1回目であり、奈良市の中学校の生徒同士は初対面であったためとても緊張した雰囲気が漂っていた。その中でアイスブレイクを行うことで少しずつ緊張がほぐれたように感じられ、生徒の顔にも笑顔が見られた。また、その後の話し合いではそれぞれの話し合いの役割を決め、アンケートなどのデータをもとになぜいじめがおこるのかについて議論を行った。私たち大学生も中学生と一緒にいじめについて考えた。私たちは、参加学校ごとに人数のばらつきがあったので、特に人数が少ない学校への支援を中心にを行った。

(2)第2回事前研修

第2回事前研修は1月19日に奈良市役所正庁にて行われた。本活動ではユネスコクラブの学生5名が支援に携わり、前回同様、アイスブレイクを行った。生徒の緊張を和らげることを目的としていたが、今回は前回と異なり同じ学校の生徒が同じグループであったため和やかな雰囲気の中で行うことができた。会場が前回とは違い広かったため、全体が動くことのできるアイスブレイクを取り入れた。楽し



生徒による司会進行の様子

んで参加していた生徒が多かったように感じる。また、アイスブレイク後は学校ごとに自分たちの学校のいじめへの取り組みの現状について話し合ったり、いじめをなくしていくために自分たちにできることを考えポスターセッションを行ったりした。私たち大学生は学校ごとの進み具合を確認したり、声掛けを行ったりした。また、人数が少ない学校へは学生がついて話し合いやポスター作成のサポートを行った。



アイスブレイクの様子

(3) 第3回事前研修

第3回事前研修は2月2日に奈良市教育センターにて行われ、ユネスコクラブの学生5名が支援に携わった。本活動では今回からの参加であり、まだポスター作成などが完成していない中学校のサポートを行った。すでにポスターが完成し発表準備を行っている学校も多くある中で、短時間で同じくらいの完成度に持っていかなければならないことは難しいと感じた。また、午後からは子どもサミット本番があるため時間に追われながらの活動であった。その中でも生徒たちはしっかりと行動しており、役割分担を行っていた。それぞれがそれぞれの役割をきちんと全うしており、時間内にほぼ完成させることができた。最終の仕上げを、昼の休憩時間を用いてまで行っている生徒も見られ熱心さを感じた。

(4) 本番

本番では参加学校数が多いため子どもサミット本番の開会式と閉会式のみ一つの部屋に集まって行われ、活動は二つの部屋に分かれて行った。そのため、ユネスコクラブの学生も二手に分かれアイスブレイクを行った。子どもサミット本番では生徒だけでなく、保護者や地域の方々にも参加していただいたため、とても人数が多かった。生徒たちも自分の班に大人が入っているという、いつもとは異なる状況に戸惑っている様子も窺えた。今回のアイスブレイクは、コミュニケーションを中心としたものであったため大人から子どもまで楽しめるものであり、少しは緊張をほぐすことができたのではないかと感じている。その後は、学校ごとに保護者や地域の方々と話を交えて話し合いを行った。今回の話し合いで生徒がまだ疑問に思っていることや悩んでいることに対して保護者や地域の方々からアドバイスや考えをもらうという形式であった。とても真剣に話し合いを行っていて、どのグループも話しが絶えなかった。それから学校ごとに作成したポスターを用いてポスターセッションを行った。今までも何回か事前研修でポスターセッションを行ってきたが、それよりも高いレベルで発表を行っていて感心させられるものばかりであった。



本番での話し合いの様子

今回の子どもサミットでは、奈良市の全ての中学校が参加を行いいじめについて考えたが、これはとても意義のあることだと感じた。また、いじめを身近なものとして捉え、自分の学校にどう活かすかを考えることで学校全体への働きかけにも繋がる良い活動であると感じた。

近畿 ESD コンソーシアム・奈良教育大学ユネスコクラブ
 そうだ、海外へ行こう。フィリピン・スタディーツアー報告会 開催報告書

報告者：奈良教育大学大学院 谷垣 徹

1. 目的

2015年に国連サミットで採択された持続可能な開発目標（SDGs）達成に向けた取り組みが世界中で進められている。SDGsの第1が貧困の撲滅、第2が飢餓の終焉であり、その達成のためには、開発途上国に住む人々への積極的な支援が必須である。今回、本学学生が3月にフィリピンを訪問し、様々な現地の情報を得ることが出来た。フィリピンで知り得た情報を共有することで、途上国の人々の生活への関心を高めることを目的とする。

2. 主催

近畿 ESD コンソーシアム
 奈良教育大学ユネスコクラブ

3. 会場

奈良教育大学 次世代教員養成センター1号館

4. 開催日時

平成30年5月19日（土）15:00～18:00

5. 参加者

計16名
 (内訳) 本学学生10名 本学教職員2名 一般4名

6. 内容

【第1部】仲間と出会う

- ◆企画の趣旨説明 ◆アイスブレイキング ◆自己紹介

【第2部】発表者の体験・想いを知る

- ◆発表者による体験談の発表

①アクセス「フィリピン・スタディーツアー2018春」

奈良教育大学 特別支援教育専修 学部4回生 藤井 愛華

②GiFT「Diversity Voyage2018春・セブ教育コース」

奈良教育大学 英語教育専修 修士1回生 谷垣 徹

コーディネーター：香芝市立真美ヶ丘東小学校 教諭 仲 孝昌 氏

- ◆パネルディスカッション

- ・ 実践発表に対する質疑・応答
- ・ 参加動機、参加しての感想、参加することで得たもの

【第3部】自分の「これから」を考える

- ◆「私のアクションプラン」を考える ◆全体総括



報告会のチラシ

7. 発表の概要

(1) アクセス「フィリピン・スタディーツアー2018 春」

(発表者：奈良教育大学 特別支援教育専修 学部4回生 藤井 愛華)

まずは「フィリピン・スタディーツアー2018 春」に参加した藤井から、スタディーツアーに参加した経緯、ツアーの参加にあたって不安に思っていたこと、フィリピンで目にした貧困の状況、フィリピンと日本の過去と現在の関係などについて、写真を用いて発表があった。実際に現地に行く前は不安な気持ちも大きかったようだが、「ぜひ大学生の間に現地に行って、現地でしか感じられないことをたくさん感じてほしい」と語った。



スタディーツアーの報告をする様子

(2) GiFT「Diversity Voyage2018 春・セブ教育コース」

(発表者：奈良教育大学 英語教育専修 修士1回生 谷垣 徹)

次に「Diversity Voyage2018 春・セブ教育コース」に参加した谷垣から、このプログラムの概要と現地を訪れて感じたこと、学んだことについて発表を行った。全国各地の大学から多様な背景を持つ参加者が集まり、「グローバル・シティズンシップのコンセプトをもとに、世界をよりよくする新しい英語教育プログラムを開発する」というテーマに取り組んだ。現地の仲間との共創を通して感じた「心の対話」の大切さ、英語教育の必要性、子どもたちの様子などについて報告した。

(3) パネルディスカッション

以上二つの発表を受けて、コーディネーターの仲孝昌氏の進行のもと、参加者からの質問に対しての応答を行いながら、参加者同士で意見交換する場を持った。それぞれの経験や考えを交流しあい、活発な意見交換ができ、参加者の海外に対する関心が高まったように感じた。



パネルディスカッションの様子

(4) 「私のアクションプラン」を考える

本報告会に参加して感じたこと、学んだこと、またこれから取り組みたいことなどについて個人で考え、アクションプランを立て、参加者同士で共有しあった。参加者一人ひとりが自分の心と向き合っ、感じたことを共有しあうことが出来た。

世界遺産を体感 東大寺に泊まろう 支援報告書

英語教育専修 修士1回生 谷垣 徹

1. 目的

- (1) 世界遺産での貴重な宿泊体験を通し、歴史文化に学ぶ態度を涵養する。
- (2) 仲間と協力し、やり遂げる達成感を味わう。
- (3) 大仏造立の歴史に触れ、現代の私たちの暮らしと照らし生き方を考える

2. 開催日 平成30年10月26日（金）～28日（日）

3. 開催場所 東大寺二月堂および東大寺境内周辺

4. 参加者 小学生（奈良県、大阪府、兵庫県、東京都より）30人
 高校生・大学生・大学院生スタッフ 15人
 NPO 法人奈良地域の学び推進機構スタッフ 11人

5. テーマ 「東大寺一行基と大仏造立」

6. 日程

【1日目】平成30年10月26日（金）

時間	活動
19:00	参加者受付開始@東大寺南大門
19:15～20:15	ナイトウォーク（二月堂へ移動）
20:30～20:50	アイスブレイキング①
20:50～21:10	夜食
21:10～21:30	東京組合流・開会式
21:30～22:15	アイスブレイキング②・班活動の時間
22:15～22:40	就寝準備
22:40	就寝

【2日目】平成30年10月27日（土）

時間	活動
6:00	起床
6:20～7:30	朝の集い・清掃
7:30～9:00	朝食・片付け
9:00～10:00	朝のお勤め・読経
10:00～13:00	東大寺探索
13:00～14:30	昼食・片付け・夕食準備
14:30～15:30	探索振り返り①
15:30～17:00	写仏

17:00～18:30	入浴@東之阪公衆浴場
18:30～20:00	夕食・片付け
20:00～20:45	北河原副院長の講話
20:45～21:00	就寝準備
21:00	就寝

【3日目】平成30年10月28日（日）

時間	活動
6:00	起床
6:20～7:00	朝の集い・清掃
7:00～8:30	朝食・片付け
8:30～9:00	日本文化体験（川柳）
9:00～10:00	朝のお勤め・読経
10:00～11:15	探索の振り返り③
11:30～12:30	振り返り発表会
12:30	解散

7. 参加学生の役割分担

運営班スタッフ	PD・MD 総括		チーフ カウンセラー		カメラ		活動班 サポート		運営班 サポート	
	谷垣		仲村		林		木多		ステフィー	
活動班リーダー	1班		2班		3班		4班		5班	
	後藤	小林	木村	北	山田	中谷	西條	藤本	畑下	山本

8. 成果と課題

【成果】

運営面

- 昨年よりも学生主体の運営ができた。
- 運営班の学生の組織化ができた。（PD・MD 総括、チーフカウンセラー、活動班サポート、MD サポート等）

プログラム面

- 「行基と大仏造立」というテーマ設定のもと、活動相互のつながりが見えた。
- 北河原副院長に何度も来ていただいたことで、活動がより充実した。
- 事前に学生で綿密な詳細タイムテーブルを作成したことで、当日プログラムの臨機応変な対応、変更ができた。

活動面

- 男女混合班にして学生を2人にしたことで、学生間の連携、学生体調不良時の対応などがスムーズだった。
- 活動班に班長（参加児童）を設け、班長会議を行い、班長中心の班活動を心がけた。

【課題】

運営面

- NPO 職員と学生間の企画段階での連携不足。
→事前に合同での打ち合わせが必要。職員と学生の役割の明確化が必要。
- 物品の不足が目立った。ユネスコクラブの持参物品で対応できた。

プログラム面

- 開催時期の再検討が必要。(東京組が後から合流する形は望ましくない。)
- プログラムの時間設定に無理があった。タイムスケジュールの見直しが必要。
- プログラムの位置づけ、学びの価値づけの再検討が必要。

活動面

- 活動班の学生間の連携不足。(班活動の目標、方向性の明確化、翌日に繋げる1日の振り返りの充実など)
- 内容面での学びだけでなく活動面での学び(集団生活)の振り返りの充実。

9. 活動の様子

【1日目】平成30年10月26日(金)



【2日目】平成30年10月27日(土)





【3日目】平成30年10月28日（日）



近畿ESDコンソーシアム

第1回「集まれ！ESD子ども広場」開催報告書

英語教育専修 修士1回生 谷垣 徹

1. 目的

奈良教育大学では、『地域と連携した「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成に向けた持続可能な発展のための教育活性化プロジェクト』の一環で、大学キャンパスや奈良町、奈良公園を会場に、奈良市内のユネスコスクールに通う小中学生を対象としたESDを体験的に学ぶ、1泊2日の宿泊活動として、平成24年度から「ESD子どもキャンプ」を実施してきた。また、平成26年度からは日本ユネスコ国内委員会のグローバル人材の育成に向けたESDの推進事業を受託して設立したコンソーシアムの事業の一つとして継続実施してきており、これまでに6回開催している。

平成30年度は、「奈良ASPネットワーク「集まれ！ESD子ども広場」」として、日帰りでESDを体験的に学ぶイベントを実施する。5月と12月に開催を予定しているが、年度内に複数回行うことで、様々なテーマにチャレンジすることができ、ESDの学びの幅が広がると考えている。さらに、子どもと関わる機会が増えることで、教員を志望する学生にとっても学びが多くあると考える。本イベントの主たる目的は次の二つである。

- (1) ESD（持続可能な開発のための教育）を楽しく体験的に学び合う。
- (2) 子どもと関わる活動を通して、教員を目指す上で必要な資質・能力を身につける。

2. 開催日 平成30年5月27日（日）

3. 開催場所 奈良教育大学キャンパス及びその周辺地域（奈良町）

4. 参加者 小学生 10人（奈良市内の小中学校より）
大学生・大学院生 29人
教職員 17人（大学・近隣の小中学校等より）

5. テーマ 「ならまちの町家～昔の人の知恵や工夫から学ぼう～」

6. 日程

時間	活動
8:30	参加者受付開始
9:00～10:00	オリエンテーション ○アイスブレイキング ○班活動の時間 ○テーマソング練習
10:15～13:15	テーマ別フィールドワーク「ならまちタイムトラベラー」
13:15～14:00	昼食
14:00～14:15	集合写真撮影
14:15～14:45	振り返り発表会準備
14:45～15:30	振り返り発表会
15:30～16:00	ESD勉強会
16:00～16:45	さよならの集い

16:45	解散
-------	----

7. 参加学生の役割分担

(事前準備)

(企画班)

◎：代表 ○：副代表

実行委員会	◎丸本	仲村	糸	谷垣	仲村	櫛	谷内
オリエンテーション	◎種瀬	○北中	森本	坂本	藤井り		
テーマ別フィールドワーク	◎下原	木村	佐野	田中	高田	守部	

(当日)

◎：代表

運営班スタッフ		◎丸本	仲村	糸	櫛	谷垣	下原	谷内
		野瀬	山本	中田	義根			
活動班リーダー	1班	◎北中	谷村	高田	足立	部谷		
	2班	◎守部	森本	坂本	西條	堀田		
	3班	◎種瀬	佐野	藤井り	後藤	桑田		

(当日)

◎：代表

運営班スタッフ		◎丸本	仲村	糸	櫛	谷垣	下原	谷内
		野瀬	山本	中田	義根			
活動班リーダー	1班	◎北中	谷村	高田	足立	部谷		
	2班	◎守部	森本	坂本	西條	堀田		
	3班	◎種瀬	佐野	藤井り	後藤	桑田		

8. 活動の概要

(1) オリエンテーション

オリエンテーションは、1日の始まりに位置する。初めて出会う友だちや学生と1日過ごすため、ほとんどの子どもがとても緊張しており、その緊張をほぐすアイスブレーキングをして全体的な雰囲気作りを行った。他にも1日の活動の見通しを立て、今日1日を楽しみに思ってもらうように構成した。反省点としては、ゲーム自体はわかりやすかったが、ゲームの内容的に子どもの緊張を完全にほぐせなかったことがあげられる。しかし、学生は模造紙を有効に使ってわかりやすくテーマやタイムスケジュールを発表したり、子どもの緊張を解きほぐし、班や全体で仲良くなれるようなゲームを行ったりして、全体の雰囲気を少し和ませることができた。(種瀬)



初めて出会った仲間と1日の始まり

(2) テーマ別フィールドワーク

伝統的な町家建築と今自分たちが住んでいる家を比べて、先人の知恵や工夫を知り、これからの住まいと町並みを考えることを目的に、奈良町を舞台に大学生と小学生、計8～9名ほどのグループでフィールドワークを行った。子どもたちの興味・関心を高めるために「奈良町にタイムスリップした」という設定を設け、道中では大学生による解説や、事前に配布したビンゴカードに載せられている写真のものを実際に探すなど、様々なアプローチで子どもたちに奈良町についての情報の提示を行った。子どもたち自身が、積極的に「これは何？あれは何？」と視点を広げながら奈良町を歩き、自身の住む家との比較を行うことで、過去の人々の工夫やその思いについての考えている様子が見受けられた。(高田)



町家の工夫を学ぶ子どもたち

(3) 振り返り発表会

振り返り発表会では、子どもたちが奈良町でのテーマ別フィールドワークを通して発見した、今の家と違うところや未来に残したいと思う家の工夫を撮影した写真をプロジェクターで写しながら、一人ずつ気付いたことや発見したこと、いいなと思ったことなどを発表した。子どもたちは、自分の住む家と比べて異なるところや、「今の家に活かせるのではないか」と思った奈良町の町家の工夫などについて丁寧に考え、発表することができていた。(下原)



フィールドワークでの学びを発表する様子

(4) ESD 勉強会

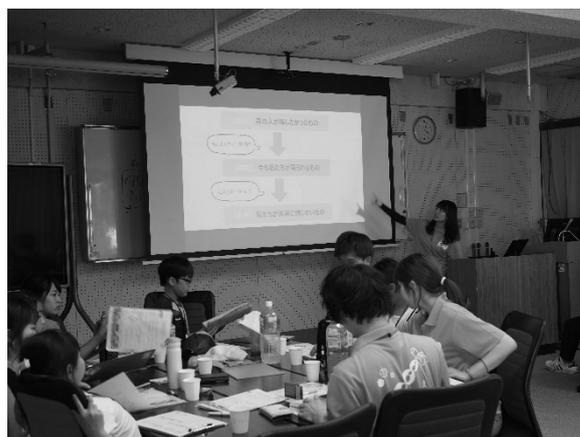
ESD 勉強会では、振り返り発表会での発表を踏まえて先人の知恵や工夫を振り返るとともに、先人が残したかった伝統・文化や先人の思いについて知り、その思いを受け継ぎ、これからも守っていこうという気持ちを育てるために、持続可能な街づくりについての話をした。現在も残っていて、私たちが見ることのできるものは、昔の人が「残したい」という気持ちを持って守ってきたものであり、私たちはそれらを尊重すべきである。しかし、暮らしの形やニーズは時代によって変わるため、昔の工夫をそのままに活用したり、昔の暮らしに戻したりすることは出来ない。昔の暮らしから今の暮らしを見つめなおすことで初めて、より良い未来の暮らしについて考えることができることを訴えた。持続可能な社会を考える時には、「知ること、伝えること、行動すること」が大切であることを伝え、最後に、現代のニーズに合わせ利便性を重視しつつも、先人の思いを受け継ぎ、伝統を守っていくために、自分がしたいことや自分に出来ることを、具体的に考えてもらい、班内で発表してもらった時間を作った。子どもた

ちは、学生リーダーのアドバイスも受けながら、自分ができることを考え、「やっぱり伝えることが大事だと思う」、「もっと知りたいからもっと調べてみる」などの意見が出て、明日から自分ができることについて具体的に考えることができていた。(下原)

(5) さよならの集い

この日の最後に、1日の活動の締めくくりとして「さよならの集い」を行った。「さよならの集い」は、参加してくれた子どもたちとの出会いを喜び、また会いたいという思いが込められている「See you again」という曲から始まった。その後、学生代表から1日のまとめと最後のメッセージが送られ、参加してくれた

子どもたちに学生からのプレゼントとして、1日の活動の様子の写真をまとめた振り返りムービーを上映した。そして、1日の活動を共にした活動班で振り返りの時間を取り、集合写真が貼られた画用紙にそれぞれがメッセージを書き合ったり、最後に一言ずつお別れの言葉を述べたりと、班それぞれの最後の時間を過ごしていた。最後に、この日何度も歌ってきたテーマソング「みらいへ」を全員で歌い、第1回集まれ！ESD子ども広場が無事終了した。(下原)



自分たちにできることって？



みんなで歌ったテーマソング「みらいへ」

9. 成果と課題

【成果】

- 先人の知恵や工夫を知り、今に活かせることはないかと考え持続可能な暮らしについて考えることができた。 ⇒テーマ別フィールドワークのねらいを達成できた。
- フィールドワークが楽しく、学びをさらに深めるためもう一度家族で回ってみたいという話を聞くことができた。 ⇒ESDを楽しく体験的に学ぶという本企画のねらいを達成できた。
参加者の行動化を促すことができた。
- 事後の報告書の中に、子どもの命を預かることの責任についての記述が多かった。
⇒事前研修会の内容が活かされている。

【課題】

- 参加者の数が少なかった。 ⇒広報の仕方に工夫が必要である。
- 事後の報告書の中に、子どもたち同士や子どもと学生間での関係性の構築が難しかったという記述が多かった。 ⇒私たち学生の立ち回り方を考えなければならない。

近畿 ESD コンソーシアム 第2回「集まれ！ESD 子ども広場」実施報告書

英語教育専修 修士1回生 谷垣 徹

1. 目的

奈良教育大学では、『地域と連携した「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成に向けた持続可能な発展のための教育活性化プロジェクト』の一環として、奈良市内のユネスコスクールに通う小中学生を対象とした、ESD を体験的に学ぶ1泊2日の宿泊活動として、「ESD 子どもキャンプ」をこれまでに6回実施してきた。

平成30年度は、近畿 ESD コンソーシアム事業として日帰りで ESD を体験的に学ぶ「集まれ！ ESD 子ども広場」を実施している（5月と12月に実施）。

5月：「ならまちの町家～昔の人の知恵や工夫から学ぼう～」(後援：奈良市教育委員会)

12月：「灯す～あなたの心に、私の心に～」(後援申請中：奈良市教育委員会)

また、本事業の目的は次の二つである。

- (1) ESD (持続可能な開発のための教育) を楽しく体験的に学び合う。
- (2) 子どもと関わる活動を通して、教員を目指す上で必要な資質・能力を身につける。

2. 開催日 平成30年12月2日(日)

3. 開催場所 奈良教育大学キャンパス

4. 参加者 小学生 16人(奈良県内の小学校より)
中学生 1人(奈良市内の中学校より)
大学生・大学院生 38人
教職員 9人(大学・近隣の小中学校等より)

5. テーマ 「灯す～あなたの心に、私の心に～」

6. 日程

時間	活動
8:30	参加者受付開始
9:00～10:00	オリエンテーション ○アイスブレイキング ○班活動の時間 ○テーマソング練習
10:15～13:15	キャンパスフィールドワーク「奈教の果てまでヒロバQ！」
13:15～13:30	集合写真撮影
13:30～13:45	昼食
13:45～14:30	ESD勉強会
14:30～16:20	キャンドルホルダー作成
16:30～17:45	キャンドルナイト
17:45～18:15	さよならの集い
18:15	解散

7. 参加学生の役割分担

(企画班)

◎：代表

実行委員会	◎丸本	仲村	櫛	下原	中田	東谷
	山本	奥平	林	取違	下垣内	谷垣
オリエンテーション	◎畑下	津森	田中	藤井ま	西條	
キャンパスフィールドワーク	◎森本	谷垣	坂本	仲村	小倉	足立
キャンドルホルダー作成	◎種瀬	谷内	佐野	伊藤	坂元	桑田
	本江	奥田				
キャンドルナイト	◎木多	◎後藤	◎櫛	糸	木村	野瀬
	北中	栞山				

(当日)

◎：代表 ○：副代表

運営班スタッフ	総括・進行・フリー	◎丸本	○谷垣	○仲村	○下原
		櫛	奥平		
	裏方	◎木村	糸	東谷	取違
	活動班サポート	◎坂本	下垣内	山本	桑田
	プログラム進行サポート	◎小倉	種瀬	本江	木多
活動班リーダー	1班	◎北中	谷内	坂元	中田
	2班	◎後藤	佐野	藤井ま	栞山
	3班	◎畑下	伊藤	田中	足立
	4班	◎西條	森本	野瀬	津森

8. 活動の概要

(1) オリエンテーション

オリエンテーションでは、今日初めて出会った友達と親睦を深め、そして緊張をほぐす目的の元、いくつかのアイスブレイキングを行った。アイスブレイキングでは、「明かり」に重きを置いた導入などを行い、子どもたちに楽しくテーマを理解してもらおうと考え様々な工夫を行った。また、12月開催だということもあり、クリスマスツリーなどを用いて季節感も大切にしました。アイスブレイキングの後には、班活動の時間を設け、班の名前や子どもリーダーなどを決めた。これには、活動班の仲を深め、士気を高める役割があった。個性溢れる名前などがたくさんあり、非常に面白かった。(仲村)



参加者みんなで「楽しむぞ！」

(2) キャンパスフィールドワーク

キャンパスフィールドワークでは「奈教の果てまでヒロバQ!」というタイトルのもと、当たり前を問い直すためのミッションを五つ組み立てた。「あたりまえ星人」からの挑戦状として、子どもたちにとって当たり前である「明かり」「水」「人」「勉強」「情報」を奪われるという設定のもと、その当たり前を取り返すために大学キャンパス内でフィールドワークを行った。「当たり前のものを失ったとき、どうやって生きていくのか」という問いから、子どもたちに「もやもやした気持ち」を抱かせ、次のESD勉強会へとつなげた。(森本)



ミッションにチャレンジする様子

(3) ESD 勉強会

ESD 勉強会では、災害によって「当たり前」が奪われる状況やそれによる心理的な被害を想定し、普段から災害に備える大切さについて学んだ。子どもたちは、イラストが描かれたボードを手に普段の生活と災害時の状況を比べ、自分ならどんな気持ちになるか、どんな行動をとるかについて真剣に話し合った。実施後に学生間でいった振り返りでは、以下のような反省点が上がった。①自分の意見を言うのが得意な子とそうでない子があり、発言の機会が偏ったり話し合いが行き詰ったりした。②プレゼン形式で学生が一方的に話を進めるのではなく、子どもの発言を拾いながら内容を深めるべきだった。③ESD と防災の関連についてもっと言及すべきだった。他にも改善点は多々あったものの、学生にとっては防災教育を行う難しさと責任の重さを実感する機会となり、子どもたちにとっては普段から災害への意識を持つ必要性を学ぶ機会となり、非常に有意義な企画となった。(櫛)



「備え」の大切さを学ぶ子どもたち

(4) キャンドルホルダー作成

この時間で子どもたちは、1日の活動を通して学んだことを「キャンドルホルダー」という形で表した。子どもたちは、自分の個性をキャンドルホルダーという形に表すこと、また学んだこと・感じたこと・考えたことを整理して漢字に表した。この時間を通して、学生は安全性・時間構成・個性の出し方・役割分担・他班との連



世界に一つだけのキャンドルホルダー

携など、多角的・多面的な視点から一つの企画をみんなで作るという難しさと達成感、そして連携の大切さを学んだ。また、子どもたちは自分の作品を真剣に作成しており、同じ道具度材料でも、それぞれが自分の個性を出し、自分色の作品を完成させていた。一つの作品に1日を通して学んだことや、個性を詰め込められたのは良かった。(種瀬)

(5) キャンドルナイト

本企画では、子どもたちが作ったキャンドルホルダーに明かりを灯し、その明かりを全員で囲みながらゲームやスタンプなどを行った。最後には一日の振り返りやまとめを行い、一日の活動を通して学んだこと・感じたことを印象づけた。本企画は心に生まれた「感謝」をお互いに伝えあうことを目的としていた。子どもたちが、ESD勉強会で学んだことをふまえ身の回りの「当たり前」に感謝し、その気持ちを言葉で示せるようになることがねらいであった。また、一日を共に過ごした班員とも感謝の気持ちを伝え合って欲しいと思い、学生間で雰囲気づくりを徹底した。実際に行ってみると、数人ではあったが当たり前への感謝の気持ちに気づいてくれた子どもの姿があった。しかしながら、子どもたちから感謝の言葉を引き出すのは大変難しいことであったように感じた。「楽しかった」という感想が多くみられたことから、一日のイベントを楽しいものとして印象づけることはできたのではないかと感じている。(櫓)



みんなで明かりを灯したキャンドルナイト

(6) さよならの集い

本企画では、一日の活動を総まとめし、全員で別れを惜しみながらテーマソングを歌った。オリエンテーションの時に比べると、子どもたちは歌詞にもメロディーにも慣れ、大きな声と笑顔で歌えるようになっていた。一日を通して何度も歌った成果をしっかりと感じる事ができたように思う。また、ユネスコクラブ代表や本学副学長が、迎えに来てくださった保護者への挨拶を行った。子どもたちの命を信頼して預けていただいたことへの感謝を改めて感じた。最後は子どもたち一人ひとりを出口まで見送った。学生は、大きな怪我をさせることなく子どもたち全員を無事に帰すことができた安心感と達成感を噛み締めていた。(櫓)



1日の思い出を振り返るムービー

9. 成果と課題

【成果】

- 「当たり前は当たり前ではない」ということに気づくことができていると感じる子どもの発言を耳にすることができた。 ⇒本企画のテーマのねらいを達成できた。
- 第1回目よりも参加者の数が多かった。 ⇒前回の反省を活かし、より多くの場所で広報を行った成果が出た。また、リピーターもいた。
- 事後の報告書の中に、「今回の活動の中で見つけた自分の課題」などの記述が多く見られた。 ⇒活動して終わりではなく、しっかりと振り返りが行えている。
- タイムマネジメントをしっかりと行い、予定通りの時間に本企画を終えることができた。 ⇒活動中時間がずれ込んでしまった時などには、臨機応変に対応することができたので成功した。次回にも活かしたい。

【課題】

- 防災において、伝える側の私たち学生に十分な知識がなかった。 ⇒事前勉強会を行うなど、学びの場を増やす必要がある。
- 当日までの準備段階において、予定通りに進まず慌ててしまった。 ⇒余裕を持った計画を立てる必要がある。
- 企画において核となる運営体制が複雑で分かりずらかった。 ⇒次回、どのような体制で行うべきなのか見直さなければならない。

【学生によるESD学習支援活動】

奈良市富雄第三小中学校 第3回ユネスコ委員会 支援報告書

社会科教育専修 1回生 義根 惇司

1. 日時 平成30年6月6日(水) 14:00~16:00
2. 場所 奈良市富雄第三小中学校 理科室
3. 参加者 奈良市富雄第三中学校ユネスコ委員会の生徒、教員3名
下原舞、後藤旭、義根惇司(学部生)

4. 概要説明

平成30年6月6日に、奈良市富雄第三小中学校でユネスコ委員会が行われ、私たち学生はその支援に携わった。今回のユネスコ委員会は中等部だけの招集で少人数となったが、一人ひとりの意識も高く有意義な委員会になった。

私は、今回の活動から2つのことを学んだ。第1に中学生とコミュニケーションをとることの難しさについて、第2に生徒の様子についてである。

第1の中学生とコミュニケーションをとることの難しさについてである。先日、行った「集まれ!ESD子ども広場」では、参加者が小学生であった。そのとき、小学生は好奇心旺盛で積極的に話しかけてくれたり、分からないことがあれば私たちに質問してくれたりすることが多いと感じた。しかし、中学生は向こうからはなかなか話しかけてくれない。私自身もこちらから積極的に声をかけてみたがあまり良い反応は得られず悪戦苦闘した。小学生と2、3歳しか違わないのにここまで大人びるものなのかと感心すらした。今回の支援では生徒の意見を引き出しきれなかったため、次回支援させていただくときはもっと生徒の意見を引き出せるような話しかけ方を工夫したい。

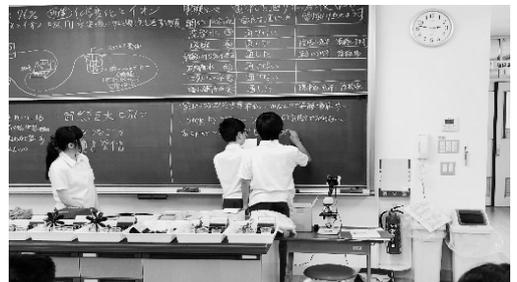
第2の生徒の様子についてである。委員会の中には、昨年から継続でユネスコ委員会に入った生徒もいれば、今年度初めてユネスコ委員会に関わる生徒もいる。第2回では、年間の全体目標を決めたりピオトープ班と国際交流班に分かれて実際に活動計画を立てたりして、話し合う機会が増えてきたが、積極的に発言するのは昨年もユネスコ委員だった生徒が主で、今年度初めてユネスコ委員になった生徒たちは終始控えめな印象を受けた。2年目の生徒が1年目の生徒に昨年の様子を教えたりする場面も見受けられたが、全体的に彼らの間に気持ちの面で温度差が生じていた。私たち学生は、その温度差を埋めるべく、1年目の生徒たちに発言を促したり、2年目の生徒たちと交流させるようにしたりと試みたが、それほど効果は見られなかった。生徒間の温度差を埋める難しさを感じたので、今後は全員が自分の思いを持って積極的に参加・参画できるように、誰もが話しやすい環境づくりの支援をしていきたい。

今回の支援より、ユネスコ委員会自体のレベルの高さを実感した。委員長、副委員長が委員会をしっかりとまとめている、活動のテーマを決めるときには様々な案が出ている中で

それぞれの案の良いワードを抜き出して使ったりと私たち大学生であってもなかなか出来ないようなことをこなしていて驚いた。また、平和や国際交流に対する意識も高いと感じた。一人ひとりが平和、国際交流に対する考えを持っており、中には良い意見も多く、とても参考になった。中学生ならではの発想は、私たち大学生には真似できないものが多いと感じたのでしっかりと取り入れていきたい。



生徒たちの話し合いの様子



テーマ決めの様子

【学生による ESD 学習支援活動】
奈良市富雄第三小中学校 第4回ユネスコ委員会 支援報告書

社会科教育専修 1 回生 足立繁郁

1. 日時 平成 30 年 7 月 4 日 (水) 14:00~16:00
2. 場所 奈良市富雄第三小中学校
3. 参加者 社会科教育専修 仲村幸奈 (学部 2 回生) 足立繁郁 (学部 1 回生)
奈良市富雄第三小中学校 教員 2 名、児童複数名
環境カウンセラー 吉田氏、室賀氏

4. 活動支援内容

奈良市富雄第三小中学校において、第 4 回ユネスコ委員会が行われた。今回の活動では、去年から年度をまたいで継続されているビオトープ活動についてこれから奈良市富雄第三小中学校のビオトープをどのように良くしていくかについて考え、話し合うことができた。

今回の活動を 2 点にまとめて報告する。一つ目は今後の支援における知識の重要性について、二つ目は継続した支援が重要であることについてである。

一つ目の今後の支援における知識の重要性についてである。今回は、雨天のため屋内で環境カウンセラーである吉田氏、室賀氏を招いてビオトープの勉強会を行った。私はこのビオトープについての勉強会で知識不足を実感した。例えばアメリカザリガニなどの外来種は、ビオトープに対して悪影響を及ぼすなどということについてである。このような知識を増やしていくことにより、より良い支援ができると感じた。これからもっとビオトープについて勉強し、子どもたちに伝えられるようにしていきたい。

二つ目の継続した支援が重要であることについてである。ビオトープを作っていくにあたり、継続して支援をしていくことにより変化に気づくことができ、より細かい意見を出せるようになって感じた。富雄第三小中学校のビオトープに関する活動は去年から年度をまたいで行われている。これからも富雄



ビオトープの勉強会の様子



ビオトープの様子

第三小中学校ユネスコ委員会と関わり、共に富雄第三小中学校のビオトープを作っていくたい。

以上 2 点について、今回の支援で感じることができた。次回の支援では、ビオトープについてより知識をつけて挑みたい。そして、これからのビオトープの進化の手助けを行いたいと考えている。

【学生による ESD 学習支援活動】

奈良市富雄第三小中学校 ユネスコ委員会 ビオトープ調査 支援報告書

家庭科教育専修 1 回生 福井 彩乃

1. 日時 平成 30 年 8 月 23 日 (木) 9 : 00 ~ 14 : 00
2. 場所 奈良市富雄第三小中学校 校内ビオトープ
3. 参加者 仲村幸奈、足立繁郁、福井彩乃 (学部生)
環境カウンセラー 室賀泰二氏
奈良市富雄第三小中学校 小学部児童 10 名、中学部生徒 1 名、教員 2 名

4. 内容

- (1) 校内ビオトープの水を抜く
- (2) ビオトープに住む生き物を水槽に移す
- (3) ビオトープにたまっているヘドロを取る
- (4) ビオトープに住んでいる生き物の観察と振り返り

5. 活動支援報告

平成 30 年 8 月 23 日に、奈良市富雄第三小中学校でユネスコ委員会が行われた。今回の活動では、奈良市富雄第三小中学校のビオトープの環境をよくするため、水を抜く作業、網やざるで生き物をつかまえる作業を行った。

今回の活動について以下の 2 点を報告したい。一つ目はビオトープに関する知識について、二つ目は今後の活動の必要性についてである。

一つ目のビオトープに関する知識についてである。今回の活動ではビオトープの水を抜くことにより、そこに住む生き物を知り、どのような環境が生き物の住みやすい環境であるかを学ぶことができた。大変な作業ではあったが、児童生徒はまじめに一生懸命取り組んでおり素晴らしいと感じた。

二つ目は、今後の活動の必要性についてである。自然に任せるだけでは底にヘドロがたまり、ビオトープの環境が悪くなってしまうため、ある程度人が手を加えていかなければならないことが分かった。



生き物を探す様子



バケツリレーをする様子

そのため、今回行ったような活動は一回きりではなく定期的に行う必要があると感じた。

今回の活動で掃除をすることにより、ビオトープがより良い環境になったことを嬉しく感じた。自然環境というと、「手つかずの自然」がよいという印象を持ちがちだが、人の手が加わることで、豊かになる自然環境もあるということがわかり、人と自然の共生について考える機会となった。そのようなことを伝えるためにも、本支援に継続的に関わっていききたい。

【学生によるESD学習支援活動】

奈良市富雄第三小中学校 第5回ユネスコ委員会 支援報告書

英語教育専修 修士1回生 谷垣 徹

国語教育専修 2回生 奥平 茜

1. 日時 平成30年9月12日(水) 14:00~16:00
2. 場所 奈良市富雄第三小中学校
3. 参加者 奈良市富雄第三中学校ユネスコ委員会の生徒、教員3名
谷垣徹(大学院生)
奥平茜(学部生)

4. 概要説明

平成30年9月12日に、奈良市富雄第三小中学校でユネスコ委員会が行われ、私たち学生はその支援に携わった。今回のユネスコ委員会はビオトープ班と国際交流班とに分かれて活動を行っていた。

ビオトープ班では、夏休みに行った作業の報告と、ビオトープに関する広報についての計画を立てていた。国際交流班は、間近に迫った海外提携校との交流の準備を進め、歓迎会やプレゼントの準備を中心に活動していた。

今回の活動の支援に携わって、私は主に2つのことについて考えた。1つ目は話し方にメリハリをつけることの大切さ、2つ目は言葉に対する感じ方の違いと似ているところであった。

1つ目の、話し方にメリハリをつけることについて述べる。海外提携校から来る方たちへのプレゼントの作成を進めていたとき、「今回までにやってくる」ということになっていたものをできていないまま、委員会内での作成にも中々集中して取り掛かれずにいる児童がいた。その時、委員会が始まってから柔らかな表情で子どもたちを見守っていた先生が、先ほどまでとは雰囲気の変った



話し合いの様子

毅然とした声と表情とで「やるといっていたのにやらないの。」と声をかけていた。そこで子どもの表情が変わったという光景を見た。「注意するときは毅然とした態度で」という言葉は何度も耳にしたことも目にしたこともあったが、実際に信頼関係のある中でなされた場合こんなにも変化があるのだということを実感した。

2つ目の、言葉に対する感じ方の違いと似ている点について述べる。歓迎会の司会の役職にあたっている子どもたち2人で、英語の司会台本にカタカナで読み方をふるということをしていた。この2人は、どちらも英語に親しみがあるらしく、カタカナをふる中で違和感もあるようだった。なじみの薄い単語の読み方を伝えたり、英語にカタカナをふる話を聞いたりする中で、私も中学のとき同じように、カタカナをふってある教材やテレビなどに違和感があったことを思い出した。読みやすくなってスムーズに言えた方が気持ちを伝えられるという言葉聞いて、言葉は伝えるための手段の一つであるという風に捉えているのだと考え、言葉について「読み方」という形ばかりを伝えていたことに気が付いた。

以上のことについて、今回の支援を通して感じ、気づくことができた。これからの支援や、自分自身の周囲とのかかわりの中でも、伝え方についてもっと深く考えていきたいと感じた。

【学生による ESD 学習支援】

奈良市富雄第三小中学校 第6回ユネスコ委員会 支援報告書

英語教育専修 4回生 森本 珠美怜

社会科教育専修 1回生 足立 繁郁

1. 実施日 平成30年10月17日(水)
2. 場所 奈良市富雄第三小中学校
3. 参加者 森本珠美怜(学部4回生)、足立繁郁(学部1回生)
奈良市富雄第三小中学校 教員、児童 複数名
4. 活動支援内容

平成30年10月17日、奈良市富雄第三小中学校にて第6回ユネスコ委員会が行われた。今回は、国際交流班とビオトープ調査班とで分かれ、活動を行った。国際交流班では、今月行われるハロウィンパーティーに向けて役割分担を行うなど、準備を進めた。また、ビオトープ調査班では、ビオトープのポスターを制作するグループと8月に行った、かいぼりをまとめたパワーポイントを制作するグループに分かれて活動した。

今回の活動支援より、以下の2点について考えた。第1に子ども主体で委員会活動を行う重要性について、第2に子どもの柔軟な発想についてだ。

第1の子ども主体で委員会活動を行う重要性についてである。今回は主に、ハロウィンパーティーに向けた準備が行われた。広報活動について子どもたちから提案が飛び交うなど、積極的に関わろうとする姿勢が見られた。しかし役割分担を行う中では、誰の手も挙がらない役割もあった。その時、子ども同士で「こういうの得意じゃなかった？」などと推薦し合い、上手く役割分担を進めていた。やはり、教員が指名して役割を勧めるよりも子ども同士で推薦し合えると、子どもたちも気持ちよく仕事を行うことができるように感じた。また、このように子どもたち主体で委員会活動を行うには、学年を超えた子どもたちの交流が必要だと感じた。ユネスコ委員会では、今回の役割分担も学年を超えて行われており、子どもたちが協力し合える関係にあると感じた。



ハロウィンパーティーに向けた準備



前方は発表の準備 後方はポスター作成

第2に、子どもの柔軟な発想についてである。一人一人がポスター制作に取り組んでおり、とても斬新でインパクトがあるものばかりだった。子どもたちの柔軟で斬新な発想を見て、私も固定観念にとらわれない発想で物事を考えていきたいと感じた。

以上のことについて、今回の支援を通して感じる事ができた。これからも継続して支援を行う中で、子どもたちとの関わり方について高めていきたい。また、子どもたちの行動や言動から気づいた点を吸収し、自分自身に還元していきたいと感じた。

【学生による ESD 学習支援活動】

奈良市富雄第三小中学校 第7回ユネスコ委員会 支援報告書

国語教育専修2回生 奥平 茜

国語教育専修1回生 西條 秀哉

1. 日時 平成30年11月7日(水) 14:00~16:00
2. 場所 奈良市富雄第三小中学校
3. 参加者 奥平茜、西條秀哉(学部生)
奈良市富雄第三中学校ユネスコ委員会の生徒、教員1名

4. 概要説明

平成30年11月7日に、奈良市富雄第三小中学校でユネスコ委員会が行われ、私たち学生はその支援に携わった。今回のユネスコ委員会は通常時とは異なり、ピオトープ班と国際交流班に分かれず全体で活動を行っていた。今年度の活動において、9年生(中学3年生)が委員会での役職を終え、後輩たちに引き継いでいくためにも次期委員長を含めた役職について話し合う活動が行われた。その後、国際交流班を中心に留学生へ贈るフォトブックの作成を始めるために、印刷物をきるという活動を行っていた。



役職の感想を話している様子

今回の支援を通して学んだことは2つある。一つ目は立場や役職が人を作っていくという側面があること、二つ目は人とのつながりが大切であるということだ。

一つ目の、立場や役職が人を作っていく側面があるということについて述べる。次期委員長・副委員長などを決める際に、今まで役職についていた子どもたちが感想を話す時間があった。委員長をしてみてもよかったこと、副委員長になって考えたことなどを前で話してくれた。今回、ユネスコ委員会の委員長・副委員長・書記を務めていた子どもたちの話を聞いて、「自分に向いていないと思ってたけど頑張ってもよかった」「本当にしたい役ではなかったけれど、やってよかった」という感想が印象に残った。やってみることで、意外と大変だった・意外と大変ではなかったといった感想が出たり、やってみたらこそその役職のよさを感じることができたのだと考えられる。実際にやってみるということは、1度経験するまではなかなか難しいことであるが、ユネスコ委員会という場所が子どもたちにとって向き不向きにかかわらずやってみよう、と思える環境なのだとすることがすごいと感じた。

二つ目の、人とのつながりが大切であるという点について述べる。自分にとって今回の支援は、今年度2回目となるものであった。そのため、ユネスコ委員会に関わる先生方や子どもたちと出会うのは2回目であり、前回よりも関わりやすと感じた。先生方や子どもたちと「前回話したことがある」「前回顔を見て知っていた」などということが、かかわりを続けていくうえで重要なのであると考えた。

以上のようなことについて、今回の支援を通して考え、学ぶことができた。今後の支援において、今回感じた、子どもたちが「挑戦してみよう」と思うことができるような雰囲気や環境を保っていけるように話し方や行動について考えていきたいと考えている。つながりやかかわりについても、これまで以上に「かかわりやすい」と感じてもらえるような表情や話し方を考え、心がけていきたい。また、私たち自身も、自分の所属している団体で「挑戦したい」と感じられる雰囲気や環境をどのように作っていくのか・自分自身がそう思うにはどうすべきかなどを今後より学んでいきたいと感じた。

【学生によるESD支援活動】

奈良市富雄第三小中学校 第8回ユネスコ委員会 支援報告書

英語教育専修2回生 櫛 乃里花

1. 実施日 平成30年12月5日（水）
2. 場所 奈良市富雄第三小中学校
3. 参加者 奥平茜、櫛乃里花（学部2回生）
奈良市富雄第三小中学校 教員、児童、複数名
4. 活動支援内容

平成30年12月5日、奈良市富雄第三小中学校にて第8回ユネスコ委員会が行われた。今回も国際交流班とビオトープ調査班とで分かれ活動を行った。国際交流班では、中学生は留学生へ贈るフォトブックを、小学生はクリスマスツリーの展示物をそれぞれ作成した。ビオトープ調査班では、ビオトープの観察と三学期の活動に向けての話し合いを行った。

今回の活動支援より、以下の2点について考えた。第1に長期的な視野を持つことの重要性について、第2に生徒・児童主体の活動の意義についてである。

第1の長期的な視野を持つことの重要性についてである。私が今回支援したビオトープ調査班の活動は非常に長期的視野を持った活動である。ビオトープに生態系をつくり、それを保護していく活動は決して短期間で達成されるものではない。現在のビオトープはまだ生態系が確立されておらず、少しの生き物と植物が生息しているのみである。しかし最初は固い砂地であったのが今では栄養を含んだやわらかい腐葉土へと変化しており、その変化だけでも大きな進歩で、長い時間がかかっているという。ビオトープ完成への道りは長く、現在活動に参加している子どもたちのほとんどは完成した姿を見ないまま卒業してしまうであろう。しかしながら、ビオトープ調査をしたり今後について話し合ったりする子どもたちの姿は非常に楽しそうであった。目に見える成果にすぐには繋がらなくても、子どもたちはやりがいをもって取り組み、よりよいビオトープづくりのために小さな活動をコツコツと積み重ねていることがわかった。

第2の生徒・児童主体の活動の意義についてである。これはビオトープ調査班で三学期の活動について話し合っている様子を見て感じたことである。自分が小学生・中学生だった時を思い返すと、話し合いは先生の助言なしにはなかなか進まなかった。また、一人ひとりがしっかりと意見をもち発表しあうことも難しかった。それに対し今回のビオトープ調査班の話し合いは、互いに発言を促し合うことで発言の機会が均等にあり、また自分の意見を持ち話し合いの場に出せる子どもたち



話し合う子どもたち

が多かった。委員長・副委員長を中心に、子どもたちが主体となって話し合いを進めており、顧問の先生や環境カウンセラーの先生はあまり発言せず見守っているのみであった。このような話し合いができるのは、子どもたち一人ひとりがビオトープを運営する責任を自覚し、またよりよいビオトープの姿をイメージできているからだと考える。ESDによって育みたい視点の一つ「責任性」が、生徒・児童主体の活動によって育まれていると感じた。

今回の支援を通して学んだことは以上2点である。この活動の支援に行くのは初めてであったが、ESDに取り組む子どもたちの姿を間近で見ることができる貴重な機会であると感じた。

【学生による ESD 学習支援】

奈良市富雄第三小中学校 第 10 回ユネスコ委員会 支援報告書

英語教育専修 修士 2 回生 糸 綾香

社会科教育専修 1 回生 足立 繁郁

1. 実施日 平成 31 年 2 月 6 日 (水)
2. 場所 奈良市富雄第三小中学校
3. 参加者 糸綾香 (大学院生)、足立繁郁 (学部生)
奈良市富雄第三小中学校 教員、児童 複数名
4. 活動支援内容

平成 31 年 2 月 6 日、奈良市富雄第三小中学校にて第 10 回ユネスコ委員会が行われた。今回は国際交流班とビオトープ調査班とで分かれ、活動を行った。国際交流班では、3 月に行われるオーストラリアの姉妹校への訪問に向けて、全校的な取り組みについての準備を話し合った。ビオトープ調査班では、ビオトープの観察や整備を行い、その後今年度の活動を振り返り、これからビオトープをどう良くしていきたいかについて考えた。



ビオトープを観察する様子

今回の活動支援より、以下の 2 点について考えた。第 1 にビオトープの変化について、第 2 にきっかけを与えることについてだ。

第 1 に、ビオトープの変化についてである。私は、2018 年 7 月 4 日に初めてユネスコ委員会の支援をさせていただいた。継続的に関わることでビオトープの変化に気づき、支援の幅が広がると思い、活動してきた。継続的な支援を行う中で、底が見えないほど濁っていたビオトープの水質がきれいになっていくなど、ビオトープの変化を感じることができた。これは子どもたちがどうすればビオトープが良くなるか考えて、活動した結果である。子どもたちにどうすれば今よりよくなるのか考えさせるには、現状を把握した上で、継続的な活動で変化していく様子に気づかせ、やりがいを感じてもらうことが大切だと思った。

第 2 にきっかけを与えることについてである。国際交流班は、3 月に行われる姉妹校訪問に向けて、全校的に取り組める交流の内容について話し合いを行った。委員会担当の先生から説明があり、話し合いを始めたのだが、なかなか意見が出なかった。子どもたちは学年が違うことへの遠慮、恥ずかしさ、もしくは何を話せばいいかわからないなど様々な心境でいたと思う。私はサポーターとしてどこまで介入していいか最初は躊躇してしまったのだが、学校について質問してみたり、手の空いている生徒に書記をお願いしたりと少しずつ話しかけることで、子どもたちも口を開き始め話し合いを行うことが



国際交流班の話し合い

できた。予想もしなかったような意見も出て、充実したものになったように思う。子どもたちには「できない」と決めつけ、話し合いのすべてに介入するのではなく、きっかけさえ与えれば子どもたちだけでできる、きっかけづくりをするのがサポーターの仕事なのだと感じた。

以上のことを今回の支援を通して感じる事ができた。これからも継続して支援を行う中で、子どもたちとの関わり方について学んでいきたい。

近畿 ESD コンソーシアム規約

平成29年7月8日
制 定

第1章 総則

【名称】

第1条 この団体は、近畿 ESD コンソーシアム(英語名:ESD Consortium, Kinki Region)という。

【事務所】

第2条 この団体の事務局を奈良教育大学に置く。

【目的】

第3条 この団体は、様々な ESD 関係者が協力して近畿圏を中心に ESD を推進することを目的とする。

【活動】

第4条 上記3の目的を達成するため、この団体は以下の活動を行う。

- 一 ユネスコスクールをはじめとする教育機関での ESD の推進と国内外の ESD 推進校との交流促進
- 二 公民館、図書館をはじめとする社会教育施設、青少年教育施設を通じた社会教育における ESD の推進
- 三 ウェブサイトや成果報告会等を通じた ESD 関連情報の共有
- 四 ESD に関するマルチステークホルダーの対話の場の構築
- 五 企業、NGO を含む様々なステークホルダー間の協働の機会創出
- 六 その他団体の目的を達成するために有益と考えられる活動

第2章 会員

【会員種別】

第5条 この団体の会員は、この団体の目的に賛同して入会する団体及び個人とする。奈良教育大学を代表団体とする。

【入会】

- 第6条 会員として入会しようとするものは、別に定める方法により、入会申込書を事務局に提出することにより申し込むものとする。
2. 入会は、運営委員会において承認する。運営委員会は、前項の申し込みがあったとき、正当な理由がない限り、入会を認めなければならない。

【会費】

第7条 この団体の会費は、当面、徴収しないものとする。

【退会】

第8条 会員は、別に定める退会届を事務局に提出して、任意に退会することができる。

第3章 役員

【種別及び定数】

第9条 この団体に、次の役員を置く。

- 一 会長 1名
- 二 副会長 1名以上3名以内
- 三 運営委員 10名程度

【選任】

第10条 会長は、この団体を代表し、その業務を総理する。

2. 副会長は運営委員の中から会長が選任する。
3. 運営委員は、会長が指名する。

【職務】

第11条 会長は、この団体を代表し、その業務を総理する。

2. 副会長は、会長を補佐し、会長に事故があるとき又は会長が欠けたときは、その職務を代行する。
3. 運営委員は、運営委員会を構成し、この団体の業務を執行する。

【任期等】

第12条 役員任期は2年とする。ただし再任を妨げない。

第4章 会議

【会議の種別】

第13条 この団体の会議は、総会及び運営委員会とする。

【総会】

第14条 総会は、会員をもって構成する。

2. 総会は、通常総会及び臨時総会とする。

【総会の権能】

第15条 総会は、以下の事項について検討し、議決する。

- 一 規約の決定及び変更
- 二 事業計画の承認
- 三 事業報告の承認
- 四 役員承認
- 五 その他コンソーシアムの運営に関する重要事項

【総会の開催】

第16条 通常総会は、毎年1回開催する。

2. 臨時総会は、次に掲げる場合に開催する。
 - 一 会長が必要と認め、招集の請求をしたとき。

【総会の招集】

第17条 総会は、会長が招集する。

2. 総会を招集する場合には、会議の日時、場所、目的及び審議事項を記載した書面または電子メールにより、開催の日の少なくとも5日前までに会員に通知し、あるいはウェブサイト上で公表しなければならない。

【総会の議長】

第18条 総会の議長は、その総会に出席した会員の中から選出する。

【総会の議決】

第19条 総会の議事は、別段の定めがある場合を除き、出席した会員の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

【運営委員会】

第20条 運営委員会は、運営委員をもって構成する。

2. 運営委員会に運営委員長1名及び副運営委員長1名を置く。

【運営委員会の権能】

第21条 運営委員会は、次の事項について検討し、議決する。

- 一 事業計画の立案と変更
- 二 事務局の組織・運営に関する事項
- 三 総会の議決した事項の執行に関する事項
- 四 総会に付議すべき事項
- 五 その他総会の議決を要しない業務の執行に関する事項

【運営委員会の開催】

第22条 運営委員会は、会長または運営委員長が必要と認めた場合に開催する。

第5章 事務局

【事務局の設置】

第23条 この団体の事務を処理するため、代表団体内に事務局を置く。事務局は、当面、次世代教員養成センター ESD・課題探究~~部~~部門 ESD・教材開発領域に置く。

第6章 基金

【基金】

第24条 この団体の目的を遂行するため、代表団体に基金(近畿ESDコンソーシアム基金)を設ける。

2. 基金の管理は、会長の監督の下で、総会において承認された事業計画に基づき、事務局が行う。

第7章 ESD 推進コーディネーター

第25条 この団体に、ESD 推進コーディネーター若干名を置く。

2. ESD 推進コーディネーターは、この団体の目的に照らし、近畿圏を中心に ESD の推進を支援する。
3. ESD 推進コーディネーターは、近畿圏における ESD 活動に習熟した識者の中から、会長が指名する。
4. ESD 推進コーディネーターの任期は1年とする。ただし、再任を妨げない。

第8章 雑則

【細則】

第26条 この規約の施行について必要な細則は、運営委員会の議を経て、会長が定める。

SDGs 推進に向けた奈良教育大学の取組

1. はじめに

奈良教育大学では、ユネスコスクールとして「持続可能な開発のための教育（ESD）」の研究と推進を大学の中期目標に掲げ、教員養成及び教員研修の核に ESD を位置づけています。また、2017年3月に公示された学習指導要領に則った学習活動の展開及び SDGs の目標達成のために、教員の ESD 指導力の向上が喫緊の課題であると認識し、取組を進めています。

2. これまでの取組

平成 26 年度～ 平成 28 年度	グローバル人材の育成に向けた ESD 推進事業 奈良 ESD コンソーシアムの構築と ESD の普及・推進
平成 27 年度	日本/ユネスコパートナーシップ事業 (5) 教員研修プログラムのあり方に関する調査研究を受託
平成 28 年度	ESD ティーチャープログラムの開発と実施（奈良及び和歌山県橋本市で実施）
平成 29 年度	奈良 ESD コンソーシアム → 近畿 ESD コンソーシアム（名称変更）
平成 30 年度	グローバル人材の育成に向けた ESD の推進事業 奈良教育大学 ESD-SDGs コンソーシアム 全国 5 カ所（北海道羅臼町・仙台市・東京都・奈良県広陵町・長崎市）で ESD ティーチャープログラムを展開

3. 奈良 ESD コンソーシアム（近畿 ESD コンソーシアム）

奈良市・橿原市・和歌山県橋本市・滋賀県彦根市の各教育委員会との協働体制を構築し、域内のユネスコスクール等の ESD の質的向上、教員の ESD 指導力向上に取り組んでいます。

ESD を広げる研修	学ぶ喜び・ESD 連続公開講座（6回/年）、教育委員会主催の教育講演会 ESD 成果発表会・子どもフォーラム（1回/年）
ESD を深める研修	ESD 連続セミナー（1回/月） 基礎学習理論研究会（1回/月） 社会教育施設と連携した ESD 授業づくりセミナー（5回/年・各施設） ESD 実践交流会（2回/年）
ESD ティーチャープログラム	学生向け 現職教員向け

4. ESD ティーチャープログラムについて

平成 27 年度日本/ユネスコパートナーシップ事業の教員研修プログラムのあり方に関する調査研究を受託し、ESD に取り組む教員に求められる資質能力を明らかにすると共に、教員研修プログラムとして「ESD ティーチャープログラム」を開発しました。

（1）ESD に取り組む教員に求められる資質能力

全国のリソースパーソンや ESD 実践者による研究会を複数回開催し、ESD に取り組む教員に求められる資質能力を明らかにしたものが右図です。学級経営や生徒指導、授業力、子ども理解といった教師としての基盤的力量に加え、SDGs への関心、地域を教材化し単元としてデザインする力、そして対話的に指導する力が必要です。

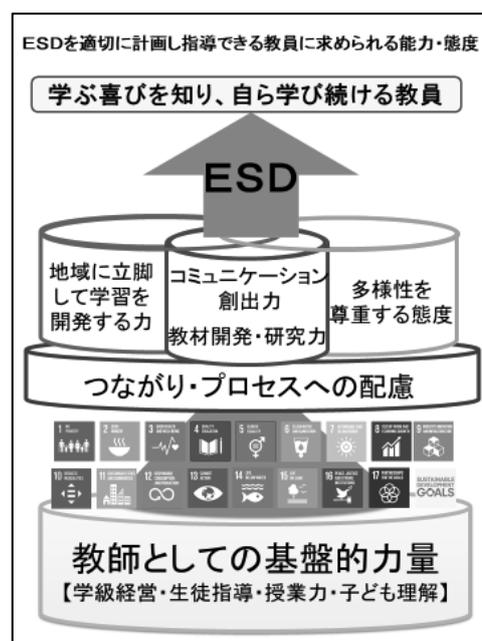
また、全国の教育委員会を対象としたアンケート調査、ESD に先進的に取り組む教育委員会や実践者に対するインタビュー調査を行い、ESD に取り組む教員に求められる資質能力を養成するためには、単発的な研修ではなく、

継続的な研修が有効であると結論づけました。そして、開発したのが ESD ティーチャープログラムです。

(2) ESD ティーチャープログラム (現職教員向け)

研修内容は5つです。(各回でミニレポートの作成を義務づけ)

- ① SDGs の理解促進 MDGs からの流れ、ESD の推進が求められる背景、地球的課題を学ぶ
- ② ESD の理論研修
 - i 「見方・考え方」と ESD の視点と ESD で育てたい資質能力
 - ii 主体的・対話的で深い学びとしての ESD
- ③ 優良実践事例の分析 SDGs への貢献、ESD の視点、ESD の資質能力から分析します
- ④ ESD 学習指導案の作成と相互検討 互いの指導案検討を通して、ESD 実践への理解を深め、実践意欲を高めます。



5. 奈良教育大学 ESD-SDGs コンソーシアム事業

平成 30 年度グローバル人材の育成に向けた ESD の推進事業を受託し、全国 5 カ所で ESD ティーチャープログラムを実施します。本事業は ESD を広げることを目的とした ESD 講演会を開催した上で、さらに研修を深めたい教員を募集し、ESD ティーチャープログラムを展開します。

(1) ESD 講演会 (ESD を広げる研修)

(2) ESD ティーチャープログラム (ESD を深める研修)

各地で 2 日連続の研修会を開催し、上記 ESD ティーチャープログラムの①、②の (i) (ii)、③を実施します。その後 2 ヶ月間ほど空け、その間に教員には地域を教材化した ESD 学習指導案を作成していただきます。約 2 ヶ月後に半日間の研修会を開催し、④を行います。

(3) プログラム終了後

作成された ESD ティーチャープログラム学習指導案を奈良教育大学で審査し、学長より「ESD ティーチャー」の認定証が授与されます。また、特に優秀な実践事例については、近畿 ESD コンソーシアムの実践交流会で発表していただきます。

ESD ティーチャープログラムを受講された先生方には各地で ESD 研修グループを組織していただき、地域での ESD 推進を担うと共に、各地の ESD 研修グループや ESD 活動支援センター等とのネットワークを構築し、交流や情報共有などをしていただきます。

(4) 期待できる成果

- ・全国各地で、地域と SDGs をつなげた質の高い ESD 実践の開発が期待できます。
- ・ ESD ティーチャーの拡大と全国的ネットワーク化が進み、ESD 無関心層を関心層に、ESD 関心層は ESD ティーチャーへという流れが生まれます。
- ・ 学校教育での学習指導要領に即した ESD の展開が行われることで、児童生徒・保護者の SDGs に対する理解が進みます。

日本ユネスコ国内委員会運営小委員会
「持続可能な開発目標(SDGs)」推進特別分科会第4回会議

SDGs推進に向けた 奈良教育大学の取組

奈良教育大学 中澤 静男

奈良教育大学の 「ミッションの再定義」より

附属学校等と協働して、「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成を志向するユネスコスクールとしての実績を発展させて、学校における実践的課題解決に資する教育研究活動を行い、持続発展教育の推進拠点としてその研究と実践を進める。

(2013(平25)年12月)

http://www.mext.go.jp/component/b_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2013/12/18/134209_1_8.pdf

奈良教育大学の 「中期目標」より

「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成を志向するユネスコスクールとしての実績を発展させ、持続可能な開発のための教育の推進拠点としてその理念に立った研究と実践を進めることにより地域の教育の発展・向上に寄与する。

(第3期(2016～2021年度)中期目標「大学の基本的な目標」)

http://www.nara-edu.ac.jp/cyuki_top.files/genan_28.pdf

奈良教育大学の 教育課程編成・実施方針 (カリキュラム・ポリシー)より

(1) 本学の特色を軸に据えた教育課程

本学の特色である「持続可能な開発のための教育」と、世界遺産をはじめ、数多くの貴重な文化財や豊かな自然に恵まれた奈良の地でこそ得られる学修とを、教育課程編成の軸とします。それにより、「5つの能力」を身に付け、「持続可能な社会の創り手」を育てることのできる教員を養成します。

http://www.nara-edu.ac.jp/guide/feature/05_diploma_policy.html

ESDティーチャープログラム (現職教員向け)

- ① SDGsの理解促進
MDGsからの流れ、ESDの推進が求められる背景、地球的課題を学ぶ
- ② ESDの理論研修
 - i 「見方・考え方」とESDの視点とESDで育てたい資質能力
 - ③ 実践的・学際的・深い学びとしてのESD
SDGsへの貢献、ESDの視点、ESDの資質能力から分析
 - ④ ESD学習指導案の作成と相互検討

ESD指導案の相互検討を通して、ESD実践への理解を深め、実践意欲を高める

ESDティーチャープログラム に係る研修の様子(1)

(1) ESD連続セミナー



学生と現職教員と大学
教員によるテトラモデル
による熱い学び



県や市から、専門家を
招聘した、地域に根ざし
た教材開発

(2) 社会教育施設と連携した授業づくりセミナー



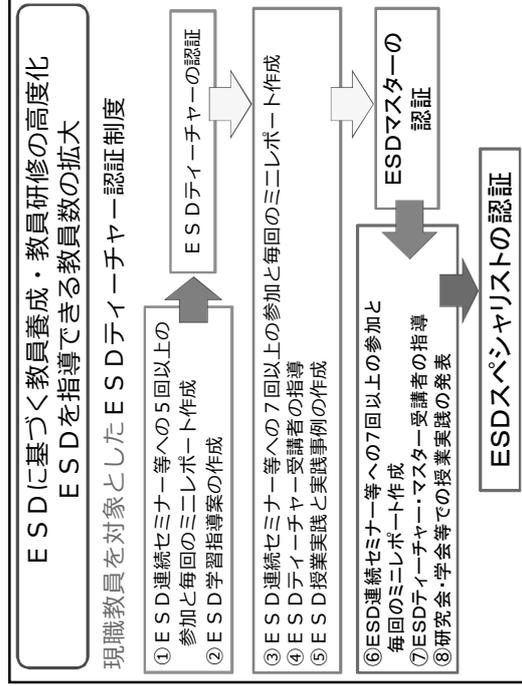
森と水の湧流館での授業づくり:
「水の恵み」



県立万葉文化館での授業づくり:
「万葉集」



奈良国立博物館との授業づくり:
「忍性」



増え続けるESDティーチャー




28年度は奈良で14名、和歌山県橋本市で7名にESD
ティーチャー認定証を授与

増え続けるESDティーチャー/ESDマスター




29年度には、奈良と橋本をあわせて、13名のESD
ティーチャーと14名のESDマスターが誕生しました。

奈良教育大学 ESD-SDGsコンソーシアム事業

ESDティーチャープログラムの
全国への普及

北海道羅臼町、宮城県仙台市、
東京、奈良県広陵町、長崎県長崎市




平成30年度 奈良教育大学ESD-SDGsコンソーシアムの展開

会場	ESD講演会 (広げる研修)	ESDティーチャープログラム (深める研修)	ESD学習推進案 相互検討会
仙台市	6月2日 見上一幸氏	市瀬智紀氏 見上一幸氏 河野晋也氏	河野晋也氏
東京	6月30日 及川幸彦氏	及川幸彦氏 大西浩明氏 手島利夫氏	河野晋也氏
長崎市	7月22日 石丸哲史氏	安田昌則氏 石丸哲史氏 大西浩明氏	河野晋也氏
羅臼町	7月24日 野村卓氏	大森亨氏 金澤裕司氏 河野晋也氏	河野晋也氏
広陵町	8月31日 中澤勝男	大西浩明氏 相島佳子氏 河本大地氏	河野晋也氏

プログラム終了後の取組

- 作成されたESD学習指導案を奈良教育大学ESDコンソーシアムで審査し、学長よりESDティチャー認定証を授与
- 特に優れた実践については、12月26日に開催する近畿ESDコンソーシアム実践交流会で発表
- 各地でESD研修グループの組織化とESD活動支援センター等とのネットワークの構築による、グループ研修の継続化

期待できる効果

- 全国各地で、地域とSDGsをつなげた質の高いESD実践の開発
- ESDティチャーの拡大と全国的ネットワーク化が進み、ESD無関心層を関心層に、ESD関心層はESDティチャーへという流れが生まれる
- 学校教育での学習指導要領に即したESDの展開が行われることで、児童生徒・保護者のSDGsに対する理解が進む

ご静聴ありがとうございました。

平成30年度 近畿ESDコンソーシアム活動実施報告書

2019年3月31日

近畿ESDコンソーシアム

〒630-8528 奈良市高畑町 奈良教育大学
教育研究支援課

E-mail k-soumu@nara-edu.ac.jp

Tel 0742-27-9367

Fax 0742-27-9147